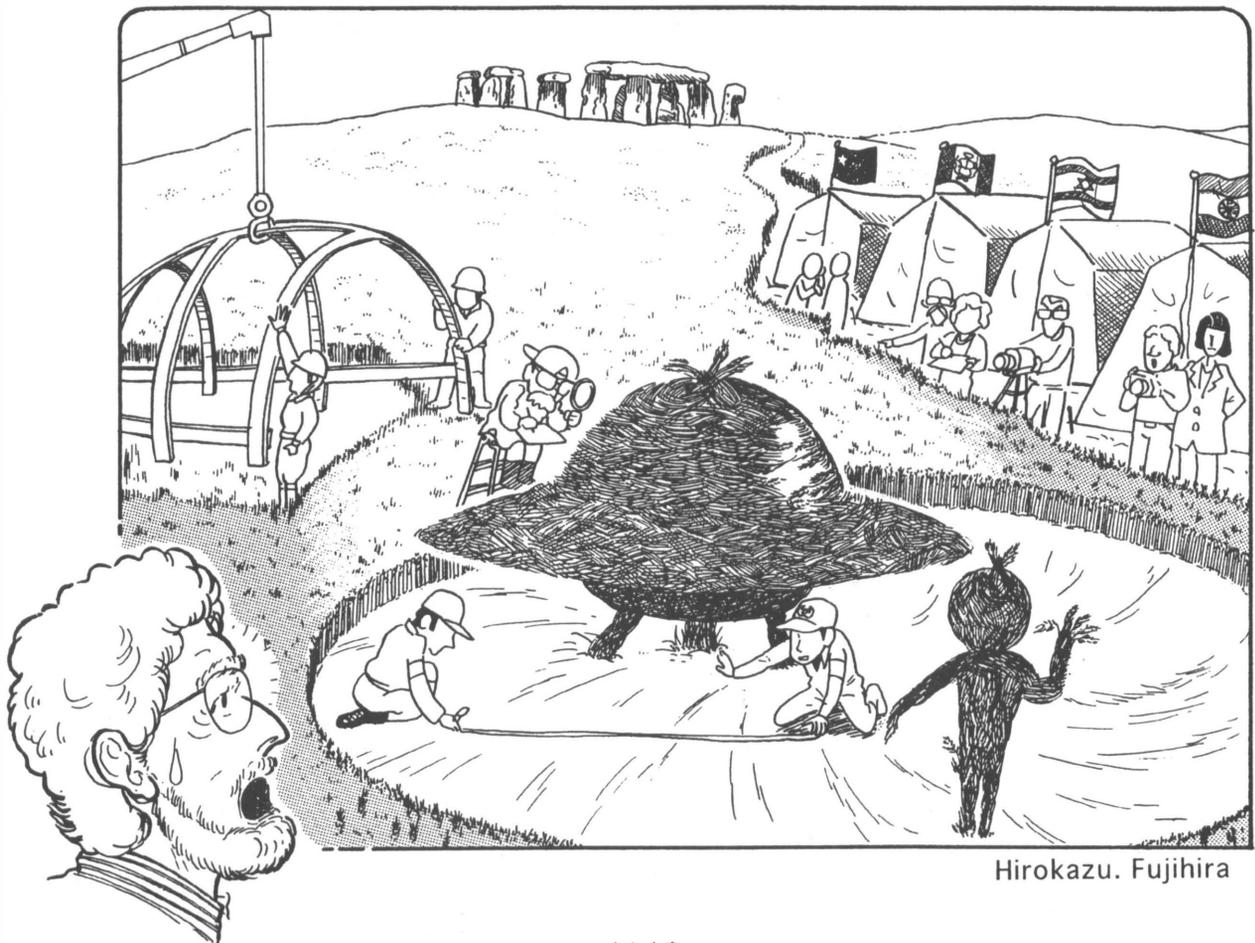


THE UFO RESEARCHER

Sky People Association-west Japan
C P R -Japan
Kiyoshi Amamiya
193-5, Byodobo-cho, Tenri-city
Nara-pref. 632-0077 JAPAN

VOL.12 NO. 1 2000



主な内容

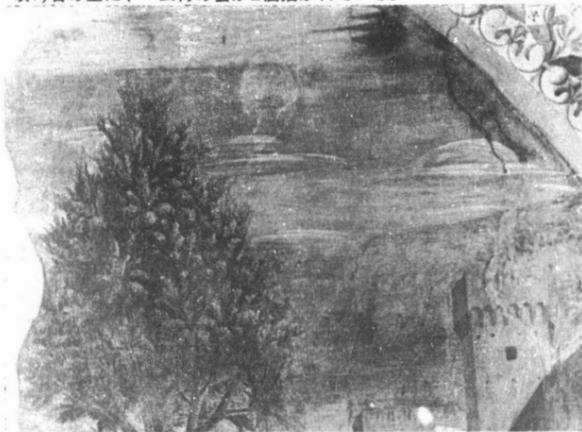
- 美術の中のUFO:ピエロ・デラ・フランチェスカ マソリーノ
- 7枝の燭台と有翼太陽円盤・古代のシンボルがクロップサークルに現われた!
-クロップサークル現地報告と巨石遺跡紀行-
- UFO目撃報告
- 中華飛碟学研究会訪問記録
- 異常現象の体験者そして研究者の証言
- MEXCO-テオティワカン紀行-太陽が生まれ、天と地が出会い、人々が神になった場所
- 日中UFO情報交流
- 本誌編者の周辺
- 広島県庄原市葦嶽山「ピラミッド」に登る
- UFO世界ニュース
- 山口市にミステリーサークルを訪ねて
- オルトバーンズのクロップフォーメーション2地点から採取した麦の元素分析報告
- 1995年5月～9月 英国の作物畑に現われたクロップフォーメーションの色々



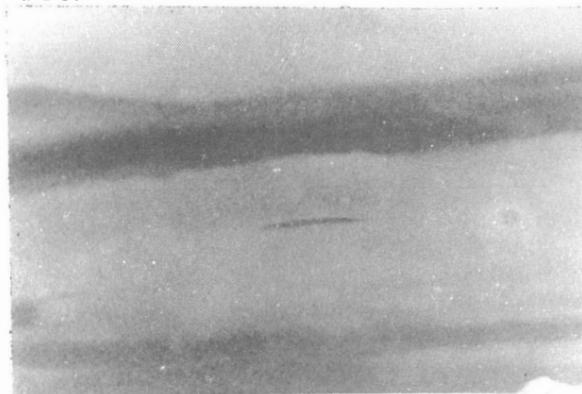
■ピエロ・デラ・フランチェスカ「聖十字架の高揚」(1460年頃?)右の空にドーム付の雲が2個描かれている。



■ドーム付雲の部分。編者も1985年4月にスーダンで同じ形の物体を撮影している。(藤平氏によるインタビュー記事の末尾に記載)■左はマンロー「サンタ・マリア・マッジョーレ聖堂の建立」にみられる雲に乗るイエスとマリア?。UFO状の編織を思わせる。



■ドーム付雲の部分。編者も1985年4月にスーダンで同じ形の物体を撮影している。(藤平氏によるインタビュー記事の末尾に記載)■左はマンロー「サンタ・マリア・マッジョーレ聖堂の建立」にみられる雲に乗るイエスとマリア?。UFO状の編織を思わせる。



■1999年7月25日、英国からの帰路、日本付近で機上から撮影された葉巻型物体。この物体は雲と機体の中間にあり機体の飛行と共に移動した。H氏撮影。

7枝の燭台と有翼太陽円盤 古代のシンボルがクロップサークルに現われた! —クロップサークル現地報告と巨石遺跡紀行—

1999年7月17日～25日まで、編者は旧知H氏の協力を得てイングランド南部、スコットランドを訪れ、驚異的なクロップサークルと古代遺跡のストーン・ヘンジ、ストーンサークルを見学してきた。今年のクロップサークルは、これまでにない具体的な図形が現われ、我々は幸運にもその一つに踏み入って、きれいに曲がった麦のサンプルを持ち帰った。また、ストーン・ヘンジを撮影したフィルムに異常が発生したり、ストーン・サークルのリバーサル写真に光点が写り込むなど、興味深い成果も得られた。いつもインターネット上のサークル情報を寄せてくれるKさんによると、その後のサークル現象は、仰天するような立体図形にまで発展した模様である。サークル現象の制作者は誰なのか? おびたしいストーン・サークルは何の目的で造られたのか?……謎だらけのグレート・ブリテン島、そこはなだらかな緑の丘陵が連なり、その丘陵の上に白く点々と羊が群れるという、我々にとって別世界であった。継ぎ目のない完璧な舗装道路が縦横に延び、郊外の洗練された街並みは、われわれウサギ小屋の住民を魅了した。

麦を自在に操って様々な図形を完成させる技術は、現代科学の水準をはるかに超えていると言わざるを得ない。その確かな技術水準を確認するためにも、現地のサークル図形を保存し、各国の科学者を誘致して国際的な調査を行うべき時が来たと感じるのだが……。

天宮 清

■サークル現象が生んだ人間世界の反応について

英国における麦畑の中の図形は1980年代より雑誌に掲載されていたが、日本におけるミステリーサークルの情報を編者が受け取ったのは1991年のことであった。現地でこれを取材し写真を送ってくれたのは千葉市の藤平浩一氏。サークル発生は1990年10月22日。場所は茨城県久慈郡里美村小里牧場で、大が一つで直径7m、小が2つで2.7m、雑草サークルで、草は左巻に倒れていた。

編者は、日本にもUFOとサークル現象を実地に調べる研究者がいたことを嬉しく思った。そして1991年5月から6月にかけて、兵庫県稲美町の麦畑にサークル現象が3度発生する。編者はOUCの乾達也氏の協力を得て現場を訪れて、雨の降る中、ズブズブと足跡のつくサークル内で、未知の力で曲がって倒れた麦の下の地面に、押し付けられた麦の痕のないことを確認する。この時の体験が、後に編者をミステリー・サークルの謎へと向かわせることになった。

いっぽう、この現象を再現しようと似たものを作る人も現われた。1991年6月、東京の空き地で二人の高校生が直径6メートルのサークルをなんと30分で作ったことや、1991年5月、岡山県で10人の研究者が本格的な麦畑のサークルを作成したのはその実例だろう。両者ともサークル現象は人のいたずらによるもの、ということを実証するためであった。

しかし、後者の場合の写真を見ると、立っている麦と倒れている麦の境目が人の踏んだことによって相当乱れてお

り、この状態を見て「英国のサークルと同じものを作った」とするとしたら、現象を見つめる「目」に問題はないか、という気がする。

サークル現象の目的について様々な意見があるが、こういう見方もできる。空飛ぶ円盤の目撃騒ぎから、トリック写真を思いついた人がいた。また空想としての宇宙人会見談や円盤搭乗記もさかんに発表された。サークル現象とUFO現象、この未知なる現象に対して、現象自体を調べて、現象から学ぼうとする反応と、なんとか似たものを作ろうとか、その原因を再現して説明しようとする反応の二つが人類の中に芽生えた。人の思考も行動も、地球という自然環境に発生した現象である。その現象はUFOやサークル現象が発生して初めて起ったのだ。UFO現象にしるサークル現象にしる、その現われた目的とは、その結果として何が生まれたかを見れば歴然としている。人類という囲いの中の種子をザルに入れて揺すったら、それぞれ芽を吹くなど反応が起ったのだ。その個々の反応こそが現象の目的である。

■98年、車のサークルが決断を促す

英国行きについては、ある旧知から「費用を全額出すから一緒に行こう」という誘いや、一般のツアーなどいろいろの機会があった。しかし、職場の事情もあり、なかなか決断がつかないまま1999年を迎えた時だったと思う。実はもう昨年、コーリン・アンドリュースに「1999年に英国に行く」と手紙を出していた。

藤平氏からの年賀状に「車の形のミステリーサークルは何か」といった文字があった。「何のことかな?」と調べていたらOUCの山野氏から電話があり、「学研の『世界奇現象ファイル』に車の形のミステリーサークルが載っている」と知らせてくれた。さっそく買ってそれを見た。確かに車である。しかも日本車であった。これを見た瞬間、英国を車で走行し、サークル現象を見なければ、という思いと、これはもう英国旅行のベテランH氏に頼み込むしかない、という決断に至った。

さっそくH氏に電話すると、快く承知してくれた。この時はまだ、アンドリュース氏との会見については話をしていなかった。

しかし、心配があった。「果たして、今年もミステリーサークルは現われるのだろうか?そして意味あるものを調査できるのだろうか?」ということである。この心配はその後解決した。というのはサークル情報や宇宙考古学に詳しい方から、最新のサークル情報が送られてくるようになったからである。彼女をとりあえずKさんと呼ぶことにする。この方は熱心な本誌読者のお姉さんで、編者の研究姿勢に賛辞を寄せられ、またご主人はじめご一家でUFOや宇宙考古学、超常現象に関心を持っておられる。そしてインターネット「CROP CIRCLES IN 1999」からの美しいカラープリントが大量に編者に送られてきた。これは非常に励みになり、また同時に3部送られてきたうちの2部は、英国行き計画中のH氏とサークル研究家の藤平浩一氏に送った。

■1999年のクロープ・フォーメーション

近年増加しつつある英国麦田における数々の複合図形は、もはや「サークル」というより「フォーメーション」(formation=形成・編成)というべきであろう。6月12日にオルトン・バーンズで報告された長大な連結サークルはまさにそれである。円を基調とした10数個の図形がトラムラインに沿って、突起を持つサークル、輪や衛星を持つサークルなどが一直線に配列されている。先端にワラビ手紋を突き出したこの図形には見覚えがあった。フランシス・ヒッチング著『謎の巨石文明』19ページに掲載されている古代の図形の一つで、「スコットランド、コクノに残されたカップ=リング記号」とある。先端のワラビ手、同心円にともなう円弧がよく似ている。

そのすぐ近くには、蛇行のようにうねる図形が現われた。これも6月12日に報告されているから、前記の長大な連結とほぼ同時に現われたものとみられる。

そして国際円盤デーを間近にひかえた6月19日、シルベリーヒルの近くになんと、ひと目でそれとわかる「有翼太陽円盤」の図形が現われたのである。翼にあたる左右に張り出した図形より中心の円のほうが上下にややみ出しているが、基本的には古代エジプトの有翼太陽円盤と同じで、翼の3つの区分も表現されている。実は編者はアジア圏あての国際書簡のサインの下に、この印章を押して使うことがあった。それだけに大変気になる図形である。現地に行ったらなんとしてもこの崩れない形を空から見てみたい。

なぜかこの図形は、全体として先の連結サークルのような明瞭なシルエットがみられず、へこみの浅い平坦な図形に思えた。つまり何らかの麦の状態のため、全体の色が「薄い」のである。この謎は現場を訪れて初めてわかった。

この情報を天空人協会本部の佐藤修氏に送ったところ、次ぎのような感想を戴いた。「…有翼太陽円盤のミステリーサークルには驚きました。このミステリーサークルが間違いなく有翼太陽円盤を意味しているのなら、ミステリーサークルには明らかに宇宙知性が関与していることになりますね。古代からの神はついに最終的な演出に入ったように思えます。しかし、なぜ英国で有翼太陽円盤型のミステリーサークルが作られたのでしょうか？ 英国の研究家が有翼太陽円盤とUFO、宇宙人を関連付けて考えることの出来る研究者がいるようにも思えません……。と書いたところで思い出しました。コーリン・アンドリュース氏と天宮様が、連携を取り合っていることわ。唯一、彼ならおぼろげながらもその意味を理解できるはずですね。ならば、今回の現象は彼を通して天宮様ひいては天空人協会をも視野に入れた演出でしょうか？ いずれにせよ、目に見えるUFO現象は全て演出であり、そこから真実を探り出すことは無理という結論となります。古代から現代の全てを俯瞰して捉えてこそ、初めてその本質が見えてくるのは明白ですね。結果的に私達は、UFO現象のメカニク的な側面ではなく、演出的な証拠を見つけ出さなければならぬように思います。(以下省略)7月24日」

■クロープサークル研究

◇生物の細胞に作用するUFO(主)の力の例

英国行きに当たって、編者は知識の準備として以下のようなまとめを行った。

1、「出エジプト記」第3章に主がモーゼを納得させようと2つのしるしを見せる。このしるし、つまり我々にとっては奇跡とか不思議な現象としか思えないこれは何なのかを考えてみる。これが主の力による魔術、あるいは幻覚作

用ならば、もう先には進まない。しかし、主自身は魔術とか幻覚のようなものを見ることを禁じている。(申命記18-10)したがって、モーゼの持つ杖が蛇になり再び杖に戻るのも、モーゼの手がらい病になり、再びもとの手に戻るのも、視覚上のトリックやマインドコントロールではなく、実際の物理現象、否、生物現象だったのではないかと考えられる。

2、昔「空飛ぶ円盤ニュース」1961年11月号くらい(薄クリーム色の表紙で昔の天体の仕組を見ようとする人の絵)の号に出ていた「26人殉教、長崎の空に輝く火の柱」といった記事に、らい病で顔の崩れた少女が、マリアの記念日なので、と外人宣教師が天に祈ったとき、光る玉が降りてきて、少女の顔面に静止し、しばらく滞空後、徐々に消えて、その後に元の美しい顔になった少女が立っていた、という話があった。もしこれが事実なら、この小型UFOはモーゼの場合と同様、人間の細胞を修復することが出来たようだ。

◇UFO(主)の力は重力をコントロールできる。

3、1973年10月18日午後11時前後、米国オハイオ州コロムバス航空基地から同州クリーヴランドのホプキンス基地に向けて飛行中の陸軍予備ヘリコプター部隊第316医療支隊の指揮官ローレンス・コイン少佐、副操縦士アリゴ・ジェジー中尉、衛生兵ジョン・ヒーラー軍曹、ロバート・ヤナセック軍曹は、1700フィートの上空で葉巻型のUFOと遭遇した。ヘリコプターはUFOの遭遇最中、未知の力によってたちまち高度3500フィートまで上昇し、さらに毎分1000フィートで上昇した。

この事件は、UFOが上空から遠隔で物体の動きを操作する能力があることを教えている。遠隔で重力や引力に類した力で飛行物体を上空へ吸い上げるような力は、我々の地球科学にはないものであろう。

◇主(UFO)の力は風と水に作用する。

「列王紀下」第2章11~22には、エリヤ昇天に伴う「つむじ風」について述べている。また昇天装置の乗員となったエリヤから落ちた外套でヨルダン川の水を打つと、川の水が左右に分かれた。さらにエリコの水の水質を主の指示で水源に塩を投げた儀式をエリヤが行うことにより変えた。悪い水を良い水に変えたのであった。主の力は水をコントロールし、水質さえも左右する。

◇主の力の発動には風が伴う

「出エジプト記」14章21~22までは、モーゼが手を海に差し伸べたので、主は夜通し強い東風を送って海の水を左右に分かれさせたとして述べている。「あなたの鼻の息によって水は積みかさなり、流れは堰となって立ち、大水は海のものなかに凝り固まった」(第15章8)とも歌われる。

イスラエルが海の中の乾いた道を対岸に渡ったのは夜明けころであったという。映画「十戒」では、このシーンがまたたく間に海が分かれるように描かれているが、記述では一晩中かかったとしている。別な資料「ダマスカス文書」では、分かれた水は氷のように左右に立ち、夜明けの太陽の光りを反射したと書かれている。

「聖書辞典」の「かぜ」の項によると「へブルびとは、神が風を作って自由に支配し導くと考えた」ヨブ28:25「知恵はどこに見い出されるか。悟りのある所はどこか。……彼が風に重さを与え、水をまずで量られたとき……彼は知恵を見て、これを表わし、これを確かめ、これをきわめられた」

アモ4:13「見よ、彼は山を造り、風を創造し、人にその思いのいかなるかを示し」

マルコ4:37~41イエスが風と海に向かって命令すると、その通りになった。

基本的にUFOは、地球上で活動や意志表示をするとき、地球の材料(物質と非物質)と形を利用するとみられる。人の期待に応じて出現する、というのも、UFO出現にスクランブルした戦闘機が攻撃態勢をとった瞬間にブラックアウトで脅かすというのも「人の出方に依りて対処する」という原則の下では同質である。UFOと人の間に空間と自然がある。空と自然は過去に遡れば神々の所有物である。人は神から土地を借りて耕し、初穂の中から神に捧げた。

UFOが主の再臨ならば、作物は主の意志を示す材料として使用される機会を持つ。人はどうか?人はその住む国家の財産である。国は国民に強制できるが、神は国民に強制はできない。人が神と契約し神の人となれば、話は別である。そうなった人は国に所属していても神の意志を優先させることになるだろう。

主は地球の材料をコントロールする。その方法は……。

「雲に知恵を置き、霧に悟りを与えたのはだれか」(ヨブ記38-36)「地は印せられた土のように変わり、衣のようにいられる」(ヨブ記38-14)……どうやら、主は大気の成分に知恵を与えて仕事をさせる能力を持つように主張している。

大気中の分子は予測のつかない動きを行っており、我々の科学ではその動きを完全にとらえて予測することは出来ない。天気予報が時に当たらないのは、我々の予測がおおざっぱだからである。

もし風をコントロールし、空気に海の水を固まられる程の力を与えたならば、麦を倒してミステリーサークルを形成することは可能だろう。問題は造形の精密さを、どうコントロールしているのかという技術的な問題だが、もはや空想の上に空想を重ねるようなものでどうしようもない。

書籍類からの示唆

■:引用文 ●天宮の注釈

Francis Hitching EARTH MAGIC「謎の巨石文明」: 1980年に白揚社から発行

■「今日なお、石造遺物を通じて肉体的に感じ取ることのできる、隠された地球の力があると、実際に信じている人たちがいる。」J.R.L.アンダーソンは「The Ridgeway 畔道」に次ぎのように書く。「感触は、弱い電撃のようにゾクゾクとした感じで指先に伝わってくる。で、その感覚をはっきりと感じ取るために石碑に近づき、触ってみることもできるのである」p.21

●1961~5年、CBA神奈川サークルの会計士K氏は、横浜市市内での会合の帰り道、川沿いの石柵の一つ(自然石を加工したものでコンクリート製ではなかった)に歩み寄り

「天宮君、この石に手をかざすとビリビリという感触が得られる。場合によっては強いショックで死ぬこともある」と言った。彼はストーンサークルが人間と太陽を結ぶエネルギー装置であることを複数の仲間と共に主張し、それを「CBAレポート」という冊子に発表していた。その図を思い出してみると、片方の手を石にかざし、もう片方の手を太陽に向けていた。しかし、こうした不可解な理論に目を向けなかった当時の天宮は、それらを真剣に考えることも実験することもしなかった。好奇心と理解力の不足を今になって嘆いている。

■「霊的な力や鋭敏な感覚をもった人々は、立石に隠された力を感じる事が出来、これに近づいたり触ったりすると眩暈を生じ、さらには手足に痺れ(●意味わからず)がきたときチクチクする感じにまで至る感覚を体験できると主張している。実際、グロスターシャーには“Tingle Stone”(tingkeは痛む、疼くという意)と名付けられた石

が存在する。」p.36

■「もし、ストーンサークルが天文学や幾何学と関連したものであったならば、なぜ彼らはそれほど多くのものを造ったのであろうか?そして、なぜそれほどまでに大規模なものがあるのだろうか?」p.39

■「カップ・リング」と名付けられた一種の彫刻がある。これは実に特異なもので、しかも広範囲に見られ、また同時にあまりにも意味のわかりにくいものであるため、いつ果てるともしれない考古学の論争題目となっていた。

「カップ・リング」印は幾重にもなる小同心円が、石の表面に見たところランダムな間隔に刻まれたもので、ときには円の中心から外側に走る波状線がつけられているものもみられる。直径は5~10センチ、パレスチナ、北アフリカ、コルシカ島、フランス、ドイツ、スカンジナビア半島、イギリス、アイルランドでは、この印のついたドルメンや羨道をもつ墓がみられ、アジア、アフリカ、アメリカ、ポリネシアでは、他の記念物上に発見されている。この印については、全くの実用的なものから神秘主義にいたる何10もの解釈が可能とされてきた。たとえばこれは乳鉢であり、ここで食物を挽いて粉にするとか、母なる神の乳房であるとか、なかには円盤を描写したのだというのさえある。p.42

■「もう一度いうが、巨石古代人は数と幾何学的形状の崇高さに取り憑かれていたというのだろうか?」p.189

●ミステリーサークルは、まさに数と幾何学の崇高さに取り憑かれている何者かによって制作されているように思える。しかも、わざわざ巨石記念物の近くにこしらえて巨石時代と結びつけようとしている。サークルメーカーは我々に「巨石時代に戻れ」と言っているのだろうか?昔、古代の王国の復活を目指した風変わりなUFO研究グループがあったが、麦畑の印は、その一部にそのグループの掲げた形を表現している。それは三重の同心円である。またそのグループとはCBAである。

■立石に存在する電磁気力に関して報告したビル・ルイスはサウス・ウェールズのアパーゲイヴニーに住む元電気技師で有数のダウザー(水占い師とも表記される)の一人だが、彼はこの力が地面から湧き起り、石を上っていくとき螺旋をなしているのだという。破損していない立石は、各々周囲を7回まわりながら上昇していく螺旋を有し、下の2巻は地下にあるという。だが力は一定していない。

月、太陽、惑星、磁極、その他種々様々な影響を受けて、強くなったり弱くなったりするのである。そして毎月極性が変わり、その力はさらに複雑で理解し難いものになっている。衰退期を過ぎると力は消え去り、2~3時間から2日~3日までの期間、混乱状態となり、再び現われたときには螺旋は反対方向に巻き、月の最後の位相に至るまで、その向きのままで周期的に増減する。p.246

■「活力ある石が、ジョン・ウィリアムスの肉体に及ぼす影響は驚くべきものである。もし螺旋になった帯の目の高さあたりの部分に掌を当てて、その石碑に寄りかかかったならば、彼は直ちに自分の身体に平衡を乱す力が形成されていくのがわかり、石を掴みつづけることが不可能になり、右か左にクルッと回って石から離れてしまうのである。彼は、この石碑のてっぺんにもう一つの力の帯があることを発見しており、これは部分的に紫外線の周波数に関係しているのだと思っている。理由が何であれ、彼は指先のちょっとしたちくちくする痛みから、12ボルトの自動車のバッテリーに触れたときの衝撃と同じくらい痙攣的な反射運動にまで及ぶ、肉体が感ずる知覚を受けている。いったいどのような力が石に存在しているのかを予想でき

ないことに、悩まされているダウザーは多い。「体内に積み上がっていくのを感じたら、私はすぐさま後に飛びのいてしまう」とビル・ルイスはいう。p.248

■1964年コーンウォール州のメリー・メイドウンというストーンサークルで、トム・レスブリッジは振り子を用いてダウジングを行っていた時、次ぎのような体験をした。

「振り子が揺れ始めるやいなや、奇妙なことが起った。右に置いた手が、軽い電気ショックのような、強い、ちくちくする痛みの感覚を受けたのである。そして振り子自身は、突如激しく持ち上がり、ついには地面とほぼ水平に回転し始めた。その石自体、1トン以上あったに相違ないのに、あたかも揺らいでいるかのように、ほとんど踊り回っている感があった。……翌日、私は妻を石の傍らに立たせ、彼女に何が起るかを見せた。彼女は同じ体験をした。他の地でこんな体験をしたとはなかった。…1975年、彼の妻マイナは、この事件が全く非人為的なものであることを確かめる。

「私には、どういうわけか石があたかも円を描いて動き、そして踊り回るかのように感じられました。振り子は持ち上がって、びんと横に突き出し、ヒューと音を立てて回転しました。そして他の場所では、そんな動きは二度と示さなかったのです。私はこれこそ、本来の、それらの石の蓄え方にちがいない一つつまり、石の周りを動き、回る人々によって力が蓄えられ、満たされたのに違いないという、非常に強い印象を受けたのです。ひょっとすると、トムと私がそこでダウズしたとき、その石に残っていたものをすべて奪い取ったのかもしれない」p.262

●ヨシュア記6章にエリコ陥落について興味深い記述がある。イスラエルの戦士たちが禁固な城壁をもつエリコを襲うに当たり、主がヨシュアに授けた方法を行うのである。それはまず武装した者たちが先頭を進み、次ぎに祭司7人がラッパを鳴らして進み、契約の箱がその後、そして残りの戦士が箱の後に続くという行列で町を6日間にわたり一回づつ巡り、最後の7日目にラッパと共に全員が大声を上げて城の城壁を崩すものであった。これはどのような力学によるものか、不明であるが、ラッパの音と人の動きのエネルギーがどこかで蓄積されて、7日目の大声とラッパに加算されて発動し、城壁を崩すほどの強力な力となった、と解釈できる。「人の動き」が蓄積されて効力を発揮するという理屈は「御百度参り」など信仰的な行為において信じられている。聖地を巡る旅というのも、何か祈願を持って臨むのが普通だろう。その祈願の成就というものが本人の旅によって訪れるのである。

■アイルランドの考古学者マイクル・モリスが1974年のIrish Archaeological Research Forum誌に書いたところによると、彼にとって、羨道墓(パッセージ・グレイブ)やその他にある巨石時代芸術は、たんなる装飾をはるかに越えたものなのである。

「われわれは、記念物が表わす儀式的象徴全体の中で、欠くことのできぬ部分を扱っている。疑いようもなく、渦巻と同心円は支配的な意匠である……最も抽象的なレベルの意味を考えると、渦巻は、生命力の……初期人類が関心を持っていた宇宙のエネルギー、そして生命のリズムの概念を表現していたのかも知れない」p.289~291

■太陽を表わす象徴は他にもあった。考古学者たちは世界中で小円盤を発見した。中には穴の開いたものもあったが、これらは太陽の力を捉え、治療に利用しようとする試みであった、と解釈されてきた。夥しい数の塚や墓から、直径2~6インチの円盤が出ている。日本にあるドルメンの地下から、考古学者たちが「馬車幅石」と称する、放射

状に筋の入った円盤を掘り出した。チェロキー・インディアンの呪術師は、草の根を引き抜くと、大地に出来た穴にその代償として円形のビーズを落としていた。そしてここに、この太陽崇拜というものの理由を解く鍵があるのかも知れない。p.303

■…真冬の日の出時にほんの短い間光りを採れるように、細心の注意を払って位置してあること、ストーンヘンジと大変数多いサークルが一直線をなし、真夏の日の出方向を指していること、南イギリスの諸遺跡がメイ・デーの日の出時になす、堂々とした整列線、巨石時代人が至点と将来の食の時期を説き明かすためになした細かい注意、これらすべては、考えもしないほど複雑であるが、精密に地表に設計された機構によって、彼らが強力な何らかの力を捉え、制御し利用しようとしていたことを言い表わすものと解釈できる。太陽が大地を暖め、作物を生育させるのは明らかである。しかし一他の天体とともに一何か他の力を与えることもできたのだろうか? p.304

■ジョン・ウィリアムスは25年以上らわたり3000以上の遺跡を目録に記載し解析してきた。

「私は、イギリス諸島にあるすべての立石が、他の二つ以上の先史時代の遺跡と真の直線をなすよう位置されていることを知った。また23.5度という角度、もしくはその倍数の47度、70.5度、94度が、再三再四、現われることも発見した。確率の法則によれば、こうしたことが起るのは180回におよそ4回だけである。…何年も私を苦しめてきたことは、たとえ当時の天文学者が黄道傾斜角のことを知っていたにしても、当時の測量技師や工学者たちが、どうしてそんなに正確にその角度を地上に描き上げる方法を解明し得たかということであった。ある日私は、23.5度はまさに9×4の長方形の対角線を引いて出来る角度であることを突如として悟った。」p.306

■目に見えない力を表わした、螺旋と蛇、太陽を表わす円盤と黄道傾斜角、北極星を指す三角形の表示—これらの象徴を併せ考えると、巨石時代人は今日やっと科学がその独特の方式で測定できるようになった、とてつもなく捉えにくい宇宙の力を理解しようとして研究を行っていたのかも知れない。月軌道の摂動を観測するときなどに、彼らが自覚しておかなければならなかったことは、物体というものはすべて作用を受けており、この作用は微小でほとんど検知不可能な変化をしていること、そしてすべての物体はこの変化による影響を受け、もっぱらこれによって規定されたサイクルと律動の中で生きているということである。

地質学者は、この世界の歴史において、これまで説明されてない、地球磁場の方向の驚くべき変化、つまり極性の完全な逆転が幾度もあったことを発見している。約1万年にわたって、場は徐々に弱まって極小の強度になり、その後、全く反対の方向に元と同じ強度で再現するのである。

これらのかすかで捉えにくい、変動する圧力と律動のまっただ中に生きて、巨石時代人は、地球と天体が互いにその力を及ぼし合うような様式で結びつけられていることを認識していたように思える。いいかえれば、彼らの天文学に関する興味は、占星術のはるか上を行くものであった。太陽、月、星、惑星の配置が、どれだけ巨石時代人の生活に影響を及ぼしたのであろうか? そして彼らが発見した螺旋状の力と、どのように関係していたのであろうか? p.310

■儀式と宇宙

巨石記念物は日々の実用的機能をもっていたこと、そして、この機能は天空との関連のもとに活性化された場合のみ生じうるものであったという見地に立てば、アレクサ

ンダー・トムが裏付けた天文学ならびに数学上の、不可解なこじつけの意味が明らかになる。巨石時代人は食、至点、分点、そして高度の幾何学を知る必要があった。というのは、現代の我々が理解していない何らかの方法で、彼らは石が正常に働くには、これら4つのことが必要不可欠なものであると悟っていたからである。

……満月の夜、ドルメンの笠石の上に物を載せ、周りを3回まわると、置いた物が消えてしまうと中世には広く信じられていた。……おそらく紀元前第3000年紀のある時期に、地球の魔術の発生に必要な三要素、すなわち地下にある力、宇宙からの影響、人間の精神の力の連合ならびに相互作用により、巨石文明がその極みに達したのだろう。p.334~339

●30年ほど前、我々若者達は古代の謎について様々な仮説をたてていた。ある仲間は、地面からワラビ手の形をした力が噴水のように吹き上げており、ストーンサークルはその発生装置ではなかったかと論文を発表した。これは説得力があり、「もう一歩」とコンタクトマンからもほめられた。私の友人だったO氏は、ストーンヘンジはテレポーション装置ではないか、と私に語った。特定の時期に人間を星の世界に転送するというのである。宇宙連合コンタクトマンは、40年ほど前にすでにストーンサークルが未知の力を発揮したり予知に使用されていたことを示唆していた。30代のまだ若い人が専門的に調べてもいないのに、今日の論点を網羅した見解を示したということは、宇宙船の中で宇宙人側からヒントを得ていたのではないか、という感想をもつ。私はまた、こう聞いた「ストーンサークルはそれを造った人が頭で理解した時に作動した」と。これはある夜、本部員のK氏がコンタクトマンから宇宙の秘密を聞いたかのように喜んで我々に話してくれたものである。儀式というものは重要らしい。まず時期という問題がある。太陽暦の特定の日、特定の人と装束、道具立て、言葉、人の行為、これらが組み合わさって儀式が成立する。

天の下で展開される儀式とは、天の神との関係において行われる。それは天と地の対話というか、契約の更新というか、地からの天への報告であり、天から地への助言であったらう。

英国の麦畑を特に選んで、夏至のころより巨石記念物に近いところに印を描かせる何者かは、地面と空間の間に生息する霊の仕業というより、巨石建造物の設置に関与した宇宙からの強力な技術の発動に思われる。

THE CROP CIRCLES ENIGMA ラルフ・レイノルズ編「ミステリー・サークルの真実」:

1990年集英社から発行

■テレンス・ミーデンや研究者は、エイブベリー、シルベリー・ヒル、ウェセックス古墳地帯など古代聖地の近辺にサークルが集中する傾向に注目している。p.58

■ウィルトシャー州の特徴は、ストーンヘンジ、エイブベリー、シルベリー・ヒル、そして欧州最大規模の古代遺跡をふくむことである。ウィルトシャー州はまたUFO活動のメッカとして知られている。1960年代、70年代を通じて、全国のUFOマニアがウィルトシャー南西部のウォーミンスターに夜ごと集結した。毎年空中に現われる奇妙な光のことが報告され、同時に発生した奇怪な出来事の数々をアーサー・シャトルウッドが本にした。その中の『ウォーミンスター・ミステリー』と『空飛ぶ円盤』の二作は、昨今のミステリー・サークル現象にふれた一番最初のものといえる。p.60

■『サークルの証明』のデルガードとアンドリュースは、

キールやシャトルウッドやUFO研究者と同様に、自分たちの生活や心構えがサークル研究によってガラリと変わってしまったことを認める。その変化はあるレベルでは哲学的と言っている。UFO研究者の発想やミステリー・サークルのデータを率直に認めると、現代の科学や教育が根拠とする合理的世界観をもち続けていくのが不可能になるのだ。見知らぬ思考回路に入っていく、神秘的な現実認識に向かい、やがて創造主と生きた宇宙の広大な謎へと導かれていくのである。p.62

■こうしたプロセスの初期、研究者は奇怪な出来事を経験することが多くなる。たとえばポルターガイスト現象の頻発などがよくある。キールが1966年にUFOの専門的な研究を始めると、たちまち奇妙な光、音、匂い、霊のメッセージ、超常的な生き物、不吉な偶発事件などに見舞われた。p.62

●これを読んで私は驚いた。私もやはり、1960年代初期、空飛ぶ円盤の本を読み、目撃し、記録をつけ始めた頃、「カナシバリ」現象に見舞われた。深夜、何者かが階段を上り戸を開けずに部屋に侵入し、その姿は黒い人影に三つの光る目であったり、抵抗すると「やめてやめて」と女の声が聞こえたり、布団が目に見えない動物によって呼吸しているように波打つものを見たり、何かの強いエネルギーとの激突で身体から幽体離脱して天井を突き抜けて夜空の冷たさと接触し、再び身体に戻ったりと、いろいろな体験が訪れた。CBA学生会員の集まりで、この体験を言うと、同じような体験をしている者がかなりいた。本部の先輩も「なぜかUFO問題に入ってからカナシバリが起るようになった」と言っていた。これについてKという語学達者なインテリの本部員に質問したところ「UFO問題の自覚によって普通の意識レベルから突出するようになったので、それをつつきにくるのだ」と説明を受けた。一時は夜眠るのがこわくなった。

■ユングの例にならって、現象の意味を考察する代わりに、サークル研究者はもっぱら現象の背後にある物的な力を探し求めることに忙しかった。それはあたかもベルシャザル(バビロン王)の宴に招かれたお客が、壁にせっかく運命を示すメッセージが現われたというのに、内容よりも通信のメカニズムに興味を感じるようなものだ。洗練された議論とは、勝手なことを言い合うのではなく問題の解決を目的とすることである。でなければ、サークルを研究する上での討論の場にふさわしくない。論争での関心はひとつである。すなわち、現在のところまるで説明がつかない不思議な出来事を理解する何らかの手段を得ることにある。そのためには特定理論を信奉するより、観察結果を共有するのが一番である。現象を理解することと、これを科学的に説明することは必ずしも同じではないのだ。p.64

■ミステリーサークルが作る規則正しい幾何学模様は、宇宙や人間の内面の原型的シンボルを表わしているのだが、自然界にはそれにあたるものは存在しない。ただ、音響効果の実験ではこれは自然発生的に生じうる。19世紀初頭、クラードニが、宙吊りにしたガラス板に左右対称のチリの模様を作り、音の調に合わせて震動させてからというものが、たくさんの方が音波のもつ模様作成能力に魅せられてきた。「最初に言葉ありき」と聖ヨハネは記した。宗教的な伝統では、音は創造の原理であり宇宙を調和させる力と考えられていた。ミステリー・サークルの幾何学模様を作り出す地球のエネルギー場への刺激のひとつが、音声であり、音楽である。しかしこうした音波はどこから発せられるのか、またそれは宇宙パワーなのか、地球パワーなのか、いまのところは答えようがない。

ミステリー・サークルと関係をもつことで研究者たちの様子や精神状態が変わったことは先に述べた。もしこのような変化が時代の精神と一致するならば、長続きして周りにも影響を与えることになる。これまでの経過からみると、ユングのUFO観をミステリー・サークルにまで広げる十分な理由があるように思える。すなわちサークルを「時代の終りに到来する一大変化」の兆しとみるわけである。

■オーストラリアでいままでに見つかったサークルは、アポリジニが古代から儀礼を執り行ったきわめて重要な場所に近い。さらに、アメリカ、ケンタッキー州のサークルは5年続けて同じ畑に出現しているが、そこはアメリカインディアン、古代墳墓のすぐ横なのである。p.201

■私たち人類、というより生き物はすべて、エネルギーからなっていると私は思います。このエネルギーは心身の調子などいくつかの要因に左右されて満ち干きします。そして程度の差はあれ、目に見える現実の肉体を超えて作用するのです。他人がすぐそばにいるとき、自分の反応がなぜそうなるのかを理解している人がどれだけいるのでしょうか？ エネルギーの磁場(あるいはオーラ)が実は相手と重なりあっていて、その波長(バイブレーションまたはエネルギー)が多かれ少なかれ相手と合っているかどうかを感じとるのです。これは一方の極から他方の極まで幅があるでしょう。……他人によく思われようと、私たちは仮面をつけることがよくあります。私たちは誰もカメレオンみたいなもので、生き残り、適応するために、しばしば本当の自分を隠すのです。でも、エネルギーの磁場を感じとれるというかそれがわかる人の前では、隠すことはできません。p.208

■さて、ミステリーサークルのエネルギーについてですが、これが牧草地ラインと関係する場合には、また実際、サークル全部が(偽物は別として)そうだと思うのですが、そこにあるエネルギーは強力です。そこで一人一人が受ける反応はそれぞれの持つエネルギーと関連します。不快な人もいるでしょうし、なかには畏れと謙遜の表情を浮かべているひとたちを大勢見ました。入っていくときの顔つきとは大ちがいです！ その意味で言うておきたいのですが、集団でやったら、こんな結果が生まれる可能性は、全くないとは言えないまでも大幅に小さくなるでしょう。さまざまなエネルギーが重なりすぎるのです。

並木伸一郎著『ミステリー・サークルが解けた!!』

■1990年に入り、ミステリーサークルは、およそ考えられる限りの複雑なパターンを示しはじめてきた。そして、もはやわれわれに予測もつかない変化を見せている。…客観的な目で見た場合、穀物畑に出現するサークルには、神聖な幾何学模様や宗教上の古いシンボルとの間に何らかの関連性があるようにも思えてくる。たとえば1989年7月、ウィルトシャー州ウィンターボーンストークに出現したサークルと「新しきエルサレム」に出てくる図形とを重ね合わせると、双方に驚くほどの一致が見られるのである。この「新しきエルサレムの図」というのは、イギリスの幻象研究家ジョン・ミッチェルが発表したもので、その基本構造はストーンヘンジやマンダラ、ゴシック建築の大聖堂の車輪窓などにみられる。p.150~151

■地中のエネルギーといえば、イギリス南部に見られる石柱や十字架は、神聖な力が地上の一点において融合する地点に置かれているという。古代人たちは大地に宿る“力”を最大限に引き出そうとして、土地の地磁気が集中するポイントにこれらの石柱や十字架を配置したらしいのだ。そして、巨石記念物などの遺跡に超自然的な力があるとす

民間伝承は、そのことを強固に支持している。

ドルイドの神官たちが空中を飛翔する力を持つらしいことは前述したが、彼らはその際、地中から湧いてくる“力”を利用したという。しかも、彼らが飛び立ったのは、神話の英雄たちが神格化された塚や山だった。このような塚や山には、通常の重力の作用を変化させることのできる力、あるいは人間の磁気場を強固にして、空中浮揚を起す状態をつくりだす力を引き出せる何かがあるのかもしれない。ドルイドの空中飛行についてジョン・ミッチェル氏は次ぎのように説いている。

「石室のある塚が位置する道筋が日の出の太陽によって刺激される日の前夜、ドルイドは塚の中に入って入り口を封じ、一夜を過ごす。その間、彼らは自分の身体の動物磁気が活発になるまで、エネルギーを蓄積しておく。日の出とともに、地磁気の流れは活動を始め、流れの道筋にある塚が刺激を受け、その中にいるエネルギーを蓄積したドルイドの身体に作用して空中に浮揚させ、一定の磁力が集中している道筋を飛行させるのである。ただし、飛行の際、ドルイドはどの程度まで空飛ぶ乗り物の力を借りたのか、あるいはまた、肉体を離脱した魂が状況に応じて姿を変えて飛んだのかはよくわからない……」p.257~258

■ミステリー・サークルが電波を発している!?

…「ドラゴン・プロジェクト」がストーンヘンジの調査中にとんでもない現象を発見している。なんと夏至と冬至に、ある周波数の電波が発信されていることが判明したというのだ。ストーンヘンジが電波を発している! これは驚くべきことではないか。しかも、天文学上の特別な日である夏至と冬至に限って電波を発するなど、そこに知的なメッセージが組み込まれているとでも考えないことには説明が付きそうにない。では、サークルはどうだろう。

1989年の夏、イギリスBBC放送が特別番組作成のためにサークル内にロケ班を派遣したとき、録音器材に原因不明のノイズが入っていた。このノイズが分析されて、結果が出たのだが、なんと5キロヘルツという周波数が検知されたというのである。p.260

パット・デルガード、コーリン・アンドリュース著

「ミステリー・サークルの謎」CIRCULAR EVIDENCE

■境界の明瞭で垂直な壁を眺めていると、ある種のチューブ状の遮蔽物が作物の上に降ろされて、その内部で茎が渦巻きながら倒されたのではないか、と思いたくなる。p.147

■電磁気は金属線—ふつう銅線のコイルに電流を流せば発生し、生じた電磁場は鉄金属の塊をその磁心に引き付ける。この力が植物の茎に作用するとしたら、茎に含まれている鉄分を帯電させ、かなりの強さで地面にひき倒すしかない。そのとき茎は乱れた倒れ方をせずに、きちんとした筋を描かなければならない。だが、電磁気が植物におよぼす影響を調べた実験では、草の葉はそよぐが、倒れたりもしなかったのだ。p.148

■……多くのサークルが雨の降る夜にも発生しているが、静電気は濡れた茎には生じない筈だ。サークルの周囲の壁には静電気防止剤でも振りかけたのか？ とにかく伝統的な科学からどのような仮説を立てても、サークル出現の真実には迫れないことがいっそう際立ってくる。……私たちが捜さなくてはならないのは、地上といっさい接触することなく発生する力なのだ。それはどこかにすでに存在しているが、なんらかの制御を加え、操作しなければ発現してこない、誰も気づいてない力かも知れないし、ことによると何らかの制御方法によって意のままに出現させ、動かす

ことも可能な力なのかも知れない。どちらの仮説も、サークルという形でなんらかの意思を表示したいと望んでいる知的存在が前提となる。……たしかに多くのサークルとリングはUFO事件と結び付いている。UFOは予想外の奇妙な動きができ、奇怪な現象を起させるとされている。人間が知らない力場をコントロールして、サークルとリングを作りだせるのかも知れない。ピシヤリと電磁遮蔽された中で回転する力場を操作するのは、UFOなら十分に可能な作業の筈だ。P.161~162

■サークルは未知なる力とエネルギーに結びついている、という考え方に信憑性をもたせるような意外な出来事が何度か起きている。ブラットンで2個組サークルの小さい方を測定中だったコーリンと私は、使っていた磁石をサークルの中心に置いたままにして、北の半径を測り終え、西の半径にとりかかろうとしたとき、磁石の針が反時計回りにぐるぐる回転しているのに気づいた。コーリンも私も目が疑った。すると回転はびたりと止まり、二度と動かなくなったのである。p.166

■調査をつづけていたある日にこと、私はふとダウジングの応用を思いついた。といってもいろんなやり方があるが、この場合は振り子方式を使ってみてはどうかと考え、M12(1.5センチ)の鋼鉄製ナットを50センチの糸に結んで試してみた。すると、たちまち驚くべき成果が現われたのである。初めは1987年7月25日、パンチ・ボウルの五個組のサークルで試みた。中央のサークルと北側の壁との中間に立って、錘を50センチの糸でぶら下げた。数秒間、錘はじっと垂れ下がったままだったが、やがて時計回りにまわりだした。サークルの渦の巻き方と同じだった。錘の描く円の直径はしだいに大きくなっていき、約40センチで落ち着いた。そこで錘の動きを止めてみたが、錘はふたたび同じ動きを繰り返したのである。……逆回りに動かしてみると、すぐに止まってしまい、またゆっくりと時計回りを始める。この現象が中央のサークルのどこでも生じたのである。p.179

■1987年夏、振り子実験の幅を広げた。オックスフォード州のロールライト巨石群、大小70余のさまざまな巨石で型どられた直径32メートルのストーンサークルで、さっそく手近の石から実験にとりかかった。その石は見取図上で14か15番だった。糸の長さを30センチにして垂らしたところ、振り子は活発な動きで時計回りにまわった。その左隣の石では反時計回りの回転が生じた。次の石は時計回り……次は反時計回り……こうした交互の繰り返し10個までつづいた。ところが次の1.5メートルほどの石で試したとき、違う“感触”があった。振り子が敏感に反応して、激しく時計回りにまわりはじめた。糸が水平になりそうなほど回転し、腕が振り子の強い動きに同調して、前後に揺すぶられた。身体を完全に一回転させて、かろうじてこの回転運動を止めることができたほどである。p.180~181

アンドルー・コリンズ著

「オルゴン生命体の謎」EARTH MYSTERIES

■ロートン軍用飛行場からは憲兵隊の空中パトロールが、いつも古代の道のリッジウェーを監視している。国防上の理由から夜間の怪光を調べているらしい。p.32

■(1991年)夏のある夜、午前3時ころ徹夜でサークルの観察にきていた一行が、近くのナップ・ヒルに降りてくる輝く柱を見たという。輝く柱は黒雲の下から見ると、丘の頂上を取り巻く新石器時代の岩跡に触れた。そのとたん、それまで固い管のように見えた柱は砕けて光線になり、丘のなかに消えていった。めったに見られぬ光景に、居合わせ

た者は酔いしれた。p.48

■若い女性サイキックのデビー・ベンステッドは、こう言う。(バーバリーキャッスルのサークル)あの場所のエネルギーに心を開いたとたん、得体のしれない情報が殺到してきた。ものすごい吐き気やめまいがして、すぐにひどいカゼの症状が現われた。そして、サークルの本質や構造のデータが頭に入ってきた。だが、あまりに多すぎて、負担し切れなくなった。p.52

■オックスフォードシャー州のロールライト・ストーンズ遺跡に通い詰っていたエセックス州のサイキック、ジョン・エイヴィス(仮名)は、遺跡を透視すると環状列石の内側に光の輪ができていたのが見えた。光の輪は何日か見えていた。そして、ため込まれていたエネルギーが均衡点に達すると、レーザーのような光の束が現われ、遺跡の特定の石の間を抜けて風景のなかに放出されていった。p.71

■1981年2月15日、ケンブリッジシャー州のウォームヘッド・ヒルの墳丘をエセックス州のサイキック、バーナードが訪れると、丘を囲むように渦巻く光の帯が見えた。彼は進み、脈動する光の中に入ると、とたんに激しい頭痛が起り、胸と頭が強烈に圧迫され、金臭い苦味や吐き気、めまいがした。同時に大地に反響するような深みのある音が湧いてきた。丘に上るほど、その音程が高くなる。さらに奇妙なことに、体外離脱体験が起きるときのように、自分が身体から抜け出てしまいそうな不安定な感じになった。そしてこんどはオレンジ色の礼服を着た神官が見えるのだ。p.72

■デビーによると、ストーンサークルは巨大なオルゴン・アキュムレーター(蓄積装置)として機能するが、その仕組みは土壘とはまったく違うようである。→

●「蓄積エネルギー」という概念は、エリコ陥落の人の動きとラッパ音の蓄積が一挙に発動して状壁が崩壊する、という物語を思い起す。

→ストーン・サークルをつくるときに石を深く埋め込み、石の間隔をわざと大きく開ける。そうすると石のない部分が規則的に並ぶようになる。石、大地、石、大地、石、大地というように、あたかも有機物と非有機物が交互に組み合わせられたようになるのだという。ダウザーたちは石や土の先史遺構の下に隠れた泉や地下水路が見つかるという。エネルギーを噴水のように噴き出している場所があるが、そんなエネルギー噴水の水源が地下の泉や水路なのだというダウザーも多い。p.74

●「地面からエネルギーがワラビ手の形で吹き上がっている。」という説を唱えたのはCBAの田中昭雄氏で1964年のころだ。彼は古代の彫刻の図柄から、それを推測した。

■古代遺構のうちエネルギー・アキュムレーターとして作られたものが実際にどれくらいの割合になるのか、またどれくらいが今も機能しているのか、は難しい。ほかの部族がまねて作ったものも多い。同一の場所が異なる文明によって繰り返し使われることもある。p.76

■神聖な丘に関する伝説には、光や火災がみられたという話が一番多い。

■1989年8月、コーリン・アンドリュースとパット・デルガードはテレビ番組用にベカムトンのサークルを録画しているが、ビデオ装置がおかしくなった。大きなサークルに近づくとファインダーにノイズの帯が入ったり赤い光がひらめいて、カメラに障害が起きたことを示す。録画フィルムすべてに、ひどいノイズが入った。

プロカメラマン、リチャード・アンセットは、バーバリー・キャッスルで助手に持たせたリモコン式のフラッシュ器がカメラのボタンに反応せず、手で操作するはめになっ

た。間隔をおいてフラッシュをたいても、すぐに充電しなければならぬ。そしてシャッターもおりなくなった。

p.86

■1987年6月13日コーリン・アンドリュースは両親や愛犬と一緒にハンブシャー州キンプトンの畑にリング形サークルを見にいった。サークルの中でアンドリュースは黒い閃光を見た。夜再びリングに入ると、3m先で静電気のようなピシピシという音がした。音はしだいに激しくなり、6秒ほどで聞こえなくなった。小鳥のさえずりというか、蜂の羽音のような音でもあった。動物はサークルに入らなければならない。低レベルの超音波を感じているためらしい。

■遺跡やレイラインには天然の磁気エネルギーが存在している、UFOが降下するとき、その場所を利用するというのである。p.97～98

■1988年7月13日、モールバラに住むメアリー・フリーマンという女性が、夜更けに車でエイブベリーを通り抜けA4号モールバラ線との合流点近くで巨石列柱のケネット・アベニューを横切っている。フリーマンがふと気づくと、雲のなかをコハク色の光が動いて、光の底部から白く輝く光の束が筒のように伸びて、しるべりーひるの南側の地面を照らし出していた。p.239

■1989年7月18日、早朝、サークルメーカーから自動書記で指示を受けたリタ・グールドは、チェズフット・ヘッドのサークルへ研究家達を案内した。サークルで小鳥がさえずるような音が聞こえ録音された。その際に畑のはるか上空に浮かぶ一対になった角のような形の光体が目撃された。

■7月25日の夜、部屋で寝ていたハンブシャー州アンドバー出身のロン・ジョーンズはさえずるような音を聞いた。起き上がると、音が頭の回りをぐるぐる回っているように聞こえ、「星気体投影」を起して、一週間前のチェズフット・ヘッドに戻ってしまった。そこで彼が見回すと、生えそった作物の海の上を、光の帯が一続きになって水平に伸びている。光の帯は回転し、上下に脈動していた。そんなふうにして同時に二つの場所にいるような状態がいつまでも続くかと思われたが、ジョーンズはいつの間にか部屋のベッドに戻っていた。p.244

沢田京子著 イギリス聖地紀行 AVEBURY で実験すること。

■エイヴベリーのグレート・サークルの南の入り口に「デビルズ・チェア」という四角い石がある。いわばサークルに入るための門柱のようなものである。記念写真を撮るにはうってつけのように、石の正面に窪みが掘られ、人が座ることができる。座ると奇妙な感覚が襲うという。p.35

■スウィンドンの並びにある平凡な菱形の石のゴツゴツした表面を何気なく手で触れたところ、手の平に軽い電気ショックのようなものを感じた。びっくりして火傷でもしたかのように手を引っ込めた。しかし、気のせいかもしれないと思って、もう一度同じ場所を触ってみると、やはりビリビリと手の平がくすぐったい。…手の平を直接石につけるよりも、2～3センチ離して石の表面にかざした方がよけいに感じるはず…p.38

■「エイヴベリー・ストーンサークルに並ぶそれぞれの石の間には、あるエネルギーが流れていて、ダウジング・ロッドに反応する…」…彼が石と石の間を通り過ぎるとき、平行に持っていた2本のダウジング・ロッドがいきなり左右にふわっと開いた。彼は再び元の位置に戻り、同じ動作を繰り返したが、ある地点までくるとやはり、棒は勢

いよく左右に開いた。クロウ氏が眼を閉じて、どこを歩いているかわからないようにしても結果は同じだった。しかし、石と関係のない場所で持って歩いても、棒はピクリとも動かず平行のままなのである。棒が開いた後、そのままの状態の後戻りすると、その地点で今度は棒が内側に戻って、交差してしまった。p.46

■私も挑戦することにした。まず、棒の持ち方を教えてもらおう。親指以外の4本の指で棒の取っ手(L字の短い方)の部分をしっかりと握り、親指は軽く立てて添えるだけ。二本の棒を地面と平行に持ち、身体力を抜いてリラックスする、それだけである。…彼がやった通り二丁拳銃のように棒を手一本づつ持ち、石と石の間をそろりそろりと歩いてみた。ちょうど真ん中に差し掛かったとき、棒が勝手に動いて左右に開いた。p.48

■英国ミステリーサークル、ストーンサークル行 各種準備の内容

6,11夜 米国CPR Colin AndrewsよりFAXあり

6,19午後2時 米国Colin Andrews宛FAX送信

6,21昼 英国Colin Andrews宛手紙発送

●服装

靴は外出用の革靴。上着はブレザー。活動中は普段着の長袖に小物入れベストを着用。着替えは濡れてもすぐ乾く薄手のズボン1本。予備に長袖のニット。頭が寒いので白い作業帽をかぶる予定。

●手荷物は3個

- 1, 撮影器材をいれるショルダー。パスポートや旅行小切手を入れる。
- 2, 撮影器材の予備、フィルム類、書類、小道具、衣類をいれる小型スーツケース実際にはH氏より戴いた大きいスーツケースを使用。
- 3, 『地球外知性痕跡探索』インド、オーストラリアなどの本を入れる小さなリュック

* 赤外線フィルムはカラーリバーサルにした。これは0度以下で保存しなければならないので、発砲スチロールのボックスに「こおるぞバック」を入れてスーツケースに入れる。これだけで半分のスペースをとった。実際には温度管理が無理なため放棄

●UFOなどの説明用小型アルバム(日本のサークル現象調査模様。UFO写真その他) コーリン・アンドリュース氏に贈呈した

●記録野帳はA6判コクヨノートを3冊。主に測量控え博物館の展示品記録に便利 実際には展示品メモの余裕はなかった

●マイクロテレコ SONY M-527 マイクロテープ60分 3本 アンドリュース氏とのインタビューで使用した

●クロップサークルの上空からの撮影は、アサペンZ-10に35mm～70mmをつけたカメラとアサペンMEに75mm～300mmをつけたカメラの2台で状況に応じてやってみよう。実際にはZ-10に75～300がベストだった

フィルムはISO400ネガカラーを使ってみる。地上からの各種撮影のみ、ビデオを使用する予定。これは主に実験状況を三脚固定撮影できたら良いが、見物人の状態により考えたい。実際には人目のある場所での実験は出来なかった

■折りたたみ笠 1本

■手袋 2組

■フリコ 風があり一度も使用する機会は無かった

■電磁波感知機 Mobil Phone Light Sensor 800～2000MHZの電波が受信されると受信機の周囲2m

の範囲で反応する 使用する機会は無かった

●クロップサークル植物標本用台紙作り(B4判の紙を縦二つ折りをボール紙ではさむ。そこに長さ35センチくらいの葉をはさみ、紙テープでとめる。小型ハサミを用意)

●チャック付きポリ袋「ストックバッグ」27,9cm×26,8cm25枚入り(8ヶ所分)にサンプルをとりあえず入れ、採取場所のシールを貼る。役に立った

●クロップサークル植物標本は一件につき(1) 立っている通常の植物の根元付近をカット(2) 立っている通常の植物の葉の一部と実(3) 曲がっている植物の曲がり根元をカット(4) 曲がっている植物の葉の一部 (5) 麦の実 実際には根元から先端までの一本そのままを採取した

●クロップサークルの内部に昆虫類がどうい状態であるか観察記録する。

●野菜を入れるチャック付きポリ袋をサンプルの採取に使用し、帰国時に紙にはさんで書類風にする。紙は7件用28枚を用意。また一応、土壌サンプル用として、フィルムケース6個を用意。土壌サンプルも、立っている植物採取場所からと曲がっている植物採取場所からの2ヶ所とし、3件分を用意した。実はフィルムケースを大量に処分してしまい。現地ですべて使ったフィルムケースを不足分に当てる。

●ストーンサークル人体実験用として厚さ0,3ミリ幅45ミリ長さ550ミリの黄銅板の(久宝金属製作所06-6762-8874)ヘッド・ベルト、ラピスラズリ首飾り、アルミ棒を曲げたダウジング・ロッド。40mm×25mmの馬蹄形磁石をナイロン紐に結んだ振り子を用意した。金属ベルトのみ使用方位磁石と巻尺(3.5mと20m)もあつたのを用意した。

●カップアンドリング遺跡で簡易拓本が可能な場合のため、60cm×50cmの和紙を6枚と両面テープ、クレパスを用意。役に立った

■ヒースロー空港まで

1999年7月15日の勤務は大変だった。私が留守になるため、先の分の仕事をギリギリまでやった。帰宅すると修理に出していたビデオカメラが到着し、長野の齋藤真理さんからの励ましの葉書が届いていた。娘から「頼まれた事、ちゃんとしなよ!」との声。葉書をバッグにしる。

「…さて、いよいよミステリー・サークルの調査にイギリスへ発たれるとの事。何だか私までドキドキ、わくわくしてしまいます。何か新しい発見があるといいですね。…向うではヘリに乗ったり、車も運転されるそうですが、気をつけて、収穫の多いことを期待します。報告待ってます。齋藤真理'99,7,11」こうした期待を寄せる方からの励ましは「期待に応えなくては」という意識の高揚をもたらしてくれる。私の家族は軍隊調なので特別な励ましはない。ちゃんと生命保険に入ったか、その確認くらいだ。

ビデオカメラを梱包から取り出してバッグに入れ、冷蔵庫から赤外線フィルムを出して冷凍ケースと共にスーツケースに入れ、前乗り午後5時51分で京都に向かう。東京駅でH氏と合流。彼の自宅に荷物を預けて、近くのビジネスホテルで宿泊。その夜、妻からホテルに電話があり、秋田の駒ヶ嶺氏から電話があったとの事で、さっそく駒ヶ嶺氏に電話する。赤外線フィルムの管理について簡単な冷凍保存の出来る道具があることや、植物サンプルの国内持ち込みに関する意見など、しばらく話した。

翌日は外貨両替と不足品の買い物など最終的準備。そして編者は夕刻、約束してあつた旧知と渋谷で会った。30年ほど前、東北出身の彼の名前と作品は知っていたが、初

対面であった。上等の寿司をご馳走になりながら、長い年月の空白を語り合う。彼からピエロ・デラ・フランチェスカ「聖十字架の高揚」とマゾリーノ「サンタ・マリア・マッジョーレ聖堂の建立」の2枚の絵画の鮮明な白黒コピーをもらう。両方とも、こんなに大きく印刷されたものは初めて見た。15世紀イタリアの画家フランチェスカの絵には独特の雲が描かれている。我々が見ると、それはドームを持った空飛ぶ円盤の側面の形状に見える。この絵では2つの形が認められた。その質感は北海道のハヨピラで撮影されたものとよく似ている。現代人のほとんどは、空飛ぶ円盤や異星人の乗り物という、金属的な外観のメカニク的なスタイルを想像すると思うが、その様な場合ももちろんあるが、我々が時折認めるのが、このフランチェスカの絵にあるような、一見雲のような質感で、その形状や変化によって「これは?」と気付く現象である。フランチェスカは好きな雲の形として、ドーム付円盤側面型の雲を背景に用いたのだろうか? それとも、フランチェスカはこの形の雲が神聖な特別なものという認識があつたのか。編者が思うに、これは目撃した者自身にしか描けない表現である。また、それが十字架という神聖なテーマにふさわしい背景だと信じる何らかの体験があつたと推測される。

いっぽうのマゾリーノの絵は時折UFO本にも掲載されているから御存知の方も多だろう。ここにも、フランチェスカとは若干表現が違うものの、本質的には同じ雲の外観を呈する神の乗り物が描かれている。牧師が地面に描いた聖堂の図面を、上空から確認に訪れた天の軍勢(代表がイエス?その隣にマリア?)を表現しているように見える。

1999年7月17日朝6時、H氏宅で合流し、箱崎から成田へ向かう。12時13分離陸。約13時間の飛行だが、日本と英国の時差はマイナス9時間なので、到着は同日の午後3時29分であった。広大なシベリアと北欧のフィヨルド地帯が印象に残った。

ヒースロー空港での入国手続きは、なんだか田舎の空港といった感じで、近代的なシステムとはいえなかった。インド人風の家族の手続きが長引いていた。すんなりとは行かない事情があるようだ。我々は観光目的と滞在期間を言って簡単にパス。以外と気温は高く、摂氏25度で晴。

空港内のレンタカーカウンターでH氏が手続き。私も国際免許証を差し出す。もう、ここからは唯一H氏が頼りだ。彼の英国行きは今回で7度目とのこと。「帰りのようだ」とH氏。彼の会話もしぐさも英国人とまったく同じだ。飛行機乗りの血筋と様々な分野に造詣の深い行動的な人物である。語学に関してはまた現地人並みの詳しさ。

次にレンタカー会社のマイクロバスで空港に隣接した会社に到着。午後4時47分、トヨタ・スープラーは静かに空港を後にした。

■ストーン・ヘンジを表敬訪問

H氏の運転で車が市街から郊外に向かうにつれて、日本ではみられない独特の風景が展開してきた。まず路面が非常に滑らかである。これは高速道路に限らず、郊外の「田舎道」であつてもだ。一見ただけでは分からないが、実際に走ってみれば日本の継ぎはぎやマンホールの多い路面との違いが即座に分かる。そのためなのか、「田舎道」でも行き交う車は時速100Kmくらいで走っている。それに、道路を歩いている人影が見当たらない。たぶん、各々の距離が歩行で済むほど近くないので、道路は車で行き、歩行は家の中、という生活が徹底しているのだろう。電柱のない景観の美しさ、緑のなかの煉瓦造りの住宅の美しさが目をひく。そして決定的に違うのが山だ。どこまでも続くなだらかな丘陵と丘陵。頂上の尖った山がないので

ある。(ちなみに英国の最高峰ベン・ネビス山は標高1343m)

H氏に教えられて樹木を観察すると、これも日本に見られない形をしている。西洋画そのままの世界だ。道路の端にもゴミ一つ落ちてない。カヤ葺き屋根も「良い仕事」をしている。白壁と木材の住宅、赤いレンガの洋館といった歴史を感じさせる建物が、即席の建物を壊しては作ってきた日本人の感覚とは違う世界を見せている。

車はソールズベリー平原に入った。周囲に広がる広大な麦畑。ついに来たのだ!! 何度も何度も写真を見て頭の中に描いた風景。これがミステリー・サークルの出現する麦畑なのだ。いま、現実目の前に広がっている。

「あっ、ストーンヘンジが見えてきましたよ」との声で前方を見て、即座にビデオカメラを向ける。一見したところ、黒い固まりに見えた。そして近づくとつれて石組が見えてきた。道路に沿って金網が張られ、反対側に広い駐車場とストーン・ヘンジ見学者の入り口がある。入り口を歩いて道路の下の通路を抜けてストーン・ヘンジの広場へ向かうようになっている。大勢の観光客が訪れていた。夕方のやや黄色味がかかった太陽光線を浴びて、灰色の巨大な石組は、人類の歴史の彼方から存在してきた姿を見せていた。私は道路から撮影しつつ、金網越しにストーン・ヘンジに声をかけた。我々は明日ここに入場することにした。

■「有翼太陽円盤」図形の麦の状態について

円を中心に左右に水平に延ばされた「翼」、これが本当に古代エジプトの有翼太陽円盤なのか、別の(例えばプロペラと飛行機を正面から見た形、あるいは外輪船を横から見た形)形を表わしたのか、その辺の検討も大切だが、とりあえず、この図形に入った体験から以下に記してみよう。

1999年7月18日、我々はまずシルベリーヒルに向かった。ヨーロッパ最大の人工の山、土に覆われたその下に石の山が築かれている。我々は登ってはならないこの山に何とか登ろうと、柵に近づくと、柵に一人分のすき間が開いていた。去年はなかったというH氏の話。この入り口を見た瞬間、10年ほど前に廃虚のハヨピラを夜訪れ、何とか中に入ろうとして、一人一人くぐれるすき間を見つけた事を思い出した。そこからは斜面に道があり、そこを登った。頂上について見渡すと、すぐ近くに有翼太陽円盤の図形が見えた。さっそく撮影を開始する。輪郭がきれいだ。

シルベリーヒルを降りる途中、独特の白い土のサンプルをフィルムケースに入れた。我々は車で道を走りながら見当をつけて現場へ向かった。運良く道路に沿って駐車場があり、そこに車を止め、器材を持って徒歩で麦畑に入る。駐車場からその方向を見たが、なだらかな斜面の向こう側にあるため、そこからは図形が見えなかった。入るべきトラムラインを選んで麦畑に入りしばらく歩くと、突然麦の乱れた場所に来た。乱れた麦を囲むようにカーブした「植え込み」があった。「植え込み」と見えたのは倒された麦と立っている麦の境界であった。

しかし、カーブしてきちんと立っている麦に囲まれたサークル図形の内部の麦は、すべて倒れている訳ではなかった。むしろ立っている麦が目だった。そういえば、Kさんから送られてきたインターネット情報のこの写真を見ると、図形の凹部が薄く見えていた。輪郭はきちりしているのだが、輪郭の中の麦がベタッと倒れていないように見えた。写真を見ると翼の中の3つに分かれた翼、これはエジプトの有翼太陽円盤を見るとわかるが、翼は3枚の上、中、下に分かれているのが普通である。その「全体の形の中の図形分け」という表現をするにおいて、製作者は輪郭

を強調するも、中の麦を完全に倒さないことで、輪郭の中の図形全体のバランスを保とうとした意図を感じた。つまり「図形の中の図形は、それぞれ別ではない。全体で一つの図形なのだ」というメッセージが感じられた。図形の中に入って、撮影やトラムラインの測定、サンプル探しや昆虫探し、そして外人夫婦との応対など忙しかったためか、図形に入ったことによる、身体、精神上的の特別な変化は感じなかった。

さて、倒された麦が、「適当に人がふんでやったのか、未知の力がランダムに倒すべき麦を倒したのか」これを確認するためには、サンプルが必要になる。藤平浩一氏から「サークルの中の昆虫の状態がどうなっているか?」の言葉を思い浮かべながら昆虫を捜しつつ、適当な曲がったサンプルを捜した。その時、H氏が一本の麦を取って私に示した「天宮さん、これちょうどいいんじゃない」まさにそれは根元の茎がきれいなカーブを描いていた。それを用意した「倒れた植物」と書いたポリ袋に入れ、次に図形の外で立っている麦を引き抜いて「立っている通常の植物」と書いたポリ袋に入れた。そしてその付近の土をフィルムケースに入れた。しかし、ちょっと量が不足だった。

■エイブベリー・ストーンサークル

この地名はAveburyと書くが読み方が本によって異なり「エイブベリー」「エイバリー」などがある。ストーンヘンジの北約30キロ、我々が宿泊したマルボロの西8キロにあり、直径約430メートルの巨大な溝と土手の中に約30個ほどの巨石によるストーンサークルがある。大きさはヨーロッパ最大で、サークルの中に民家やホテルが建っている。

平面設計は大きなサークルの中に2個の小サークルがあり、その完成当初の姿については、これまでも多くの書物で紹介されてきたように実に壮大だが、長い年月の間に多くの巨石が倒されて埋められ、破壊され、原形をとどめなほど当初の姿が失われてしまった。一説によると、完成してから約3600年後のノルマン征服までは原形が保たれていたらしい。

それでも、今日大勢の観光客が訪れる古代の遺跡として現存しているのである。BC2800年から約5000年の歳月を経過して!! もしこれが日本の大湯のように地下に埋没していたなら、幾千年もの混乱の時代を土の下で過ごし、戦乱が終息した頃に発見されたなら、我々は当時の姿を見られたであろう。

1999年7月18日、エイブリーの駐車場にはギッシリと車で埋っていた。晴天の空の下、暑さにもめげずヨーロッパ各国からであろう観光客が訪れていた。アイスクリームや清涼飲料を売る車でピン売りのスプライトを買い、それを手にしながら遺跡の入り口に向かう。道路を横断すると巨石の列が見えてきた。でかい! 思わず石の前で立ち止まり、スチルカメラ、ビデオカメラで撮影。何度も訪れているH氏は、編者がいつまでも石に触ったり、片手を太陽に向けたり、抱きついたりするのを待っていられなくなって、さっさと先へと進んで行く。必死で後を追いかける。

ストーンサークルという全世界共通の遺跡は、その所によって規模が違う。おそらく日本の大湯や最近の青森小牧野ストーンサークルなどは小型の部類であろう。それぞれの石は巨石と呼ぶほどの大きさではない。しかしながら、このエイブリーの石はまさに巨石である。なんでこんなに巨大な石でなければならなかったのか? 日本のような小粒では間に合わなかったのか? あるいは同じ「石の輪」であっても建造目的や機能が違うのか?

しかし、石を円形に並べる、あるいは太い丸太を垂直に立て、それを円形に配置するという古代人の行為は英国でも日本でもみられるものだ。だから、彼らはたとえ民族や地域が異なっても、同一の趣旨でそれらを建造したのではないかと思えてくるのだ。

ある人は石に手をかざすとビリビリという感触、あるいは電氣的ショックを受けたと書いている。石が地下からの力をくみ上げる装置だという説もあった。たしかに、1988年にアンデス展を万博公園の民族学博物館に見に行ったとき、アンデスの縦に長い石に、地下からの力を上昇させている図柄が彫られているのを見つけた。残念なことに、この石の写真は分厚いタタログには掲載されていなかった。アンデスの壺の絵柄に、あの黄金ジェット機に乗って空を飛行している人物の図柄を見出したのも、このときである。

日本には、巨石に怪光が訪れたり、降下したりする伝承がみられる。この怪光が小型のUFOだったとしたならば、古来からある巨石に接近する目的は何なのか? 石が地下からの力をくみ上げて蓄え、その蓄えられた力をUFOが吸収する、といった説もあったように思う。しかし、相当科学が進んだUFOとしては、地球の遺物を介してエネルギーをもらうなんて、ちょっとおそまつではないか。しかし、石に何らかのエネルギー蓄積の機能があるのなら、情報の蓄積のほうが、外部からの知性にとって有用であろう。つまり石を地球人のモニターとして使用のだ。その石に近づいた幾世代の情念・怨念・想念・言葉が石に蓄積され、それを100年に一度くらい取り出してデータとしてUFO側の情報倉庫にほうり込むという……。もしそうならきわめて実用的な石の用い方である。

ストーンサークルやストーンヘンジはまた別な石の機能が利用されたのだろうか。単に天体の観測装置だとしたら、あまりにも建造に歳月と人力が投入され過ぎると思う。確かに天体の動きに連動する構造的な特徴については明白である。しかし、作物の種まき時期を知るために、巨石建造物が必要だったとする考えには賛成できない。もっと切実な古代人の内面生活の維持、あるいは長期におよぶ安定した社会を維持するための装置、そういった現実的な建造物でなければ、たとえばストーンヘンジ/1700年にも及ぶ計画的な建造という、我々の社会でも実現しそえないスパンの長い知的活動はできないのではないか。

巨石に一人一人が座れる窪みがあり、そこに座ると異変を感じたという記述を確かめようと、編者もそこに座ってみた。何の変化も感じなかった。私の身体が鈍感なのか、訪れた時が、その時でなかったからなのか、とにかく異変を感じるうわさのある石に手を触れたりかざしたりしたが、何も感じなかった。これは、たとえばUFOを確認するために、一晚徹夜して観測したが、見えなかったのでUFOなんか実在しない、という事が言えないと同様、フラッとやってきたよそ者に、数1000年もそこにいる石が、簡単に語ってはくれないと思ったほうが賢明なのである。何事もそうである。ある人にとっては、簡単にUFOが見られるから、それをまねすれば同じ結果が得られるか、といったらそうではない。長い年月のひたむきさが結果としてある日に訪れるものである。

■オルトンバーズの長大な図形に踏み込む

7月中旬のこの時期、かならずクロープサークルが現われるという場所、それがオルトンバーズである。H氏はその辺のところを心得ており、車が数台連なって駐車している場所に車を停めた。歩いてゆくと、そこは丘陵の上から下を見下ろす場所であることが分かった。そして2つの

クロープフォーメーションが見えた。左側がいくつかの円形を連ねた長大なもの。その右手彼方にあるのが蛇行する図形であった。さっそく撮影を開始する。

しかし、その2つのフォーメーションは出現したのが1カ月前であり、多くの人々が訪れたことや、麦が収穫時に近い黄色い色となっているので、新鮮な麦のサンプルは期待できそうになかった。かなり遠方にある。ここから下るか、それとも平地に下って反対側から畑に入るか、そのほうが近道と感じたので、我々は図形の反対側に向かった。麦畑が一望できる場所に車を停めて器材をもってトラムラインを捜す。あたりは牛糞の堆肥場らしく、かなりの臭いが漂っていた。トラムラインをどんどん進んでいくと、図形はなんと右手遠方にあった。これだと畑を何本も横切らないと図形にたどり着けない。麦は脇の下ほどまであって垂直で固く、とてもそれを踏み倒して横切ることとは不可能であった。我々は車に戻り、再び丘の上に向かった。

丘を下り、畑の柵である有刺鉄線を乗り越えれば、あとは以外と簡単であった。選んだトラムラインは図形の方角に向かっていた。トラムラインとはトラクターの轍の跡で、一人一人が歩行できる幅(約40cm)があり、麦がないので早足で歩ける。左右から麦の穂がラインを覆っているが、穂を透かして黒い道が見えるので、それを見ながらかなりの速度で歩ける。まるで金色に輝く麦の海を進んでいるかのようなのである。空は快晴に近い。それでも湿度が少ないので、汗のかきかたは日本よりまだ。

我々はついに、サークルに到着した。トラムラインを中心にして麦が左右に円弧を描いて立ち、図形は2本の畑の中に収まる大きさになっている。倒れた麦は何百人かの訪れた人々の足で、かなり平らにつぶれている状態だ。さらに進むと、まったく同じパターンの円弧が現われる。しかし、近くで見ると、どんな図形なのかはもうわからなかった。遠くから見た明確な輪郭が、現場ではどの部分に当たるのか、即座に判断できなかった。円弧を描いて垂直に立っている麦の壁は、間違いなく、10年以上も映像で見てきた英国南部のクロープサークルのそれであった。

倒れている部分と周囲の立っている部分から適当なサンプルを見つけながら、スチル写真、ビデオの撮影を行った。行けども行けども図形は続いていた。それはそうである。直径12~20m前後の円が10個以上、間隔を置いて連なっているのだ。おそらく全長は200m近いと思われる。これは編者が最初に2本のトラムラインの間隔を巻尺で測定し、約2mであったことから、その数値をもとに、Kさんから送られたインターネット情報の写真で測ったものである。

長大なフォーメーションの端から、麦を倒した踏み分け道がもうひとつの図形に向かって延びていた。これは楽であった。トラムライン以外の通常の麦畑の中は、中に入っても一歩も歩けない。麦と麦の間を歩こうとしても、間隔は人の幅より狭い。倒さなければ前に進めなくなる。背の低い雑草ならば多少踏みつけて歩いても罪悪感を生じないが、立派に実った麦を倒して自分だけの道をつくるということはとても出来ないのである。そして、人が倒して歩いた跡は、上空からの写真でも明確にわかる。

さて、蛇行する形のフォーメーションも同じパターンの連続で、いくつかの麦の円弧の壁が、まったく同一の状態が続いていることが見ただけでわかった。これもトラムラインを中心として左右対象に近い。

クロープフォーメーションの中で仰向けに寝て瞑想している人がいた。時間に余裕があれば、この人のように色々

な試みをしてみたいものだ。倒された、あるいは曲げられた妻は、自分が何者によって変形させられたかを目撃しているのだろうか。それとも、知らぬ間に、曲がりそして人の足の下になっていたのか。なんで、こんなことを書くかという、「植物には記憶がある」というテーマのテレビ番組を見たからである。曲がったまま成長を続ける麦の数を、植木鉢に移し換えて、妻が何に反応するかという実験が出来るのではないかと、思ったのである。室内の植物が、3人の容疑者の中から真犯人にのみ反応したという驚くべき話が真実なら、妻にプラズマ、UFO、二人の老人などの写真を見せて、それに妻がどう反応するかを調べることも出来るのではないかと。

サンプルを3ヶ所のクロップ・フォーメーションから採取できたことは、とりえず現場を訪れた意義があった。しかし、磁石の実験やダウジングの実験には至らなかった。

■ストーンヘンジを見る

昨日は金網越しに見ただけだったストーンヘンジに、今日は入場料を払って入る。この瞬間を何度頭の中で空想ただらう。私は今まで、ストーンヘンジの写真を見ると曇っている空の下、あまり良い条件で撮影したとは思えない写真ばかり見てきた記憶があり、今日のように陽光さんとそそぐ下で輝くようなストーンヘンジを見られたのは非常に幸せだと思った。大勢の見学者と共に、周囲の歩道をゆっくりと歩きながら、刻々と変わる姿を2台のカメラで撮影する。私は、まずその巨大な石組みを見た瞬間、巨大な機械を連想した。映画「スターゲイト」に出てくるような「装置」だ。その感じは何年も写真と映像だけを見てきたことと実物を見たことの違いと思われる。周囲に広がる広大な丘陵平原の、この場所が、そしてこの形が、我々の知らない特別な出来事との遭遇、そのことによって生じたであろう必然性、必要性、計画性、と計算によって決定され、家系別の役割と人材が組織され何千年にわたる建設工事が、何世代にもわたって続けられた結果の、あまりに永い年月を大地にさらした事による、新たに侵入した民族の無知による破壊の結果を、我々は目にしているのだ。

破壊されたとはいえ、間近に見るその石の構造物には言い知れぬ力を感じた。現代の我々が、その「悟り」を得て、ストーンヘンジを再作動させ、世界を作り替えることが可能なほどの、力だ。

あるいはこんな空想も頭をもたげてくる。シナイ山のような岩山のないブリテン島に宇宙からの教師を迎えるためには巨大な石の輪が必要だったのか…。横石は宇宙船の翼を休める支えなのか…。

ある特別な事情にあった古代の人々は、石を円形に並べることに力を注いだ。そうした人々はなぜか全世界に分布し、石の大小の差こそあれ、基本的に石を円形に配置することは一致している。

石を円形に並べた理由について、特に語る神話伝説はないが、石が力を持つことや、神からの通信を受け取る手段として、またイスラエルのように主の命令で出来事の記念として石を配置した話はある。

ストーンヘンジの場所に最初の平面設計がなされたのは紀元前3000年、今から5000年前のこととされている。その時すでに現在とほぼ円形の土手と入り口があったという。サークルは当時「オープリーの抗」と呼ばれる直径1メートル程の56個の穴であった。穴で形成された円の直径は86.6メートル。その後、約1500年間にわたって段階的に石の建設が行われ、紀元前2600年から紀元前1600年こ

ろまで最終段階の配置が行われたという。

いったいなぜ、そうした段階的な発展が行われたのか、目的のために試行錯誤したというより、最初の図面に追加された施設であるから、今日の「バージョンアップ」のような能力向上のための改築と考えられそうだ。

■コーリン・アンドリュースColin Andrews氏との会見

18日夕刻、サークル現象研究の第一人者Colin Andrews氏は、連れの若者一人を伴って我々の宿泊するマールボロのホテルに約束の時刻に現われた。髭をたくわえ、かなり顔のしわが目立ち、声も態度もCOSMO ISLE HAKUIで会った1997年の時と比べて、別人のように老けて見えた。彼だけが別の時間に入って、我々の世代を通り越して長老の世代に到達したような、不思議な感じであった。米国での苦勞からだろうか?それともサークル現象の磁気パワーを受け続けたせいなのだろうか。何かの悟りの境地に入ったような、笑顔と大笑いのリラックスした物腰は、COSMO ISLE HAKUIから10年以上経っている感じを受けた。

Colin Andrews氏のもっぱら英会話達人なH氏と会話し、私はそれをビデオ撮影しつつ資料を眺めるという立場にいた。私が簡単な英単語で説明したのは持参した写真資料の説明くらいだ。

Andrews氏の持参したクロップサークルの写真ファイルは圧倒的な水準の高さを示していた。大判の空中写真には、例えば有翼太陽円盤のそばに古代のソイルマークが浮き出しているのが鮮明に見えた。彼のレクチャーと共に撮影した資料について紹介する余裕はないので省略するが、彼が我々に質問し、それに答えた内容については述べておく必要があるだろう。

編者の知るところによれば、Colin Andrews氏はサークル現象に取り組む過程でのUFO問題に関係した。1980年代の彼はテレビでのインタビューにサークルのUFO成因説に対してあまり好意をもっていないように見えた。しかし、例の解剖フィルムをはじめ、彼自身からの手紙でも、世界のUFO映像を分析する段階にまで発展していることを述べている。また、いつでもETと接触できるように、またETとの接触によって地球を離れることになっても、家族に迷惑をかけない方策をとったことを以前のニューズレターで書いていた。

従って、現在のColin Andrewsにとってサークル現象と共にETの問題が大きなウェイトを占めつつあることは間違いないと言える。

Colin Andrewsは我々に聞いた。「キャトルミュートレーションはETによるものか?」これに対してH氏はこう答えた。「ETは優れた知性の持ち主である。高度な知性は自然を破壊しない。動物であれ、人間であれ、損なうことはしない」

H氏は続けた。「宇宙には我々と同じ姿の人間が住んでいる。我々は彼らをブラザーと呼ぶ」この言葉にColin Andrewsは合点がいった、という反応を示した。H氏は、聖書における天使や、環太平洋の文化圏における文化英雄に及んだ。対話したH氏によると、Colin Andrewsは察しの良い人で、こちらが言わんとすることを、こうではないかと先回りして言うこともあったとの事。喫茶室から移動して、食事をはさみながらの懇談は長く続いたが、我々は翌日の飛行を約束してわかれた。

■クロップフォーメーションを空から見る

7月19日、Colin Andrewsと弟子、未知の若者、我々2人、パイロットの6人を乗せたヘリコプターはクロップサークルに向かって離陸した。H氏よりもらった外国製の機

具でビデオカメラをヘリの窓ガラスに固定し、録画を開始する。「キヨシ、シルベリーヒルだ!」アンドリュース氏の声がヘッドホンから聞こえてきた。眼下にそれが見え、我々が踏み込んだ長大な連続サークルと蛇行するサークル、がしなびた形で見え、そして有翼太陽円盤が見えた。これはまだ形が崩れていなかった。それでも出現当初の写真と比較して妻の反射が少ないのは、倒れた妻が起き上がっているせいかと思われた。やがて数々の驚異的な図形が目飛び込んできた。自分の視界に入った瞬間を狙ってシャッターを切る。ズームの調節、図形に窓枠が入らない瞬間を狙わねば、と思う間もなく図形は後方へ行きすぎる。あわててシャッター。むずかしい撮影だ。最後のサークルは出来たての様(インターネットでも7月19日報告となっている)で、アンドリュース氏自身もかなり感動していたようだ。いつもインターネットのサークル情報を送ってくれるKさんが「きっと出来たてホカホカのサークルが…」と書いておられたことを思い出す。星雲の渦巻きのような形や天からのエルサレムのような四角形など、サークル現象の当たり年に空から見られて感動の連続であった。

■ストーンサークルとカップアンドリング

英国の道路は滑らかで凹凸がなく、田舎道でも車はかなりのスピードを出している。郊外では日本のように路上を歩く人はほとんど見かけなかった。移動はすべて車なのだろう。日本の高速道路にあたるモーターウェイはM4とかM5という具合にすべて記号である。郊外の交差点はラウンドアバウトといって、ロータリー式である。つねに右側から来る車が優先だ。私は後日一度だけ車酔いをおさえるため運転をしたが、ロータリーの手前でつい停止を怠ってしまい、そのまま入ろうとしてあわててブレーキを踏んだりして「そんなんじゃぶつかってしまうよ」とH氏に注意された。

7月19日、我々はアンドリュース一行と別れて一路スコットランドへと向かった。北上するに従って空は雲が多くなり小雨が降ってきた。H氏の運転は平均時速120キロで、時折160キロで走行。片手にビデオカメラを持つこともある。行けども行けども丘陵が延々と続く。その丘陵には木立がなく、白い点々が丘陵の斜面にみられる。それは羊の群れであった。天候が良ければどんなにか素晴らしい景色であろうと想像する。

ニュートン・スチュワートからA71を南下、WigtownでB733に入ったところにあるトーハス・ストーンサークルTorhousekie Stone Circleに到着したのは7月20日であった。丸みをおびた直径1メートル前後の巨石が円形に配置されている。中央にひととき大きな石がある。サークルの規模は大湯と同じくらいか。石の大きさは全然大きい。私は用意した黄銅のベルトを頭にまき、石に座ったり、抱きついたりして何かを感じようと必死になった。この頭に金属をつけるという理由は、鈍感な我々でも、金属という敏感な素材を通して何かを感じられるのではないかと、という理屈で、古代のシャーマンが頭にかぶる金属の冠をヒントにこしらえたものである。

エイバリーでもそうだったが、急ぎ旅で余裕がないというか、じっくり現地に根を下ろして精神状態を安定させないと、巨石から何かを感じ取るなどということは出来ないように思えた。

次ぎに向かったのはグラスゴーの西方Kilmartinの手前A816に沿って2箇所が表示されている「カップアンドリング」で、キルマーチン近くに「Cup & Ring Marked Rock」と記され、Caimbaanの東方、国道からはずれた奥地にも同じく「Cup & Ring Marked Rock」と記さ

れていた。我々にはからずも最初に遠い北方の遺跡に到着した。雨と風で足元が悪く、遺跡の掲示板のある駐車場に車を停めて、黒い棒のように地面から突き出しているいくつかの立石に接近した。カメラは一つだけ持った。フィルムはリバーサル。実は6000円を投じて購入した赤外線のリバーサル2本は、気温0度以下で保存しなければならず、車の移動中に冷凍保存が出来なくなるし、英国のホテルには日本のビジネスホテルのように冷蔵庫もなく、管理できないため出国前に放棄した。

夕闇迫るような暗い空の下、ストロボをたきながら撮影。すぐもう一つの遺跡に向かった。国道沿いに「Historical sites」の標識があり、横道に入ると延々と道が続く。ようやく標識の立つ入り口に到着。そこから山すりの道を徒歩で向かう。雨と風が強い。私はカメラと陰刻転写用の和紙を一枚だけ持った。最低の装備である。しばらく歩くと、手すりに囲まれた赤っぽい岩の露出した現場に到着した。その岩の表面にびっしりと同心円、円形の窪みが刻まれている。私が想像していたより多く、複雑であった。私は和紙一枚しか持ってこなかったことを悔やんだ。とにかく、柵を乗り越えて岩に立ち、ひととき自立派な同心円を選んで表面のゴミを拭き取り、和紙を岩に当ててクレパスでこすった。岩が濡れているため、両面テープを使って固定するのをやめた。しかし風が強く、片手で紙を押さえていても、紙が持ち上がってズレた。仕方がない、そのまま作業を続行した。

■帰路そして大英博物館にて

エジンバラの町でビデオカメラを路上に落としたことは大きな失敗だった。その後一応、撮影はしたが、帰国して再生すると画像が乱れ音声は入ってなかった。静止画像にするとギザギザの画面がやや安定したので、重要な粘土版などは静止画を撮影して保管することにした。今回はこのビデオカメラも含め撮影面での失敗が多い。ストーンヘンジを前にバッテリー切れになったり、クロップサークルの最後の素晴らしい場面を前にテープ切れ寸前だったり、同時にフィルムも切れた。もっとフィルムをポケットに入れておくべきであった。リバーサルで撮影したトーハス・ストーンサークルは曇り空なのに露出補正をせずに撮影したため、露出不足となった。MEのタイマーで撮影した記念写真も失敗していた。レンズが違うと自動露出が連動しないらしい。とにかく、古いカメラと新しいカメラの混合は失敗を招きやすい。あれもこれもと欲張った装備も、散漫になって重要な時に確実な動きがとれないこともある。

我々は時速120~160キロで疾走する車中にて、刻々と変化する異国の景観に驚嘆の声を上げながら、過去の様々な教訓や出来事について世紀末を生きている今の心境を語り合った。

スコットランドから再びイングランドに戻る途中の宿泊地の食堂における英国マナーいっばいの雰囲気や、こんな巨人がいるのか、と思うほどの大きな「スコット」スコットランド人、何を言っているのか判らない売り子嬢の英語、レストランの高額な食事、過去の風景そのままの小さな町のたたずまい、編者は今まで貧困の国々ばかりを訪れていたもので、西洋という文字をこれほど強く体感した旅は貴重な体験だった。

大英博物館では今まで本でしか見たことのなかった古代オリエントの遺物がものすごくたくさんあった。エジプトの展示室の一角の陳列ケースが空にならうていた。帰国後、その品物が日本に運ばれていて古代エジプト展が行われていることを知った。編者も「クロップフォーメーション展示会」でも開催したい気分だ。 天宮 清 ■



■ マールボーロのホテルでColin Andrews氏らと会談



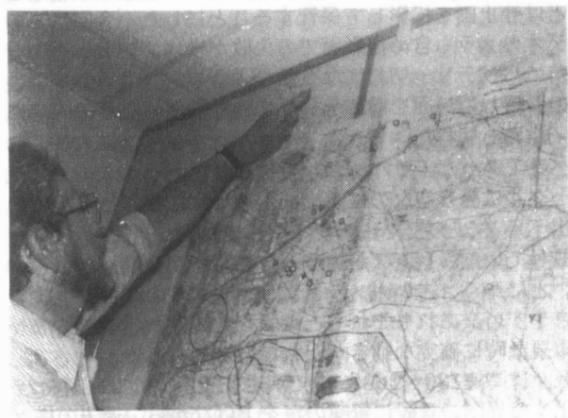
■ C.P.R.InternationalのColin Andrews氏



■ コネティカット出身の助手 Quinn Ramsby氏。



■ ヘリコプター飛行場で編者とColin Andrews氏。



■ サークル発生地点を示すColin Andrews氏。



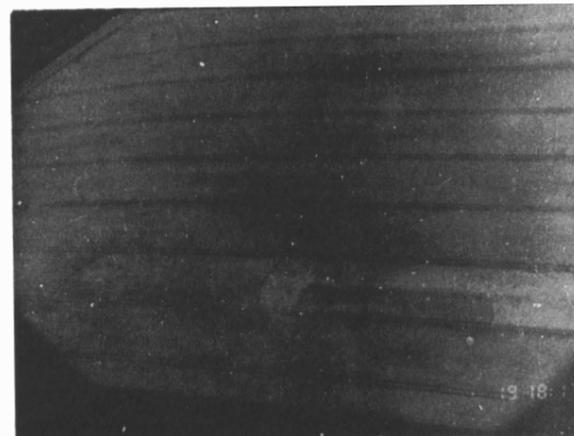
■ ヘリコプターに乗り込む。



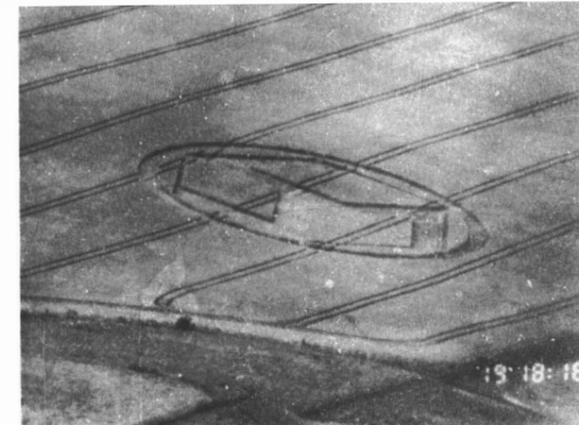
■ 窓ガラスに固定したビデオカメラを調整する編者。



■ サークルを撮影中の編者。



■ 「有翼太陽円盤」と我々が命名したサークル



■ 立方体Cubeサークル



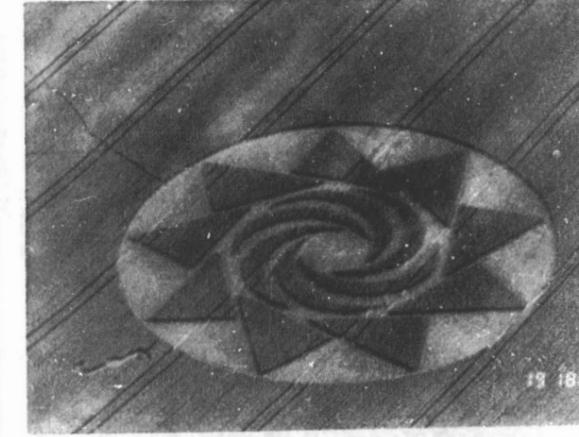
■ 立方体の中に球体のある形



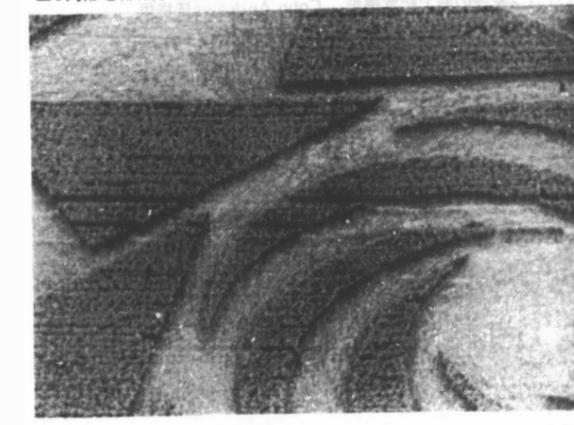
■ 3個1組が基本になっているフォーメーション



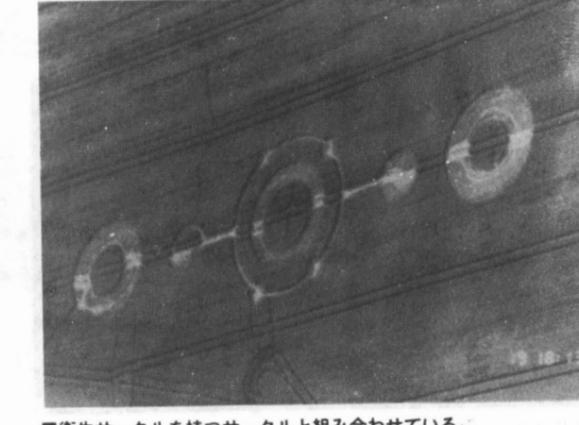
■ 5角形を形成する大小のサークル



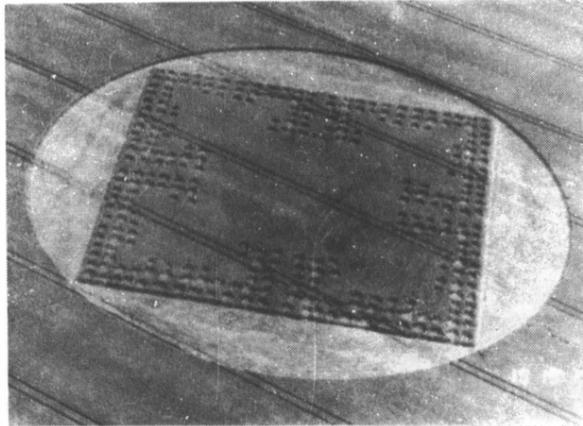
■ 渦と光を表現したような形



■ 三日月と三角は奇麗に出来ている。



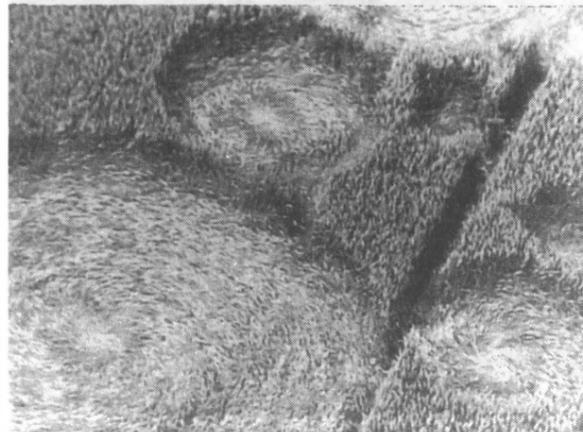
■ 衛生サークルを持つサークルと組み合わせている。



■編者が「天からのエルサレム」と命名したもの。



■CRESCENT VORTEXと名付けられているサークル



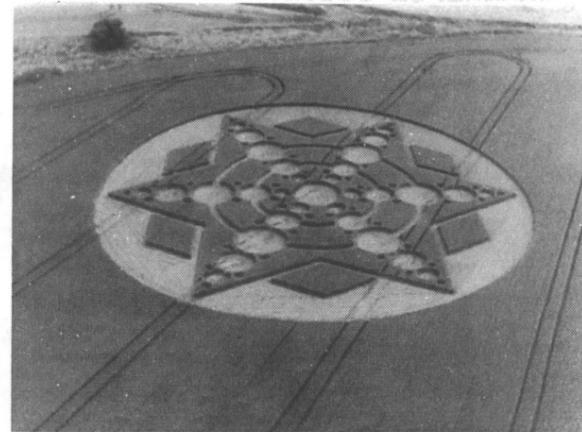
■The Devil's Denサークルの内部



■ヘリコプターの前で記念撮影 Colin Andrews氏提供



■整然と開けられた穴の拡大



■The Devil's Denと名付けられたサークル



■ヘリコプターの前で記念撮影 Colin Andrews氏提供



■オルトンバーズでサークルを撮影中のH氏。

■有翼太陽円盤のサークルから採取したサンプルの麦について

有翼太陽円盤図形から採取したサンプルの曲がり具合について述べてみる。採取した麦を床に伸ばして測ると全長は79cmあった。その根元の7cmが第一の節まで湾曲している。曲がり部分には一定の間隔でシワがみられた。このサンプルは、テレビ番組に出稿するため宅急便でオフィス・トゥー・ワンに送ることになった。それで発送前の8月24日(採取から38日目)、この曲がった部分を撮影した。その時は曲がった部分に約1センチ間隔のシワがあり、これは湾曲の内側にあるため、麦が未知の力で強制的に曲げられた証拠と考えられた。採取当時は気がつかなかったが、もし当初なかったとすれば、水分の蒸発によって麦の表面の、伸びた外側と縮んだ内側の微妙な変化がシワとなったのだろうか。ところがテレビの収録が終わって返却されてきたサンプルを9月25日夜、全長の計測と湾曲部の長さを計測するため再びケースから取り出してみると、シワが消えて表面がツルツルになっていた。しかも、その湾曲部から上の麦の穂までの茎は相変わらず干からびた緑スジのある光沢のない表面であった。これはおかしいと、ケースの中を捜すと、シワのある皮が片隅にあった。いろいろ触ったりしているうちにめくれたらしい。元どおりにしようと薄い皮を被せようとしたが、無理に広げると皮が破壊されそうなので、皮は曲がった茎のそばに置くことにして、全体を伸ばしてベニアに和紙を包んだ紙に張ることにした。

麦は採取してすぐ三つに折ったため、茎が折れ曲がっているため、それを茎の節が元通りにないように伸ばしてセロテープで固定した。ところが一箇所、折った部分でもないのに曲がったままの部分があった。そこは節になっていた。くの字に曲がったその角度は、分度器を当てると丁度140度あった。この曲がりは根元のカーブとは逆向きであった。これをまともに考えると、いったん曲げられて倒伏した麦が、途中の節から逆に上向きに曲がるという面白い曲がり方になる。このように単に節が曲がっている状態は蛇行するサークルの中で多数見つけた。我々はそれを手に取って見て、自然の節がこのように曲がっているのか、未知の力が作用して根元が曲がると同時に節にも影響が出た結果なのかを話し合った。しかし、この節について、今までの知識にはなかったことなので、撮影もサンプル採取もせず見ただけで済ませてしまった。これが実は従来から問題とされている現象だと気づいたのは、ロンドンで購入した書籍に掲載されていた写真を帰国後に見てからである。シワのある薄い皮の下は、固い茎だが、そこにはシワはなく、表面もすべすべ

と光沢さえあり、その部分は細胞単位で曲がっているように思われる。このような変化が均一に巨大な図形の広大な面積で起っていることを証明するためには、図形内の麦をすべて根こそぎ採取して、数万本かそれ以上わからない麦を広大な平面に広げて一本一本を調べる必要があるだろう。それが出来るのは、麦の農家とサークル研究家の協力においてである。これまでの20年間、そうした徹底的な麦の研究は行われたのだろうか。一本一本の麦や葉の花の根元を直角にあるいは曲線をもって曲げる技術、人知れず夜間の短時間に行う技術。この植物瞬間造作による巨大図形が、人類の最新科学力や軍事技術をもってしても再現できないとなると、その未知なる技術の出所を探究するのは世界各国の科学者のテーマとなりえるのではない

か。また、イタズラを行って、真性のサークル現象の研究を妨げる個人やグループの犯罪行為に対しては、英国の国民を冒涇する罪として、警察や政府機関が対策に乗り出すべき課題であろう。もし、サークル現象が地球外知性地球接近を証明する材料ならば、ETからの電波を受信しようとして電波望遠鏡に投じられてきた資金の配分についても検討がなされるべきだろう。これは国家元首、女王陛下レベルの協賛に発展すべき人類全体の問題である。国家の威信にかけて、各国政府は精鋭の調査隊を英国に派遣し、麦畑でいったい何が起っているのか、何が起りつつあるのかを検証しなければならぬのだ。

しかし、これまで科学者らによる本格的な調査が行われなかつた背景には、サークル現象が既述の学問を継承する人々を寄せ付けず、一種独特の雰囲気を持っていることも原因しているのかも知れない。それは50年以上も謎が続いているUFOにも似た、手かけたら名誉を失う領域、自己の利益にはむすびつかない領域、そういう危険な領域であることを本能的に感じる何か、それが「ばかばかしい」として退けるしか対処できない自分の限界を悟らせる何か、それらが無言の中に発散し、それを感じ取って、うかつに手を染めたら学者生命を失う可能性を感じたのかもしれない。

学者生命を失おうと、学会から追放されよう、この現象には人類の英知を超えた何かがあるに違いない、と英国に移り住んでテントを張り、研究する学者が現れたなら、彼にこそサークル現象の素顔が明かされるべきだろう。「求めよ、さらば与えられん」である。



■有翼太陽円盤の麦の状態。

光沢さえあり、その部分は細胞単位で曲がっているように思われる。このような変化が均一に巨大な図形の広大な面積で起っていることを証明するためには、図形内の麦をすべて根こそぎ採取して、数万本かそれ以上わからない麦を広大な平面に広げて一本一本を調べる必要があるだろう。それが出来るのは、麦の農家とサークル研究家の協力においてである。これまでの20年間、そうした徹底的な麦の研究は行われたのだろうか。一本一本の麦や葉の花の根元を直角にあるいは曲線をもって曲げる技術、人知れず夜間の短時間に行う技術。この植物瞬間造作による巨大図形が、人類の最新科学力や軍事技術をもってしても再現できないとなると、その未知なる技術の出所を探究するのは世界各国の科学者のテーマとなりえるのではない

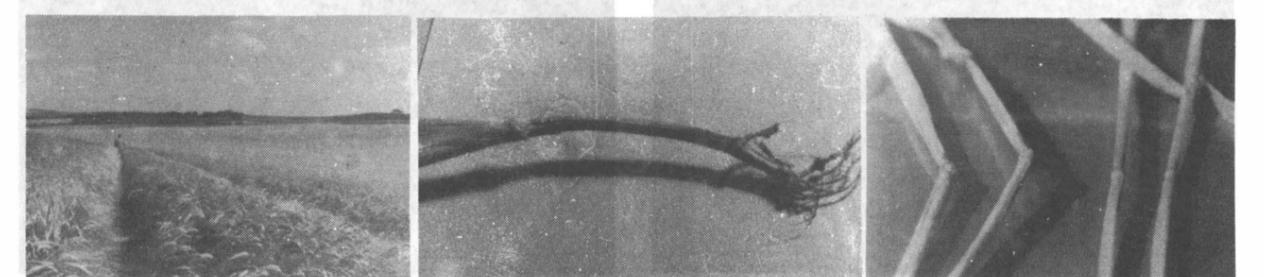
か。また、イタズラを行って、真性のサークル現象の研究を妨げる個人やグループの犯罪行為に対しては、英国の国民を冒涇する罪として、警察や政府機関が対策に乗り出すべき課題であろう。もし、サークル現象が地球外知性地球接近を証明する材料ならば、ETからの電波を受信しようとして電波望遠鏡に投じられてきた資金の配分についても検討がなされるべきだろう。これは国家元首、女王陛下レベルの協賛に発展すべき人類全体の問題である。国家の威信にかけて、各国政府は精鋭の調査隊を英国に派遣し、麦畑でいったい何が起っているのか、何が起りつつあるのかを検証しなければならぬのだ。

しかし、これまで科学者らによる本格的な調査が行われなかつた背景には、サークル現象が既述の学問を継承する人々を寄せ付けず、一種独特の雰囲気を持っていることも原因しているのかも知れない。それは50年以上も謎が続いているUFOにも似た、手かけたら名誉を失う領域、自己の利益にはむすびつかない領域、そういう危険な領域であることを本能的に感じる何か、それが「ばかばかしい」として退けるしか対処できない自分の限界を悟らせる何か、それらが無言の中に発散し、それを感じ取って、うかつに手を染めたら学者生命を失う可能性を感じたのかもしれない。

学者生命を失おうと、学会から追放されよう、この現象には人類の英知を超えた何かがあるに違いない、と英国に移り住んでテントを張り、研究する学者が現れたなら、彼にこそサークル現象の素顔が明かされるべきだろう。「求めよ、さらば与えられん」である。



■オルトンバーズで麦のサンプルを物色中の編者



■オルトンバーズのトラムラインを進む。■有翼太陽円盤で採取した曲がった麦のサンプルの根元。■現地の本でも節の曲がりも問題になっていた。



■全行程約2300kmを無事走行したレンタカー(日本車)。 ■エイブリーストーンサークル ■電気ショックを感じるというスウィンドンの石



■西スコットランドの立石。天候は雨



■西スコットランドの立石。天候は雨



■カップアンドリングの刻まれた巨大な平らな岩



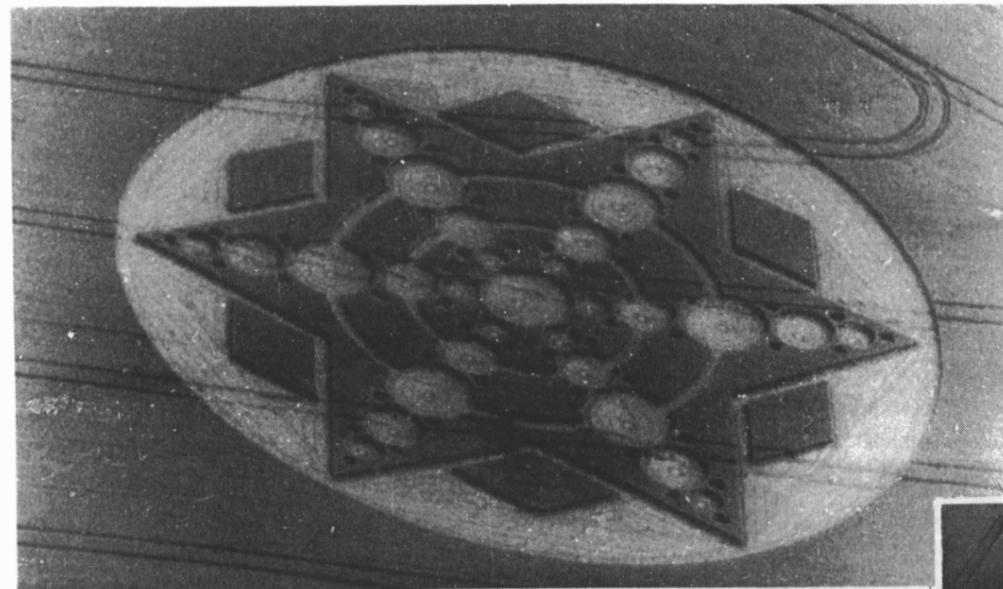
■陰刻に和紙を当てて写しを取る編者。



■同心円の真ん中の円が窪んでいる独特の陰刻



■重なるように大小の同心円が刻まれている。

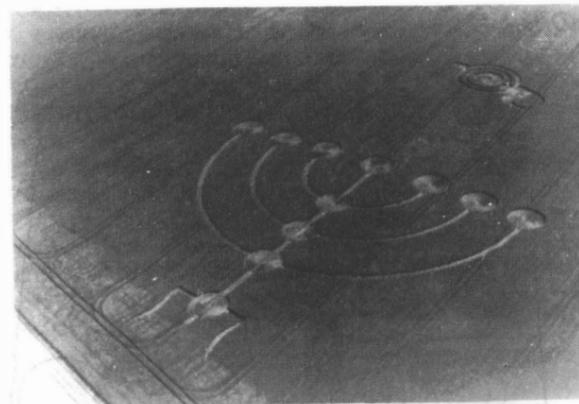


■右の写真はドイツのピクトグラム。1992年7月22日、Grasdorfに発生。謎の金属製の皿との関連を示す写真。Michael Hesemann著「THE COSMIC CONNECTION」より。

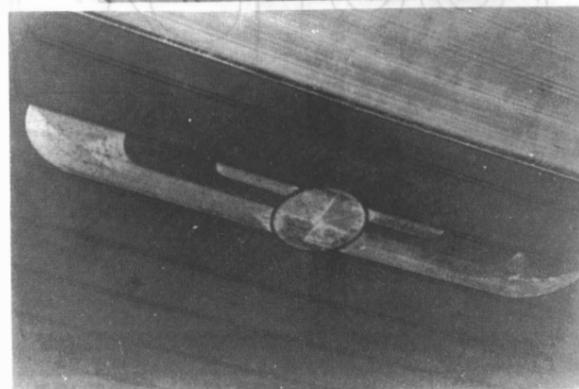


JAPAN UFO Political Party
for Star-Open-Initiative

"And you shall make a lampstand of pere gold. The base and the shaft of the lampstand shall be made of hammered work; its cups, its capitals, and its flowers shall be of one piece with it; and there shall be six branches going out of its sides,.....And see that you make them after the pattern for them, which is being shown you on the mountain. (EXODUS 25)



■「出エジプト記」において神がモーゼに七枝の燭台の作り方を指示する文章に「そしてあなたが山で示された型に従い、注意してこれを造らなければならない」とあるが、神は昔から地面に図面を描いた。ギルガメシュの物語の中でも大洪水の前、ウトナビシュテム(ビル・ナビシュテム)はエア神から、砂の上の大きな船の図面を描いてもらって船を造ったし、イエスも指で地面に何かを書いていたことがあった。右上はモーゼが主より十戒を授かる絵。右中は妻がイスラエルから買った置物。右下はミイラの棺に描かれた古代エジプトの「ホルスの翼」あるいは有翼太陽円盤。



■我々がヘリで飛んだ日の直前に出現したと思われるサークル。まるで工作機械で刻んだような幾何学図形である。この形が日本のUFO党のシンボルマークに似ていると党首より知らせがあった。下は党首の名刺の一部を拡大したもの。

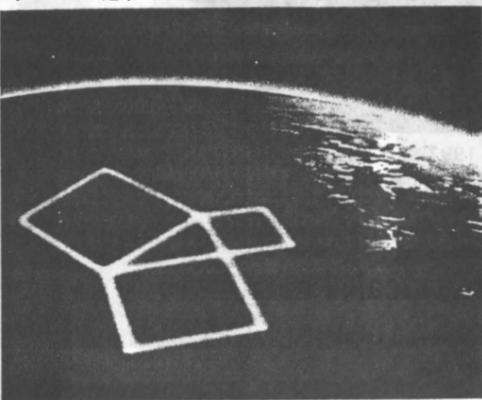




■1999年8月11日、ヨーロッパから中近東にかけて皆既日食が見られたが、そ

れに先立って日食を表現したサークルが5月に現われた。その形はこの巨石と日食を関連づけた絵葉書のような図形であった。(巻末「1999年クロープサークルの色々」にあり)

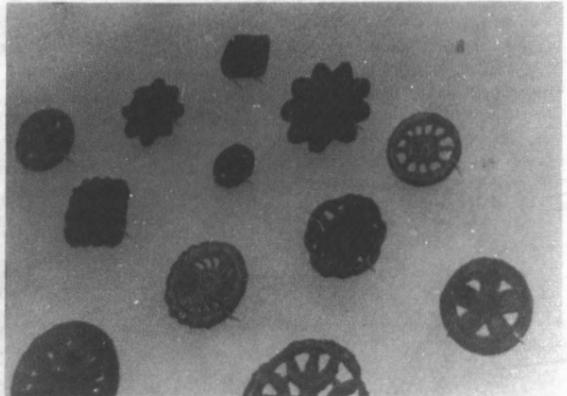
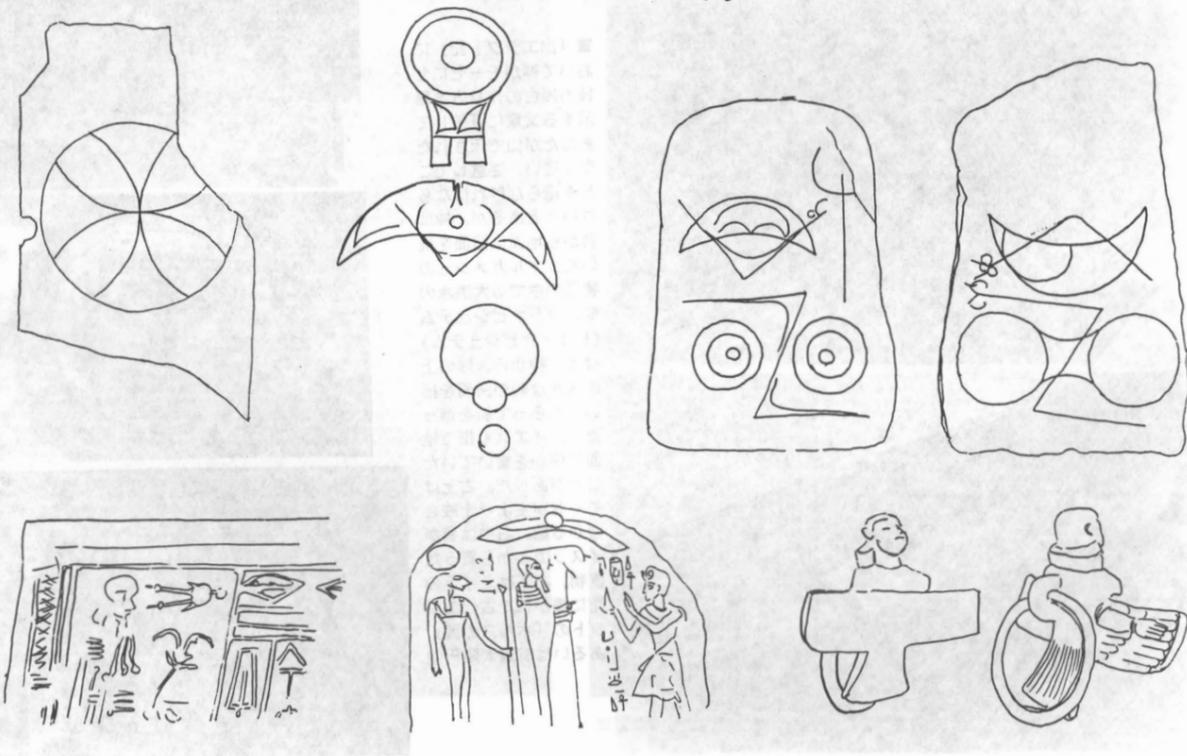
以前、触手を持つ連続サークルが天気予報に該当する図形を示してたとの説がある。「予告」という要素があるということか。



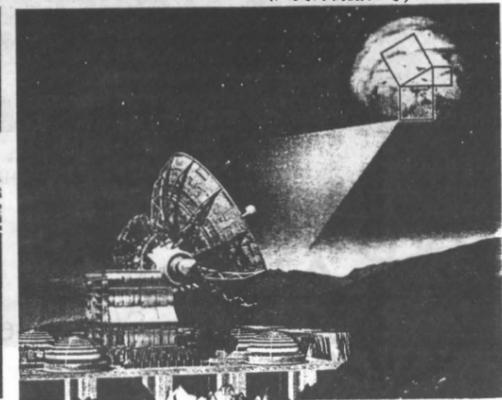
■地球には知性を持つ生物がいる!...この事を宇宙に知らせるにはどうしたらいいか?「幾何学図形のようなものは、一目みればそれが人工のものであり、かなりの数学的知識を有する生物の手になることがわかるだろう」というわけで、地球を観察するほど文明の進んだETなら、ピタゴラスの定理を知らないはずはない、それはつまり、地球に知性を持つ生き物がいる、ということの何よりの証拠となるのである。1869年、フランスのグローは火星の表面にメッセージを書き込もうという方法をフランス政府に売り込もうとした。(金子隆一著『ファースト・コンタクト』より)

■上:スコットランドの博物館で見た石に刻まれた謎の図形より

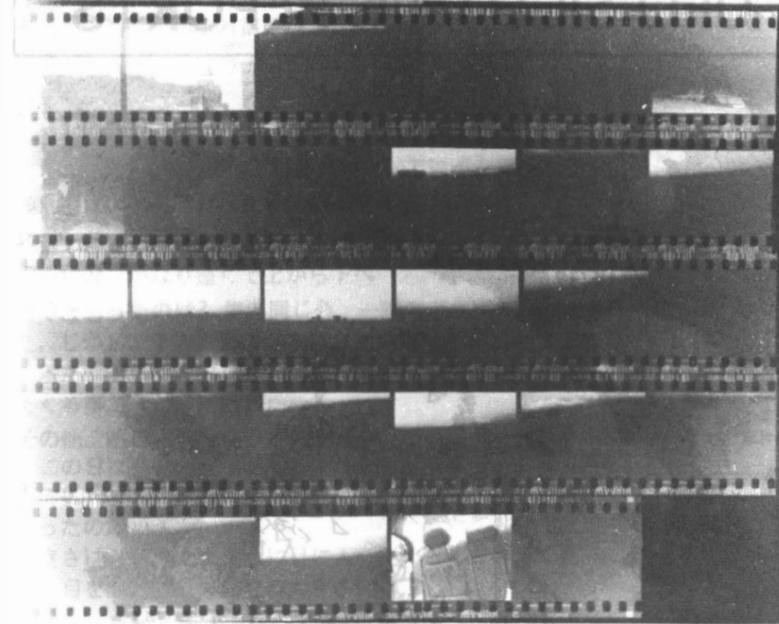
下:ロンドンの大英博物館で見た古代オリエントの形より。



■古代の図形はクロープサークルに似ている。(大英博物館にて)



■1999,7,18撮影 英国ストーン・ヘンジ 写真上の問題について



■黒い部分が写らなかった箇所。カメラの故障の可能性もある。



■UFOの写っているストーンヘンジ



■正常に写った前日の写真

私は今回、生まれて初めてストーン・ヘンジを訪れた。子供の頃から多くの写真や映像で見、知人から話を聞かされていると想像をふくらませていた。

1999年の7月、ついに私は友人の助けを得て、英国に行けることになった。7月17日、ヒースロー空港に着くと、我々は表敬訪問のため、レンタカーにてストーン・ヘンジへと向かった。

車は「十戒」の演奏と共にストーン・ヘンジへと接近した。私は走行中の車内からフロントガラス越しに、なだらかな丘陵の平原に黒い塊を遠目に見た。それがストーン・ヘンジだった。緑の平原の中にそれはあざりに唐突であり異質に思えた。金網越しに私は何枚か写真に撮った。正式な入場を明日にして、夕日に照らされた巨大な石組をまず距離を置いて見た。

そして翌日の午後、我々はクロープサークルの現場調査を終えて、再びストーン・ヘンジを訪れ、入場して規定の歩道を歩きながらストーン・ヘンジの周囲を巡った。空は晴れていた。巨石は太陽の光を受け、あるいは影になる、巨大な機械を思わせる巨石の存在感を満喫した。私はストーンヘンジに向けて、ネガカラー撮影をアサヒペンタックスMEで、リバーサル撮影をアサヒペンタックスZ-10で行った。

帰国後、写真が出来てきたとき、あんなに撮影した筈のストーンヘンジの写真が1枚もないのに気がついた。英国に着いた当日に表敬訪問し金網の外から撮影したストーンヘンジの写真はあった。しかし金を払って入場し、じっくりとアングルを意識して撮影した写真は一枚もなかった。それで、てっきりフィルム1本をどこかへ落としたんだ、しまったと青くなった。しかし、冷静になってネガをよく調べてみると、なんとストン

ヘンジの連続写真のフィルムのみ、帯状の目隠しをされたように透明になっていたのがあった。その透明な帯の上に、ストーンヘンジの上部が写っているコマもあった。ストーンヘンジの前に撮ったコマと、すぐ後に車の中で知らずにシャッターを押して椅子の写っているコマには異常がなかった。ストーンヘンジを撮った箇所だけに異常があった。フィルムの原因ではなく、ストーンヘンジ撮影上に発生したとしか考えられない。「いったい何だこれは?。何か間違った操作をしたのか、誤って露光させたのか?」と頭をかかえた。

カメラ修理の専門家に聞くと、誤ってカメラのフタを開けて感光した場合は、フィルムが黒くなる、と改めて指摘された。すると、このフィルムはストーンヘンジを撮影中、感光しなかったことになる……。いまのところ、きっと何かの間違いで、まさかストーンヘンジの影響ではなからう、と考えてはいる。ちなみにもう一つのカメラによるリバーサルによるストーンヘンジは通常に写っていた。もし、ストーンヘンジからネガ・フィルムのみを感光させない力が出ているのなら、他の観光客のネガ・フィルムも同じ被害に遭った筈だ。だが、それは知ることは出来ない。

最初の頃のコマは真っ暗が何コマか続き、次にストーンヘンジの下方が写って上に、光を消す何かが、かぶさっていて、次にストーンヘンジを隠すように水平の闇が覆っている。

とにかく、このことが本当の異常なのか操作やフィルムのミスなのか、とりあえず誰かに話して意見を聞こう。という訳で、ネガのベタ焼きを白黒でツクリ、一部のプリントを焼きましました。

カラーネガのベタ焼きは日数と費用がかかるので、なるべく早く処理するために白黒の自家製にした。



■黒い闇から上に出ているのがストーンヘンジ



■黒い闇に包まれたストーンヘンジ

UFO目撃報告 UFO SIGHTING REPORTS

UFO目撃報告

日時 1999年8月9日 AM11:30頃

場所 千葉県千葉市若葉区小倉台5-3の駐車場より

方向 西南西

仰角 25° ~ 35°

目撃している時間 2~3秒

色 白(周囲の雲と殆ど同じ、同化しているかの様)

形 もやもやとしたマユのような感じ

スピード 飛行機よりも速い感じ

進行状況 かなり速くで上から下へ

UFOと思ったのは? 雲と同じ色。一瞬ちぎれ雲かと思った。しかし、そのままの形を保ち、高速で下の雲に入ってしまった。そして、5分程見まもっていたが、下の雲から出てくる事がなかったため。

その他、感じた事

この日は長崎に原爆が落とされた日。千葉市から西南西方向は九州の上部へ向かってラインが引ける。何か意味があったのだろうか?

大きさは? たまたま偶然に目に入った。とても小さく見え、目を離すと見失う位の大きさ。

千葉市 藤平浩一(37才)Hirokazu Fujihira

■回転する光体を3度目撃

この目撃は、編者が勤務する会社の同僚から「娘がUFOを見た。回転していたと言っていた」という話を聞いて、さっそくその日に質問状を書いて、同僚である母親に渡して回答をもらったものである。以下にその質問と回答を掲載する。

お母様よりUFO目撃について聞きました。直接お会いした方が良いのですが、とりあえず以下の事について教えてください。

1,それを見たのはいつですか?

①1999年8月2日の午後8時30分~9時の間

②1999年8月7日の午後8時頃

③1999年8月9日の午後8時50分頃

2,それを見たのはどこですか?

①天理駅より南西へ1km付近

②大和郡山市泉原町レストラン弁慶の敷地内

③大和郡山市泉原町レストラン弁慶の敷地内

3,それはどの方向に見えましたか?

8/2は、西の空 8/9は、南 8/9は、南

4,それはどの位の仰角(地平からの角度)

に見えましたか? だいたいでけっこう

です。

8/2は杉の木(公園の)の間に現われ、上昇していき、

8/7、8/9は60度ぐらいで見えていたと思います。

5,空は晴れていましたか?

晴れていました。

6,雲はありましたか?

ありました。

7,近くの星座を覚えていますか?

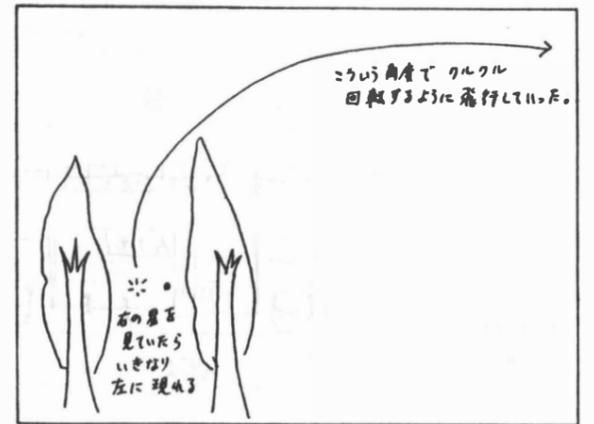
覚えていません。

8,それが変だな、おかしいな、と思ったのは、何ですか? 動き? 形? 色?

点滅の仕方がおかしかったのと、ゆっくり上に弧を描く

ように移動していくのが、飛行機の移動、飛行の仕方とは違っていました。

9, その動きを思い出して描いて下さい。



9,-A(後日追加質問)

2,目撃した光体の拡大した状態を描けますか。あなたの描いた図は経路だけなので、

図に書いておられた「…クルクル回転するように…」という状態の図がほしいのです。



10, 色はどんな色でしたか?

ルビー色と青白い白の2色の時と、赤と白っぽい色の2色のときがありました。

11,大きさや明るさを表現できますか? 1等星、マイナス2等星とか。

パッと目につくぐらいの明るさがありました。大きさは、星と同じか少し大きいぐらい。

12,ヒコーキの速度と比較してどうですか?

速かったと思います。

13,それは何秒間位見えていましたか?

あるいは何分間位 " "

私が見ようとすれば、もっと見ていられたと思います。8/2は、5~10分ぐらい。8/7は1、2分。8/9も1、2分。見つづけていたら、空に見えつづけていたかもしれません。

14, あなたは、そのとき何を考えていましたか?

仕事の帰りで、妹のアパートに寄る途中、ふっと見たぐらいで、次ぎの日は休みだったので、解放された気分でしたが、何を考えていたかまでは覚えていません。

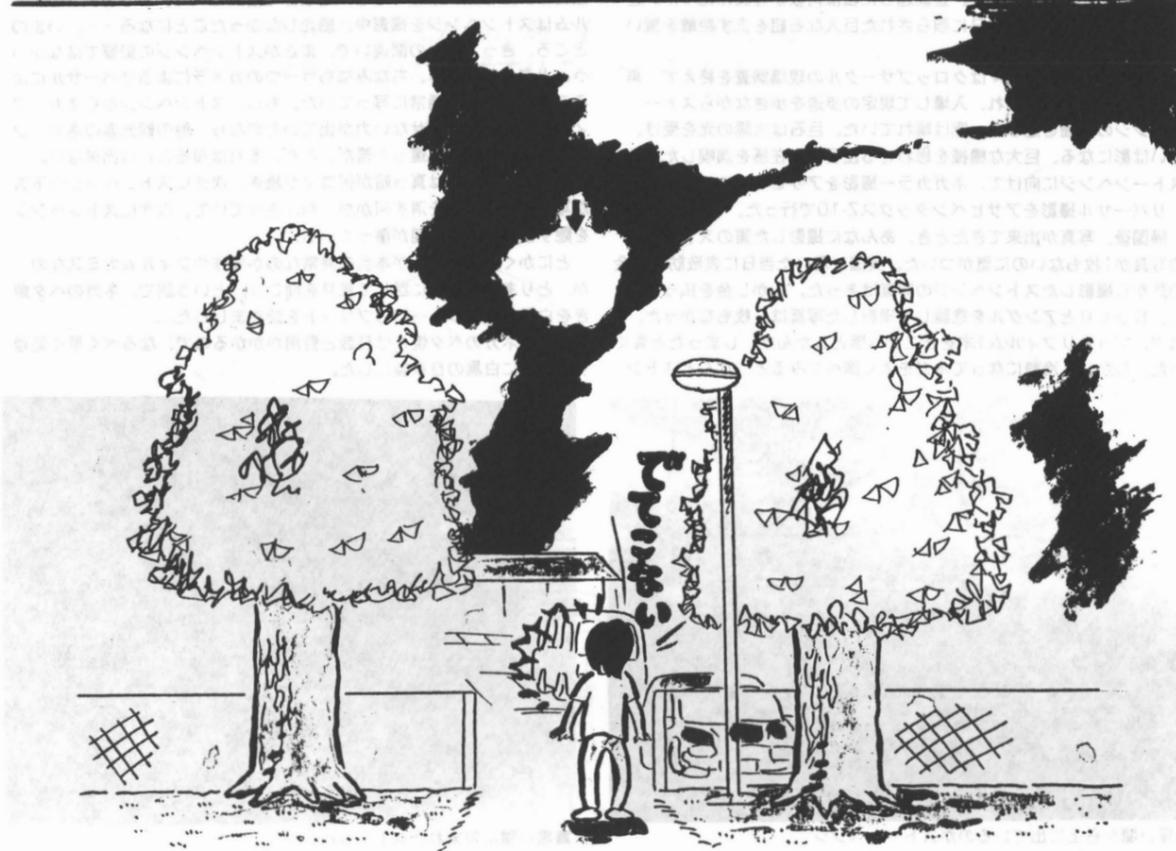
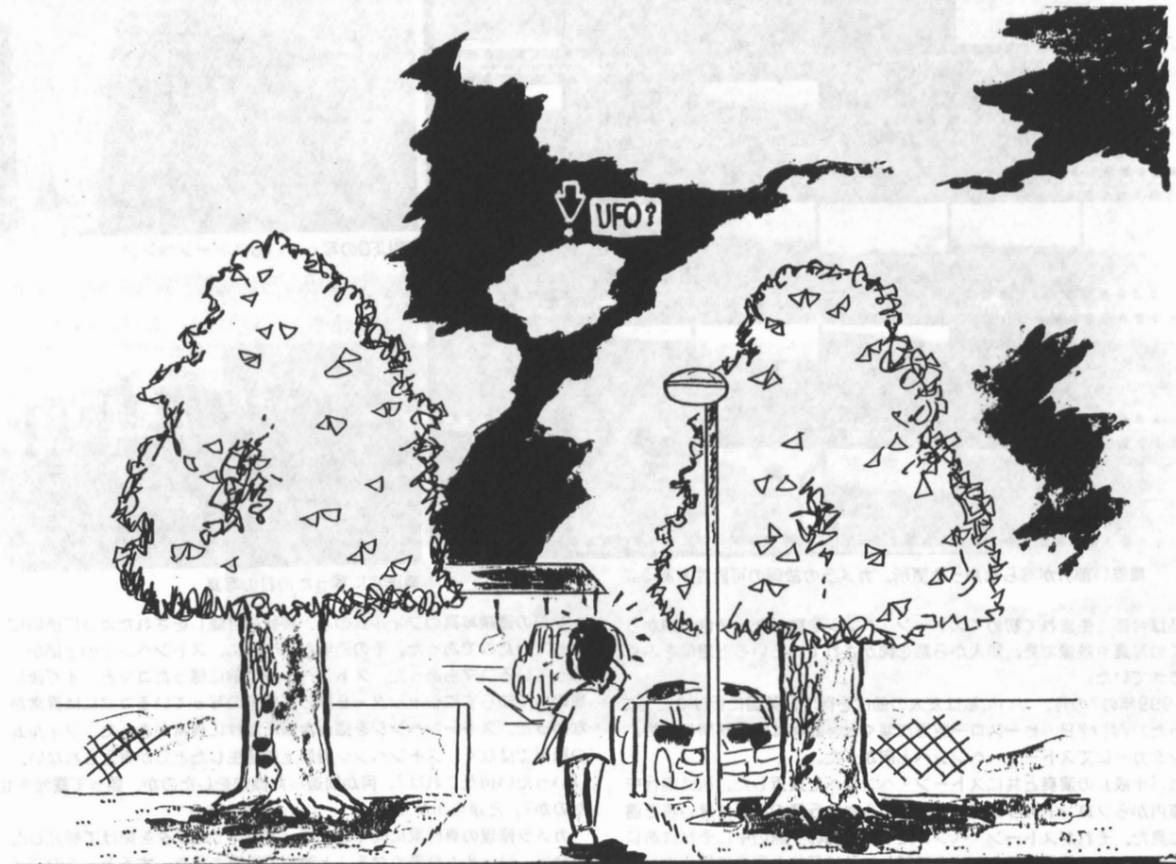
15, 見たあと あなたの感想を聞かせて下さい。

まさか! と思い、やっぱりと思い、存在は疑っていませんでした。とうとう自分も見たかという感じです。だけど、どうして今、私が見たのか、どういった巡り合わせなのかと思います。

天理市 谷下千恵子(24才)Chieko Tanishita

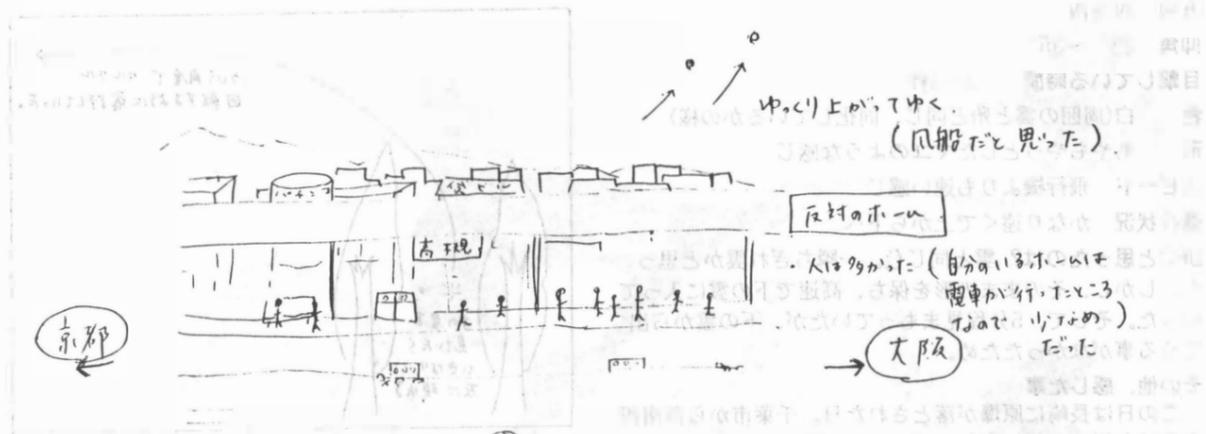
■駅のホームから見た2つの球体

この目撃者は編者の娘天宮志麻の友人で、目撃直後に電話で連絡があり、その内容を志麻が書き取ったのが以下の

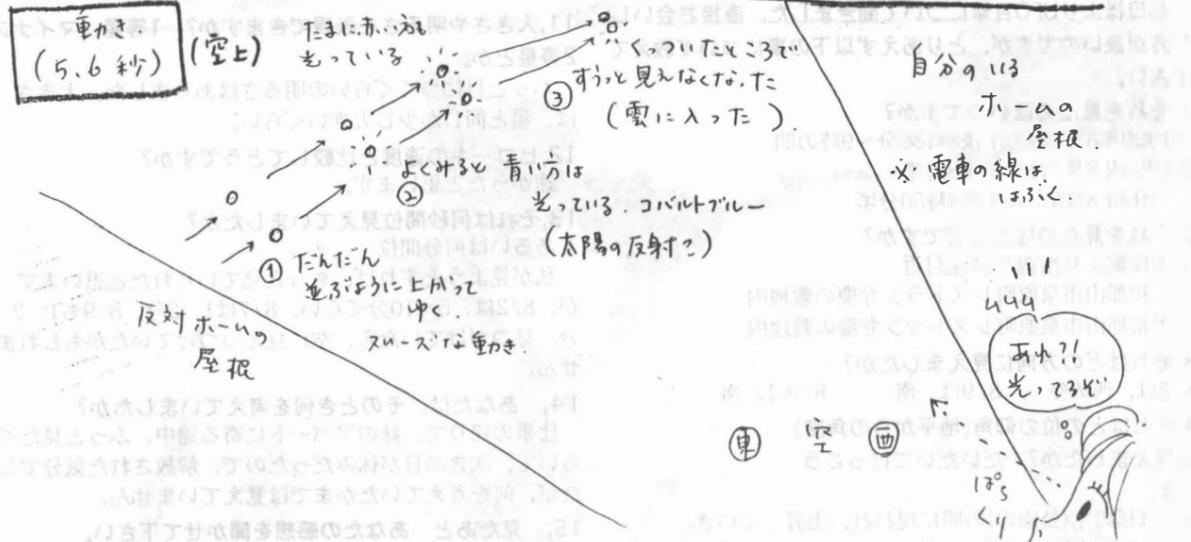


8/8 (日) PM 6:35頃 JR高槻駅ホームにて

東の方向をむいていた



自分の状況
 先月で仕事をやめて、
 毎日が自分の自由で
 楽しい。今日は髪を
 七割りに切った。
 買ったものをしり、楽しい
 時間をすごした。家に
 帰り、最近始めたメールを
 チェックして5-7時頃だった。



文章で、後日本人から図解された報告が届いた。
 日時 8月8日 午後6時30分頃
 目撃者 澤田真知子(26才) Machiko Sawada
 場所 大阪府高槻駅
 状況(電話の内容)
 駅のホームで電車を待っている時、ホームとホームの間の空に、赤と青の円い物体を発見。一瞬、風船かと思ったが、すぐに並んで飛びはじめたので、おやっと思ったという。
 赤いのと青いのは、東北から南西へ向かって、高さ50°

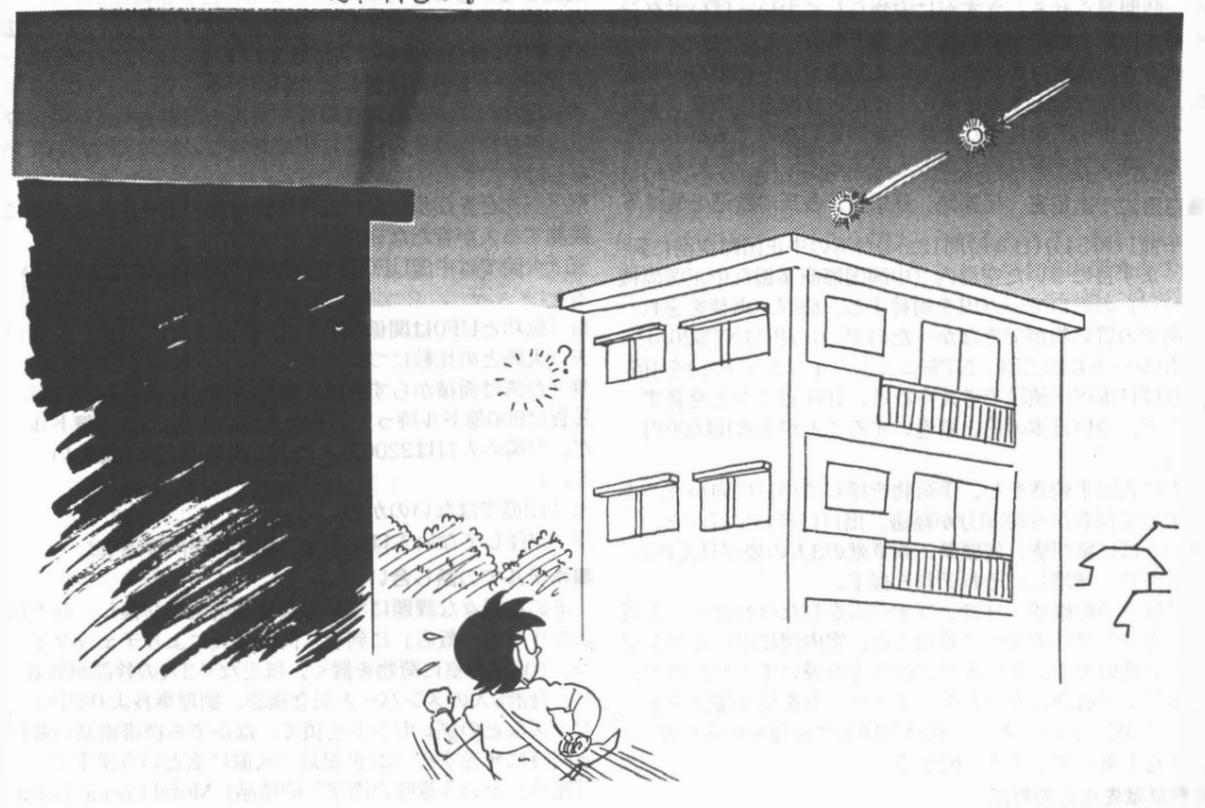
～60°のところを、ふわふわではなく、すうとしたスムーズな動きで飛んでいった。その時、太陽の反射のせいかと思ったが、先に青い方が、次ぎに赤い方が、不規則にチカチカ光ったという。青い方は、光ると水色っぽく見えてきれいだったという。
 見えていた時間は、5～6秒で、雲の中に入った見えなくなった。近ごろ起きた変わった事は、仕事をやめたことと、インターネットを始めた事。この日は髪を切った良い気分だった。

UFO目撃報告

1999.9.28 PM8:10頃

高速で飛んだ光の玉 目撃 藤平浩一

方向	南→北
仰角	50°～60°
場所	千葉県千葉市若葉区小倉台5丁目3番地 小倉団地上空
時間	2～3秒
色	黄金色
形	光の玉状
見かけの大きさ	星よりやや大きい
スピード	大きさを変えず直線的にスーッと。 推測で飛行機の3倍位。流星より遅い
その他	すこく低い高さを感じる。明るさは金星よりは明るい。



■その他:8月初め、編者の勤める会社の女性社員より、「夜自宅付近で山のほうに強烈に光る扇形の光体を娘(高校生)と見た。二人で追いかけた」との話があり、話の内容から中国で撮影された光体の拡大像を見てもらったところ「似ています」との事。

天宮志麻が画展の会場で聞いた話:白松さん(画家・日展おじいさん)より「大昔、夜、島根で道を歩いていると、大きな白い丸いものが目の前にきて、一緒にいた女性は腰を抜かした。めちゃめちゃ大きかった。月よりはるかにでかかった」という話を聞く。

1999年5月3日～5日 中華飛碟学研究会訪問記録

5月の連休を利用して、私は台湾の台北に飛び、台湾における代表的なUFO研究者達と交流してきた。故宮博物院や基隆の古代洞窟を探訪、また理事長の事務所を訪れてインターネットのホームページを見学した。そして中正国際空港近くの中正航空科学館における「台湾UFO研究展」を見学した。短い時間であったが、きわめて有意義な経験であった。以下にその経過を報告する。

天宮 清

■出発まで

5月2日の「第4回UFOフォーラム」が予定通り終了し、夜9時近くに帰宅してすぐ台湾の蔡章献先生に「明日予定通り行くので、よろしくたのむ」と国際電話する。5月3日午前5時すぎ起床。5時47分の電車に乗る。奈良発7時5分のバスで関空着8時15分。関空が完成して以来、初めてここに来た。近鉄奈良からのバス運賃1800円。空は晴れ。8時30分JTBのカウンターで航空券を受け取る。次に日本アジア航空のカウンターで搭乗手続き。手荷物預けを終えると8時40分。搭乗の入場口に空港使用料の自動販売機。2650円でカードを買う。そのカードで自動改札をくぐらせて入場。9時に各ゲートに乗客を運ぶシャトルに乗る。9時55分搭乗手続き開始。

10時30分離陸。機長のアナウンスによると台北までの飛行は2時間20分。現地の気温は24度でくもりとのこと。途中で今回のために600円で買ったデジタル腕時計の数字を一時間遅らせる。さすがに安物らしく力いっぱいボタンを押さないと表示が変わらず手間とる。

前回来たときは居眠りして入国カードを書くのを忘れ、入国審査のところであわてたが、今回は居眠りして気がつくカードを持った女性が歩いていたのでらう。たいていはツアー客なので係の人がまとめて持っている。

■空港にて劉紹賢、何顯榮、蔡章献、各氏の歓迎を受ける

午前11時54分(日本時間12:54)台湾の中正国際空港に到着。まず目についた空港内「中国国際商業銀行中正国際機場分行」の窓口で一万円を両替する。前回、両替を忘れ、市場での買い物ができなかった。1万円はNT\$2651。行市(レート)は0.251。NT\$(ニュータイワン・ドル)を4倍すれば日本円の値段で考えられる。100元(エンと発音するので、つい日本の円と勘違いすることがある)は400円相当。

次に入国手続きをし、手荷物を探して出口に向かう。ここまでで到着から約30分が経過。出口に歩いて行くと、柵のそばに劉紹賢、何顯榮、蔡章献の3人の姿が見えたので近寄り、柵越しにそれぞれと握手。

私は「予約確認、リコンフォームをしなければ…」と近くのカウンター的女性に尋ねると、案内図にボールペンで航空会社のカウンターまでの行き方を書いてくれたので、日本アジア航空のカウンターでチケットを見せ確認をとる。「OK」とのことで、私は何顯榮さん運転の車に蔡章献さんと乗ってホテルへ向かう。

■蔡章献先生との対話

車中における蔡章献さんとの質問応答をかいつまんで以下紹介する。使用している言葉や表現には若干違いがある。

天「共同記者会見はするのか？」

蔡「記者会見はしない。海底遺跡の件、信じる人が少な

い」。

天「あなたの生年月日を教えてください」

蔡「1923年3月17日 大正12年」

天「今まで何回日本に来たか？」

蔡「1947年以後、20回ほど。」

天「どんな用件で行ったのか？」

蔡「天文関係のことで。」

天「東京天文台に行ったか？」

蔡「東京天文台にも行った。」

天「村山定男は知っているか？」

蔡「村山定男知っている」

蔡「天文関係の人はUFOを信じない人が多い」

蔡「最近の天文学者は観測をせず机上の理論ばかりをやっている」

天「通常の天体観測は視野がせまい。あなたは視野を広く観測しているのか？」

蔡「変光星の星座表を見て変光星を探すので観測視野は広い。UFO発見のチャンスがある」

天「円山天文台を見学したいが…」

蔡「現在円山天文台は後継者不足から閉鎖されている。プラネタリウムはその近くに出来た新しい施設で行われている」

蔡「天文台を活用しないと天体望遠鏡で星を探し、実際に観測する人が育たない」

天「大陸では中国UFO研究会が気功研究会に含まれている」

蔡「気功とUFOは関係ない」

天「大陸との比較について」

蔡「台湾は面積からすれば大陸の1000分の5と小さいが、外貨は900億ドル持っている。大陸の外貨は1500億ドルだ。台湾の人口は2200万人だが、大陸は17～8億人いる。」

天「12億ではないのか？」

蔡「定住してない人口が多く、統計と実際は違う」

■ホテルでの話し合い

その他様々な課題について意見や情報を交換し、我々はホテル「第一飯店」に到着。何顯榮氏によりチェックイン。10階8号室に荷物を置く。ほどなく2人の幹部が到着し、合計5人のメンバーと記念撮影。劉理事長よりUFOグッズなどのプレゼントを頂く。なかでも携帯電話の着信と同時に発光する「21世紀最“火偏に玄という漢字で“光る”という意味の漢字”的精品” Mobil Phone Light Sensorという器具は面白い。「UFO～多機能偵測器」とも書いてある。次に劉理事長、蔡章献とすぐホテル内レストランにて、4人で軽食をとりながら話をする。以下メモより。

天「会員は何人いるのか？」

蔡「200余人」

天「この機関誌は何部印刷しているのか？」

蔡「3ヶ月に一回発行している。印刷は1500部。高等学校と図書館に寄贈している」

天「書店では売ってないのか？」

蔡「書店では売らない」

天「この雑誌の文字はコンピュータか？」

蔡「みんな何さんが、やっている。」

天「印刷の経費はどのくらいか？」

蔡「一回、5万元かかる。」

天「全部会費でまかなっているのか？ 政府から補助は出ないのか？」

蔡「なんとか会費でまかなっている。補助は出ない」(天宮ここで計算。会費一人年1000円で200人なら20万元。一回の印刷費用5万元で割ると年4回の印刷費用分となる。新規入会には別に入会金300元が必要。)

天「劉さんは何の仕事をしているのか？」

蔡「電子部品を製造をする工場を所有している」

天「劉さんの生年月日を知りたい。」(劉さんに教えてもらう)

天「劉さんがUFOを知ったのはいつか？」

劉「この会が出来た1993年に知った。まだUFOは見えない」

蔡「この会はそれまで正式ではなかった。呂應鐘さんの任意の団体だった。」

劉「香港の万仲満さんが、あなたに会いたいといっている。」

天「いつか香港にも行ってみたい」

劉「10月に無錫市で会合がある。上海のそばで汽車で1時間くらい。呉先生が主宰している。」

天「呉嘉祿先生か?(文字で示す)」

劉「そうだ。彼は上海市UFO研究会の会長さん。私は大連の大会に参加した。」

天「知っている。金帆先生から写真もらった。(我收到了大連大会の照片)と書く。」

天「大陸は簡体字を使って書くスピードが早い。台湾はなぜ旧漢字を使っているのか？」

蔡「漢字は象形文字だ。漢字に意味がある。しかし、簡体字になって本来の意味が失われた文字も多い。たとえば瀋陽(シェンヤン)は沈陽となったが、音は同じだが意味がまるでちがう。」

劉「広東で5月1日UFOが目撃された」

蔡「中通社(中国通信社)が伝えた」

劉「5個が回転していたそうだ。」

天「全体が回転していたのか?(図で示す)」

劉「いや、個々が回転していた。」

天「私も皿状のものが回転しながら飛行するのを見たことがある」(図を描く)

蔡「この会は正式の組織なので会長は交代しなければならない」

天「ああ、そうか。今まで何故理事長が変わるのか、疑問に思っていた。そのような規則があるとは知らなかった」

■会食で、研究者との交流…UFO発明家・目撃者もいた!

ここで、ホテルから別の場所に移動する。台北の町の商店街は各店舗の階下の一部がアーケードのように歩道をまたぐ形になっていて、雨の日でも濡れずに町を歩ける。それぞれの店の2階から歩道に伸ばされた柱は様々だが、その不均一な状態が面白い。

私と蔡章献先生は劉さんの運転する小型車に乗る。雨が降ってきた。車を下りてレストランに行く途中で、劉さん

に「あなたの英語は良かったと娘が言っていました」と言う。彼はてれくさそうに「ノーノー」と謙遜していた。

我々は、とあるビルのレストランに入った。あらかじめ予約してあったようで、他の客にじゃまされない隅の一角にしつらえた大きなテーブルを囲む椅子に座る。私が皆を一覧できる席。右となりに蔡章献先生。左に何顯榮氏。

蔡章献先生のとよりは黄朝明氏で三令印刷有限公司に勤務。この人の風貌は、実は私のUFO学上の先輩の某氏をほうふつとさせ、UFOをやる人は国籍を越えて似たようなタイプが集まるのだろうか、と思った。彼の職場が会の本部になっていて、3人のUFO会の名刺にこの会社の住所が記載されていた。しかも、機関誌の印刷はこの会社で行っている。昔、私が軽印刷業を営みながらUFO会の連絡所兼作業場をやっていた頃を思いだす。そのととなりが理事長の劉紹賢氏。いつも微笑みを絶やさない温厚で知的な人である。左側、何顯榮氏のととなりが陳漢順氏。若くて活発そうな感じ。銀行員とのこと。こんな私のために集まってくれたわけで、私は連休中だが台北はそうではない。

何顯榮氏がコンピュータで取り込んだ写真や図をA4にプリントした資料を積み上げて、私に一つ一つ説明していく。言葉が不足すると蔡章献先生が日本語に通訳する。この形で台湾におけるピラミッド遺跡関係、ムー大陸問題、台湾原住民、など彼らの情報、文献知識、実地調査から発掘結果まで、熱心な説明を受けた。これまた私と仲間が1971年に和歌山県田辺で発掘を行ってワラビ手紋の陰刻をみつけた事とよく似ていた。

何顯榮氏は、七星山の付近を調査する過程で、祭壇とみられる土盛の土を取り除き、その下に隠れていた石組を発見したと語った。

また、彼が提示した「先祖が帽子に乗って天から降りた」という伝説を持つ凱達格蘭(KETAGANAN)の民族芸術にみられる大きな冠をつけた人物像や木製の壁の陰刻にみられる図形は、極めて興味深いものであった。「ケタガラ」について平凡社世界大百科事典の「台湾」でみると「台湾西海岸北部の印文陶の末流はケタガラ族の文化に伝えられている」との一文にみられるのみで、詳しくはまだわからない。「印文」とは何か。これを雄山閣考古学選書『考古学よりみた中国古代』でみると、414頁に直線的な縄文に似た模様のある土器の写真が「印文…」として掲載されていた。

台湾の神話には天から降った神の話が様々みられる。私の持つ世界神話伝説大系『中国・台湾の神話伝説』をみると、アイヌの神話にも似た物語もみられる。「大洪水による被害」「舟の作り方を教えた神」「洞窟の話」「空飛ぶ物体と、それに乗った人の話」といろいろある。

私は持参した青森県木造町の土産店より購入土偶を取り出して見せ、彼らに贈呈した。また、私の研究成果の一部をファイルにしたものを回覧して見てもらった。また簡易仰角測定器、視直径測定器を説明し、彼らが実際に手にして測定姿勢を撮影した。また中文で説明した観測についての解説を各自に手渡した。

簡易視直径測定器の目盛について蔡章献先生に説明する。物体の見かけの大きさを角度で表現するという事は天文学者には当然のことながら、UFO目撃者は往々にして目撃したものについて、想像した大きさを言う場合が多い。

この頃、もう一人の人物が到着し、席に着いた。さっそく私は立ち上がって彼に近づき、名刺を交換して初対面の挨拶をする。邱水文さんといった。邱(てい)さんと呼ぶらしい。彼はキャノンのズーム付カメラを持っていた。目つ

きが鋭い。名刺には「太平洋日報」「首都時報」「中華時報」「日本亞州新聞」の撮影記者、そして円盤の図形の下に「UFO発明家」とあった。そして、彼は誇らしげに手帳大の古い写真のファイルを開いて見せてくれた。そこには円盤が飛行している写真や小型の変った乗り物の写真があり、それらはすべて彼の手によって製作されたものであった。「この円盤にはエンジンが付いているのか?」と聞くと、「そうだエンジン」と答えた。どうやらラジコン用の強力なエンジンによってプロペラを回し、空中に浮く円盤機のようなものである。私はそれらを撮影した。

彼はまた、何やらUFOの情景の話 시작했다。「それは、あなた自身が目撃したのか?」と私が聞くと「そうだ。」という。さっそくその話を始めからしてもらい、蔡章献先生による通訳の言葉と共に録画を開始した。そして、「ここに図を描いてほしい」と私の取材ノートを渡し、彼が図を描くのを録画した。彼の目撃は個人的なものではなく、同時目撃者、そして現場から電話による通報、撮影を含む客観的な出来事で、目撃が報道された新聞記事も持参していた。どうやら彼は製作した写真の小型ファイルとこの記事をいつも携帯してして、このような機会に第三者へ説明することを心がけているようだ。この態度と工夫には感心した。彼は私にカメラを向けて色々なポーズを写真に撮ったが、その様子は私が関心を持った人物を撮影する行為に似ていた。やはり、撮影という任務において同じ意識にあるようだ。

ちなみに、彼が目撃当時に撮影した写真は、カメラが安物でレンズが広角のため、形ある像とは写らなかったようだ。

色々話をしている、ふと気づくともう午後8時半を回っている。私は蔡章献先生を通して「宇宙人とはどんなイメージでとらえているか?」「UFOのどんなところに魅力を感じているか?」「それぞれの研究課題について知りたい」と質問した。宇宙人のイメージという質問は趣旨が理解されなかったようで、反応はなかった。魅力の問題も即座には出てこなかったらしい。最後の質問のみ、何顯榮氏と蔡章献先生から答えを頂いた。

外は雨が降っていた。「明日天気なら洞窟を見に行きましょう。」と明日の打ち合わせをして、私は劉理事長の車でホテルに戻り「明天!」と言って別れた。

■故宮博物院見学

ホテルについたら即座にバッテリーの充電にかかる。今日は連続撮影で2本使い切った。冷蔵庫のコンセントを外して充電のプラグを差し込む。テレビは自由に見られる。時代劇、バラエティー、ドキュメント、歌など。私は歌に興味があるのでしばらくそれを見た。そして、次に宛名だけ書いて持参した絵葉書20枚ほどを書き始めた。途中で疲れて書く手が止まる。ホテルの通路や部屋は小便の臭気が少し漂う。古い建物だと排水の老朽化があるのだろう。ベッドは固くて寝やすい。以前、台北で泊まったホテルはベッドがふかふかで眠れず、ついに床に寝たことがあった。バス・トイレ室にカミソリのないことに気付く。すぐフロントに行くと近くに店があるという。さっそく行って安全カミソリを買う。ところがこれが見かけはかっこいいが、切れ味は悪かった。私は自宅ではいまだに1年前にビジネスホテルから持ってきたカミソリを使っているが切れ味は新品の台湾製より格段に良い。鋼が悪いのか、不思議。

5月4日朝6時起床。外の散歩に出る。文具でコピーをする。コピー機はゼロックス。センターを合わせるのに手間

とる。一枚2元。枚数で計算して小銭を渡すと紙の枚数も確認しないで金を受け取ってレシートをくれた。

私は見知らぬ町を歩くのが好きで、国内で余裕のある列車の旅ではよく途中下車して知らない町を歩いた。ある時は夜から朝まで適当に野宿したこともある。

台北の裏通りの建物、装飾、生活感のある様々な風景は日本の昔を思い出す。昔の東京はゴチャゴチャとしていた。廃屋や地下生活の級友もいた。そんな昔を台北の裏通りに重ねてしまう。公園に行くとき功をされている初老の男性がいた。

ホテルに戻り、7時半に食券を持ってホテルのレストランに行くと、長い行列が出来ていた。そこでゆっくりと順番を待つ。皿を手を持ち、好きな惣菜を皿に盛る。日本のバイキング方式というやつだ。ちょっと腐臭が漂っていた。ハムのようなものを2枚とったが、誰も手にとらない。席について気づいた。腐臭はそのハムからしていた。「まあいいや」と私は2枚とも食べた。ご飯は粥のように水のなかに米粒かあるといったもの。北京でもそうだった。

9時半に蔡章献先生と何顯榮氏が迎えに来た。「朝は故宮に行きます。」との事。昨日「どこか行きたいところはありませんか?」と何度も聞かれたが、七星山は雨で無理だし、それでは故宮に行ってみよう、また、海岸近くの遺跡にも行ってみたいと希望を伝えていた。

私が故宮博物院に来たのはこれで2度目となるが、驚いたことに「三星堆」の展示を別な建物でやっていた。「ついでに見よう」ということになった。まず常設展示を3人で見学。2人の解説つきである。夢中で見学していたが、高齢の蔡章献先生には徹えたらしい。ふと気づくと彼がいない。何顯榮氏は「蔡さん、疲れたので休憩しています」とのこと。安心して見て回り、そろそろ帰ろうと何顯榮氏が蔡さんを捜しにゆく。「ずいぶん時間がかかるな」と思って待っていると、「蔡さんが見当たらない」との事。私も彼と共に広い展示場を見て回り、その周囲にある廊下の休憩用のソファーを見ながら一階まで降りて探す。しかしどこにも見当たらない。「二人でもう一度4階から見よう」と我々は4階のレストランから、各階のトイレまで捜したが見当たらない。トイレのドアが開かない時、彼は長身を生かして鴨居に手をかけてバネのように跳躍し上から見た。彼は玄関そばの交番で事情を説明したり、電話をかけた、一階の係員に聞いたり懸命に動いている。もしや急に具合が悪くなって病院に行ったか、運ばれたか、1時間以上捜していないので、とにかくもう一度電話と交番に立ち寄り、ついでに入り口前の郵便局で絵葉書に切手を貼って投函し、我々は海岸に向けて出発した。

■台湾原住民文化研究者から話を聞く

再び雨が降ってきた。彼は少し焦ってかなりのスピードで車を走らせる。私はやや車酔い状態。何度も狭い路地や鉄道の踏切付近で道を間違える。「海岸に行くのにやけに道を間違えるな」と思っていたら、林さんという方の店に立ち寄って行くためであった。そうたびたび訪れている訳ではないのだろう。ややこしい道を通って、車は基隆市商店街にある「李鵠餅店」の前で止まった。私は車内で待機。店には「凱達格蘭文化事業」との看板もみえる。初老の人物が店から出て車に乗り込む。名刺を交換して何顯榮氏より紹介される。

林勝義氏。台湾原住民文化聯盟總召集人。この人は『飛碟探索』1998年11月号のトップ記事『人類最早最大

的「姆大陸帝国」都城所在地——台湾』という論文を何顯榮氏と連名で発表している。

林氏からは立派な印刷物を2部づつ戴く。アート紙にカラー写真も多数あり漢文と英語を用い極めて学術的な内容である。そして「ケタガラン」について、説明を受ける。この民族はどこからかやってきたという。そのどこか、という場所について、彼は「サナサイ」と言った。「それはどこか?」と聞くと、指で上を差し示す。「ヘブンか」と私が聞くと、二人とも「ヘブンだ」と言った。

この件について、いま江晃榮博士の「UFO & SCIENCE」6号に掲載された李君章氏による「凱達格蘭の伝奇:台湾原住民来自外星球之探討」をみると、「SANNASAI」が宇宙母船として解釈されている文章に出合った。「ケタガラン族」と「サナサイ」は台湾の古代と宇宙とのつながりを解明する重要な手がかりと思われる。

■何顯榮氏と共に基隆の洞窟を訪れる

林氏と別れ、我々は基隆の海岸の道路沿いにある洞窟の前に到着した。雨と風が強い。傘をさして車外に出るが、撮影器材を濡らすと大変なので、ショルダーバッグを抱えて傘をさして進む。雨を避ける場所にゆかないと撮影は簡単に出来そうにない。我々は濡れた草を踏みしめて足場を確認しながら洞窟に接近した。こんな場所で転倒したら泥だらけになる。我々は洞窟に入った。大昔の洞窟住居の感じと、子供のころ東京田端の山の防空壕で遊んだ時の雰囲気を感じた。いつの間にか近所の青年らしき人物も見えてきた。地面は陶器の破片のようなものが散らばっていて、ゴミ捨て場に利用されていたのか、最近までの生活の跡なのか、わからない。右の奥は柵がしてあって人が入れなくなっている。発掘途中なのか、危険なので封鎖してあるのか不明。左の穴は途中で土に埋まっている。「近くにもう一つある」とのこと。徒歩で次の洞窟に向かう。狭い入り口を入ると以外と奥が深い。懐中電灯を頼りに進むが、少し不安になり「もうこの辺でいい」と言うと、「もっと奥に行こう」と促されて進むと、かなり広い空洞と、もう一つの洞窟から出口が望める場所に来た。もう一つの洞窟は水が溜まっていて、進めない。撮影するが光量不足でたぶん良い写真にはならない。「昔はここに大量のコウモリがいたが、今はほとんどいなくなった」という。サーッと我々の頭上をコウモリが通過した。「今の見たか?」「見た」人工的な痕跡を探すが、天井の岩に直線的な断層か掘削の痕跡なのか不明な部分があったので、これを撮影する。

何顯榮氏の説明によると、二つの洞窟が空気の流通を可能にし、また片方が狭く片方が広いのは、獣の侵入から守る知恵による構造だという。そしてこの洞窟の年代は氷河時代に遡る古いものであるとのことであった。

確かに台湾の神話には岩の穴や洞窟が出てくる。「二つの洞窟から、この世に初めての人間が生まれた話(干卓万蕃かんたばんばんの始祖)」「地の底に続く穴の奥に住む賢人の話(粟を貰って来た男)」「岩の割れ目から生まれた人間の話(合歡蕃の祖先)」「大洪水の水を押しやった祖先と、その時に生じた険しい地形の話(石から生まれた先祖)」「大きな石の二つの穴から男女が生まれた話(文水蕃の御先祖)」といった具合。

それゆえ、洞窟に古代の謎を求める作業は、そこに住む者として必然的な課題となろう。彼はさらに山を車で登ってもう一つの洞窟に行こうとしたが、工事中で道がふさがっていた。やむなく山を降りて海岸に来て停車。そし

て山の斜面の工場について銅がどうしたとか言っているが、意味がわからない。彼は私を道路の際に引っぱって行って海岸を見せた。何と海岸には大きな赤い岩がゴロゴロし沖合いまで海が薄茶色に染まった異様な光景が見られた。銅が溶けて海の色を変えているようだ。

風が強く、傘がおちこになる。傘を何顯榮氏に渡し、ビデオとスチルカメラを持って撮影した。車に戻って濡れたカメラをタオルでぬぐう。「帰りましょう」と我々は帰途につく。

台北に入って彼が言った「三星堆の見学を忘れてました!。間に合うか行ってみます」午後4時45分、故宮博物院に到着すると展示は4時半で終わっていた。「資料だけでも買いたい」と私が言い、すぐ三星堆の展示場に行く、さいわい販売所は閉まる直前で開いていたので、中文のパンフレットを買う。といつてもすべて彼が買ってくれた。きちんと領収書を取り、会の正式な経費として計上するようだ。故宮博物院のレストランで夕食をとる。そして、蔡章献先生が無事帰宅していることが確認された。話によると蔡先生は博物館の外で待っていて、なかなか我々が来ないので帰ったということであった。とにかく大事なかったので安心した。どっと疲れが出てきた。めまぐるしく変化する車に同乗して緊張していたせいかもしれない。明日の予定を聞き、何顯榮氏とホテルに戻る。

部屋に戻り、風呂に入ったあと、器材を点検し今日の出来事などの感想を録画する。

■劉理事長の経営する電子製品工場を見学 中華飛碟学研究会のホームページを見学

5月5日午前5時半起床し朝の散歩に出る。裏道の家屋や廃屋を見ながら歩く。ホテルに戻り早めの朝食をとり、また自分自身の語りを録画。こうして別の土地で自分自身がカメラに向かって語りかける録画は一人のレポーターとして同胞に語りかけるという事で、面白い試みだ。窓ガラスに映ったライトの撮影もした。刻限が迫ったので身支度を整えてロビーに降りる。8時半ちょうどに何顯榮氏が到着。ホテルの精算をすませてくれる。私はレジの数値をメモ。

今日はまず中正空港近くにある劉理事長の工場に行く。そして空港のUFO展を見学する予定だ。車は朝のラッシュの影響で高速に乗るのが少し手間だった。しばらく高速を走ると右手に大きな中国風の建物が見えてくる。最近できたグランドホテル(圓山大飯店)で、すぐそのそばに圓山天文台がある。私は疾走する車内から天文台に向けてシャッターを2回切った。

途中給油を経て、車は劉さんの経営する電子部品工場に到着した。間口は3間くらいか。ここで録画テープ終了のサインが出たので、路上でテープを交換する。その直後に劉さんが現われた。促されて工場の階段を上る。2階は立派な事務所、3階に作業所と応接間、経営者劉さんのパソコンと資料がある。まず作業風景を見学。5人ほどの若い男女がハンダ付けや半導体の取り付けなどの流れ作業をしていた。許可をもらって少し撮影する。そして、次に彼のパソコンコーナーへ。ディスプレイの画面にはすでに彼ら『飛碟探索』のホームページが出ていた。カラフルで秩序だった項目と構成で、なかなか立派な作りである。UFOも画面を動いている。すべて劉理事長が作ったと何顯榮氏からの説明を受ける。目次をクリックすると写真や文章がでる。UFO写真をスライドしたり、画面にズラッと表示されたたくさんのUFO写真の任意をクリックすると、その写真が画面一杯に表示される。私はビデオカメラ

を固定して、しばらくこの内容を録画することにした。もし詳しい内容が知りたい方がいたら、VHS1本にまとめた「99年台湾行」を申し込んでほしい。

しかし、UFO情報やUFO写真また「エイリアン」とされる奇怪な「生物」の写真は、見たところ最近のものが多。UFO写真はマイヤーが多い。我々が1960年代、海外から入ってくる空飛ぶ円盤写真に興奮し、コレクション的感覚で真偽に関係なく、アダムスキーやメンジャーの撮った空飛ぶ円盤の文字通りの写真を眺めていた頃を思い出す。この素晴らしいホームページの中味がすべて真性で埋め尽くされる事が出来たら、それだけで世界は救われるのではないかと、と心密かに思った。日本においても「空飛ぶ円盤とは、アダムスキー型かマイヤー型でなければ認めない、単なる球体はUFOではない」といった主張もみられる。一方、カメラやビデオは発達しているが、その機能を自分のものとするには歳月と経験が必要になる。その実体験を経過して初めて「空中物体の実際の写り方」という課題と出会えるのだ。

ひととおりホームページの見学を終えて、少し休憩と雑談ののち、劉理事長の車と共に我々は空港の航空博物館に向かった。また雨が降ってきた。

屋外に戦闘機の実物展示もある航空科学館は立派な建物である。中に入るとライト兄弟の作った複葉機の実物大模型が天井から吊下がっている。一瞬スミソニアン航空博物館を思い出す。戦闘機や小型機の実物を使った操縦席もある。

「台湾UFO研究展」は通路に沿ってパネルが展示され、途中にビデオ上映コーナーと模型展示コーナーがあった。パネルが非常に美しい。資料を中華飛碟学研究会が提供し、科学館側の資金によって作られた第一級の展示物である。写真や文字が黄色を主体としたハーフトーンの上にカラーで印刷のように焼き付けられている。コンピュータを使用してしたものと思われるが、とにかく高い技術水準を同わせるものであった。パネルは透明プラスチックのようなもので覆われているため、真正面からのストロボ撮影では反射が生じるため、斜めから撮影した。その写真を見ながらパネルの表題と使用されている写真などを紹介すると...

■航空科学館で「台湾UFO研究展」を見学

- 1,UFOの定義 What Is UFO?
メキシコのサカテカス天文台(「地球版」のザカテカスは間違い)の写真(但し説明文は米国ニューメキシコになっていた)の太陽面UFOや中国と台湾の代表的UFO写真など。
- 2,UFOの科学分類 Science Classification Of UFOs
ハイネックによる分類法が採用されている。着陸ケースとしてアルプス山中のアンテナ付き。
- 3,UFOの発見と調査 UFO Investigation
アーノルドとアダムスキーの写真。プロジェクト・ブルーブック(藍皮書計画)の写真と米空軍発表統計図。
- 4,重要UFO文件 Important UFO Files

■表紙説明

1999年8月、いつもクロープサークルの情報を寄せていただいているKさんから、驚くべき図形が送られてきた。まるでザルのような網目が形成されている。

『すごいのが出ました!!! 立体的で本当に組み込んだ「バスケット」のようです。残念なこと、この農場主がさっさと、しかもこのサークルのところだけ刈り取ってしまったとのこと。皆なげいてます。サークルメーカーに第2の立体サークルを作ってくれるよう急ぎようではありませんか。次が楽しみです♡』

表紙の上に、何か別な材料で出来たものをかぶせたように見える。い

1978年12月6日国連文書、MJ-12文書、NICAPのUFO分類図

5,重要UFO目撃 Important UFO Sightings
国父孫中山、ジミー・カーター元米国大統領、クライド・トンポー、蔡章献、三毛といった重要人物によるUFO目撃。

6,台湾のUFO研究現況 Taiwan's UFO Research Condition

台湾UFO研究の先駆者呂應鐘先生の紹介、中華飛碟学研究会の沿革と機関誌やインターネットホームページの紹介。

7,台湾のUFO目撃事件 Taiwan's UFO Sightings
蔡章献円山天文台長時代の目撃から最近の8mmビデオ映像までの写真つき年表。

8,中国歴史上的 UFO事件 UFO Records In Ancient China

張開基著『古中国正史的UFO事件』より図版と事例が紹介されている。

そして、この後から30枚ほどのUFO写真が一枚づつ額入りの写真で展示されている。いくつかの写真の説明に少し誤りがみられたので指摘し、その一部を何願榮氏の手帳に書かせて頂く。

9,世界各地に出現のUFO UFO PHOTOS

各種円盤図とガルフブリーズ、マイヤーなどのUFO写真
10,宇宙人および死体解剖事件 Autopsy The Alien And Photos サンテリア・フィルムの真偽と怪物型各種エイリアンのイラスト

11,UFOによる誘拐事件 Abduction By Aliens ヒル夫妻の事件やインプラント事例など。

12,空飛ぶ円盤墜落事件 UFO Crash Event
ロズウェル事件や異星人死体模型、ロシアにおける最近の墜落事件の写真など

13,UFOとクロープサークル UFO And Crop Circles 英国における1990年代初期の各種サークル。ドイツと日本の兵庫県稲美でOUC乾達也氏撮影の光体もある。またナスカの地上絵と比較している。確かOUCのメンバーにも同じ視点の方がいた。

14,地球外文明探索計画 Search for Extra Terrestrial Intelligence 米国のSETI計画、ドレイクの方程式、バイオニアに搭載された金属板、アレシボからの発信、火星隕石中の生命など。

15,UFO飛行特性一覧表 UFO Flying Style
天宮が『地球外知性痕跡探索』に発表したもの。

16,UFO現象が地球人に与える啓示 The Revelation From UFOs 宇宙を背景にした白抜き文章。UFO現象は科学において、宗教において、社会において、哲学において重要な意味を持つ。

●結語は大きなパネルに電波望遠鏡4基のイラストを描き、その上にこう書かれている。「抬起頭来, 望向宇宙; 體悟自然界不断傳給人類的信息…」

つも図形に残るトラムラインさえも、このザルの図形に限っては、ほとんど造形の中に取り込まれて消えている。

編者はこれを見ていて思った。「思いきってUFOとETの立体が出来ればいいのに…」と。次に「この思いを絵に表わして、今度の表紙にしよう。そうだ藤平氏に頼もう。」という訳で、この案を藤平浩一氏に送り、ご覧のようなイラストが完成した。この発表の直後、Kさんから「ついにETの顔が出ました!」との電話を戴いた。「その顔はどんなですか?」と聞くと「それがグレイなのです」との事。本物かイタズラか…。しかしつむじを巻いたような裏の倒れ方は本物に見える。あまり衝撃的なので、今回の巻末一頁では割愛させて戴いた。



■ホテルロビーでの記念写真。前列向かって左から何願榮、蔡章献、天宮清、劉紹賢。後列向かって左から陳漢順、黃朝明の各氏。理事長の劉紹賢氏からは今回の台湾UFO研究展記念グッズの数々を戴いた。旗は編者のパソコン室の正面に吊掲げている。

中華飛碟学研究会:您好!
回國以後, 竟思經過二星期, 此次訪台灣中華飛碟學研究會, 幸得訪問, 其時承多才多藝, 給與很多機會, 深感真無上的光榮, 何先生表示衷心的謝意。
此次在貴國期間, 雖甚短促, 但在台北會場會議, 參觀故宮博物院, 訪問村先生館, 屏東縣地洞, 參觀中正航空科學館「台灣UFO研究展」等處, 均承親切引導訪問, 聽到何先生寶貴的語話, 誠為莫大的榮光, 又蒙贈各種紀念品, 研究材料, 土產品, UFO照片, 磁帶, 錄影帶等, 非常感謝!
敬祝 身體健康
敬啟
天宮清
1999年5月20日



■中華飛碟学研究会5名、新聞カメラマン1名と共に会食しながら懇談中の編者。



■基隆市の洞窟を探訪中の何願榮先生。



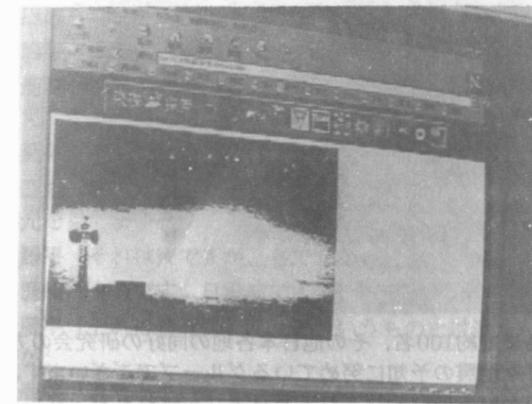
■中正航空科学館における「台湾UFO研究展」で劉紹賢先生と何願榮先生。



■台湾のピラミッド研究を特集した「飛碟探索」



■上:張開基先生の手による「天文志」記載事件の再現模型。左:劉紹賢理事長制作の研究会のホームページ。立派な構成である。



■台湾における有名UFO事件と撮影写真のページより



■世界中のUFO写真を網羅したページより

「第4回UFOフォーラム」開催記念取材

異常現象の体験者そして研究者の証言

藤平浩一



藤平浩一氏

5月2日大阪開催のOUC主催「第4回UFOフォーラム」中の「日本のUFO研究会、研究者からのメッセージ」の一つとして発表するため、千葉の藤平氏が彼独自の情報網から3人の研究者、体験者を訪問し、それぞれの特異な分野と体験を取材した。これらはすべて8ミリビデオに収録されたが、フォーラム内容決定の締切後であったため時間の割り振りに間に合わず、旅客機からUFOを目撃した体験のみが発表された。本誌は藤平氏の取材内容の重要性から、藤平氏の承認を得て、ここに未発表分を含めて抄録し、研究者の参考に提供することにした。まず彼の自己紹介からである。

藤平「藤平浩一(ふじひら・ひろかず)です。まずはOUC10周年おめでとうございます。OUCの皆様とは羽咋市における第1回国際UFOシンポジウムで知り合ってからのおつきあいです。当時、私は小学館の『ワンダーライフ』という雑誌でUFOディレクターの矢追さんを題材にした「矢追さんちの宇宙人」という四コママンガを書いていた。その関係で羽咋市に取材に行ったわけです。そこで皆様と出会ってから、いろいろ勉強させて戴き、またいろいろな人と出会うことが出来、感謝している次第です。その他、雑誌『ムー』の姉妹誌だった『MAYA』でオカルト編集部を題材にした四コママンガや、『漫画アクション』の四コマ、『小説推理』、『天文ガイド』では毎月の天文情報に合わせたイラストを4年くらい書いてました。現在は、地元千葉県のエリア情報誌『Ossa(おっさ)』の中で、「道草くっちゃえ」という自分の企画で、自由に書かせてもらっています。ふだんは珍しい店を発見したり、自然に対してアウトドア的なことをやってみたり、変わった人物を紹介したりして楽しんでるんですが、時々自分の好きなオカルティックな分野も時折扱っています。(中略)

私自身のUFO目撃は、中学生くらいからです。未確認というか、それらしきものを入れれば10数回くらい目撃しています。一番最近では獅子座流星群の騒ぎの朝8時半頃、南西の空に銀色の球状のものがゆっくり飛行していくのを見ました。それが朝で明るかったんで、これはカメラで撮れる、と思ったので急いでカメラを取りに行ったんです

が間に合わなくて…。見失ってしまいました。

今回はUFO、そしてUFOと誤認されやすい事例をリストアップして取材しました。」

■「地震雲予知」の日本地震雲研究会会長 鹿嶋實先生

(1999年4月11日取材)

藤平「UFOの中には雲と同じような形に見える写真が多数あることは、皆さん御存知だと思います。

(編注:例えば1957年10月16日米国ホーロマンミサイル実験場上空の写真、1974年11月17日年デンマーク上空の写真など)そのことと関連するかも知れませんが、地震雲という、まだ科学では認められていない分野を20年以上研究されている鹿嶋實先生にインタビューしたいと思います。」

鹿嶋「ただいまご紹介いただきました日本地震雲研究会の鹿嶋でございます。うちの会は元の奈良市長の鍵田忠三郎先生がお作りになった会でございます。現在、北海道から



■元奈良市長の鍵田忠三郎氏が市長現役の1980年(昭和55年)に中日新聞本社より出版した『これが地震雲だ・雲はウソをつかない 付・日中地震雲学術交流会の記録』(A5判205ページ)。豊富なカラー写真を使って地震雲を紹介している。中国の研究者との地震雲共同研究や、地震との相関関係を示す事例の記述は、いまだ解明されない地震発生と大気現象の目に見える形としての雲の異常との密接な関係を物語る。地震雲の特徴と見分け方は現在でも参考になる。この鍵田氏の実績を鹿嶋實先生(写真下)は引き継いでおられる。

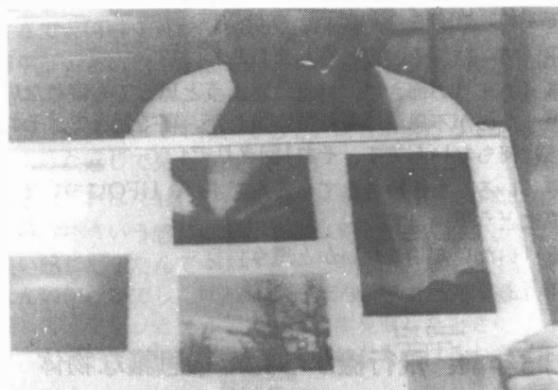


鹿嶋島まで約100名、その他日本各地の同好の研究会の方々と日々地震の予知に努めているグループでございます。地震雲というのは公認されておられませんけれども、昔から大自然の異常を示す前兆現象として、いろんなところでい

ろんな形で現われる『宏観(こうかん)現象』と呼ばれるものの中の一つです。阪神大地震の前日、千葉県上空でみられた赤い月、こういう月が観測撮影されております。昔から古老などが言葉でこういう月が出たら危ないと、伝えてきたものが撮影されたということです。

それから、これは発光現象の一種ですが、阪神の時も各地で見られた訳ですが、こういう現象の検証が誰にでも出来るということです。

それからこのようにまっすぐ昇る竜巻雲。これは最近よく見られるようになりました。これは飛行機雲だとおっしゃる方もいますが、飛行機雲と地震雲の違いは、高度、滞空時間、形で違ってきます。マグネチュード6以上の被害地震の時は、必ず大自然が人類に警告を発しているということです。こういうことに、皆さん気を向けて戴ければありがたい。」



■いろいろな地震雲の写真を示す鹿嶋先生。

藤平「最近の実績としてはどうでしょうか」

鹿嶋「1年前の6月1日、三重県で起きた地震の前兆でございます。これは千葉県上空ならびに埼玉県で撮影された地震雲です。また、これは東京上空、東京タワーの上に現われたもので、3月16日の午後、晴天の下に現われました。これはアークと違ってレインボーではありません。レインボーは光学現象ですが、アークは磁気現象で起きます。2日後の3月18日、東京新宿付近を震源とする地震が起きております。」

鹿嶋「火事のような赤い夕焼けも発光現象の一つです。夕焼けは日没前後ですが、発光現象は太陽が沈んで辺りが真っ暗になって、突然空が赤く染まる現象です。」

藤平「先生は長年空の観察を続けておられますが、UFOといわれるようなちょっと不思議な現象を見たことはございますか」

鹿嶋「1回あります。」

藤平「それはどんな現象でしょうか」

鹿嶋「夕空に九十九里の海岸を光りながら飛んだのを一回見たことがあります。」

藤平「その光というのは、どんな…」

鹿嶋「明るく、こう…星のように光りながら…横に走った光を見てます」

藤平「それは夜ですか、昼ですか」

鹿嶋「夕方です。日没前です。」

藤平「それは飛行機とか、そういうものとは違うんですか」

鹿嶋「違うと思います。私の浅察ですが」

藤平「色はなに色でしたか」

鹿嶋「色は見えません。遠くだったもので。流れ星のように真横に走ったという感じで…飛行機よりも速かった。飛行機ではないと思います。」

藤平「何秒くらいですか」

鹿嶋「うーん、さあ確かなことは判りませんが、5秒か10秒あったんじゃないでしょうか」

藤平「えーと先生、歴史的な地震雲の資料もあるそうなんですけど、どんなものでしょうか」

鹿嶋「これは、おそらく中国から渡ってきたものだと思いますが、楠木正成(1294~1336)がイラストとして残したものの一つで、48種類の雲の状態を示しています。その一番トップにきているのが、地震雲とは言ってありませんが、こういう状態になった時に地震が起きるよ、ということを示しているんです。こういう雲が出たら風だよ、雨だよ、というのを残しています。また日蓮さん(1222~1282)が『立正安国論』の中に具体的に地震雲を書いておられます。それから昭和に入っては中里介山(1885~1944)の『大菩薩峠』の竜神の巻の書き出しはまさに地震雲でございます。」

(中略)



■楠木正成が残したという地震雲の図

藤平「今回、UFOフォーラムということで、いつも空を見ている先生の立場から、UFO現象というものをどのようにとらえているか、その辺をお聞きしたいのですが」

鹿嶋「個人的にはですね、存在するだろうと思います。という理由はですね、地球人が宇宙に探査機を飛ばしているんですから、この広い宇宙のどこかに我々地球人以上の知能を持った生物が存在し、彼らが活動してくるだろうということは十分考えられます。ですから、これは否定できないだろうと思います。

藤平「わかりました。ありがとうございました。」

■目前で落雷を体験した人

藤平「雷や稲妻などで、時々UFOと間違える現象が現われます。これから紹介する児島功さんは小学生の頃、目の前に雷が落ちるといって特異な体験をされた方なので、いくつか聞いてみたいと思います。

児島「児島功です。自分が小学校6年でしたか、雷が目の前に落ちたんですね。その時はですね、音がゴーンとしたんですよ。いきなり目の前が真っ黄色になって…」

藤平「真っ黄色…!」

児島「友達とかいたんですけど、もう目の前、全然見えないくらいに真っ黄色になって…」

藤平「距離はどれくらいのところ落ちたんですかね」

児島「うーん、距離はわからないですね。本当に、目の前



■異常体験を語る児島功氏。

という感じで全然見えません。真っ黄色で…」
 藤平「その黄色い状態はどれ位続きましたか。感覚で…」
 児島「うーん、3秒ぐらいですかね」
 藤平「で、友達も同じ様な感じなんですかね。」
 児島「怖くなって、近くの会社に逃げ込んで…」
 藤平「要するに、助けを求めて…」
 児島「ええ、まあそうですね」
 藤平「会社の人、何か言っていましたか」
 児島「はじめ信じてもらえなかったですね。」
 藤平「ああ、雷が落ちたってこと。そうですか。その後、そういう体験はしてませんか」
 児島「それっきりですね」
 藤平「真っ黄色、3秒間。それは、やっぱりいきなり落ちるんですかね。」
 児島「いえ、そんなことはないです。雷がすごかったんですよ。すごくて、ああ、なんか近くきそうだな、という感じになって…まだ遠いなとは思ってたけど、いきなりゴーンと音したと思ったら直後ぐらいにパーッときて…」(中略)
 藤平「えーと、あとですね、福島の田舎の方で、何か不思議な音を聞いたということなんですが、それについて聞かせて下さい」
 児島「やはり小学校6年、同じくらいじゃないかな。夏、福島に遊びに行ったときに、今度は光じゃないんですよ。音だけ。」
 藤平「それは昼間ですか？」
 児島「もう、真っ昼間、12時ね…飯食ってちよつとしたくらいだから1時からかな、外出ていきなりグァーという感じで、」
 藤平「ハァーそれはどの位の長さで…」
 児島「凄い、半端じゃない。」
 藤平「へえー!」
 児島「兄ちゃん母は、家の中にいたんだけど、俺が『今、すごい音したでしょ』と言ったのに『全然知らない』って。」
 藤平「それは不思議ですね!」
 児島「そのとき怪我した傷がこれなんです」
 藤平「ちなみにその田舎はどの辺にありますか。福島の…」
 児島「福島の金山町」
 藤平「えーと、あと分野は違うかも知れませんが、ポルターガイスト現象みたいなことがあったっていうんですけ

ど、これはいつごろで、どのような…」
 児島「引っ越してすぐだから、やっぱり小6の時に。家を新築して引っ越して、その時に…えーと10日後過ぎたくらいに、夜中の2時ぐらいに目が覚めて、覚めたと思ったら、いきなり電気がパッパッパッパッと…」
 藤平「それ、すごいスピードで」
 児島「そんな速くないです。消えたと思ったら、またついて、消えた、と思ったらまたついて…」
 藤平「それは消してた状態だったんですかね。」
 児島「どうだったろ。起きた時にはそうになっていたから…」
 藤平「それは時間にして、どれくらいの間起ってましたか」
 児島「小学生だから長く感じたけど、短かったかも知れないですね。10分もないでしょうね。」
 藤平「で、結局その後どうしました」
 児島「あまりの怖さに、寝よう寝ようと思って寝れないと思ったのが不思議なもので寝ました。寝て起きて、それ以後は何もないんです。それ1回きりで」
 藤平「いろんな体験されているんですが、UFOについて率直にどう思います」
 児島「いないんじゃないかと思う」
 藤平「ありがとうございます。」

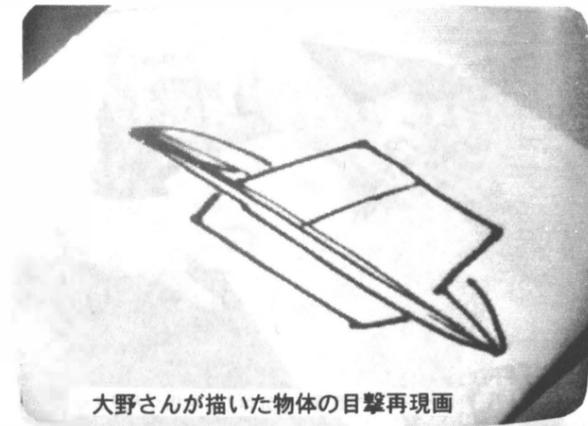
■13年前、飛行機から見た不思議な物体

藤平「えー、続いてはですね、本物のUFO、真性UFOを目撃したと思われる女性の方に、お話を伺いたいと思います。彼女は大野比佐代さんといまして、私の友人の奥様でございます。大野さんは、アフリカでボランティア活動をしておられました。ではどうぞ。」
 大野「えー大野比佐代です。アフリカの難民救援ボランティアとして、約通算4年半、アフリカでアンゴラ難民とウガンダ難民の救済活動をボランティアでやってきました。」
 藤平「えーと、ときどきUFOを目撃する方は、将来的にあるいは過去に重要な役割をしたとか、社会的なかかわりを持つ方がいますが、この方もそういう感じの方かも知れません。えーとUFOと思われるものを目撃したのは、どれくらい前の話でしょうか。」
 大野「8年……10年くらい前でしょうか」
 藤平「1989年ごろですか」
 大野「もっと前ですね。13年くらい前ですね。」
 藤平「13年くらい前、はい。では…その状況ですね。季節とか、わかる限りお話しください。」
 大野「えーと札幌から東京羽田まで飛行機で来たときに、東京湾の上空ですごい旋回をするんですけど、その時に私は向かって右側の列の窓側に座ってまして、ちょうど夕方だったと思います。午後4時とか、まだ明るい時間だったんですけども、えー、雲の上ですね。東京湾に近かったんですけども、雲の上で……眼下に雲が見えるっていう感じで。その上を西日が射しているような状況でした。窓から外を見ていて、ふっと見たときに、銀色の、円盤みたいな感じの、それはハッキリ近くで見えたんですけど。」
 藤平「その近く、っていうのは、どのくらい近くの感覚ですかね。」
 大野「えーとですね、感覚的にいうと何メートル…本当に



大野比佐代さん

肉眼で見ても、こんな形くらいで見えましたから、この大きさで…(手で15~20センチほどの輪をつくる)」
 藤平「…ということは…えー…ニアミスみたいな感じ…に近いのかな」
 大野「そうっ、ですね。でもその西日が当たって光っているような感じで見えるんです。」
 藤平「それは反射しているっていう、ことですかね。」
 大野「そういう感じです。すごい天気良くて、西日が強い感じだったんで…ふっと見た時にそれが見えて、で、ほんの何秒かでしたけれど…顔の向きをまた飛行機の中に戻して、アレっと思って、もう一度見直したときには…もう、一応肉眼では見えるんですけども、はるか彼方に…」
 藤平「遠ざかって…」
 大野「遠ざかっていた、っていう、ほんの何秒かですよ本当に。」
 藤平「座席は右側でわかりましたけど、どの辺ですかね。翼の付近とか。後ろのほうとか頭の方とか…」
 大野「翼より前だったと思います。でもわりと翼のあたりではあります。」
 藤平「あー、なるほど。それは、どんな形か、ちょっと書いていただきますかね。ゆっくりでいいですよ。」
 大野(紙にマジックで描きながら)「本当に何か…こういう感じで…下はこんな感じで」
 藤平「その(上部の)台形の上の感じは、角はそんな鋭角の感じですか。カクカクっとなってるんですか。」
 大野「わりとそうでした。でも、きっちりカククっというじゃなく、多少こう、丸みはあったにしても、角っぽい感じでした。本当に真横に見えたっていう感じで…こうほとんど(周囲のツバは)一直線状態でした」
 藤平「ああ、そういうことですか。真横にきているっていう感じ。でこれ全体が、銀色っぽいんですか」
 大野「銀色です。もう全部銀色。」
 藤平「窓も何もありませんか」
 大野「なかったですね。ただ、何かこう、継ぎはぎじゃないんですけど…」
 藤平「なんですかそれ、継ぎはぎっていうのは?その表現を知りたいですね」
 大野「えーと、よく板…鉄板とか合わせると、継ぎ目が出ますね。」
 藤平「ええ、はいはい。溶接した跡みたいな…はい」
 大野「そんな感じのが、見えたような気がするんですけど



大野さんが描いた物体の目撃再現画

ども」
 藤平「うーん、何ですかねえ。そんな精巧なものなんだから溶接する訳ないでしょうけど。」
 大野「そうですね。でもここに線みたいなのが…」
 藤平「それが見えた。」
 大野「見えた。ただ窓とかは一切なかった」
 藤平「それで、遠ざかった時は、形は同じですか」
 大野「まったく同じです。まったくそのまま、横に見えていたものが、そのまま真直ぐ移動したという感じで…」
 藤平「へえー、すごいですよね。これねえ。で、ほかの乗客の人は…」
 大野「特に、何の声も聞こえなかったので…どうなんでしょう。」
 藤平「不思議ですね。それで、これを見てどう感じました。乗って見て直後は…」
 大野「UFOだ、と思いました」
 藤平「あーそうですか。」
 大野「最初、窓を見ていて、それが見えた時は、それが何だかわかんなかったんです。でも、あれっ、と思って見返した時に、遠くにあったので、ああ、これがUFOなんだ、っていう感じはありましたけど。…テレビで見ると、銀色の、ああこれがUFOだっという、感じでしたね。」
 藤平「こんなハッキリしたのを見るっていうのは、なかなか無いと思うんですけどね。ちゃんと銀色に光りも反射していたと」
 大野(円盤画の角ばったドームの左辺を指差しながら)「こちら側が西日ですごく光ってました。(円盤の下方の空間に手をやって)このへんに雲があって、この雲も西日でけっこう光ってました」
 藤平「これが…東京湾の上空ですよ」
 大野「そうです。ほんとに着陸体制にだんだん入って旋回する時でしたから…」
 藤平「あと、何かこの写真の方のアフリカのボランティアに行っていた時に、村でUFOっぽい騒ぎがあったんですけど、その辺をちょっとお話し下さい」
 大野「アフリカのザンビアという国なんですけど、その難民キャンプにいた時に、周りはもちろん高層ビルなんかありませんし、ただっ広いところなんですけど、そこで、オレンジ色の…」
 藤平「えーと、じゃあこれも、ちょっと書いてくれますか。この紙の裏つぺたといっても映ってら…」(先の画の



■ザンビアで目撃した光体の形を描く大野さん

紙を裏返す。しかし、マジックのなで絵が映って見える

大野「もう一枚、紙ありますよ」(別な紙を広げて楕円を描く)

大野「それは単にオレンジ色の光りで、こう楕円の感じですね。」

藤平「これ、仰角としてはどの程度ですかね。手でちょっと指差してもらえますか。高さを…角度を」

大野「こういう高さです。」(カメラに向かって腕を斜め上にあげて指差す)

藤平「ちょっと、それじゃ見えづらいので、横を向いてください。はい、これだと大体45度くらいですかね。この光りというのは、全体がオレンジ色…」

大野「全体がオレンジ色で光ってました」

藤平「その光りの大きさは?」

大野「もう全体が光ってオレンジ色っていう…」

藤平「大きさっていうのは、例えば星くらいとか、飛行機のライトくらいとか…」

大野「星よりは大きいです。最初人工衛星と思ったんですけど、人工衛星よりは大きい感じです。」

藤平「大きい感じですか…。これはどの位の間、見えていましたか?」

大野「けっこう長い時間で、気がついた時には、あったという感じで。たぶん5分とか10分とかだと思んですが…」

藤平「それは位置を変えず…」

大野「ええ、位置を変えずといっても、微妙にこうジグザグみたく動いてはいるんです。」

藤平「微妙に動いている、揺れているように見えると…はい」

大野「でもそれは遠くへ行ったりとか、大きい動きではないんですよ。その場所でこう動いているという。」

藤平「これは何人くらいの人が見てますか?」

大野「もう周り、みんな見てましたので…」

藤平「周り皆んなというのは、だいたい何人くらいでしょうか?」

大野「たぶん誰でも見えたっていう…」

藤平「その難民キャンプというのは、何人くらいの方がいるんですか?」

大野「10000人です。」

藤平「10000人ですか!! すっごいですねえ」

大野「みんなで、あれは何だろう、と話をするくらいです



■ザンビアの目撃の仰角を示す大野さん。

から」

藤平「やっぱり現地の人たちも、おかしいぞ、って思ってる訳ですね。ということは、やっぱり土地の人もあまり見ない光を見てるってことですね。でこれは一日だけですか?」

大野「いえ、何日か…一日に何回か見えることもあるし、一週間に一日とか、一回とか…」

藤平「それは位置は同じですか?」

大野「だいたい同じ位置、方向ですね。」

藤平「それは何年くらい前でしたっけ。」

大野「それは…えーと11年前、11年前くらいです。」

藤平「それから、アフリカにボランティアに行った経験から、人間の能力についても、何か面白い経験をされていると言うんで、そのアフリカの人達、ザンビアと…どこでしたっけ」

大野「タンザニアです」

藤平「タンザニアの人達なんかの、日本人とかがないような能力ですか、それについてちょっとお話し願いますか。」

大野「…非常に目が良い、ということと耳が良い。目がいいのは、私たちが全然見えないようなものでも、遠くに何々があるって言って、たぶん視力でいくと6とか、それくらいだと思うんですけども。あと耳が良い、っていうのは単に小さい音でも聞こえとか、遠くの音が聞こえとか、ということと…もありますけど、もう一つは言葉に関して、向こう非常に言語が色々あるんですけども、それを全部耳で聞いてすぐに理解が出来るというか。その二通りの意味があります」

藤平「二通りの意味があるということですね。あと暗闇で一緒にいて、目の良さですか、その一例をちょっとあげてみて下さい」

大野「向こうは電気も何もありませんから、真っ暗闇なんですけど、そんな中でも歩いていると、見えるというか。黒人の人なので色が黒いので、夜なんか歩いていると、私たちが全然わからないんですけども、あそこに誰々がいる、とか」

藤平「ちゃんと名前と一致するわけですね。それで音については…」

大野「音については…車は少ないんですけども、私たちが聞こえない音でも、遠くから車がきたっていう、まずその車の音がわかって、でそのあとに、あれはどこの車だと、ちゃんと車種がわかる、メーカーの音を聞き分け

る。」

藤平「それはたまたま一人や二人の人じゃなくて、だいたいの人がそういう能力あるんですね。」

大野「そうですね。」

藤平「能力というか、それが普通なわけですね。彼らには。すごいですね。…いろいろそういう人間の能力についての体験と、UFOらしき物を見てるんですが、UFOとはどういうものだと思いますか。率直にお願いします。」

大野「やっぱり、地球の外から、宇宙から…何らかの、何というんでしょうか、異星人とでもいうんでしょうか…が乗ってる乗り物というか、やっぱり未確認飛行物体というのは、そのままそういう風に思いますけど。」

藤平「何しに来てるんでしょうかね。なんで、比佐代さんの前に、こんなすごい形の姿を見せたんですかね。このプリンみたいな…どう思いますか?」

大野「何か、その存在をアピールするのかなっていう…自分たちがいるよ、来ているよ、ということをアピールしたのかな、と思いますけど。今まで興味はありましたけど、実際に見たことはなかったんで、そういう人たちの前に現われるのかな、と…」

藤平「…ということは興味のある?…」

大野「そうですね。ま、ある程度信じてる人たちとか。」

藤平「ああなるほどね。こちらは、一万くらいの人が見た、ちょっと判らない現象ですよ。天体のね。こちらは個人で見た、一人だけ飛行機の窓から見た、ハッキリとした金属的な、UFOっていうんですかね。この二つ対照的なんですけど、非常に貴重な体験だと思います。何かの参考になればと思います。どうも本日はありがとうございます。」



The Japan Times

'All the News Without Fear or Favor'

ISSN 0244-4806 © The Japan Times, Ltd. 1985 FRIDAY, APRIL 19, 1985

Japanese Probing 'Manna From UFO' in Sudan

KHARTOUM (UPI) — Food aid for refugees in Africa is delivered in many different ways, by pack animal, truck, airplane and helicopter but a Japanese research team has arrived in Sudan to investigate a more bizzare method — by flying saucer.

The nine-man team headed by Kozo Kawai, an engineer from Tokyo, arrived Wednesday in search of a group of refugees they claim were actually fed by a flying saucer as they walked across the border into Sudan last Christmas Eve.

The group is being assisted by the U.N. High Commission for Refugees office in Khartoum.

The team represents the Tokyo-based special UFO (unidentified flying object) research corps, a group of amateur and professional UFO watchers.

The search, dubbed Project Cherry Blossom, already has taken the team to Ethiopia in search of the refugees who supposedly had a close encounter of the first kind while trekking across the desert.

The Japanese loaded up their rented Land Rover and left for the eastern Sudanese towns of Kassala and Gadaref Thursday.

"It will be hard work to track these people down but we must go to the camps to find these people," said team spokesman Koji Kimura, a student from Tokyo.

"We have no idea where to find them but we must try," he said.

According to the group, about 5,000 refugees were on the brink of starvation when a UFO appeared in the night, opened its cargo doors and dumped bread on them.

Kimura said reports reaching Japan about the incident have ruled out that the Christmas Eve food drop was done by helicopter or any other known craft.

"It was not an ordinary food drop because we understand from our sources the food floated down. It defied gravity," Kimura said.

He said the food was probably manna, which according to the Bible was bread which came down from heaven to feed starving Israelites as they crossed the desert.

"That is exactly it," Kimura said.

The group has made similar UFO hunts in Madagascar, Australia, Bolivia and India but Kimura said this was the first reported mercy mission by a flying saucer.



■1985年4月20日夜エチオピア難民救済調査行で難民キャンプ「ワドカオリ」に到着。キャンプの小屋で一泊した翌21日、84年12月にキャンプ入りしたチグレ族を訪れる。車から降りると、ワツと子供達が取り囲んで、一人一人手を差し出して握手を求めた。



■降り高きチグレ族の間では「UFOのことはよく知っている」という反応が返ってきた。しかし、問題の物資投下に関する情報ではなかった。当事者と考えられるチグレ族の婦人は、我々の質問に対して首を振った。UFOが難民に物資を投下したか否かの問題は、一応これで決着した。 撮影:天宮 清

■下の英字新聞記事と写真は編者の体験から

■1984年12月、エチオピア難民がスーダン国境付近で上空に飛来したUFOから物資の降下を受けた、というニュー

スを確認するため、1985年3月、エチオピア難民救済調査隊が現地を訪れた。この時に取材を受けた記事。

MEXICO テオティワカン紀行

太陽が生まれ、天と地が出会い、人々が神になった場所

神原二美

1997年、12月27日。エジプト・ギザ台地。冷たい朝霧の霧の中、私と妹は三大ピラミッドを目の当たりにして、その偉業が現在の我々の技術を圧倒的に凌ぐものであることを実感した。

今時、この三大ピラミッドが「王の墓だった」とか「クフ王が造ったにちがいない」と断定する人もいないだろうが、それにしても、いったい誰が何の目的で建造したのか、諸説紛々、謎に満ちたままである。

折しも「ルクソール・テロ事件」の直後とあって、早朝の大ピラミッドは人もまばらで、王の間では20分以上、妹と二人きりになった。ピラミッド貸し切り状態で、とても贅沢な見学ができたのだが、不幸な事件ただけに、素直に「空いて良かった」とも思えず、少々複雑な思いであった。

宿泊先はピラミッドが眼前に迫るような近さで見渡せる「メナハウス・オベロイ・ホテル」。ここでも事件のあおりを受けて閑古鳥が鳴いている。そのせいかどうかピラミッド真正面の素晴らしい部屋に泊まることができた。

部屋の窓からはちょうど大ピラミッド北側の出入り口が見える。ひがな一日、飽きもせずピラミッドを見ていて思い出したのは、ロバート・ボーヴァル/エイドリアン・ギルバートが書いた「オリオン・ミステリー/NHK出版」の内容だ。その中では「ギザのピラミッドの配置と大きさが、オリオン座の三ツ星に一致する」という指摘がなされていた。

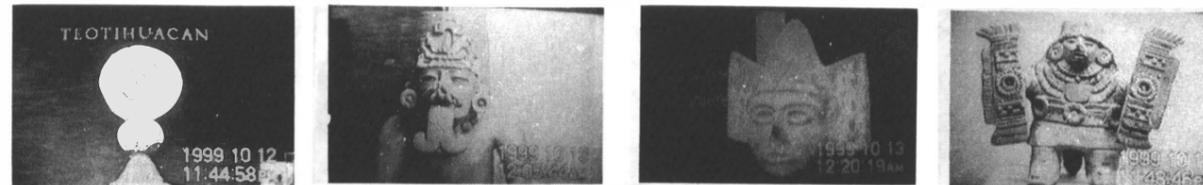
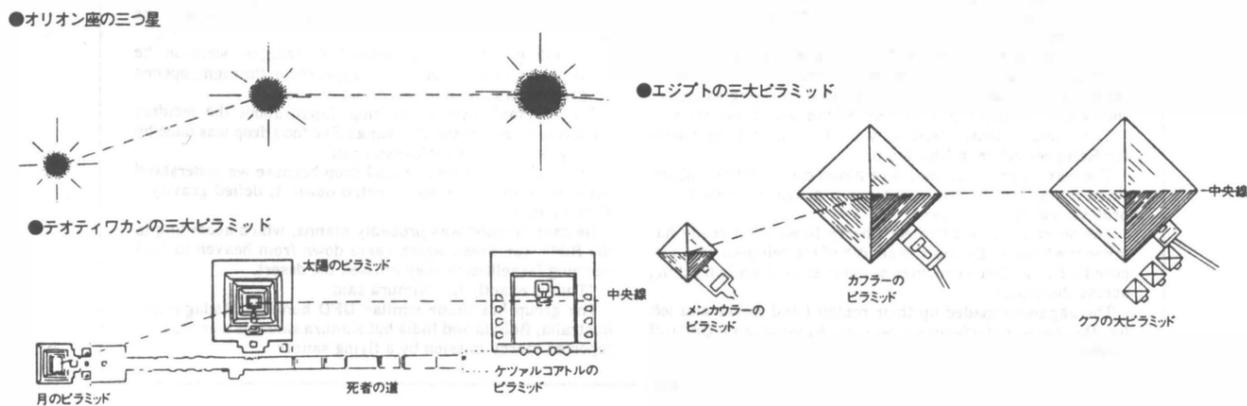
そう考えながら実際に自分の目でみると、なるほど、天の縮図を地上に見ているかのような気分である。このギザ台地にそびえる建造物だけが天の縮図なのだろうか・・・いや、きっと他にもあるにちがいない・・・そんなことをしきりに考えていた。

そして帰国後、ギルバートとモーリス・コットレル共著「マヤの予言/凱風社」という本から、オリオン座やシリウスが古代エジプト人に対して果たしていたのと似たような役割を、中央アメリカの先住民に対してはプレアデス星団が担っているらしい・・・との情報を得た。

やはり、ここでも天空と地上が結びついている！ そうと知って、すでに私はメキシコ行きを考えていた。エジプトへの旅が、もしかしたらテオティワカンへの旅の始まりだったのかもしれない。

もうひとつ決定的だったのが、クリス・モートンとセリ・ルイーズ・トマス共著・南山宏氏監訳「謎のクリスタル・スカル/徳間書店」という本との出会いだった。

なんと、この本によると「テオティワカンのピラミッドの大きさや位置関係は、ギザの三大ピラミッドとぴったり重なる。上空からこの二組のピラミッドを見下ろすと、ギザのピラミッドが中央線に対し45度の角度で並んでいるのに対し、テオティワカンのピラミッドは直角に並んでいて、これらのピラミッドの配置図をおなじ縮尺で描いて重ね合わせると、大きさも三つの頂点もほぼぴったり重なる。」という。



そして、(俗に言う)クフのピラミッド同様にテオティワカンの太陽のピラミッドにも数学的暗号が隠されているらしい。

つまり、基底部の周囲の長さや高さとの関係にパイ(π)が使われており、古代テオティワカンにおいても、直径から円周を出す計算法や、ひいてはヨーロッパ人より数千年も以前に、地球が丸いということを知っていた可能性があるというのだ。

また、ハンコック著「神々の指紋」で指摘されているとおり、春分と秋分の真昼に、太陽のピラミッドでは西面の最下段にまっすぐな影ができるが、この影がきっかり正午に66.6秒間、消える。古代人はこのようにして、春分と秋分の正午を正確にチェックしていたらしい。

私の頭の中では「ギザ」と「テオティワカン」のピラミッドが重なり合っ、ぐるぐる回り始めていた。

ご存知のように、世界の神話や伝承にはいくつもの共通点が隠されている。たとえば、マヤの諸神の中で重要な神「サムナ」は「羽毛の蛇」として知られるのちのケツァルコアトル・ククルカンの原型であるが、ここで気になるのは、この羽毛の蛇という存在だ。

エデンの園に出てくる「蛇」、シュメールのエア神やエジプトのプタハ神・トート神、そしてマヤに伝わる「羽毛の蛇」。

どれをとっても、当時の人類に知恵と文明を授けた存在であり、一様に「蛇」がシンボルとなっている。グラハム・ハンコック氏やゼカリヤ・シッチン氏でなくとも、ここまで世界中に共通するイメージがあれば、そのつながりを無視できるものではない。

そして、これらの存在こそが後世に残るピラミッドやジググラトの建造者なのではないか・・・との見方も多くある。

「すばる(プレアデス)とオリオンを造り 闇を朝に変え 昼を暗い夜にし 海の水を呼び集めて 地の表に注がれる方。 その御名は主。」(アモス書5-8)

古代において「主」と呼ばれた彼等が、地球上の存在だったのか地球外の知的生命体だったのか、確証があるわけではないが、現在の人類以上に高度な文明を花咲かせた存在がいたことは事実のようである。私はむしろ中央アメリカの遺跡も自分の肌で感じてみたくなった。

・・・というわけで、まずはメキシコ、それもメキシコシティから車で小一時間で行けるテオティワカンに的を絞り、計画を建てた。

せっかく地球の反対側まで出かけるのだから、本当なら、ゆっくり時間をかけて中央アメリカをくまなくまわりたいところである。・・・が、中1と小5の子供を持つ身であり、一応、主婦としては、主人の理解と協力を得られる程度の日程に押さえる必要がある。

旅程は10月11日から16日までの4泊6日と決定。現地到着が夕刻、出発も早朝なので、正味中3日間の強行スケジュールとなった。

必ず訪れたいのは、テオティワカン遺跡、パチカン公認の「聖母マリアの奇跡」が起きたとされるグアダルーベ寺院、国立人類学博物館、テンプロマヨール、などなど。時間がないうちに少々欲張りかもしれないが、どれも捨てがたく、なんとかがんばって回るしかない。

最近では、メキシコシティの治安がかなり悪化し、つい先日にも麻薬がらみの銃撃戦が町中であり、多数の死傷者が出た。

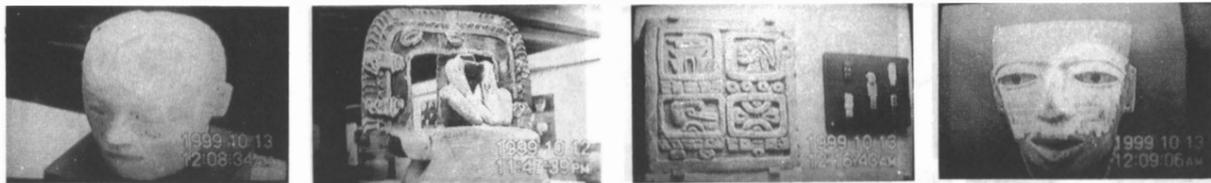
下調べを兼ねて事前に読んだ植田麻美子著「メキシコ万華鏡」によると、空港の白タクはもとより、夜間のリブレ(タクシー)利用は「御法度」だそうで、タクシー発車後すぐに複数の男達が乗り込んで強盗を働くという。どうもドライバーがグルなのである。

日本の商社駐在員はメキシコシティでのタクシー利用を禁止されているところもあるという。かと言って、地下鉄やバスが安全かという、そうでもないらしい。すり、ちかんは言うに及ばず、空港から地下鉄で市内に向かった男性が身ぐるみ剥がれたなどということもあるようだ。

地元の人々でも公共の乗り物は極力避けているとのこと。中流以上の人達は圧倒的に自家用車で移動する。(それがまたあの悪名高いスモッグを増やしているのだが)

また、余談ではあるが、メキシコシティでは子供の誘拐も頻発しており、これまた中流以上の家庭では子供を外で遊ばせるなんてことはしないそうである。

金持ちであれば、会員制のスポーツクラブで運動させたり、そうでなくとも家の中の廊下で三輪車やスケボーをして遊んでいるような・・・。(これではお金持ちになればなるほど「檻の中」に住む羽目になってしまうぞ。)もちろん、上流家庭になればプール付き・テニスコート付きはあたりまえで、お散歩だって自分の家の敷地内で済んでしまうのだが。



中南米諸国に見られるこの階級社会・貧富の差は、我々日本人にはなかなか理解するのがむづかしい。97年のエジプト・ドバイ（アラブ首長国連合）旅行に続き、去年インドへ行った時も、やはりメキシコと似たような階級社会を目にしたし、逆に言えば一旅行者である私も、東洋人として、日本人として、行く先々、ステータスに合った行動を要求される。

日本にいと、単一民族のぬるま湯にひたっていて、あまり深く考えることはないけれど、私たちから見ると考えられないような貧富の差や階級の違い、理不尽な扱いやら嘘八百が、当たり前のように目につく。微妙な事情のわからない海外では、いろいろな意味で緊張感を持って行動すべきなのだろう。

というわけで、とにかく、今回は安全を最優先させた。宿泊先も治安の良い高級住宅地に近いチャプルペテック公園にある日航ホテル（JALマイレージバンクの会員割引で、かなり割引してもらったが、それでも、高い。しかし、治安と地震対策を考慮して、奮発することにした。なにせメキシコは地震が多く、先日も南部オアハカで大きなのがあったばかりだから。老舗ホテルや街のプチホテルもいいのだが、どうも耐震構造になっていないので不安が残る。）に決定。そして、テオティワカン・グアダルペ寺院+市内観光付きの個人向けツアーを予約した。

あとは、お天気が良いように、天に祈るだけである。出発直前の10月6日前後、中南米は大洪水にみまわれていた。メキシコでもタバスコ、プエブラなど9つの州に非常事態宣言が出されていた。過去40年中、最悪の大洪水だとのこと。マヤの予言によると、1999年4月21日から2000年4月20日の一年を支配するのは「雨と風の神」だという（三宅裕司プロデュース 大沢直行著/マヤ 聖なる予言）。そう言えば、今年の夏は日本でも集中豪雨が多く、中州に取り残されたキャンプ客が死亡したり高潮による被害が出たりした。7月20日の東京の雷雨も前代未聞だったし、都庁に雷が落ちたんです。これ以上、大荒れになりませんように。マヤの神様、おねがいますよ。

10月11日（月）

JAL012便（バンクーバー経由）にて夕刻メキシコシティ到着。ホテルへ直行。

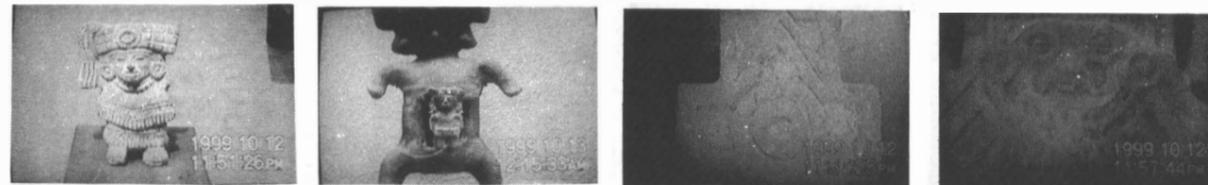
メキシコと聞いて皆さんが思い浮かべるのは、きっと、「あの」映像でしょう。そう、1997年8月6日午後4時20分頃、トーマス・デル・チャミサルビルの背後を、白昼堂々、ゆらゆらと飛ぶ「あの」飛行物体の映像のことだ。私も、インターネットやTVで見て、びっくりした。あのビデオ映像が本物か偽物かは別としても、同時に地元の多くの人達が目撃証言していることはまちがいない。

今年も、メキシコのモンテレーで、7月、朝のお天気ニュースを生で放映中、カメラが未確認飛行物体を捕らえて大騒ぎになったという事件がある。すごいのは、その後、天気予報そっちのけで飛行物体にフォーカスして放送し続けたということだ。やってくれるじゃありませんか。とにかくメキシコシティは謎の飛行物体が出没するメッカなのである。

10月12日（火）

丸一日を国立人類学博物館見学にあてる。日航ホテルからはレフォルマ通りを歩いてわずか7~8分、あの悪名高いタクシーを使わずに行けるのがうれしい。ペドロ・ラミレス・バスケスの設計により、1964年に完成したこの博物館は、建物の総面積だけでも4万平方メートル以上ある。世界有数の規模と内容を誇るだけあって、とても一日ではまわりきれそうにないが、滞在日数に限りもあるので効率よく見学するしかない。ビデオの持ち込みには30ペソ（約300円弱）ほど料金がかかるが、エジプトではこの10倍近い値段をとられたのでそれに比べれば安い方である。

一階のメインフロアが考古学関係、二階が民族学関係に分かれており、主なものを一通り駆け足で見ても、軽く半日はかかってしまいそうだ。だが、なんとと言ってもパレンケの王墓やメキシコ各地からの発掘品など、遺跡のある現地では見ることのできない貴重な品々も多く陳列されており、縮小された模型も多数あるので遺跡全体がとてもよく把握できるのでありがたい。長い年月により崩壊寸前だったものも修復されているし、当時の色や姿を忠実に再現したレプリカもすば



らしく、その労力と地道な作業には、ただただ感謝するばかりである。一階フロアはイントロダクションの第1室から始まって、各文明ごとに部屋が分かれていて、とても見やすい。中でも力を入れてまわったのは、テオティワカン室・トルテカ室・オアハカ室・メキシコ湾室・マヤ室などである。・・・が、残念なことに、一番の目玉である「太陽の石/アステカ・カレンダー」があるメシカ=アステカ室は現在工事中で、閉鎖されていた。なんとか太陽の石だけでも見たいのだが・・・

とにかく、その膨大な量と質の高さには圧倒されてしまう。すべてが記録に残したくなるような品々で、ビデオとカメラの両方で撮ったが、そのうち持っている手や肩が痛くなってしまったほど、どれもこれも素晴らしい品のオンパレードであった。

10月13日（水）

「市内観光」

午前9時。日航ホテル・ロビーにて集合。市内発のツアーで、いざ、市内観光とテオティワカンへ出発。ツアーは日本に本社のある「メキシコ観光」にお願いした。この日の参加者は私の他に1名、毎日新聞ニューヨーク特派員の仕事を終え、日本に帰国途上メキシコへ足をのばしたというK氏と一緒することになった。

まずは市内観光。市の中心ソカロ（中央広場/正式名は憲法広場）は、かつてアステカの大神殿が建ち並ぶ政治・宗教の中心地であったが、16世紀のコルテス征服後、すべては破壊され、埋め立てられ、その上に今のメキシコシティがある。この周辺にはスペイン統治時代の壮麗なコロニアル建築が残っており、カテドラル（メキシコの教会を統括する大教会・ラテンアメリカ最大の教会建築でなんと250年もの歳月が費やされた）や、国立宮殿がある。国立宮殿は、現在、右側が大統領執務室・左側が大蔵省として使われている。そのせいで警備も厳重だが、中庭に面した2階回廊にあるディエゴ・デ・リベラ作の大壁画は入って見ることができる。

リベラの最高傑作と言われるこの壁画は、アステカからメキシコ革命までの歴史が描かれており、特に興味深かったのは、ケツァルコアトル神が戦いに負けてこの地を去るときに乗った飛行物体が、蛇を象徴として描かれていることだ。ご存知かと思うが、ラ・ベンタ出土のレリーフにも、やはり蛇の形をした飛行物体状のものに座って、遠く離れたシュメールの神々が持つのと同じ制御装置のようなバスケットを手にした人物が彫られている。左手はあたかも操縦桿を握っているようだし、あたまにかぶっているのはマイクのついたヘルメットのようにも見える。奇妙な一致であるが、かつては蛇が何かの飛行物体を表していた可能性もあるのではないだろうか。

そう言えば、博物館ではまさにヘルメットを被り、ゴーグルをつけた宇宙飛行士がスーツを着ているような像が沢山あった。あれだけリアルに造られているのだから、きっとモデルがいたにちがいない。

ところで、この重厚華麗なコロニアル建造物だが、実は、ひどく傾いているのである。この一帯はアステカの都だったころ湖に浮かぶ都市だったのだが、それを埋め立てたせいか、徐々に地盤沈下が進んでいるらしい。ソカロの石畳にしても、宮殿の回廊にしても、とにかく、斜めなのだ。まっすぐ歩いているつもりでも、おもわず斜めに進んでしまうくらい、沈下しているのが実感できる。カテドラルにしても、内部は張り巡らされた鉄骨で支えられており、建物は息も絶え絶え、かろうじて建っている様である。もしや、これはアステカの怨念か・・・と思うと、背筋が寒くなってしまふ。

そのカテドラルのすぐ横には、テンプロマヨールとよばれるアステカ帝国の都テノチティトランの中央神





殿跡がある。

1913年、ビル工事中に、たまたま遺跡の一部らしき地下へ続く階段が発見され、1979年には水道工事中に8トンもの石版が発見されたから、さあ大変。その石版はアステカ神話の月の神コヨルシヤウキの像で、それをきっかけに本格的な発掘がはじまったのだそう。1984年には発掘が完了し、一般公開されるに至った。遺跡の一角には水に浮かぶかつての都テノチティトランの復元模型が設置されており、今では鳩のかっこうの水飲み場になっている。大小数々の神殿が、今もソカロ周辺に埋没していると聞くと、やはり征服されたアステカの怨念がスペイン征服後の都市を呑み込もうとしているかのようで、不気味である。

「グアダルーペ寺院」

次の目的地は、ローマ法王庁により3大奇跡のひとつとして公認されているグアダルーペ寺院だ。祀られている聖母はメキシコの国家的シンボルだそうで、異色なのは、その聖母が黒い髪と褐色の肌を持っていることである。

スペイン人によりアステカが征服されてから10年後の1531年、12月9日、テペヤックの丘で先住民ファン・ディエゴの前に聖母が現れ、「司祭のもとに行き、ここに教会を建てるよう伝えなさい」と言った。しかし、スペイン人司祭にはその話を信じてもらえず、落胆しているとまたもや聖母が現れ、12月には咲くはずのないバラを証拠に持たした。ディエゴがそのバラを自分の粗末なマントに包み、再度、司祭のもとに戻りマントを広げたところ、金色の光とともにマントに褐色の聖母像が浮かび上がったのだという。現在では、この丘の上の小さな教会堂と、新旧2つのりっぱな教会が建ち並び、ラテンアメリカ各地からの巡礼者でにぎわっている。



一般にはグアダルーペとよばれているが、先住民の間では「トナンツィン」と呼ばれ、親しまれているそうだ。このトナンツィンはアステカの女神で、ナワトル語で「神々の母」という意味である。そして、聖母が出現したテペヤックの丘には、かつてトナンツィンの神殿があったと言う。「神の子イエスの母」である聖母と「神々の母」であるトナンツィン。ここでは先住民の女神が西欧の聖母信仰と重なって生き残っているようである。だからこそ、褐色の聖母が現れたのではないだろうか。

聖母の浮かび出したマントは科学的分析もされているそうだが、不思議なのは、まず、保存処置もされず、400年以上もの年月を経ているにもかかわらず、竜舌蘭の繊維で織られたマントは今なおきれいなまま残っているということだ。聖母の浮かび出したマントは、もちろん今でも額に入れられ、大聖堂に飾られている。何より驚いたのは、絵に使われた染料が、植物性、動物性、鉱物生のいずれでもなく、地球上には存在しない成分で出来ているということだ。



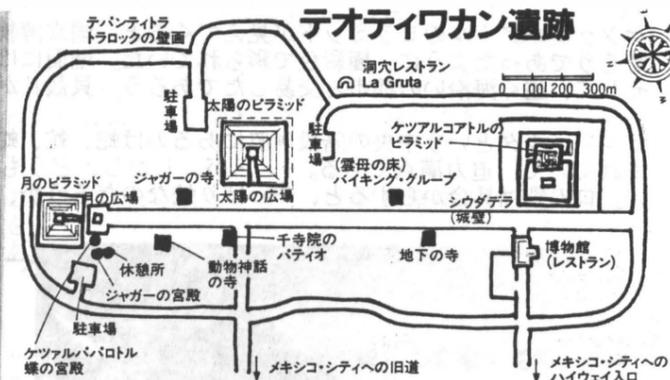
また、竜舌蘭のような荒い繊維のマントなのに、染料が裏まで染み込んでおらず、おまけに聖母の瞳には聖母がマントに現れたとき近くにいた、ディエゴ・マスカラ司祭・通訳の3人が焼き付いて写っているという。まさに、奇跡、不思議である。それ以来、聖母の出現があったのかどうか・・・どちらにしても、聖母はかつての敵・味方を問わず、人々を見守っていてくれるような気がする。聖母はアステカの末裔にとっても、西欧の人々にとっても、そしてきっと神々にとってさえも「母」なのだから。

「テオティワカン」

メキシカン・ランチの後、いよいよテオティワカンの遺跡に向かう。メキシコシティから北東へ約50km。幅広の高速道路を快調に飛ばす。周りに広がる小高い山々には、未だに水道も通っていない手作りの煉瓦の家々が、びっしりだ。スラムは、日に日にシティを中心にひろがっているようだ。貧しい人々の多くは、やはり先住民族なのだという。その彼等が守ってきたテオティワカンとは、いったいどれほどのものなのだろうか。

月のピラミッドから

↓ 太陽のピラミッドと死者の道を望む。



テオティワカンとはアステカ族がナワトル語でつけた名で、「人が神に変わる場所」という意味だそうだ。当時は王が死後神になる所と考えられ、ピラミッドも墳墓とされていたようだが、実際には墳墓というより祭礼センターの役割があったらしい。遠く離れたエジプトでも、ファラオが死後神々の仲間入りすべく様々な儀式が執り行われたことを考えると、たしかに共通点がある。

考古学者達によると、現在の姿のテオティワカンが建設されたのは西暦150~300年の間と推定されているが、発掘作業で確認されたところ、遺跡全体は紀元前2000年にはすでにかなりの広さがあり、最盛期とされる5世紀には20平方キロメートルほどの面積に10万人とも15万人ともいわれる人々が住んでいたそうだ。

我々が現在目にしている姿は、実は比較的新しいアステカ時代のもので、その下にはもっと古い基礎があるというわけだ。テオティワカンの名もアステカがつけた名だ。

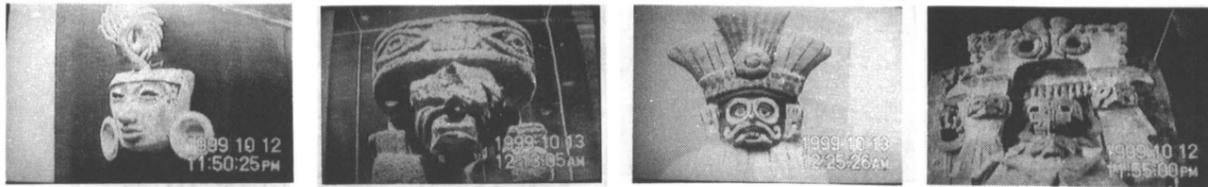
礎を造った人々は、実際にはここをなんと呼んでいたのだろうか・・・。礎を造った人々は、もしかしたら、遺跡に暗号のように隠された遠い星からやってきたのだろうか。

それとも、次元を越えて地球の物理次元に現れた存在だったのだろうか・・・。中にはアトランティスの末裔がたどりついた・・・という説もあるが・・・真相やいかに、である。

近年、テオティワカン地図作製計画メンバーは太陽のピラミッドの南の岩に刻まれた、2つの同心円に刻まれた十字架の形を発見。どうも標識らしい。同じような標識が西2マイルにある山腹でも発見されたそうだ。

この2つの標識を結ぶ視線は正確に東西の軸線の方位を指している。離れた地点の間にまっすぐな線を引く方法を、彼等は知っていたにちがいない。(詳細はゼカリヤ・シッチン著「失われた王国」/徳間書店第3章参照)

また、広範囲にわたる地下洞窟も発見されており、どうやらこの洞窟から掘り出した土や石を使ってピラミッドが建造されたもようである。月のピラミッドと太陽のピラミッドの間には、地下通路があることもわかっているらしいが、いずれにしても、地下の発掘調査には膨大な労力と時間がかかりそうだ。とにかく、スケールが大きいのだ。



ガイドの古川さんによると、つい数日前には月の神殿で調査している日本のチームが、なんとジャガーの骨を発見したそう。数ヶ月前には人骨も発掘されており、詳しい発表が待ち遠しい。

まずは、シウダデラ（城砦）に向かう途中、ガイドさんの説明通り、広場中央にある神殿の階段に向かって立ち、手をたたくと、キュン、キュンという反響音が帰ってくる。パン、とはたくと、キュンツという具合だ。この反響音、ケツアル鳥の鳴き声に似ているとも言われているが、同行のK氏も、「あれ一つ、不思議だなぁ、階段の前でない、だめですわねえ」などと言って、あちこち移動しては音の跳ね返り具合を試している。みんな、知らぬうちに「拍手」を打たされているようなものだ。古代の建造者達は、当然、こういう効果も考慮していたにちがいない。音と数は、それぞれ対応する・・・とも言われているが、いったいどんな意味があるのだろう。

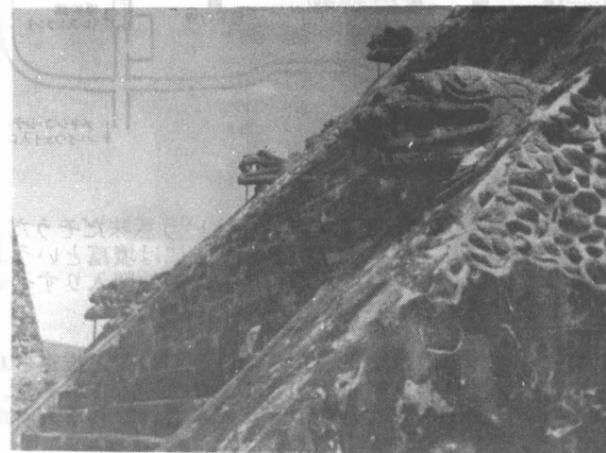
さんざん拍手を打たされたあとで、シウダデラ（城砦）に入った。

この頃からだろうか、大風が吹き始めていた。午前中はどんよりと垂れ込めた空から、今にも雨が落ちてきそうだったが、テオティワカンに着く頃には、晴れ間が広がり、それと同時に煽られるような強風が吹いてきた。風の音が、なにやら古代のインディオ達の吹く法螺貝の音を運んできそうである。風は冷たいが、時折差し込む日差しは高地だけあって非常に強い。ビデオを持つ手がジリジリと焼かれる。

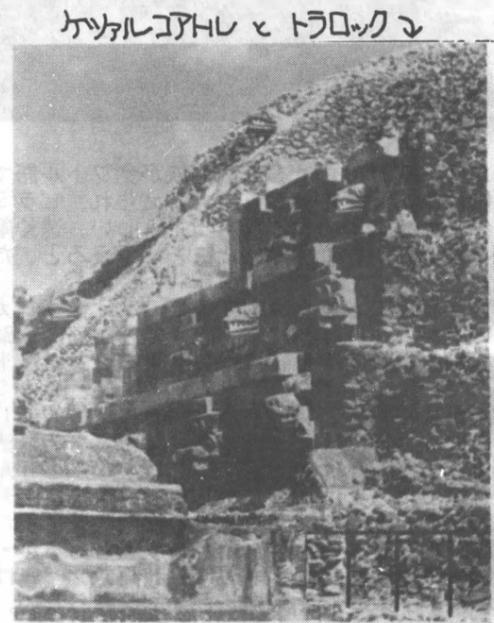
「ケツアルコアトルのピラミッド」

ケツアルコアトルのピラミッドが見えてくると、国立博物館に復元された姿が目に浮かんだ。それは、当時そうであったように、極彩色で彩られていた。壁面には、雨の神トラロックと蛇/ケツアルコアトル、そして、遠く海沿いの都市と交易したであろう「貝殻」が彫られていて、とても美しい。

アルファルダという中央の階段両脇にあるのは蛇、蛇、蛇の頭。蛇の目には、黒光りする黒曜石がはめ込まれていて、迫力満点である。・・・が、しかし、どうも私にはこれらの蛇が獅子頭に見えてしょうがない。口の裂け具合からすると、やっぱり蛇なのだろうが、お顔のほうは、どちらかというとな獅子である。



←アルファルダ脇の蛇



3つのピラミッドのうちでは一番小さいが、月と太陽のピラミッドにはない、華やかな装飾に彩られており、ギザのピラミッドの一番小さいものと同様、このケツアルコアトルのピラミッドも、オリオンの三ツ星のミンタカのように、ひとつだけ位置が少しずれている。位置関係からすれば、同じ設計者がデザインしたとしか思えないほど似通っている。

ここ、端のケツアルコアトルのピラミッドから月のピラミッドまで歩いたら2km以上ありそう。それだけで空気の薄い高地では息切れしそう。とてもピラミッドの頂上目指す元気は残っていないだろう。

実は、メキシコシティに到着してからというもの、どんなに寝不足で疲れていても、夜、眠りが浅い。いったんは寝入るものの、2時間もすると、息苦しさで目が覚めてしまう。普段は泥のように眠りこける私としては、めずらしいことである。



「きっと興奮しているんだろう」とか「時差ボケさ」・・・などと思ってみたものの、とにかく数時間おきに目が覚めて、しかも身体の中で何かが暴れ回っているような感じがする。夜中に、身体の中でエネルギーが運動会をしているようで、体むどころの騒ぎではない。これには、まいってしまった。ガイドさんやK氏、他、現地駐在の商社マンの方達に話を聞いてみると、これはやはり軽い高山病のようで、私だけに限ったことではなかったのである。皆、一緒に「眠れない」「頭痛がする」「疲れる」「落ち着かない」と言うのである。商社マン氏いわく、「出張でロサンゼルスなんかに行く奴がいると、みんな羨ましがるんですよ、いいなあ、あいつは下で寝られて・・・って。ここは標高2000m以上ですから、やっぱり平地で育った者にはきついんですよ。みんな万年寝不足気味でね。やっぱり下はいいですよ。」と語っていた。

そうか、そうだったのか・・・自分だけ調子がおかしいのかと思っていたので、話を聞いて安心したが、それにしてもあの夜中の状態は尋常ではない。鈍感な私が「何かいつもとちがう」と感じるほどのだ。

自慢ではないが、私は鈍感そのもの、超常体験などとは全くご縁がなかったのに、どうやらこれは本で読んだ「クダリーニの上昇」のような症状である。思い当たるのは、数ヶ月前に見た夢だ。大きな生命の樹に、大蛇がものすごい勢いで登っていく夢を見たのだ。その時は「ああ、夢か」で終わってしまったのだが、ここへ来て、夜中にベッドにすわって鬱々としている時、急にその夢を思い出してしまった。ははーん、あの夢は「そろそろだぞ」という予告だったのか、そうでなかったのか・・・？ 一般的には、だれしも40歳前後でクダリーニの上昇は経験すると聞いている。それが、覚醒にむすびつくつかつかないかは、個人個人でちがうようだ。私もきっちり40歳であるから、きっとひとつの節目には来ているのだろう。単にストレスがたまっているのかもしれないし、少々早めの更年期なのかもしれない。思い過ごしなのかもしれないが、やはりエネルギーの質が少し変わったような感じである。もう少し、様子を見てみるしかないだろう。

それはさておき、パワーの配分も考えると、ここから月のピラミッドまでの移動は車でしたほうがよさそう。こんな時は、つくづく若い時に遺跡巡りしておくんだと悔やんでしまう。そういえば、ギザのピラミッドの上昇通路もきつかった。翌朝、あちこちが筋肉痛になった覚えがある。

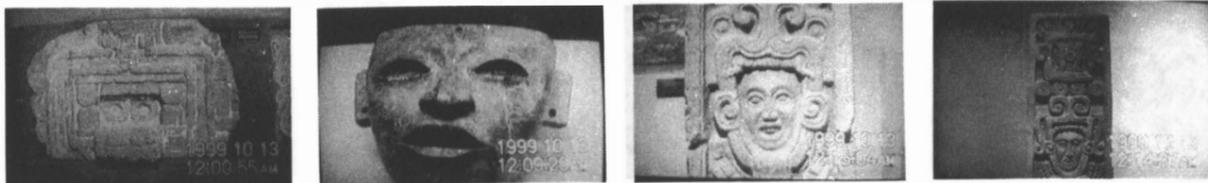
「月のピラミッド」

月のピラミッドの駐車場で車を降りて、まずはケツアルパパロトル（ケツアル蝶）の宮殿を見学。遺跡の中でも、一番完全に近い修復がされたところだ。かつて神官達の住居であったとされる建物には、雨水を貯める貯水槽があったり、サウナがあったり、となかなかゴージャスな生活が想像できる。しかし、生け贄も死の間際にここのサウナを使ったというから、我々の死生観からは、ちょっと想像しにくいものもある。その南西にあるジャガーの神殿には半地下があり、まわりには3つの部屋がある。各部屋には「羽毛のジャガーが法螺貝を吹く絵」などが描かれており、オリジナルの色彩も多く残っていて、素晴らしい。

月の広場に立ってピラミッドを見上げると、足がすくんでしまう。思っていたより、はるかに急勾配だ。看板には「ピラミッドに登るのは、危険です」なんて書いてある。そのくせ、しっかり階段中央に手すりが設けられている。つまり、十分気をつけて登りなさい、ということか。ガイドさんによると、太陽のピラミッドの広場には大きな救急車両が待機しているとのこと。年に数人は落ちてけがをするし、時には死人も出るという。「でも、太陽のピラミッドより月のピラミッドのほうが、危ないんですよ」・・・などと脅かされてしまった。

そうこうしている間にも、ラサまで陸路で行った健脚の持ち主K氏（さすがに高山病にかかったそうだが）は、とつと急な階段を登りはじめていた。私も、急がなくては。ビデオに、カメラに、・・・と日本人丸出しで、えっちらおっちら登るのだが、これが、かなりきつい。風はますます強くなり、重い身体もぐらりと煽られる。すぐに息があがってしまって、無様なことこのうえない。まわりでも、みんなが何度も小休止を挟んで慎重に階段を踏みしめている。よく見ると、階段の幅がものすごく狭く、ちょっと間違えば、ずるっと踏み外しそうである。うっかり下を振り返ると、そこにはあるはずの階段が見えるのではなく、かろうじて下へ続く絶壁が見える、そんなかんじだ。それほどきつい勾配なのである。

しかし、そんな苦しさも、昇るにつれて広がり行く景色を見つめたら、どこかへ飛んで行ってしまおう。なんと言っても月のピラミッドの上から眼下にのびる死者の道を望むと、圧巻である。「うわーっ、うわーっ」という言葉が出るばかりだ。今、私はこのピラミッドを建てた人々の目線で、死者の道を見ている。頭上すれすれを雲が走り、太陽がものすごく近い。満月の夜に、ここから月を褒めてみたいものである。



〈月のピラミッド〉

月のピラミッドの高さは太陽のピラミッドより低いのだが、土地そのものの勾配を利用しているので（死者の道の南端と北端では、2.7%の落差があり、ゆるやかに勾配している）、その差が見た目にはわからない。海拔で言えば、太陽のピラミッドと月のピラミッドは、ほぼ同じ高さになる。そう言えば、ギザでも3つのピラミッドのうち真ん中のピラミッドが高台に建っているため、見た目には高さが同じだった。ギザとテオティワカンのピラミッドは、こんなところも奇妙に符合している。ここまで似てくると、双方のピラミッド建造者が同一だったか、もしくは同じような設計図をもとに造られたのは、まちがいないように思えてくる。

大洋をはさんで、これほど離れた2つの地域に、これほど似たピラミッドがあったとは……。そして、もしこれが本当に「天の縮図」だとしたら……。

月のピラミッドを這いつくばるようにして降りたあとは、風の音を聞きながら、太陽のピラミッドまでゆっくり歩いていく。

「太陽のピラミッド」

真正面から見上げた太陽のピラミッドの、なんと気品に満ちた美しさだろう。凜として、輝いている。

頂上部分は平らになっていて、昔は頂上に神殿があったという。おもしろいことに、太陽のピラミッドの階段の最初の段は傾いていて、ピラミッド自体の方位とはずれている。前にお話したとおり、私たちが現在見ているのは、一番最近建造された外側のおおいなのだ。ピラミッドの下には遙か昔に据えられた基礎がある。チチェン・イツァにあるククルカンの神殿も同様におなじ方位を持つ古い建物の上に建っているが、その基礎はかなりの古さになるらしい。そして、この外側の階段部分よりずっと以前にあったであろう基礎を造ったのが誰で、なんのためなのか。謎が謎を呼んで、きりが無い。このへんのことは、グラハム・ハンコック氏が著書「天の鏡」で指摘している。

驚異的な遺跡建造物のその下には、さらに古い「基礎」があるのだ。まるで現在のメキシコシティの下にテノチティトランが眠るように……。そして、これは中南米の遺跡に限ったことではないらしい。たとえば、バイオンで有名なアンコール・トムも。バイオンは階段ピラミッド寺院だが、さらに時代の古い、まだ発掘されていない基壇の上に建っているという。

そしてもうひとつおもしろいことがある。テオティワカンの太陽のピラミッドとギザの大ピラミッドとは、基底部の長さがほぼ同じだということだ。

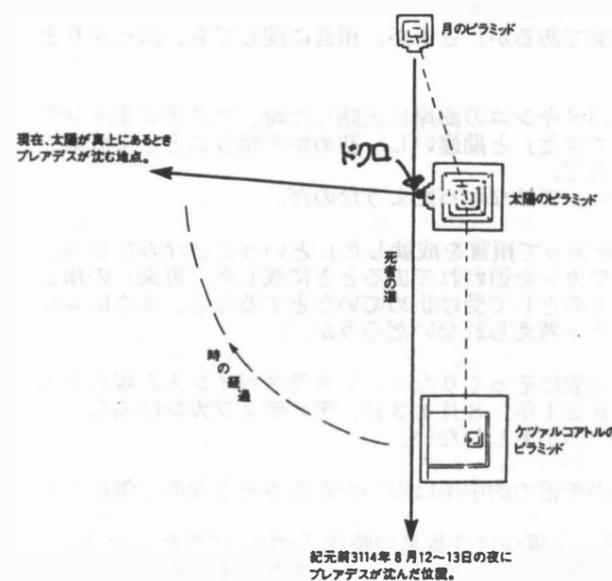
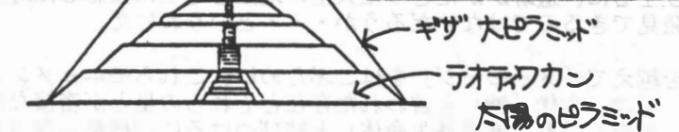
太陽のピラミッドは約745フィートで、ギザのは約754フィート。その差数十センチというところか。図を描いてみると、ちょうどすっぽりギザの大ピラミッドに太陽のピラミッドがおさまるような感じである。

その他、これらのピラミッドには奇妙な一致がたくさん見られている。ピラミッド側面のスロープの角度など、詳細についてはご自身でシッチン氏の本などを読んでいただければよくわかることと思う。

ところで、南北に走る「死者の道」の軸線は正確な「北・南」を指しているわけではなく、南東に15度30分ずれている。当然、それと交わる東西の軸線も同じだけずれている。もちろん、これは計算違いでもなんでもない。古代の人々にとっての「聖なる方位決め」なのである。ここのみならず、トゥーラやその他の祭礼センターでもこの方位に固執しているという。

この方位決めは、テオティワカンで祭礼センターが建設された時、暦の上のある日、ある時に、天体観測をするためのもので、この地域（北緯19.5度のテオティワカン）の観察者の天頂を太陽が通過するその時にあわせて行われたらしい。

前出「天の鏡」によると、「テオティワカンでは1年に2回だけ、5月19日と7月25日の正午に太陽がピラミッドの真上に来る。太陽のピラミッドの西面は、この2つの日に太陽が沈んでいく方向と一致する。西の地平線に太陽が沈む位置を指している。またテオティワカンは牡牛座のプレアデス星団の配置と深い関係があり、それは現在のピラミッドが建てられたと推測されている西暦150年頃、正午に太陽が天頂を通過する日の夜明けに、「ヘリアカルライジング」をする。つまり、夜明け直前、プレアデス星団が真東の空に地平線すれすれに昇ってくるのだ。」という。ハンコック氏が著作の中で紀元前1050年の春分の日、ギザで見られる獅子座のヘリアカルライジングについて書いているのをご存じの方もいることと思う。



☆ 一説によると、死者の道が、テオティワカン建設当時はプレアデスの沈む地点を指していたともいう。ある研究家によると、当時太陽のピラミッド基底部、死者の道に沿った場所で、あるドクロが西の地平線に向いており、その石のドクロは西暦150年頃プレアデスがヘリアカルライジングをする5月19日と9月25日の二日間、プレアデスが地平線に沈む地点を指していたという。

古代テオティワカンの人々は、オリオン同様、プレアデスとも繋がりがあったのかもしれない。

テオティワカンを、太陽のピラミッドを中心とする巨大な時計の文字盤のように見て欲しい。この時計の針である死者の道は、紀元前3114年8月13日（中央アメリカの古代暦において現在の「第5の太陽」が生まれたとされている日）にプレアデスが沈んだであろう地点を指し、一方で、もうひとつの針であるドクロは、現在プレアデスが地平線に沈む地点を指しているのではないだろうか……とも考えられている。ややこしいが、なかなかおもしろい説である。（詳細は「謎のクリスタルスカル」参照）



10500年前の春分のこの日、スフィンクスが見つめる東の地平線には太陽が昇る約1時間ほど前に獅子座が現れる。そして、スフィンクスは獅子座と対峙し、ピラミッドはオリオン座の3つ星を向くことになる。
エジプトでの「獅子座のヘリアカルライジング」が示すのは「ゼプ・テピ」と言われる原初の時の始まりのことらしいのだが、そうすると、この紀元1500年にテオティワカンで見られる「プレアデスのヘリアカルライジング」というのは、何の時の始まりを表すと考えればいいのだろうか・・・。

現在では、コンピューターシミュレーションを使って、簡単にいつの時代の空をも再現できるので、遺跡と星の関係から時代を割り出すことも可能である。
その遺跡が本当にその時、その場所の空と関連があるのかなのか、見極めるのはむづかしいところだが、ようするに、遺跡がかたどった天空の地図を地上に投影した時代をさがせば、きっと何か重要なポイントを発見できるのではないだろうか・・・というわけだ。

時を越えて「メッセージ」をはこぶために、これらモニュメントが建てられた可能性もあるはずだ。もしくは、古代「神」と言われた存在とそれらの星とが密接な関係にあったとは考えられないだろうか。なにがなんでも「地球外生命体」と結びつけるには根拠がなさすぎるが、その可能性を頭から否定するのも、おなしくらい根拠がないように思う。
とにかく、いろいろな角度から検討してみることはとても大切なのではないだろうか。我々の思考の許容範囲を越えるからと言って「否定」してばかりいたのでは、始まらないのだから。どこかの国の学者さんたちも「キトラ古墳の天空図は、きっと当時の制作者が下書きを写し間違えて、ひっくりがえしたもののなのだろう。そうでなければ年代的におかしい。」などとたまわっていないで、天空図そのものの位置をもとにして、考えてみていただきたいものである。でなければ、なんのための「証拠」か・・・ということになってしまうのだから。

「マヤの予言」

先行するものがなく、全くの初めから完成品として出現したという意味では、マヤはシュメールに負けずとも劣らない。
遺跡の話からは少々ずれるが、そんな素晴らしい文明の中で特に気になるのが、複雑かつ正確な暦法と「マヤの予言」であろう。

「予言」にしる「預言」にしる、通常は物事の起こるであろう「日時」ははっきりしないものが圧倒的に多い。ノストラダムスしかり、聖書においても「その日その時は天の父しか知らない」と記されるばかりだ。エドガー・ケイシーのリーディングにしても、おおまかな年がわかるくらいで、あとは推測するしかない。
・・・が、マヤはちがう。
マヤ文明が天文学・数学に秀でていたのは、周知の事実であるが、さすが、預言に関しても、はっきりとした日付を残している。

ところで、1519年3月4日、スペイン人コルテスがメキシコの海岸に上陸した時、アステカ王モンテスマ二世が「預言にあった神ケツァルコアトルが戻ってきた」と勘違いし、初めから戦うことさえ放棄、あっけなくアステカが滅びたという話はあまりにも有名だ。
しかしながら、これはモンテスマ二世の「単なる勘違い」ではなかったようなのだ。
ある意味でこの預言は「大当たり」だったと言える。
なぜなら、「神が自分で手を下さすかわりにコルテス等を使って預言を成就した」ということなのだから。アステカ人が、神がアステカの人々によってテオティワカンを追われて去るときに残した「再来」の預言が成就するというのを、自分たちの滅亡を予告するものとして受け止めていたとするなら、まさにコルテスこそは神がアステカに送った「復讐の使い」だったと考えられないだろうか。

神の再来が「預言」されていたその年、その日、神の容貌にそっくりなコルテス等スペイン人が現れたのは、とても偶然ではすまされないような気がする。1521年、8月13日、テオティワカンは陥落。ケツァルコアトルは、やはり預言どおり、再来していたのかもしれない。

破滅の預言が当たって喜ぶ人はいないだろうが、マヤの予言的中率はなかなか良さそうなので気になることがある。
マヤではこれまでに4つの時代(太陽)が終わりを迎え、今現在は5番目の時代(太陽)に当たるそうだ。その始まりをマヤ暦の「4アハウ8クムク」から西暦になおすと「BC3114年8月13日/もしくは12日」という説もある」となり、その終わりは「4アハウ8カンキン」で、現代の「2012年12月23日/もしくは22日」に「大変動」で破局を迎えるという。



私たちは、その瞬間をたぶん目にする事だろう。
だが、「破局」という意味も受け取り方次第では輝く未来へ転ずることができるのではないだろうか。

今、まさに水瓶座の時代が始まろうとしている。文化によってはこの水瓶座のシンボルのかわりにガルーダやフェニックスなどの「上昇する鳥」の姿を描く場合があるという。
再生する不死鳥のように、我々人類も新たな「時」を再生できるのだろうか。たとえ文字通り破滅があるとしても、その先には新しい何かが生まれてくると信じたい。
そして、何事が起きるにせよ、起きないにせよ、たくさんの人々がカウントダウンの始まった残り十数年を古代史解明の研究に費やすことと思う。一度「謎解き」にはまったら、なかなか抜け出すのは、むづかしいそうである。

「マヤの時間/宇宙論」

マヤに関しては、古代マヤ人が持っていた「時間の宇宙論」を抜きには語れない部分があると思う。
ここで私のような素人がいくらお話ししても要領を得ないだけなので、以下にいくつかの本を推薦させていただこうと思う。

「銀河文化の創造/13の月の暦入門」高橋徹 著 たま出版

「マヤの宇宙プロジェクトと失われた惑星」高橋徹 著 たま出版

「13の暗号」高橋徹 著 ヴォイス

☆高橋徹氏は、太陽系の惑星サイクルとマヤの時間の宇宙論との融合を研究している。数々の著作の他、有名なマヤ研究家ホゼ・アグエイアス氏の本を邦訳。また、マヤの時間科学を論証した「ドリームスベル」と基本ツール「13の月の暦」を日本に紹介している。

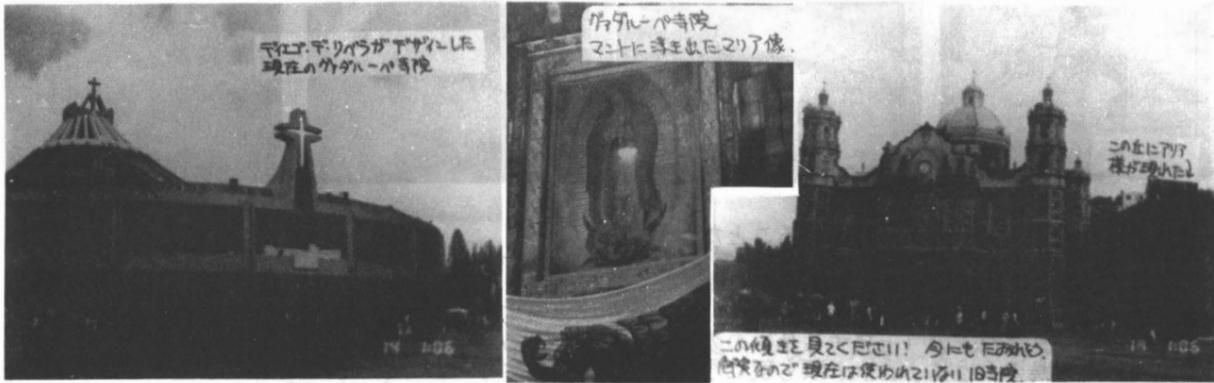
「時空のサーファー」ホゼ・アグエイアス著 小学館

☆アグエイアス氏はメキシコ系アメリカ人として1939年に生まれ、教育者及び教授としてプリンストン大学、カリフォルニア大学デイヴィス校・サンフランシスコ校、などなどを歴任。
1987年8月16日-17日、マヤ暦の調波コードに基づいて地球規模の瞑想と芸術的メディアの催し「ハーモニック・コンバージェンス」を推進したことで有名。マヤ暦の解読完了のため、日々研究を続けている。

10月14日(木)

最終日。前回見られなかった「太陽の石」をあきらめきれず、もう一度博物館を訪れる。
工事中ではあったものの、ビニールシートをめくって、ちょっとだけ覗くことができた。しっかりビデオに収めたのはいいが、まわりの工事の音がギンギンに入ってしまった。そしてもう一カ所、前回時間切れと疲労のためあきらめた「パカル・ヴォタン」の墓を地下に見に行く。この王様、当時の人にしてはかなりの大柄だったらしいが、翡翠の仮面をつけて墓に眠る様子がとてもよく再現されていた。この石棺の蓋のレリーフについては、本当にいろいろな解釈がなされている。謎めいた仮面の下で、パカル・ヴォタンは後世に何を伝えようとしたのだろうか。

いまだに妖気漂うお墓を見たいかどうか、最後の夜はいつにも増してエネルギーが飛び跳ね、落ち着かなかった。高山病なら、ルームサービスに頼んで、ココ茶でも持ってきてもらおうところだが、どうも、そうではなさそうである。やはり、神々の波動が強く残っているパワースポットに浸ったせいで、なにかが目覚めた、そんな感じである。ここはひとつ瞑想でもするか・・・と、窓をあけて空を見上げると、明け方の天高くオリオン座とシリウスが冴え冴えと輝いていた。まったく、心憎い演出ではある。
この星々が巡ってギザのピラミッドの上に現れる時、もしかしたら何かのメッセージを「こちら」から「あちら」へ伝えているのではないかと・・・などと考えてしまう。
慌ただしく、エネルギーがかき混ぜられたような旅だったが、無事に旅を終えられたことを天に感謝し、10月15日、早朝、帰国の途についた。



写真：神原二美

グアダルーペ聖母の奇跡

グアダルーペ寺院(Basilica de Guadalupe)は、メキシコ市のテベヤックの丘のふもとにある。古い旧寺院の隣に建つ新しい大きな円錐形の建物だ。この大聖堂の中の大広間の、ガラス窓の天井に向かう巨大で垂直な中央祭壇の壁に、一枚の「聖母」の絵が掲げられている。緑がかった青地に黄金色の星をちりばめたマントを着、ややうつむいて合掌する姿は「黒い髪と褐色の肌を持つ異色の聖母」といわれている。この絵こそ、毎年世界中から100(万人もの信者を引き付けてきた「グアダルーペの聖母」なのである。この聖母はメキシコの国家的シンボルであり、ただひたすら信仰熱心なメキシコ人、とくに貧しい先住民の人々から圧倒的な支持を得ている。

この聖母の驚くべき特徴とは、それが地球人の画家の手による作品ではないらしいという事である。その奇跡の物語は次のように伝えられている。

…グアダルーペの奇跡は遠く16世紀にさかのぼる。スペイン人によるアステカ帝国征服から10年経った1531年12月9日、一人の57才になる農夫の先住民ファン・ディエゴが、テベヤックの丘(かつてそこにはアステカ人の祭壇があったという)にさしかかった時、「ファニート(ファンの愛称)、どこへ行くの。私の中でいちばん小さく、愛らしい子ファニート」という、やさしい乙女の声が聞こえた。

ディエゴを見ると、光輝く褐色の肌をした聖母が現われていた。彼女はディエゴに「私は神の子の母なる聖母である。この地に私の教会堂を建てよう伝えよ」と言った。

ディエゴはすぐにスペイン人司祭のもとへ走ったが、彼の話は信じてもらえなかった。落胆するディエゴが再びテベヤックの丘を通りかかると、また聖母が現われ、今度はディエゴに証拠の品として色鮮やかなバラの花を与えた。(バラは12月には咲いていないので奇跡の証拠となる。)ディエゴはマントにたくさんのバラを包み、司祭のもとへ再び走った。

ちょうどその頃、ディエゴの伯父が病の床に伏し危篤状態にあり、ディエゴもとても気づかっていた。聖母はディエゴが彼女の使者としてひた走る間にこの伯父の前にも出現し、伯父の病気をたちどころに回復させるという奇跡も行った。

一方、司祭のもとに赴いたディエゴは、神父たちの見守

るなかでバラを包んだマントをひろげた。すると金色の光とともにマントの上に褐色の肌の聖母の絵が浮かび上がった。司祭はこの新大陸にも守護聖母がお現われになったと喜び、早速テベヤックの丘に聖母を祭った寺院を建立した。…

これがグアダルーペの奇跡と寺院の起源である。この奇跡の布は現在に伝えられ、寺院内新教会堂の中央祭壇に祭られている。

スペイン人神父らは、この聖母をグアダルーペ(ディエゴが聖母出現の話をした時“聖母は、自分はクアウトラク一ベウ〔光の世界から、火のワシとしてやってきたの意〕の聖母である”と語ったとい

う。この名がスペイン人の耳に〔グアダルーペ〕と聞こえたという。)と呼んだが、先住民の間ではトナンツインの名で親しまれた。トナンツインはアステカの宗教のなかに現われる女神の名である。それはナワトル語で「神々の母」という意味を持つ。また聖母が出現したテベヤックの丘は、その昔トナンツインの神殿があったところだとされている。

奇跡の布には、神秘的な謎がいくつかある。いずれも科学者が分析した結果についてのコメントである。まず、この布は1531年以来400年以上の歳月を経ている。当時保存の処置をされなかったこと、近くのテスココ湖が塩分を多く含んだ湖であったことを考えると、普通なら一世紀で酸化してポロポロになる。しかしこの竜舌蘭(リュウゼツラン=リュウゼツラン科の無茎の大型多年生植物。多肉質の葉は長さ1.5m。中央アメリカを中心に約300種がある。繊維用種としてはサイザルアサやヘネケンがよく知られる。メキシコ原産で100年目に開花するということから century plantの名が生まれたが、実際には10年~20年で開花する。)の繊維で織られた布はいまだに張りのあるものだといふ。絵に使われた染料は、植物性、動物性、鉱物性でもなく、地球上に存在しない成分でできているという。また1929年、複製作成の目的で布の写真が撮影されたが、この際、聖母の右眼に人の姿が発見された。その後何人が調査を繰り返し、1960年代はじめには、その人物が聖母出現の時に一番近くにあったディエゴ、マヌエル司祭、通訳の3人が焼き付いているという写真分析結果が出た。その写真は寺院地下の売店の壁にかけられている。

【以上編者まとめ。参考文献：■神原二美氏提供観光案内文・絵葉書LA NUEVA BASILICA ■『ムー』1983年9月号 阿部美智子「現代科学でも解けない“絵姿”の謎…グアダルーペの聖母の奇跡!!」】

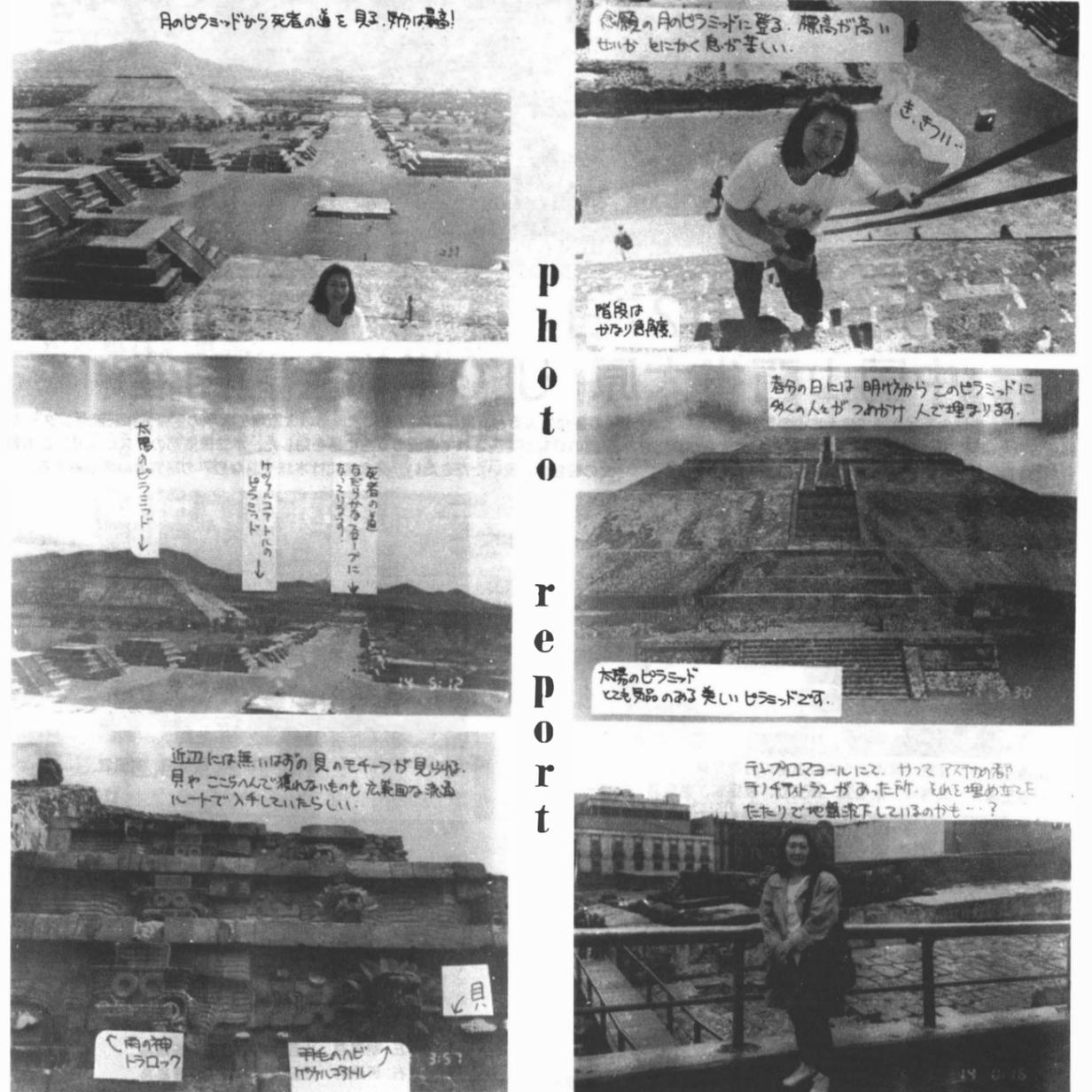


Photo report

关于《太原·一九九八年UFO学术会议》
情况的简报 晋U(98)秘文6号



①「太原1998年UFO學術會議」參加者的合同写真

■1998年6月27日
中国山西省太原 UFO學術會議開催

昨年8月、中国山西省太原工業大学の劉鳳君教授から届いた2通の書簡によると、同年6月27日に太原市の太原理工大学の學術文化交流センターで開催されたUFO學術會議は、全国から56人の研究家が集まり、37編の研究が発表されて盛況のうちに幕を閉じた。本誌編集部へのミスにより、この報告が約1年遅れてしまったことをお詫びする。詳細については中文の報告をご覧ください。発表者には本誌でおなじみの研究者の名がみえる。



②山西、上海、北京、河南からの代表者の合同写真
左から王禹光、吳嘉祿、童秉天、孫式立、袁振新、劉鳳君、岳景洲。



③會議期間中の写真。右から楊世春、呂應鐘、劉鳳君。



④呂應鐘先生に山西省UFO研究会高級顧問が招へいされた記念写真。
左から楊光亮、劉鳳君、祝平、呂應鐘、吳鴻、高愛枝、王禹光、魏樹海



「太原1998年UFO學術會議」
左：劉鳳君 山西省UFO研究会理事長
右：田道鈞 江蘇省UFO研究会理事長

出席《太原·一九九八年UFO学术会议》的代表，于六月二十五、六日陆续到达太原。二十七日上午与会代表观看了飞碟录像。下午二点三十分《太原·一九九八年UFO学术会议》在太原理工大学学术文化交流中心二层会议厅隆重开幕！山西省UFO研究会副理事长王禹光主持了开幕式，刘凤君理事长致开幕词。山东省UFO研究会秘书长王芝苗宣读了兄弟学会的贺信贺电。论文宣读大会分别由王禹光、王芝苗和河南省UFO研究会秘书长岳景洲主持。

出席大会的教授、学者、专家和UFO爱好者分别来自北京、上海、江苏、山东、河南、山西、台湾等地共56人。山西省民政厅社团处李翔、赵海家处长、太原理工大学副校长杨世春教授、山西省科学技术协会学会部负责人刘子良、太原理工大学土木工程系领导杨秋学、袁毅刚等领导同志出席了大会表示祝贺，并发表了热情洋溢的讲话。山西省电视台、黄河电视台、太原理工大学电视台、山西省人民广播电台、长城电台、山西科技报、山西科技消息报、理工大学校报、山西经济报、人民代表报等新闻单位的记者先生和女士们，对大会进行了采访和报道。

会议宣读和交流论文37篇。从自然科学的相关领域阐述了UFO学研究的新成果，集中体现在以下几方面：飞碟动力系统的研究、飞碟目击报告的剖析、时空隧道理论的探讨、宇宙起源的新阐述、生命科学的实例分析、UFO研究组织的整体构思等。此外，大会还收到了上海UFO研究会的会刊《奥秘通讯》、

贵州UFO研究会《简报》、河南UFO研究会发行的《天地探秘》、台湾中华飞碟学会出版的《飞碟探索》(收藏本)、吕应钟先生的专著《超越时空系列》和《UFO五千年——外星人考古学》、内蒙古UFO研究会理事刘成义拍摄的海尔——普谱慧星照片，河北肥乡县UFO研究会冀建民拍摄的飞行物尾迹照片，开封UFO研究会寄来的图书等宝贵资料。

出席大会的孙式立教授、袁振新教授、吴嘉祿理事长、王芝苗秘书长、童乐天编审等带到大会的录像受到大家的热烈欢迎。会议休息时间，与会代表还参观了山西省UFO研究会展出的《宇宙·飞碟·人类》大型图片展览。

学术交流于六月二十八日下午四点半圆满结束，接着颁发优秀论文证书。岳景洲秘书长致闭幕词。他指出：在大家积极支持和参与下，大会开的非常成功！通过交流与探讨，我们对UFO这一多科学的边缘性交叉性科学有了更新的认识，在这次会议上，许多代表提出了许多新的观点、新的认识、以及研究的新途径、新方法，这对我国UFO研究事业将起到促进作用。通过这次会议必将掀起UFO研究的新高潮！

下午六点三十分，大会在一片热烈的掌声中落下了帷幕！

山西省UFO研究会
一九九八年六月三十日

《太原·一九九八年UFO学术会议》 论文目录

- 1 飞碟动力系统的研究概况与展望
- 2 时间、空间问题及特异时空现象(提要)
- 3 关于锡山市两镇5.6事件的调研报告
- 4 UFO存在的可能性
- 5 关于“宇宙演化”的几点看法
- 6 四种地球人起源说法之比较研究
- 7 UFO研究事业前途光明
- 8 “UFO研究会”团体建设构思
- 9 关于“猴娃”的考察报告
- 10 三晋飞碟案例综述
- 11 关于凤凰山UFO事件的考察报告
- 12 磁谱仪上天,地球磁分布将受干扰
- 13 美国空军UFO课程研析
- 14 飞碟研究五十年后的思考
- 15 对飞碟研究中若干问题的刍议
- 16 UFO研究具有科学价值
- 17 科学地进行UFO研究
- 18 美国“UFO档案秘文录”
- 19 飞碟功能初探
- 20 受控核聚变的几种实验方法
- 21 飞碟乎?法轮乎?
- 22 路在脚下
- 23 晶体低熵时的变化
- 24 奇特的“大风吹人”事件
- 25 UFO的推论
- 26 关于都溪林场和都拉营车辆厂
突发事件的考察报告
- 27 对一句俗语的思索
- 28 飞碟来访与人类进化
- 29 飞碟与星象
- 30 人类不明现象与UFO
- 31 人造飞行器与不明飞行物
- 32 8.27事件不是日本火箭所为
- 33 探索十五年——回顾飞碟研究主题的发展
- 34 论我国的UFO研究形式与走向
- 35 海尔——波普彗星彗尾有腐生的酵母菌病毒
- 36 荒谬的球雷——3.31假雷命案
- 37 失落的光辉——玛亚文化
- 38 中华奇易探感回文

- 田道钧(南京)
谢湘雄(湖南)
楼锦洪(上海)
祝平(山西)
赵峰(山西)
吕应钟(台湾)
李鸿昌(山东)
岳景洲(河南)
袁振新(北京)
山西省UFO研究会学术部
童乐天(北京)
刘成义(内蒙)
吴鸿(台湾)
孙式立(北京)
田道钧(南京)
吴嘉禄(上海)
吴嘉禄(上海)
楼锦洪(上海)
李宏刚(山东)
王伟刚(山东)
杨安定(山西)
王芝苗(山东)
赵峰(山西)
张卫民(开封)
金帆(大连)
- 童乐天(北京)
王芝苗(山东)
杨生龙(山西)
曹鉴(山西)
宜晋宝(山西)
吴嘉禄(上海)
吴嘉禄(上海)
白涛(上海)
楼锦洪(上海)
刘成义(内蒙)
于文江(山西)
王培源(山西)
汪源(河南)

■太原1998年UFO学术会议で発表した研究者の中には、本誌でこれまで幾度か登場した研究者が10人ほどいる。編者の注目する古代宇宙来訪説に関係した内容がみられないのは残念である、唯一「飛碟探乎、法輪乎」(21)と題した楊安定氏の課題に、それらしき雰囲気を感じる。楊安定氏はUFO古記録の研究を本誌に寄せてくれたことがあった。アメリカ空軍のUFO調査についての台湾の研究者(13)の内容も注目している。上海の吳嘉禄先生はIFOとUFOの問題では第一人者と思われる。



■黒龍江哈爾濱近くにミステリーサークル出現か?

1998年1月1日早朝6時頃、中国黒龍江省哈爾濱の北西約200Kmにある大慶市沙区原總機廠家屬基地でトレーニングをしていた郭書田氏は、付近の草むらに直径6.3mの窪んだ円形を発見した。円形の中の草は一方方向に倒れ、円の周辺には車の轍の跡のようなものがあった。当時の天気は非常に寒冷で、夜には雪が降った。しかし、いかなる足跡や痕跡もなかった。円形内の草は折られたりつぶれたりしてはいたなかったという。【「飛碟探索」1998年第5期】



■1998年10月3(30)日昼間

中国昆明でUFO映像撮影に成功か?!

日本では写真週刊誌『FRIDAY』1999.4.2号が5枚の連続写真でこれを報じた。また3月25日夜フジテレビ系「奇跡体験!アンビリバボー」でも紹介された。

これまで内外の「UFO映像」をご覧になられた諸兄にとっては、すでに承知のことと思うが、日本で一時的なUFOブームの火着け役ともなったあの「金沢UFO映像の菱形」や「諫早UFO映像の菱形」また矢追純一氏のUFOスペシャルにおける欧米の「超拡大菱形映像」とよく似た映像が、この昆明UFO映像として写真週刊誌とテレビで紹介された。「またまたビデオカメラのアイリスの形か?」とガッカリするむきもあろうかと思う。

まず気になるのが撮影日。北京の程伯年氏より提供された新聞(4月16日「中国青年報」からの転載)では「去年(1998)10月3日」になっているが、王志平氏より提供された雑誌記事(誌名不明)の撮影者本人執筆の記事では「1998年10月30日」になっている。また、ビデオカメラの機種は「中国青年報」からの転載記事では「索尼(SUONI)ソニー34E小型ビデオカメラ」で「拡大率180倍」となっているが、本人の文章には見当たらない。180倍という望遠鏡なみの拡大率は、最近のデジタルズームでもないから、間違いであろう。もし、ソニーの製品なら、当然オートフォーカスが組み込まれているだろう。御存知のように、これを解除しないで空中の飛行機や光りを拡大撮影すると、焦点がなかなか合わない状態になる。ピンボケのままズームアップを最大にすると、あの金沢映像のように菱形の絞り「アイリス」の形が現われる。しかし、カメラを引いて広角にすればピントは合う。従って被写体の映像も肉眼で見た状態に戻る。

実は、「アンビリバボー」で放映された昆明の映像は、まったくこの通りの映像であった。つまり、広角では輝く光りだが、ズームアップを続けると四角っぽい光りとノイズと思われる黒い影が現われ、最後につつぶオレンジの菱形に変化する。しかし、この映像を広角に戻してゆくとオレンジのツブツブ菱形が白い光源へと戻っていったので



ある。それにしても、この番組に登場した「専門家」の素人的な分析はどうしたものか。正体は不明であるとしても、映像に関する解説は、本誌のほうが正論であろう。

事実関係を読むと、雑誌上の本人記述のほうが順を追って詳しく、新聞報道や日本の写真週刊誌、および本人を直接取材した筈のテレビ番組はあいまいである。

撮影者韓建偉氏は、家族と墓参りに丘の上の公園墓地を訪れた。午前11時50分ころ、彼が昆明の町のほうを眺めたとき、発光体を見つけた。彼はすぐ家族に知らせる。しかしそれはやがて消失する。それから約3分後、彼は再び発光体を発見する。それは先の位置より右側だった。彼は今度はビデオカメラを手を持ってこれを撮影する。

それがこの映像というわけだ。映像は一時中断する。それは彼が興奮したことで、自ら録画を停止させたことによる。そして、落ち着いてから再び撮影を開始する。光源は最後には次第に消失したという。やはりUFOだったのだろうか。またテレビ「アンビリバボー」における中国UFO事件の内容についてだが、「鳳凰山事件」の紹介が、1994年に北京で発表された当初の内容とかなり違っていた。内容が様々な情勢に合わせて成長したのか、不思議に思った次第。UFO目撃地点や着陸(墜落)事件現場などの土地が観光資源としての価値を持ち始めた昨今、UFOマニアを誘致する熱心さから誇大宣伝に走らなければ良いが本誌は心配している。



■撮影者の韓建偉氏。はたして彼は、8mmビデオカメラのピンボケ像について知っていたか?



1, 李自新先生と夫人李水萍さん



2, 一緒にやる会員と。

■UFO研究の経済基盤を目指す 河南省UFO研究会科技開発部

UFO研究を進展させるには資金がいる、という状況は中国のみならず、わが国の民間UFO研究団体にとっても昔から大きな課題であった。1000人前後の安定した会員が機関誌を購読し、その会費と寄付、そして賛助広告の収益で運営できればまずまずである。編者が昔携わっていたUFO研究団体の関東、東海、近畿地区では、個人事業に遠方からの会員が参加する形で資金活動と共同活動の場があった。若い独身時代、同じ志の者同士が寝食と労働を共にする、というのも一つの成長の場である。日本と中国とは条件も事情も異なると思うが、このほど(といっても1998年9月)河南省開封市の李自新氏から「我々は一つの経済実体を作った。中庭に家を買って、経営を開始した。これは将来、UFO研究に経費を提供する資金源となり、古いものを新しく変えてゆく」という書簡と共に5枚の写真が届いた。商品は「強生用品」つまり健康用品・スポーツ用品で台湾との連携で仕入れ販売をする模様。中国では国際郵便物を航空便で送る費用も大変である。中国の経済事情は厳しく、UFO研究者からの手紙のうち封書でも船便で届く場合もある。とにかく彼らの成功を祈りたい。

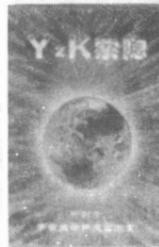


■浦鈞鵬先生の母校で江蘇省UFO研究会と 上海市UFO研究会の合同会議開催

1998年7月25日、錫山市瀋口鎮中心小学(浦鈞鵬先生の母校)において、江蘇省UFO研究会と上海市UFO研究会の合同会議が開催され、上海市UFO研究会会長嘉祿理事長、包衛東副理事長、張明敏秘書長、樓錦洪副秘書長、と江蘇省UFO研究会の名譽理事長華約伯、田道鈞、理事長劉道業、秘書長費国藩、副秘書長高德隆、常務理事浦鈞鵬及び瀋口鎮UFOサークルの華奕琦、蔡志剛の全部で12人が出席した。会議は来年1999年秋にUFOシンポジウムを開催することが決まった。



3, 来賓の祝辞を戴く。左から右へ王台下(経済電台);台湾J教授;李自新先生;市府官員(女史)



■李自新先生著作
開封市宇宙生命開
発実験室(この名称
自体ETを開発実験
するというところだ
から物凄く実験だ)
発行の「Y2k索隱」
彼独特の思想が展
開されているが、よ
ほど中文に詳しくな
いと読めない。



4, UFO研究会メンバーの一部



6, UFO研究会メンバーの一部

■湖南省UFO研究会
が1997年9月に発行
した空飛ぶ円盤と地
球外文明を探索した資料集。主編は本誌でお
なじみの謝湘雄先生。扉のカラー絵には、
CBAが発表したアポロ11号月面上雪ダルマ型
UFOが掲載されている。中国における高い水準
のUFO研究と事実が網羅された貴重な資料であ
る。

編者の
賀信も5
ページ目
に掲載さ
れている。
また199
4年北京に
おける94年垂太地区UFO資料展示学
術交流会における編者の講演内容も
134ページに紹介されている。
B5判152ページという大作は奥深
い中国のUFO研究者のUFOに対する様
々な考察が展開されている。

裏表紙の合影写真にはジュニア世代の参加が認められる。
我々日本も、未来の地球を引き継ぐ後継者について真剣に
考えなければならないだろう。

■中国14省から103人が参加 大連で「UFO科技研究会」開催

1998年8月19日~21日、中国遼寧省大連市遼寧師範大
学国際文化交流センターにおいて、UFO 科学技術シンポ
ジウムが行われた。趣旨は中国のUFO科学技術の研究と
開発応用を促進するため。北京、広東、湖南、遼寧、河
南、新疆、大連、香港、台湾などから研究組織の共同発起
があった。

■内蒙古の劉成義先生から

白城市UFO研究会発行冊子

『磁場と天体の探索』が届く

内蒙古牙克石の劉成義先生とは、1994年の北京会議以
来、東北部の怪光事件についての研究、クローズアップサークル
の解釈、GEODS映像に対する見解、日食観測など、幅広
い分野での情報交流が続いている。彼の研究は地元新聞に
も何度か掲載されている。

このたびは彼から、かなり読み古された感じのB5判20
頁の冊子が送られてきた。発行が1989年10月。更紙に活
版印刷したもので、随所に劉氏のものと思われる書き込み
がある。題名は『磁場と天体的探索』、著者は王鉄民氏。
副題が「地磁場起源的假説」となっている。地球磁場の起
源についての仮説と思われる。文章は活字で、図はコピー
を張り付けた手作りである。地球の磁場と太陽の磁場が図
解されている。通常、地球磁場の発生は「ダイナモ理論」
が有力だが、地磁気の起源は謎である。ダイナモ理論はあ
くまで結果を説明するためのモデルである。それ以外の説
の登場する余地はあるだろう。

中国のUFO研究者は、UFOに限らず、自然と宇宙の謎
に向けて様々な理論を展開することが、UFO学の世間
に対する貢献の姿勢として歓迎されているようだ。UFOに
限らず、未知の問題に取り組み、学問上の貢献をすれば
世間におけるUFO問題への評価も違ってくるだろう。

重力や引力という「結果」として現われている日常の現
象、また電気や磁気といった現象にしても、突き詰めると
謎が多い。

この冊子の終章は「斥力場とUFO」となっている。斥
力とは、磁石ならNとN、SとSで起る反発力で、おなじみ
の現象だ。(斥力=二物体間で互いに遠ざけようとする力。
同種の電気相互間または同種の磁気相互間に働く力の類。
→引力【広辞苑】)



■1988年北京天安門にて奥様と劉成義氏。

さらさら手紙を
書いてくれる。
編者は何とか
慣れて、それ
らのさらさら
文字を判読出
来るようになった。
それでも彼ら
にとっては日
常の表現だろ

■劉成義氏と10才になる息子さん。

うが、日本人には見当のつかない文字もある。そうして
内容を読み込んで相手の様子を知るのに時間がかかる。
そして日本語ならたくさんの言葉で表現したいが、漢文
だとこれしか表現できない、というところで時間切れの
返事を書く。相手の数が多いと、内容も簡略になる。

■孟正六先生のUFO研究と人生

65万市民にテレビ放映される

中国浙江省義烏市UFO研究会の孟正六理事長は、1999
年2月26日、義烏市人民政府民政局辦公室において記者会
見を行い、この模様は3月6日に3回、3月7日に2回、義烏
市テレビ局から放映された。また、「外星文明の研究、数
十年のぼこ人生」というビデオ作品が義烏市テレビ局
により、4月18日から4月30日にかけて収録された。山上
にある太古の謎や、孟先生の娘さんとの親子対談、孟先生
について紹介された各国の書物、座談会などが盛り込ま
れ、この収録は5月10日夜と11日の昼にそれぞれ13分間づ
つ放映された。

義烏新聞联播

義烏市人民政府 民政局 孟正六
入選 世界名人录 一大型丛书进行录像

時間: 公元1999年2月26日 星期四(阴历正月十一)

地址: 義烏市人民政府 民政局辦公室

具体内容如下:

- 10寸照片
在義烏市人民政府大院内 市人民代表大会常務委員會
市政協會議 辦公大樓前
孟正六和中国UFO研究会理事長王錫振來義烏市指導講學。
市政協會議主席略談談話。本會部分理事合影。
- 孟正六和義烏市社會團體管理辦公室主任、浙江省省級社會
團體管理先進工作者董元成同志研究問題。
- 孟正六正在翻閱 大型丛书世界名人录書。
- 世界名人录 詳細內容, 其中在610-611頁, 刊登孟正六簡况
- 採用世界先進工藝制作的銅質證書(長36cm, 寬26cm, 厚2cm,
重6.6市斤), 刻有中文、英文孟正六姓名。
- 榮譽證書: 孟正六同志 被評為一九九八年度義烏市社會
團體先進工作者。

義烏市廣播電台: 1999年

3月1日 星期一 上午: 6:50, 7:70, 10:50; 晚上: 6:40, 8:40

向全市65萬人播送 孟正六入選 世界名人录

錄像員: 義烏市電視台記者、市電視台民政局特約記者站負責人
吳開權

義烏市電視台攝像員 王鐘紅(女)

3月6日 星期六 下午 8時10分 播送義烏新聞联播簡况

9時 全播 全部內容53秒

10時 全播 全部內容53秒

3月7日 星期日 中午 12時 播况

12時30分 全播: 全部內容53秒 -1-

義烏新聞联播

義烏電視台特 世界名人 孟正六

數十年研究外星文明, 坎坷一生录象成(生活之路)

1999年4月 具體錄像內容如下:

18日 星期日 在義烏市柏峰水庫(赤岸鎮)水庫邊, 孟正六講解:

(1) 在山頂上, 數億年前, 外星人的巨型石頭雕像;

(2) 在山脚下, 水庫邊, 數億年前, 二大塊岩石被外星人切割。

參加者: 義烏市UFO研究会理事及愛好者

丁敬文、錢寶福、陳建平、陸子俊、張巧英(女)、

丁美英(女)、朱福琴、孟正六

21日 星期二 在孟正六家, 二女孟佳燕和父親對話: 研究外

星文明, 費大量精力和照顧家庭、二女的矛盾。

22日 星期四 在孟正六家一天一夜

上午: 大女兒 孟蘇杭協助參加錄像活動

(1) 七次 中国UFO研究会全國會議136照片, 挑選20多張10寸

照片

(2) 八次 義烏市UFO研究会全市會議131照片, 挑選20多張10

寸照片

(3) 全家照, 孟正六和父親、母親、哥、二个姐姐全家合影照片

下午 刊登採訪孟正六的報導和照片的大型丛书如下:

國外: 美國、英國、日本

海外: 澳門、台灣地區

國內: 中國省級特級行政區、香港 2本

全國大型丛书9本, 國際大型丛书 2本

晚餐 孟蘇杭(女)在義烏市景前街“一帆快管”店宴請錄像員

7時, 大女兒孟蘇杭(女)從溫州回來, 當場交給父親

一張刊有外星文明的報刊。二女兒, 孟佳燕, 小女兒,

孟仙仙協助父親整理大量資料。

8时 吴文生同志和孟对话，吴提出当前研究外星文明，提出异议和影响家庭生活建议。

9时半—10时 孟正六理事长拉二胡，大海就靠靠能手

23日 星期五
上午 本研究会理事钱福福、孟苏杭(女)、王小英(女)在孟正六家进行准备工作
下午 2时左右，以上人员去义乌市科协与主席姜星运、秘书长朱洪位研究如何在义乌召开国际UFO会议的有关问题。

29日 星期四
上午 8时 起市UFO研究会理事钱福福、孟苏杭(女)、丁敬文、朱流顺、骆永刚、孟正六在孟正六家办公室准备工作

下午 3时半 在义乌市政治协商会议，召开座谈会义乌市政治协商会议主席蒋旗法作了重要讲话，他说：“我们研究范围广泛得很，是很有研究的，现在苦于研究手段太落后，我们接触范围太少，最大的束缚就是我们思想认识的束缚，不是讲我们自己，在座的这些人，我们自己这些人思想是比较开宽的，但社会上许多人认为物质世界是可以看见的，认为你们这些人却在发神经，认为现在科学解释不了的东西，就是迷信，就是你神经有毛病，恰恰就是这个问题阻碍了我们科学的发展，我们义乌市UFO研究的成果无论是你的，还是其他同志的，应汇编成册，争取出版。

下午 4时 以上人员来到市府三楼，季盛清副市长办公室，孟正六理事长向季汇报市UFO研究会最近情况，和研究准备在义乌市召开国际UFO研讨会的问题。

季盛清副市长说：“义乌市UFO研究会作出了很大成绩，付出了辛勤的劳动，取得了丰硕的研究成果，在全省、全国及至全世界引起了注目，市政府表示感谢！”孟理事长，接着将有关国家和地区，日、美、英、澳、台、台专家来函呈交季副市长，季副市长讲：“若要在义乌市召开

国际UFO研讨会，应按程序进行，市政府大力支持。欢迎各国学者，专家来我市参加会议，通过交流，可大大提高对宇宙进一步的了解，同时又可大大提高义乌市的名声。

5时 在市府大院内 在古樟树下摄影留念
孟苏杭(女)、钱福福、骆永刚、丁敬文、朱流顺、孟正六
5时半 在孟正六家 录像

- (1)10多本荣誉证书、聘书；
(2)美、英、日、澳、台大部分信件；
(3)国内各省市学者来信；
(4)国际UFO权威、毛泽东主席翻译、博士生导师孙式立教授来函贺卡等。

30日 星期五 录像在孟正六理事长家
下午 5时左右，在办公室大门外等地录像。
义乌市电视台播音员：朱莉莎 录像员：张伟建
5月10日晚上 8时 简要播出
9时 全部播出、编入“生活之路”栏目 计13分钟
11日中午 12时 简要播出
12时30分 全部播出，编入“生活之路”栏目 计13分钟

季盛清副市长在义乌任职期间，对本研究会工作大力支持和关怀，给全体UFO研究人员留下深刻的印象和不可磨灭的贡献。谨此，向季盛清副市长表示衷心的感谢和崇高的敬意。



刊登 孟正六传记(有的还刊孟的照片)

大型丛书

- 一、全国大型丛书，全国发行 (人民币)
(1)《神州之魂》 全书 100多万字 96年7月出版 ¥: 98.50元
(2)《世纪之光》 全书 150多万字 98年1月出版 ¥: 98.00元
(3)《奔向2000年》 全书 220多万字 98年8月出版 ¥: 295.00元
(4)《改革二十季》 全书 250多万字 98年9月30日出版 ¥: 180.00元
(5)《管理·决策·发展——当代领导干部优秀文集》 全书 3000千字 98年10月出版 ¥: 295.00元
(6)《辉煌三十载——中国改革开放成功理论与实践文选》 全书 200多万字 98年11月出版 ¥: 286.00元
(7)《中国改革新闻人物传略》 98年11月出版 ¥: 188.00元
(8)《世纪启示录——当代中国改革文选·集思卷》 全书 200多万字 98年1月出版 ¥: 298.00元
(9)《科学中国人·中国专家人才库》(世纪珍藏版) 全书 200多万字 99年3月出版 ¥: 248.00元

二、国际大型丛书，全世界发行：
(1)《Who's Who in social sciences in China》
译：《中国社会科学家大辞典》(英译版)此书是迄今第一部以英语语种向世界全面和介绍反映中国社会科学家及其学术成就的大型权威性工具书，以编录当代中国人文哲学社会科学有代表性的学者。 全书 1800千字 95年8月出版 ¥: 325.00元

(2)《世界名人录》 世界文化艺术研究中心
美国海外艺术家协会(协) 通讯：香港兴发街邮局38062信箱
此书，是荟萃当代世界各杰出人物对世界文明的推动和对人类作出辉煌贡献的真实记录。描写了可歌可泣的英雄事迹。宛如一部气势恢宏壮美的史诗，在各个领域创造了前所未有的辉煌业绩，他们是时代的开路先锋，民族的楷模。在历史轨道上留下长长的闪光的足迹。是—1—
对世界文明历史作出杰出贡献的见证，具有深远国际影响和强大的号召力。

本书收录中国大陆、港、澳、台、新加坡、侨居海外华人知名人士、学者，大约7000条。 全书 380万字 98年11月出版
¥: U S \$ 119元
¥: H K S 800元
¥: 人民币 750元

- A、世界名人证书：中英文对照的铜质证书，长36cm，宽26cm，厚2cm，采用世界先进工艺制成，亮丽堂皇，外带锡盒。
B、精装证书：中英文对照，有孟正六的照片和加盖公章。

三、国外和地区出版的大型丛书
(一)日本国出版 著名国际科学家 日本国 天宮清教授主编
《THE UFO RESEARCHER》大型丛书，每本用日语、英语、汉语论述。从94年1月起——99年1月止，共22本，每本刊登孟正六的照片共计48张，及有关大量资料和论文若干篇。 每本约 ¥: 500日元 邮 费 ¥: 310—500日元

《THE UFO RESEARCHER》VOL.11.NO. 1999刊登孟正六照片5张及论文《千古之谜，再现再查》，将它翻译成日语《387年隔てた二つの奇縁は出逢いの純潔性》孟正六

美国出版：美国国际性英语杂志《NEXUS Magazine》大型杂志 1600页。1998年春季，用英语特刊中国《小商品世界报》的采访孟正六长篇传记和照片《生活在世界‘边缘’的人》 计 3页 ¥\$: 80美元

台湾出版
(1)台湾大学 农化系教授 江晃荣主编《飞碟与科学》大型杂志，78页

义乌市新闻联播
世界名人 孟正六
市政府领导 市UFO研究会理事
在商讨宇宙奥秘及召开国际UFO学术研讨会事项
自左至右
朱流顺、钱福福、蒋旗法、孟正六、骆永刚、孟苏杭、
市政协主席蒋旗法说：“……在市场经济形势下大家都做生意赚钱，唯我们UFO研究会，在没有拨款和资助却靠自己钻研研究，这种精神真是难能可贵，研究成果在日、美、英、澳、台的报刊杂志上报道……近几年英国伦敦大学教授，John Bayne和美国人类学家Jason Richardson，专程从英国赶到义乌拜访孟正六，在不同时间和研究会理事、市政府领导共同商讨如何研究宇宙奥秘等。
在义乌召开国际会议，请各国专家、学者来我市参加学术交流，在义乌历史上是首次，市政府热烈欢迎和支持，一是提高义乌知名度；二是提高人民的素质……”会上对如何开好这次会议等一系列有关事项进行了研究。 1999年4月19日 浙江省义乌市人民政府

A、1994.1.10，刊登孟正六长篇论文《外星人为什么不愿跟地球人类接触》 5千多字，计7页 ¥: 台币 120元
B、1994 夏季季刊登孟正六长篇论文《试论外星人生存的条件》8千多字和特刊 浙江日报93.6.5 采访孟正六的长篇传记和照片《家徒四壁，痴心不改，他——迷恋UFO》 1千多字和孟的照片 计7页 ¥: 台币 120元

(2)原文化大学，现南华管理学院 核物理家 吕应钟教授主编
A、台湾著名的《飞碟探索》杂志95.7刊登孟正六长篇论文《外星人是如何克服空间障碍的》5千多字 计3页 ¥: 台币 150元
B、台湾著名的《大幽浮》杂志119页 93.7.1刊登 孟正六论文《秦始皇多次接见外星人》 2千多字 ¥: 台币 150元

四、香港出版：
林清泉主编 国际大型学术双月刊《天问》杂志1991.10 创刊号 用繁体汉字 计 80页 全世界发行刊登孟正六的长篇论文《意念——是一种未查明的物理物质》 7千多字 计7页 ¥: U S \$ 5元 ¥: H K S 15元

- 五、1998年一年中：
A、应邀参加 国家级大型会议 6次。
B、应邀赴泰国曼谷参加，《世界华人艺术大奖》国际大型会议。
C、日本国 刊登孟正六的照片、论文，计2本，共5页。

注：1、地区级、县市级，出版的书，刊登孟的传记和照片不计在内。
2、孟编写《外星人在地球上的证据》一书初稿已完成，正在润色，寄往国外出版。



■中国のUFO雑誌「飛碟探索」1999年No.1で「UFO之家」と題して本文記事と巻末カラーページに編者と家族の写真が紹介された。本文では編者の歩みが簡潔詳細に記述されており、後日、この記事の執筆が「陳学勉」とは、陳百海氏のペンネームであることがわかった。彼には色々世話になり、また彼からの依頼もまた多いが、なんとか応えていた。



日本著名的UFO研究者天宮清先生一家多年来一直在利用业余时间，孜孜不倦地追寻UFO的足迹。
现住奈良县天宮清先生一家洗衣厂工作。天宮清先生1944年10月出生于日本奈良县。当时正值第二次世界大战末期。他初次知道UFO只有十几岁。1960年加入了民间UFO研究团体。通过该团体主办的杂志和众多老师的指导，他了解了各种UFO事件，学到了各种研究方法。天宮清先生从事UFO研究至今已有30多年的历史。在家人的支持下，通过自己的努力和潜心研究，能用电脑编辑、自费制作出版了《UFO研究者》杂志。这份刊物专门向广大UFO爱好者介绍各国情报并刊登自己和家人亲身经历的UFO目击报告。他在《地球外知性体探索》一书中，以图解的方式将不明飞行物展示在不同层次的研究者面前。每期所出版的杂志都免费向各国UFO研究者赠送。1993年《UFO研究者》杂志刊登的《UFO运动状态一览表》，是天宮清先生对自己多年的目击体验和收集的众多目击报告进行分析研究后得出的结论。他的这项工作填补了UFO学的一项空白。
天宮清先生的妻子天宮曾1942年11月生于北海道石狩市。她曾在一家点心制作厂工作过，当过打字员。参加过许多UFO宣传活动。在父亲及兄长们的影响下加入UFO组织。她既是关西总开发部的一员，又是CBA(宇宙友好学会，成立于1957年)东京支部的一员。从事着关西发行的UFO杂志的资料制作工作。那时，天宮清先生也在负责做统计UFO目击报告的工作。由于共同的爱好、兴趣、追求，两人开始交流，并逐渐走到了一起。这期间，天宮曾因各种原因几次由北海道到东京，又由东京到北海道。1971年11月天宮清夫妇由北海道工业大学一位副教授作伴，在东京开始了。她对事物的观察力以及素描、绘画(尤其是油画)等方面曾有出色的表现。
天宮清先生的长子天宮高康，毕业于关西大学。在父亲出版的《UFO研究者》杂志上常常能看到的插图及目击报告。一家人为UFO研究着迷了。在长期的UFO研究中，他们不知付出了多少心血和花费了多少时间。他们对UFO的研究表现出严肃、科学和一些不苟的态度。
天宮清先生一家平时还经常到各地去考察、拍照、分析研究，积累了丰富的经验。为了掌握海中“火球”的必需要素，他和一位研究者曾几天几夜没有合眼。天宮清先生及家人多次目击UFO，坚信外星人的存在，也正因此，他们才有这样执著的追求。

本誌編者の周辺

編者の読書感想

『UFO誘拐事件の真相』

(1999,8,28上巻を276ページまで読み進んだ時点まで、)
 ■160ページから始まる「目撃者が二組いた誘拐」の内容は驚くべきものだ。事件は1989年11月下旬のニューヨークで起り、「リンダ・コータイル」という女性がアパートの窓から外に浮遊されて、上空のUFOに乗せられた光景を、二人のボディガードと彼らが護衛していた有力政治家、そしてブルックリン・ブリッジを運転して渡ろうとしていた女性が目撃したというのである。

これを発表したのはあのパッド・ホプキンスである。運転しながら目撃した60才の女性は、自分が見た光景を3枚の絵にしてホプキンスに送った。そして同じ晩に別な誘拐事件の目撃者もあったとのこと。しかしMIT(マサチューセッツ工科大学)における会議でのこの発表は、すでに関係者の間で知れ渡っていたらしい。推測するに、この事件に関してかなり積極的な宣伝が行われ、ホプキンスはその情報の受取人の一人であったようだ。「二人のボディガードと有力政治家」が本当に実証し証言するのでなければ、この話は信頼度が薄いということになる。

■206ページにリンダ・ムールトン・ハウ女史と著者の対話は興味深い。彼女が家畜虐待事件だけでなく空飛ぶ円盤開幕史をいっきよにしゃべる当たりに、彼女の各有名事件に対する認識度、正確度が測れる。また彼女が有名なスピーカーであるゆえ、その内容が多くの米国人の知識となっていると思われる。その点でアーノルドからワシントン事件、ラボック・ライト、ザモラ、沼のガス、に至る内容は重要である。しかし、これほどの細かい事実を、著者との対話で頭の中から引き出したとしたら大した記憶力である。おそらく何か資料を見ながら、あるいは著者に提示しつつ話したのではないか。それはミサイル基地事件の紹介の仕方からも推測できる。つまりいくつかの資料を彼女は手に携えていたのだ。著者はこの事件に関しては「リンダが私に見せてくれた『公式』とされている報告によると」と書いている。しかし、「見せられた」だけで文章は書けない。コピーをもらってそれを見ながら書くのが普通である。この辺で著者の身辺の事実表現の程度がわかる。

しかしこの「公式」報告の内容はどうもSF的だ。「円盤人」から発射された光線がライフルが「分解」したという。「分解」とは構造物がバラバラになって砕け散った状態を指すのか、物質が蒸発した状態なのか。この表現は実際の事実を元にしてSFマニア的捏造者(国家公務員であれ)が手を加えたような印象を受ける。「核弾頭の構成物質が弾頭から欠けていた」という表現も、軍事記録としてはありまいである。「目標番号が消えていた」とか「核物質の一部が失われていた」とか具体的に書かなければ、役に立たないのではないか。あるいは「公式」は制約があるので、リアルな表現は禁じられているのか。とにかくミサイル基地でUFOと乗員が核装置の破壊活動に類する工作活動を行っているという情報は、確かなUFO事実に触れた内容に思われる。

■131~234ページのあたりの体験談は、「宇宙誘拐」が

古来からの「夢魔」「現代のカナシバリ」「妖精によるアストラル体の誘拐」に類似しているという認識を強める内容である。

我々人間には身体の輪郭に一致した別の霊体が付随して、自分の意識が身体感覚を離れて霊体と共に身体から「はがれる」ことがよくあるようだ。この霊体で肉体から離れると、肉体の五感とは異なる目で別な光景が見えてくる。それらの光景は肉体レベルでは関知できない。臨死体験者の見る世界と似た別な「次元?」の世界である。だから、壁や建物を透過して空に昇っても、本人の「霊体」が経験しているので、「客観的」には見えないことになっている。もし、これが現実の光景として見られたら(前述のように)、あるいは8ミリビデオに撮影されたら、大変なことなのだが、通常は夢が8ミリビデオには撮影できないのと同様、「宇宙誘拐」は撮影できないのがUFOマニア間の常識である。

通常の日常では「幽体」が身体からはがれることはない。しかし、身体が強いショックで死にひんした場合など、身体の苦痛に耐えられない状態のときに、感覚を認識する意識が別な領域に逃れることで、苦痛から回避された状態、つまり幽体としての自分が身体から離れる現象が起るようだ。

もし、この現象を外部からの力で操作し、任意の時に「標的」の身体から「幽体」を取り出して「体験」を施す装置なり機能が存在するとしたら、その装置や機能は「死の仕組」や「霊体の仕組」について我々以上の知識と実用技術を持っている者ということになる。

その者たちは死者なのか、これは多に可能性はある。かんたんに「死者」とはいつても、その道の書物には膨大な理論や知識の世界があるが、もし、魂の輪廻転生というものがあり、何らかの原因あるいは過失により、その輪から外れた状態。つまり人や生命の身体に生まれることが出来なくなった状態で時を過ごし、「輪」に戻る手段を模索する集団があったとしたら、「人の輪に戻るための生殖や機能」を調べようとする動機が生じるかも知れない。

「人の機能を獲得しようとするが、現象としては胎児に似ていながら胎児の機能もない」というのが「リトル・グレイ」の率直な姿ではある。生命の増殖にとって不可欠な口が閉ざされ、呼吸すべき鼻も満足に与えられておらず目は形を呈してはいるが機能には程遠い、決定的なのは生殖機能がない、という状態の形で「イメージの世界」に存在している何か。これが「任意の身体から幽体連れ出して身体機能検査の体験を施す」存在ということになるのか。

彼らは生きている我々の意識に侵入でき、ベッドに寝ている半覚醒状態、運転操作をしている無意識の状態に割り込んで、人の機能と意識を分離させて、意識だけを機能から剥離させる能力を持つ。機能は運転や睡眠を継続し、意識はベッドの上に寝かされて身体検査を受ける。こんな状態が想定されてくる。

しかし、この推理からすると、「彼ら」は「現実の肉体」を検査しているのではなく、「霊体」の身体を調べているということになる。霊体がどこまで肉体の機能を複製

しているのか、そんなことは空想の空想でしかないが、霊体の変化が肉体にも投影されるようである。

しかし、「イメージの世界」ではあっても宇宙船様のデザインや装飾、そらしき機械様の演出など、はたしてスウェーデンボルグが見てきたような霊界の住民のイメージだけで構築されるものなのか。

夢の中の物語は、つじつまの合わない登場人物や展開が特徴であるが、肉体の五感を離れると時間と空間を超えた物語の主人公になる傾向があるようだ。人の意識する材料は現実世界の経験とさまざまな対象に向けての感情などが混合されたものと思われるが、それ以上に空想や推測、思い込みや取り越し苦労、悩み願望、欲望、恨み、嫉妬、苦悩が充満している。そういう意識の固まりの中から、なんとか現実目に向けて、頭の中のモヤモヤしたものを修正し、現実を現実的に対処しようと努めることで正常な人格が保たれる。現実を認識する意識とは、個人差があり、同じ現象に遭遇しても受け取り方や記憶の仕方はさまざまである。各人の共通した課題はいかに生活費を得るか、何を食べるか、誰と何をするかといった事で、UFOや異星人などという課題は無いに等しい。それなのに、誘拐体験に共通項目があるのだから、これらは個人が勝手な思い込みや過去の心の傷の変形とかで解決できるものではない。説明はいくらでも出来ても、「説明」は解釈に似た底のないドロ沼に似ている。1999,8,28 屋 天宮 清

■米国のテレビ番組

「エイリアン・ウィーク」より

■米国Yakimaヤキマの山林火災監視小屋の日記に火の玉の出現が記録されているという事実は素晴らしい。「Satus Peak Lookout(サタピーク監視所)のDorothea Sturmさん(FIRE LOOKOUT)は34年間に100回以上不審な光を目撃し、地図上の正確な位置を記入してきた。

1981年3月21日Stella Washinesステラ・ウォシンスさんはその夜、娘が窓のカーテンをしめようとした時に凝視した現象を見た。同時に近所の犬が家の中に飛び込んできてテーブルの下にかくれた。こんなことは今までなかった。上空に火の玉が3つ三角形にならんで見えた。白とオレンジだった。それは窓に接近してきた。

■英国北部のスーパーマーケットの3台の監視カメラが空中を飛びまわる不思議な発光体をとらえていた。光体は丸く面積があり、低空を不規則な動きで飛び回っている。ビデオ画面右下の数字「26-04-91 00:09:18」は「1991年4月26日午前0時9分18秒」の意味か?

■Prof. Michael Persinger は1780年5月に米国南西部の沿岸が突然闇に包まれ午前中なのにローソクが必要で人々が世の終りと思った事件を調べることからUFOの研究を始めた。

「TELEPORT/MRSGUPPY」彼はUFOが目撃された区域、時期と自然現象の発生を比較した。

「BLACK RAIN FALL EARTHQUAKE」UFOの集中的な出現は地震の半年前に観測されることが判明した。

Dr. John Derr US GEOLOGICAL STUDY いう「私は火の玉と地震の発生は関係あると考える」と。1966年2月7日に長野県の歯科医師が撮影した発光の写りが紹介される。(MOUNT KIMYO. JAPAN FEBRUARY 7, 1966)

■1963年米国コロラド州の軍需工場の深さ3キロの井戸に大量の廃液が投棄された。廃液で断層が動き1500回以上の地震が起きた。廃液が岩の断層に作用して滑らせたりヒビ割れを広げ、震動が拡大したらしい。

パーシガー教授は言う。「廃液の投棄、圧力、UFO、そして地震が反復される」
 Dr. Alan Millsは言う。「鉱物を摺り合わせると火花が発生する。石英が最適」ここで実験が行われるが、発光は岩と岩の接触部分のみに限定され、しかも岩の形状の一部が発光の部分と重なるもので、岩自体から遊離した発光には見られない。その火花が形や運動をともなって空中を浮遊することは証明されなかった。

【鹿角UFO研究会 駒ヶ嶺政也氏提供VTRより】

■混迷の世紀末、様々な話題

ノストラダムスの「恐怖の大王」の7月が過ぎ、8月の「グランド・クロス」、「カッシーニ接近」をやり過ごし、8月22日の「GPS(全地球測位システム)エンドオブウィーク問題」も混乱はあったにせよ、大事故には至らず無事通過した。インターネット上で7月7日にポールシフト(地軸大変動)が起きると予告して、何も起きなかったため、この説を自分のホームページから削除した人もいたという。

これまでテレビでも雑誌でも特集が生まれ、宗教的な著作活動上でも目玉だった「世紀末世界滅亡」の命題は、一面でUFO現象の話題を世間から遠ざけたように感じる。あのオウム事件以後、UFO番組自粛の動きは確かにあった。「UFOはバラエティ番組でしか扱えない」という向きもあるが、3月25日の「アンビリバボー」で中国のUFO情報が扱われたのは新鮮だった。

「いつ何が起きる」という最近の「予言」はともかく古代の聖典が記すように人類は昔から「世界滅亡」のテーマを突きつけられてきたのである。それが999年の世紀末に、1999年の世紀末に集中して世界規模の関心事になることは必然だろう。しかし、基本的に、人が何を言おうと、人が何を発見しようと、自然災害は容赦なく発生するのが自然の摂理である。たとえ大地震発生を予知したとしても「どこへ逃げろというのか?」と問題を突き詰めてゆけば、地球という惑星に住む以上、災害から救われる道なぞ存在しない。つまるところ、世界崩壊の予言類とは、「いつ何が起っても悔いのない日常を送る」という覚悟を固める材料ではないか。「死んだつもりになれば何でも出来る」とはよく言われるし、「自分の命を愛する者はそれを失い…」(ヨハネ伝12-25)という言葉もある。

それにしても、8月11日の日食、8月18日のグランドクロスの影響か、8月17日未明に発生したトルコ大地震の後、世界各地では大小の地震があった。以下がそのデータである。

1999年8月16日午前7時17分(現地時間) インドネシア M6,0

1999年8月17日午後11時19分(現地時間) ビルマ(ミャンマー) M5,6

1999年8月17日未明 トルコ大地震発生

1999年8月18日午後6時05分(現地時間) キプロス島 M4,9

1999年8月18日午後6時06分(現地時間) 米サンフランシスコ M5,0

1999年8月19日午前 ギリシャで4回 M4,1~4,2

1999年8月20日午前10時56分(現地時間) インドネシア M5,7

1999年8月20日 コスタリカ M6,7

世界滅亡前に、宇宙からの宇宙船に乗せてもらうために、集団自殺したという事件が19970年の3月に米国カリフォルニア州で起った「ヘブンズゲート事件」であった

が、今年も南米コロンビアのカルト集団がUFOに救ってもらうために集団失踪したという報道があったという。しかし、その人達は単に集団生活をしていただけで家族が思い込んで騒いだことによる誤報であったようだ。

UFOが実在する外宇宙からの宇宙船であり、高度な科学力を持っていて、平和的な思想の持ち主ならば、彼らに対して何かを期待するという感情的が起ってくるのは当然だろう。彼らの宇宙船に乗せてもらって、別な世界を訪れてみたいという気持ちは、UFOの実在を確信するならば必然的に沸き上がってくる感情である。しかし、現実には見たいと願っても一生に一度、あるいは死ぬまで全然見られないというのが現実のUFOである。しかも、見たとしても遠くに見て、はたしてあれが本当に宇宙船に類するものなのか、それとも何か既知の現象の誤認なのか、確認のしようがない、というのが実情である。そうした実情を踏まえた上で、現実的な希望や思いを実現してゆくのが正当なUFO道であろうかと思う。まだ目撃していないなら、見るための努力から始まる。

UFOに限らず、努力目標とは現実的でなければならない。そういう点からみると、安易に自殺して魂をUFOに回収してもらい、別な天体で生まれることを夢想するというのは、現実放棄、まさにこの世に生まれてきたことに対する反逆である。地球という自分の所属する世界を放棄した、自分本位の死に方は、可能性の道を遮断するのであるから、死後も可能性はなくなるだろう。そうした意味で自殺とは、自分の所属する環境を少しでも正常な方向へ変えようとして必死の努力をし、その途上で不運の死を遂げるという場合とは、天と地ほどの開きがあると言える。

「世の終り」の前には「ニセキリスト」や「大いなるしるしや奇跡」が行われると聖書におけるイエスの言葉は記されるが、今が「世の終り」に近いのか、過去に繰り返されてきた試練の期間に過ぎないのか、これは誰にもわからない。

■スカイパーフェクTV「まんだらけゾーン」で

古川益三氏と一時間対談・4/16,17,18放映

990年2月末、「OUC山野会長の紹介」ということで、「精神世界の番組づくりの一貫として、3月から試験的に放映する。天宮さんUFOを撮影したりしているそうだから、UFOについて1時間しゃべってもらえないか」との依頼があり、3月7日に大阪梅田のスタジオに何う約束をした。後日山野氏から電話があり、彼の話によると、OUCのメンバーの一人がリストラによる職探しの過程で知った大阪の「まんだらけ」という店の社長とUFOの話をしたことがきっかけという。また、山野氏によると、OUCメンバーの別な一人が『ポーターランド』1997年5月号に古川氏が載っていることを思い出した、とのことで、さっそくそれを見てみた。

そこには「古川益三(ふるかわ ますぞう) 古書マンガ専門店まんだらけ店主 1950年滋賀県生まれ、70年代マンガ家として『ガロ』誌上に作品を発表。82年東京中野に「まんだらけ」1号館を開設。渋谷、大阪にも支店を広げ、年商12億、社員100名のビッグビジネスを展開。トライアスロンの選手として数々の全国大会に出場の経歴。」とあった。

編者は古川氏からの依頼のあと、こんな話があると、さっそく秋田の鹿角UFO研究会駒ヶ嶺政也氏に連絡した。すると、3月4日に駒ヶ嶺政也氏から電話があった。彼の話によると、たまたま衛星放送の番組表を見ていたらそれらしい番組(ショッピング情報の中)があって、第1回

は秋山真人でそれを録画したからビデオテープを送る、との事であった。

2日後に届いたテープ「CSパーフェクTV・まんだらけ・ディープゾーン・秋山真人」を途中まで見た。秋山氏の話はいつ聞いても現実の事より頭の中で組み立てた感じが強い。「写真を撮った」といっても、それをすぐ提示する訳でもなく、あくまで「話」だ。

出かける前の夜、娘が「その人はテレビの「なんでも鑑定団」の鑑定師として出る人だから、写真を撮ってサインをもらってきてほしい」と頼まれた。資料でいっぱいの手提げにカメラまで持つとは考えていなかったが、頼まれたのでカメラに1本残っていた400のフィルムを入れて手提げの資料の上に置いた。

さてこうして1999年3月7日、私は前裁駅から午前8時発の近鉄に乗った。曇り空だったが雨が降ってきた。座席が混んでいたのて立ってガラス窓から外を見ていた。二階堂を過ぎて、ふと空を見るとほぼ正三角の配置で3つの丸い影が見えた。瞬間、「アドバルーンか」と思ったが色彩のない灰色に異常を感じたので、すぐ手提げの上のカメラをつかんでそれに向けてシャッターを切ろうとした。しかし、オートフォーカスのままのため焦点が合わずなかなかシャッターが切れない。それでカメラを手元に戻してマニュアルにして距離を無限にしてからもう一度空に向けて、もう3つの影は仰角が低くなって建物すれすれに2つか1つしか見えなかった。それも、背景の灰色の空とほとんど溶け込むような灰色で、とにかくファインダーにとらえてシャッターを切った。そして最初の見えた位置を手を伸ばして計り、仰角30度とした。しかし、その2~3秒後に仰角は10度以下になっていた。これは確かである。見かけの大きさはとりあえず月くらいとした。これは写真から正確にわかる筈である。

カメラを手を空を凝視する私の行動に「何事か?」とけげんな目を向ける乗客もあった。私にとっても、電車の車内からこれほど集中して撮影したのは珍しい。しばらくの間、カメラを手に窓ガラスに顔を押し付けるようにして上空を観察した。次の駅に着いた時、駅の時計を見ると「8時8分」であった。腕時計はしていなかった。撮影時刻にカメラに内蔵されている表示でもわかる筈である。

一度、窓の前方に似たような丸い影が見えたので、窓ガラスにカメラを押し付けるようにして2枚撮影した。しかし、仰角が低く色も濃いように思えた。これも写真でわかるだろう。時刻はやはり駅を通過した時にみた8時13分ころ。

西大寺に着いた時、窓の上方ギリギリにグリーン熱気球がすぐ低空に浮かんでいた。「さっき見たのは、これなのか?」と思いながら、カメラを窓に押し付けて2枚撮影した。電車が動いて少し角度が変わったので再びそれを撮影した。動きはゆっくりとしている。色彩は鮮やかだが、もしこれが高空にあつたら灰色の空に溶け込むような色彩で見えるのか。また、仰角が短時間で変化したのは電車の傾きでそう見えたのか…色々考えながら大阪に向かった。(後日、これらの物体は熱気球の可能性が大と判断)

雨が降っていたが傘を持たなかったのて、地下街を歩いて待ち合わせの旭屋書店に近い出口に出て歩いたら、すぐ前方に山野氏の姿が見えた。

ふたたび地下街を歩き、アーケードのある歓楽街に出てしばらく歩くと「まんだらけ」の店の前に到着。10時の約束時間だったが、9時30分に着いてしまった。店はまだ閉まっていた。しばらく待ってから別な入り口の自動ドアを手で開けて入る。まだ照明がついてないので暗い。する

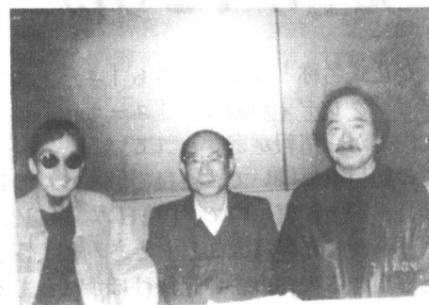
と「そのまま上がってください」という拡声器の声がした。我々は停止しているエスカレーターを上がり、迎えて来た女性と共に最上階の事務所に入った。下を見ると、まるで図書館のように書棚が並び、ガラスケースにはマンガのグッズがぎっしり。正面にはステージがあり、カラオケが出来るようになっている。

3人が座れる幅のテーブルの前に、三脚に固定したビデオカメラを点検中の細身の男性が古川氏であった。名刺を交換して座る。名刺は最近パソコンで作成した。

カメラ操作は女性が担当するが我々の雑談を試し撮りして点検し「マイクの声が小さいな」と、電池の交換を女性カメラマンに指示した。私が真ん中に座り、右手が古川氏、左手に山野氏が座って、録画スタート。私はテーブルの上に持参したUFO写真、カラスケッチ、ビデオ作品、THE UFO RESEARCHERなどを並べて、古川氏の質問に答える形で話が進められた。私は図や写真などを見せながら、今までにない詳細な目撃の説明を行った。古川氏は私に自由にしゃべらせてくれた。内容も打ち合わせはまったくしていないにもかかわらず、あたかもシナリオがあるかのように1時間キツカりに終わった。

古川氏から「売れるものはありますか?」と言われて、THE UFO RESEARCHER、地球版、ビデオを商品とした。彼によると、来年は大々的にやるそうである。なんだか我々も思いきり自分を出せる場が見つかった喜びを感じた。古川氏は、個々の人間性を強く出して行きたいという方針との事。単に「こういう資料がある」「こういう話がある」という仲介者ではなく、全人格が映像と音声で表現されるとなれば、中味の濃さが要求される。

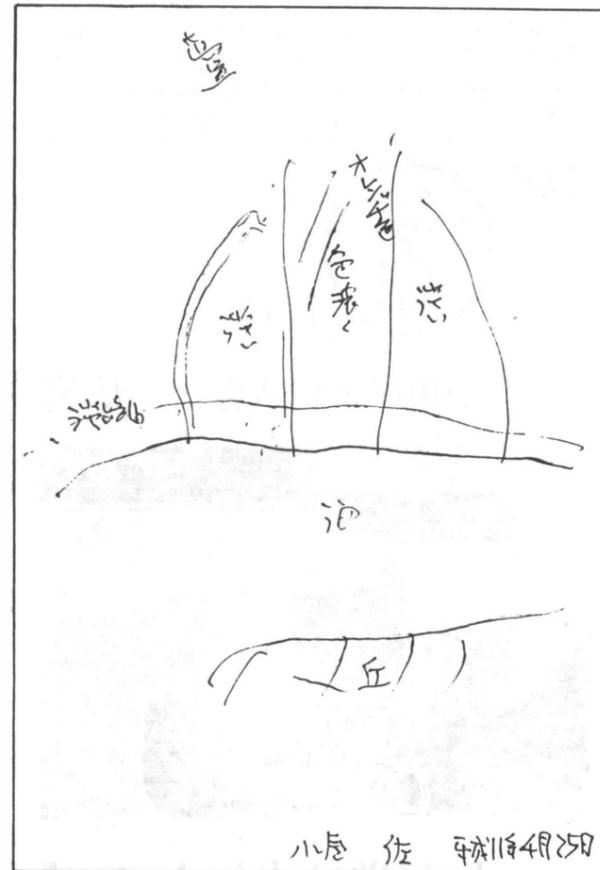
私は古川氏に「今日のは序の口で、まだまだ面白い話あります。」と伝えた。



■左から古川氏、編者、山野氏。(まんだらけ大阪店にて)

■『雇用のしるべ奈良』に紹介される。

昨年6月、毎日放送「昼ナマ」にUFO研究所として編者が紹介されたが、丁度そのころ、編者の勤める小山産業に雇用開発のための企業紹介ビデオの撮影取材があり、編者はOPルームという部署(病院の手術に使う手術着や様々な布など、病院から運搬されてきた当初は血だらけのものだが、連洗という巨大な洗濯工程を経て血や汚れが落とされ乾燥されて、30kg単位で袋に入り次々と下階から上がってきたものをワゴンにあげて病院単位で揃えたり、小さな洗濯機で洗ったOP製品を次々と乾燥して揃える等、一日中動き放しの作業場)で、上がってきた袋を編者が操作してワゴンに落とす様子が撮影された。この収録の数ヵ月後、会社の経理部長が来て言うには、雇用開発の関係者とテレビ「昼ナマ」のことで話題になって、雇用開発の機関誌に、勤労の余暇をUFO趣味に使っている天宮を取り上げたいそうだが、どうしますか?とのことであった。編者は快く承知し、ちょうどテレビ関係のために貸し出していた写真が返却されてきたので閲覧用ビデオと共に部長に託



■発光現象について語る小巻 左氏(天宮宅にて)

■阪神大震災発生に謎の発光現象!

■阪神大震災発生と共に目撃した謎の発光現象 4月25日、「雇用のしるべ奈良」に掲載する記事の取材に、編者宅を訪れた奈良県雇用開発協会の会報編集者小巻左氏は、彼が阪神大地震発生時に見た不思議な光りについて語った。編者は話を録画し、小巻氏に目撃図を描いてもらった。

「その日は神戸に行っていた。最初、下からドカーンという突き上げるように持ち上げられ、それからストーンと奈落の底へ落とされる感じだった。普通ならグラグラときて、地震や!となるが、今まで東海地震や福井地震ではかなりの横揺れを経験したが、しかしストーンと落ちるような事はなかった。また、その時、グォーッという音を聞いたような気もする。気づいたらタンスの物が布団の上ののっかっていた。それらをはねのけて、すぐ外に出た。外に出たら真っ黒で、何も見えない。私は神戸の西部の方にいた。向かいの淡路島の方を見たら、そこだけパーッと光っている。オレンジ色だったか、ちょっと濃い色で、パーッと。どうしてあんなに光っているのか?と不思議に思った。自分で体験するということは貴重なことだ。」

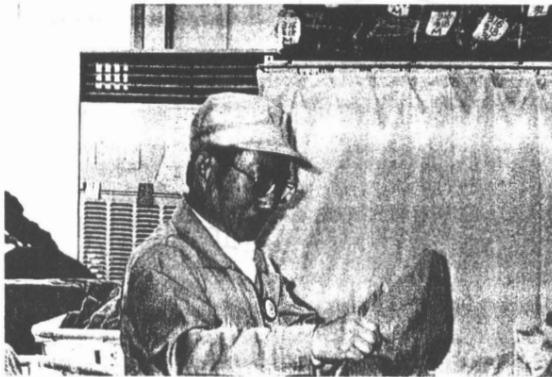
した。その後、部長を通じて「シリーズの最初に扱う」との中間報告があって、しばらく音さたなく、少し心配になってきた。今年になってOUCの山野氏の紹介で衛星放送関係の取材申込があり、3月7日に大阪梅田で収録することになった。そのため貸してある写真がどうしても必要

になったので、経理部長にその事を言うと、雇用開発の方に連絡を取って、3月3日の午後1時に写真返却をかねて取材を受ける事がきまった。

3月3日午後1時丁度、経理部長と老年の小柄な男性が私の部署に昇った。初対面の挨拶をし「(社)奈良県雇用開発



小山産業(株)勤務 天宮 清さん UFO研究者



わが道は未知なる UFO 見上げてごらん

天宮清さんは高年齢者雇用の先進企業、小山産業(株)本社工場(天理市)に勤務している。

東京から天理に転居、昭和62年の途中入社。洗たく部門のオペチームの一員として、これまでのキャリアと実直な人柄で職場での信頼は厚い。

同社の定年は60歳。まだ間があるが、「一日々々を大切に」と充実感を作業服に包んでいる。

その天宮さんにはUFO研究者というもうひとつの顔がある。空を見上げ、自分を掘り下げる研究歴は37年と長い。多感な青年がUFOと出会い、その探索に情熱を注ぐ道程は自分探しの果てしない旅でもある。膨大な資料の山に埋まる自宅書斎で、UFOを語るほどにその目は輝く。

高校3年時、弟が東京、神田の古本屋街で買った「それでも円盤は飛ぶ」(平野威馬雄著)を手にして、アニメ作家の故手塚治虫さん主宰の「宇宙友好協会」に入会。知見が加わることが喜びの青春であった。UFOが縁で妻、ユキさんとも結ばれる。

ユキさんの亡兄は幼時、UFOを目撃、遺作「三つの太陽」を残しており、ユキさんはよき人生の伴侶であり、よき研究パートナーでもある。いま、娘の志麻さんも加わり、UFO研究一家となった。

太平洋戦争前後、アメリカ空軍、民間機が日撃した「空飛ぶ円盤」は軍事用語「UFO」(未確認飛

行物体)が正式名称となる。呼名も「ユー・エフ・オー」がピンクレディが歌った「ユーホー」に一般化され、内外から情報が寄せられている。

東京での初目撃に続いて、奈良で目にしたのは昭和50年5月、石上神宮境内で。「続日本記」34、7月の項に「是夜有流星其大如盆」とあり、こうしたUFOと思われる大和の古い記録はほかにもある。

以来、自ら考案した仰角測定器と遠望カメラを手に観測撮影を続けるとともに国内外の情報収集、分析、記録、発表に地道な努力を続け、「地球外知性痕跡探索」と「The UFO Researcher」(年1~2回)を発刊している。同誌に寄せられた台湾の天文学者、蔡章献前台北市立円山天文台長のUFO目撃談を報じる新聞記事は「星ニシテ星ナラズ、人造物ニ似テ非ナリ」と記している。

UFOとは?。アメリカ空軍が軍事機密として情報を全面公開しないまま未だ確認されていない。

UFOが地球の人類に照射するものは、なにか。5月放映のNHKテレビはUFO体験を「偽りの記憶」とするアメリカでの諸見解を紹介したが、確かなことは地球の破滅をもたらす核兵器廃絶、核実験禁止、大気汚染による地球温暖化防止に早急に取り組まなければならないことだ。天宮さんは「偏見なく見ることを重ねてほしい」と説く。

●寧楽(なら)
奈良の古地名
「みんなが心ゆくまで楽しむところ」
語義は昔も今も変わらない

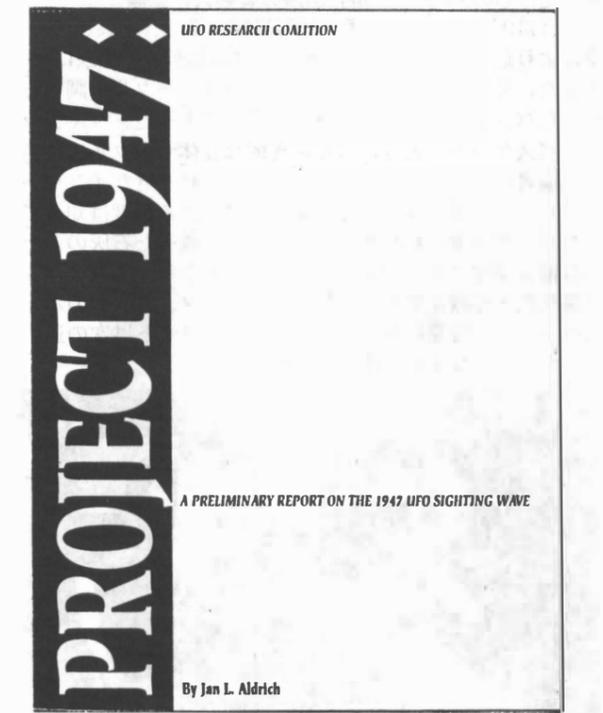
協会・非常勤嘱託 会報編集担当 小巻 佐」とかかれた名刺を頂いた。部長の計らいで会議室に行き、取材を受けた。「UFOとは日本語でどういう意味か」という質問に始まって、この問題に入ったきっかけ、宇宙友好協会に入った事、マンガ家の手塚治虫氏も協会の理事で高額の寄付をもらったことがあること、UFOという言葉もいつ誰が考案したのか、UFOの言葉が日本に広まったのはいつか、日本で空飛ぶ円盤が知られるようになったのはいつか、西日本と東日本のどちに目撃が多いか。空に見られる現象は天文台や気象台が報告を受ける立場だが、その点どうなっているか。米国ならNASAとか空軍とかが公式発表しないのか。また、この方は私の渡したビデオをよく見ておられ、それに基づいて「天空人協会」についての質問もあった。

仕事でもあり、この日は今までになく広い作業場に30台ほどのワゴンに山ほどの仕事がかきて、しかも天気が良いので暑く、時間を気にしながら何とか一通り質疑応答を終え、今日は仕事の写真を持って、後日改めて自宅付近で仰角測定器を持った写真を撮りに来るということになった。

会報は年に4回で7月の夏の夜空と関連づけて、7月の号に取り上げるとの事であった。そういえば今年の「奈良リビング」紙も夏に合わせて編者の記事を載せた。

■『UFOと宇宙人・全ドキュメント』執筆者に「地球版」を送付。その後の経過

返信や資料の提供があった研究者に「THE UFO RESEARCHER」Vol.11 No.1 1999を送った。3月2日米国のJan L. Aldrich氏よりA4判200余ページの「PROJECT 1947:」が届いた。生前の高梨純一氏が電話で「フーファイター専門の研究団体がある、1947年当時を研究している研究者もいる」と熱っぽく語っていた事を思い出した。内容を見るとUFO事件ばかりを記述しているせいか、大変とりつきやすい。持ち歩くにも適当だし、



いつまで続くかわからないが、しばらくつきあってみようと思った。

また、要請に応じて人工衛星再突入の写真やデータ(池

田隆雄氏提供の資料を含む)を送ったスペインのVicente-Juan Olmosビセンテ・ホワン・パレストル・オルモス氏からは、ロサンゼルスで日本人カメラマンが連続撮影した写真を送ってほしい旨要請があり、さっそく複写の焼き増しを送った。10月にお礼といくつかの資料が届いた。彼はUFOの誤認例、特にミサイル発射実験との関連を調べており、このロス連続写真(1987年10月28日撮影)も

「Minuteman missile from the Vandenberg Air Force Base, California」カリフォルニアのバンデンバーグ空軍基地からのミニットマンミサイルであると述べている。また、1976年6月22日にスペイン領カナリア諸島で撮影された強烈な発光は「it was the result of a Poseidon missile launch from a US Navy submarine」米海軍潜水艦から発射されたポセイドンミサイルだと述べている。そういえば、『UFOと宇宙人・全ドキュメント』の307ページでも同じ見解がみられる。学研の写真集「UFO」73ページにも似たような写真がみられる。撮影は1973年3月5日となっており、オルモス氏が対象としている現象に酷似するも、オルモス氏が掲げている写真は「1979年3月5日」となっている。彼の見解に従えば、カナリア諸島およびその一つの島であるグランカナリアGran Canariaでは、ミサイル誤認UFOが何度か撮影されているということになる。

■スウェーデンの研究者から1989年~1995年に発行された機関誌のバックナンバーの一部が届く

「地球版」送付の返礼としてスウェーデンのUFO研究者Anders Liljegrenアーンデシュ・リエーグレン氏から研究団体Archives for UFO Research発行の印刷物「AFUNewsletter」A4判が多数送られてきた。さっそく鹿角UFO研究会から一部返送されてきた「UFOLOGY資料」を送った。この出版物はUFOと航空機との遭遇、クローズアップ情報など格調高い内容で、図解もあり参考になる。とりあえず2冊のクリアブックに収めてあるが、彼らの研究内容を知りたいところである。

■台湾蔡章献先生の紹介で、ポーランドのUFO研究者より協力依頼--各種出版物が届く

9月はじめ、ポーランドのUFO研究団体MCBUFOiZAのRobert K. Lesniakiewicz氏よりUFOと超常現象を扱ったA4判の豪華な雑誌『WIZJE PERYFERYJNE』1996年1号と2号と手紙が届き、手紙の冒頭で編者のことを台湾の蔡章献氏より知ったと書いてあった。

返礼とTHE UFO RESEARCHERを送ると、10月はじめに返礼と2冊のA5判単行本形式の『CZAS UFO』1999年通巻9号と特別号が届いた。ともに内容は高水準と思われる。

Robert K. Lesniakiewicz氏はUFOと核施設事故、環境危機、大変動との関係に関心を持っておられる。これはRobert K. Lesniakiewicz氏からの3通目の手紙に明記されていた。編者も同じ分野に関心があることを書いて、関係資料を送った。また、クローズアップについての寄稿を依頼されたので承知した。英語圏でない国からの手紙は判りやすく、こちらも簡単な英作文をつなげて意味を表わす方向でやっている。本号発行後にクローズフォーメーションに関する英文原稿をパソコンの機械式翻訳の助けを借りながら着手し、年内に最初の原稿を送ることにしている。

UFO現象に対する姿勢は、先のオルモス氏のようにUFOとされた事件や現象をIFO解釈で解決して行くのも道だが、UFO側の意思を読み取って、それに即した分野の開拓も良いのではなかろうか?

Close encounters with unknown missiles



Swedish security police investigates "cigar" sighting

Miniature stealth-like plane over Lake Vänern



■左:スウェーデンAFUから届いたニュースレター。
 ■左下:中国北京科学技術協会から届いたパンダの写真類より
 ■右:ポーランドのUFO研究雑誌
 ■右下:台湾の中華飛碟学研究会のUFO学講座用教材。「飛碟と天文研習」には編者の台湾紀行も全文掲載されている。



- 4, 關於UFO観測装備……………池田隆雄・天宮清
- 5, UFO討論会……………全体参加
- 6, 聯歡会……………全体参加

■「たけしのTVタックル」出演の有名人と懇談
 編者は9月18日夕刻、テレビ朝日収録後、竹本良氏の提案により近くの店に入り、6人で会食しながらの懇談に参加した。英国で長期にわたりミステリーサークルの調査を行ったパンタ笛吹氏からの情報は貴重であった。「マジック・バスケット」と呼ばれる驚異的な立体サークルについて、編者は神原二美さんから迅速に送られてきたインターネット上の大量のサークル情報と共に、ある程度は知っていたが、刈り取られた跡のことや、跡に残った石灰のことや静電気探知による調査など初めて聞く事実を多数、パンタ笛吹氏から教えてもらった。彼はインターネットのホームページでも活発に発信している。彼のサイトは次の通り。
<http://atlas.csd.net/~panta/>



■写真提供:宇和原わこ氏。

■OUC主催「第4回UFOフォーラム」開催

大阪UFOサークル10周年を記念したメンバーの手作りによる、UFOフォーラムが5月2日午後午前10時30分、予定よりやや遅れて開催された。ゴールデンウィークの中日にあったためか、思ったより乳乗車はすくなかったが、奈良県など県外からの来場得者も多く、内容的にかなり充実した内容であった。

講演後の質疑応答も講演内容に関連し、2000年問題には宮本健一氏、オーパーツ関係には栗飯原直子氏、UFO映像分析関係には池田隆雄氏がそれぞれ対応した。また夢の問題や予言なども来場者からの提起と相談があり、これに対して愛媛から参加の津島氏が応えるなど、主催者側、来場者が補足し合って、全体の調和のとれたフォーラムであった。今回、テクタイトの岩石が最新の装置で分析された結果も発表され、その分析を行ったTHE UFO RESEARCHER読者も来場した。懇親会は席に座った形で、お互い年月をかけたUFOとのかかわりの中から率直な感想や意見が交された。

- 以下は中国の研究者に送った文書から
- ☆1999年5月2日開「第4届UFO研討会」在大阪石炭倉庫
 - 1, 祝大阪UFO小組、10周年……………山野とおる
 - 2, 電腦2000年問題(千年虫)……………宮本健一
 - 3, 關於OUT-OF-PLACE ARTIFACTS…栗飯原 直子

P
h
o
t
o

r
e
p
o
r
t



■UFOフォーラムの打ち合わせをするOUC例会
 ■SF映画のカラーコピーの展示物を貼る原稿勇氏。
 ■山野会長を中心に開場前の打ち合わせをするOUCメンバー



■入場受け付けの瀬戸さんと栗飯原さん。
 ■編者が制作した展示の前で語り合う参加者。
 ■今回初めて参加した本誌読者の記念写真。



■開演前のカメラリハーサル中の乾達也氏。
 ■講演と会場をビデオ撮影中の谷脇真澄氏。
 ■「第4回UFOフォーラム」の司会をつとめる広瀬誠氏。



■日本宇宙現象研究会会長並木伸一郎氏、鹿角UFO研究会代表駒ヶ岡政也氏から寄せられたメッセージを朗読する栗飯原さん。
 ■オーパーツについて講演する栗飯原 直子さん。
 ■コンピューター2000年問題について講演する宮本健一氏。

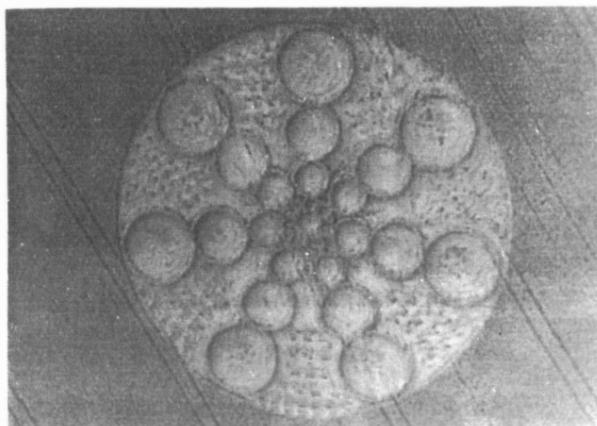


■UFO観測装置の仕組や実際について講演中の池田隆雄氏
 ■休憩時間、西国の津島氏を中心に話が盛り上がる
 ■買金のジェット機やバレンクのレリーフに関して「これらの買金の制作者たちが、当時直接に目で飛行物体を見たわけではない。つまり、現代の飛行機やロケットのように見える模型や図画ではあるが、この形はあくまでも制作者達が、言葉による伝達された内容から再現したものではないか。」また精神的な修行について「宗教的な修行で空中に上るといふ事は、技術的な伝達が既成したとも考えられる。」など質疑応答に交えて見解を示した栗飯原さん。



■長い年月をかけて制作したUFO観測装置について講演した
 広島の池田隆雄氏(日本宇宙現象研究会副会長)と編者。
 ■フォーラム終了後、参加者の記念撮影

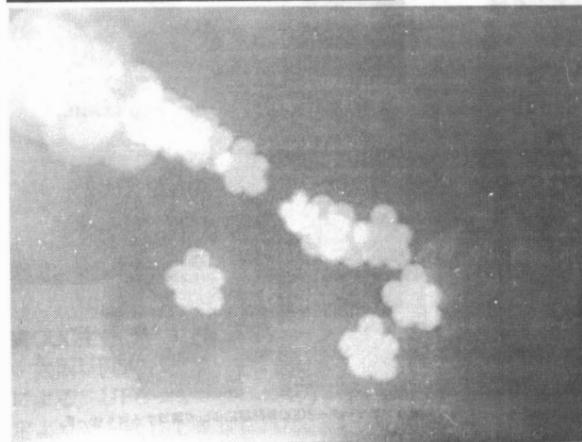
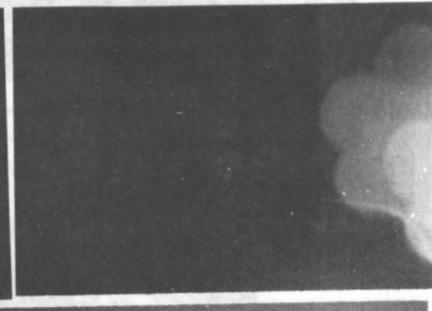
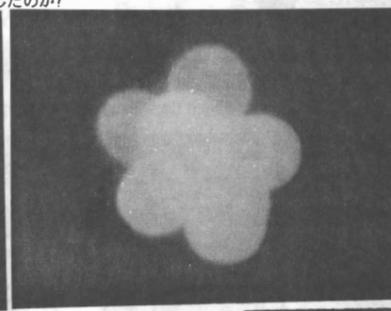
第4回
 UFOフォーラム
 開催



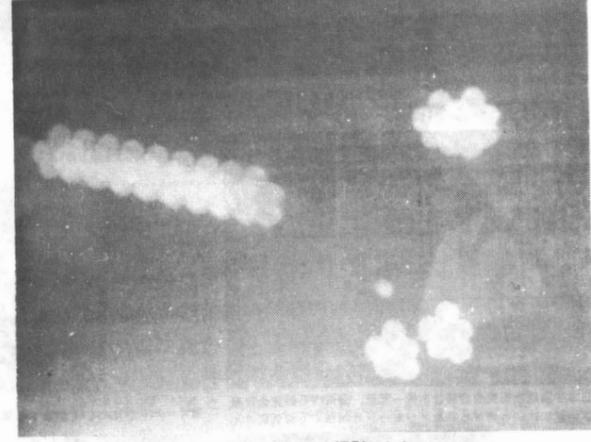
■これが「マジック・バスケット」のサークル。未知のサークルメーカーは、これでもか、これでもかと様々な図形を提示してきたが、いっこうに動かない世界の科学者にザルで水をすくう気持ちを表明したのか?



■「マジック・バスケット」の細部を写した貴重な写真。すぐに農場主によって刈り取られてしまったが、単に麦の畑から、どうやってこの立体的な形を生み出したのか? 技術水準の高さを示す証拠である。



■発光体の映像を静止画と動画をカメラで撮影したもの。



■発光体の映像を静止画と動画をカメラで撮影したもの。

■衝撃! 発光する五角形発光体映像の公開

日本テレビ系(関西では読売テレビ)で10月9日放映された「衝撃レポート30年前にUFO墜落・五角形発光体他」に、英国のミステリーサークルを取材中に撮影されたストロボライト状の発光体映像が公開された。

編者はさっそく、録画したこの映像の静止画面(発光は肉眼ではフトロポのようにしか見えませんが、その瞬間を苦勞して止めると5つの発光球体が合体したような明瞭な形になる)の撮影と動画のバルブ撮影を行い、そのカラーコピーを何人かの研究者に送った。まず編者の撮影した写真が大変良く撮れているとお褒めの言葉を二人の方から手紙と電話で戴いた。編者は「シャッタースピードを15分の1以下にして撮影すれば大丈夫」と説明した。今回は夜間の画面なので8分の1と4分の1秒で撮影。また、バルブは2~3秒間開放して光体の大きさと移動の変化をみた。

他の人からの感想も合わせ一般的この光体は「輪郭が明瞭で作り物くさい」という感想を持つようだ。たしかに発光風船(そういうものがある話)のように見えるが、5

個の風船を合体させた中で、発光ガスを明滅する技術と、その合体風船の糸を持った人が急速に移動する事が可能ならば、ある程度は似たような状況を再現できるかも知れない。

編者がバルブ撮影した場面は、カメラマンが「ロックしている」と言っているフィックス場面と、発光体のそばから一瞬黄色い光が流れる場面の2ヶ所。それらをここに掲載するので検討材料にして戴ければ幸いである。

なお、「旧ソ連圏における墜落UFO現場調査」として紹介された映像については、本誌のS氏より、「写っている軍人の服装や車などがおかしい、と思いついて見ていると、やはり番組の中で軍事評論家が同じ事を言っていました。」とのお便りがあった。

UFOが墜落したという物語りを一本の記録映画風に制作する財力のある組織とは、いったい何者であるのか、非常に興味深い。以前の「外星人解剖フィルム」も同様である。UFO情報の畑から一粒の真珠を捜すのも大変である。

■あのオリバース・キャッスル サークル発生直後の写真を

日本人が撮影していた

1996年8月10~11日に「ジョン・ウェイレイ」という青年が、複数の発光飛行物体の飛行と共に発生したミステリーサークルをビデオ撮影したが、撮影者が姿をくらましたことや、撮影者がコンピュータグラフィックの技術者であったことなどから、撮影された画像が「作り物」だとする評判が世界を席巻した。この現象(つまりニセ物だと信じる傾向にある人の中の現象)について、情報を発信する全体の傾向がそのような思い込みに統一されていったとする見方もある。つまり実際にコンピュータグラフィックの知識や経験がなく

ても、「あれはニセ物だ」と断定して発信することが出来る情報社会の欠点、UFOならば、実際にUFOを目撃しなくても「UFOとはこういう現象だ」と人に向かって解説できる状況を指摘している。確かにテレビ番組で「こうやって作った」とする画像は、どう見てもアニメそのもので、実際の「ジョン・ウェイレイ」映像とは程遠い。そんなにニセ物説が有力ならば、なぜ誰も同じ物が作れないのか? 話や言葉だけで「ニセ物」とする態度を知性の証拠であるかのような、現代社会の欠陥は、誰かが是正しなければならぬだろう。



前置きが長くなってしまったが、上の写真と「ジョン・ウェイレイ」映像を比較してみられたい。

■天空人協会の佐藤修氏・千葉の藤平浩一氏と懇談

テレビ収録の翌9月18日朝、東京駅で佐藤修氏と藤平浩一氏と合流し、横浜へ向かった。昨日夕刻は、東京出張の藤平氏がテレビ朝日の場所まで来ていただきながらスレ違いで会えなかった。

横浜では山手で編者の思い出の場所を歩き、彼らに1960年代の様々な思い出を説明した。また別の場所では彼らの機敏で熱心な行動力を見せていただいた。

佐藤氏からは未公開の素晴らしいUFO写真を見せていただき、編者も英国におけるクロープサークルの写真を見せた。藤平氏から英国におけるサークル現象の調査活動について質問があり、日本のような黒山の人だかりはなく、非常に静かな環境の中で度肝を抜く現象が多発している状況を説明した。

また、編者は核兵器の問題について道を歩きながら語り、駒ヶ嶺政也氏から送ってもらった1960年頃の週刊誌記事を参考して、彼らに重要事項を伝えた。9月30日、東海村で原子力施設での重大事故が発生した。

■目撃報告追加IFO or UFO?

-追伸-本日夕方、近所の公園で犬の散歩中に目撃しました。

残念ながら航空機かUFOであるのかの判定ができませんので、一応「未確認」ということで報告します。

◎目撃者:東京・佐藤禎治

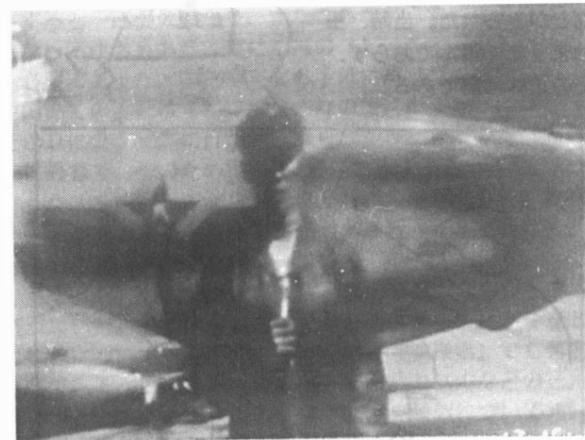
◎時刻:1999年9月12日、17時20分頃、(その後、公園の出口近くの時計で25分を確認)

◎場所:自宅近くの城北公園

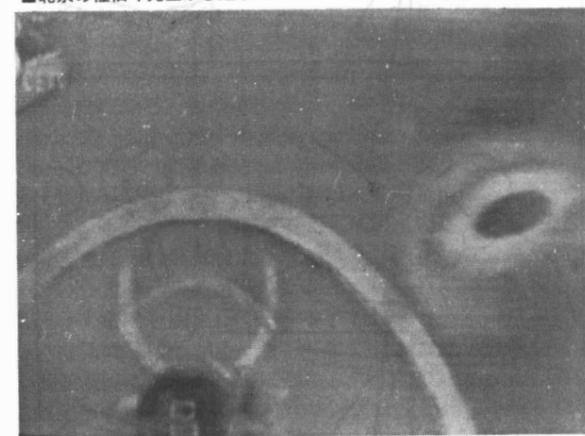
◎状況:犬の散歩中、上空からレシプロのエンジン音がかなり低空で聞こえたため、セスナであろうと判断し、位置を確認しようと林の間から、上空を見回したが確認できず、間もなく、はるか上空を北に向かって飛行している黒



■7月31日夜、天理教子供おじば帰りのパレードの最後にUFOの模型がたくさん出た。



■北京の程伯年先生から送られてきた中国のテレビ番組「UFO」



→漫談」で目撃パイロットの証言とUFO遭遇の再現映像があった。

い物体を確認。(高度は、このあたりで良く見かける旅客機の高度と同じと思われる)速度も同じ。但しその後、同じ高度を西へ向かう旅客機を確認。こちらは西日に光っていたが、翼などの形状が確認できた。また、エンジン音も確認した。しかし、先に見た物体は形状はほとんど黒い点状、エンジン音も確認できなかった。

残念ながら双眼鏡、カメラ、時計などの器材を持ち合わせていなかったため、詳細分析ができなかった。

但し、発見のきっかけとなったレシプロエンジンの音は、この物体とは無関係で、単発、低空(機そのものは(機そのものは確認していないが…)のものであった。

また同高度の旅客機との比較としては、物体は旅客機の1/4~1/5の大きさ。スピードも同じ程度であった事から、戦闘機では無いと思われる。300ミリ程度の望遠があれば、もう少し形状の詳細がつかめ、撮影できたと思われるが、いつも持ち歩いているにもかかわらず、毎回、犬の散歩で持ち合わせていない時に限って目撃するのが残念でならない。但し、航空マニアと自称するからにはエンジン音と、その音量、方向から、おおよその位置、航空機のタイプを判断する自信はあるが、レシプロの音とこの物体は全く無関係であると断言できる。

■テレビ朝日「たけしのTVタックル」の反響

編者の勤める会社では放映一週間前に各部署への伝達事項の中で「天宮さんテレビ出演」が伝えられた。「恥さらしですから…」とか言いながらも、稲美の光体を巡る論戦が出版れば面白いとは思っていた。案の定、そうした専門的なやりとりはすべてカットされて面白い場面だけが放映された。しかし、見た人の反響から、この放映がきっかけでミステリーサークルに関心を持ってくれたように思われ大変嬉しい。

まず当日放映中、「天宮さん、相変わらず活躍しているようで、番組を見て大変感動した」と近県から。続いて東北から「ずいぶん頭が禿げたな。あまりしゃべらなかつたが…」との質問。「大幅カットされたんだ」と返答。九州からは「テレビ出演ご苦労様でした」と労いの言葉。未知の若い人からの電話は編者が外出で詳しい感想は聞けなかつた。

翌日は秋田の駒ヶ嶺氏より感想の電話を戴いた。東京の旧知からは「元気でやっている様子、見させてもらいました」と励ましの声。

会社では、妻と編者が20人ほどの同僚、上司から近隣に知らせてくれた様子や感想を聞いた。以下それを記録してみた。

●「この間、『ハイ昼ナマ』で天宮さんを見た主人は仕事で見られなかったが、私は娘に電話して教えた。」

●「会社の人が出るからと、親戚中に電話した」

●「天宮さんの紹介の内容と発言内容が釣合とれてなかつた。天宮さんが話はじめると途中で切られていたようだ。腹が立った。」

●「UFOだけのあの収録は何時間だったのですか?」返答「UFOバトルで1時間半です。それをちょっとだけ見せたもの」

●「天宮「昨日はオソマツ様でした」上司「いやあ、たいしたものだ」

●「あの反対派メンバーじゃ、大変だったね。あれだけのメンバーの中で堂々としていた。とてもよかった。」

●「8時に来客があり、よく見られなかつた。2、3度ちょっとつけると隣の人(パンタ笛吹氏)が話していた。ああいう人とやっていたのね。」

●「きのうテレビ見ました。私は大槻教授が好きなんだけ

ど、今回ちょっといいかげんなことを言ってたな!」

●「お父さん、男前に映っていたね。うちのお父さんもじいっと見ていたわ!」

●「きのう、テレビ見させてもらいました」

●「男前に映っていた。テレビに出るだけでも大したことだ」

●「天宮さんテレビ見たよ。お風呂に行っていたが、時間が迫ってきたので、急いで上がろうとしたら『なぜそんなにあわてているのか』と知人に聞かれ『うちの会社の人がテレビに出るので、早う帰らなくてはいけない』といい、帰って来たらすぐ8時になり始まった。」

●「きのうテレビ見たんだけど、途中から見たので、いつ出るかと見ていたら、とうとう出なかつた。最初の方だったんだね。」

●「話し始めたら途中でさえぎられて、天宮さん気の毒だった。何回かテレビに出て、テレビ局と仲良くなりたいいけないのかな!」

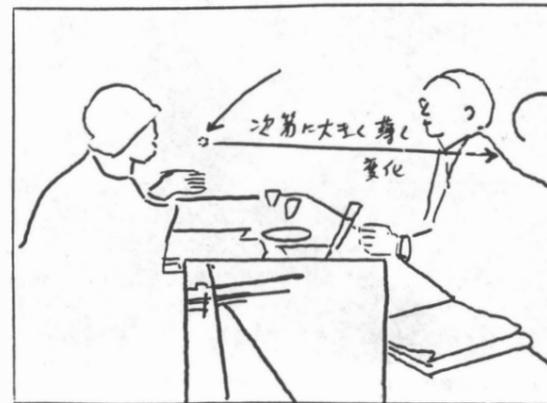
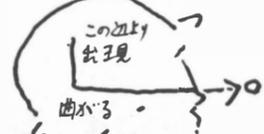
●「また葉書で「テレビ見ました。ほとんど話してなくて良かったです。」との感想もあり。」

■「まんだらけ」衛星放送「デープゾーン」の

OUC山野会長と古川社長の対談中謎の小物体が乱舞!

4月1日~4日に放映されたOUC(大阪UFOサークル)の山野とおる会長と「まんだらけ」の古川益三社長との対談中、図のような動きをする小さな白い物体が映っているのを天宮志麻が発見。編者と妻もこれを確認し、山野氏と古川氏に知らせた。またこれ以外の場面でも、例えばテーブルの上の書類から現われて

天井に向かう半透明のものなどがみられた。当時、虫はまったく飛んでおらず、その正体は謎である。



1999年4月10日~11日

広島県庄原市葦嶽山「ピラミッド」に登る

■なぜ葦嶽山に行くことになったか

今年はじめ、台湾の中華飛碟学研究会(UFOLOGY ASSOCIATION)の劉紹賢理事長より、1月から6月まで中正航空科学館で開催される「台湾UFO展」の案内が届いた。また、添付の手紙には編者を招待したいので来られる日程が決まったら通知してほしいとの事。

当時の私の職場では平日の休みはせいぜい1日しかとれない状態であった。(現在は幸い、私に代わって仕事の出来る人材を指導中である。少なくとも10日間位私が休んでも支障のない体制を目指している。)

結局、開催期間中では5月の連休しか機会はない。5月2日は大阪で「UFOフォーラム」があり、行けるのは5月3日から5日までしかない。まず、台湾の観光パンフから日本アジア航空の便をきめて、会社の休憩時に電話で交通公社に航空券を申込み、予約がとれた時点で台湾の劉紹賢理事長に手紙を書いて日程を知らせた。

その直後、連絡用にファックスの必要性を感じ、以前Joshin電機にプリンターのインクを買いに行った時に見た「現品限り」のbrotherの商品を買い取った。後日、有志からの協力金(渡辺留治氏からの寄付)を手に、その店に行き、まだ売残っていたbrother750TAを購入し設置した。(いままではパソコンを通じてFaxを受け取っていたが、相手の機種によっては読みにくいのと、プリントすると一部が欠けたり、またこちらからすぐ手書きで送れない不便さもあり、更に手紙のコピーをすぐとるためにも必要であった。国内や英文の手紙はパソコンに残るが、中国あての手紙はすべて手書きなので、出すたびにコピーをとりコンビニに行かねばならなかつた。雨の日はコピーに最悪で、そのため投函が1日遅れることもあった。ファックスを設置してから、交通公社とのやりとりや、台湾からの連絡、また台湾への連絡や、最近「まんだらけ」という会社との連絡で役に立っている。)

まず、4月3日に元台北市天文台長の蔡章献先生から手紙が届いた。そこに、何願榮氏が台湾と日本のピラミッドの比較について研究中であり、既に『飛碟探索』でも発表されているが、広島県の葦嶽山や富山県の立山などの三角形の山と、台北の七星山の金字塔遺跡の類似について共同で記者会見したいので写真など資料はないか、といったことが書かれていた。また、最近テレビなどでも取り上げられている沖縄ムー大陸説と関連した台湾の海底遺跡問題もあり、私なりに考えてみる価値はあると思い、とりあえず関連資料のコピーを蔡章献先生に送った。

そして、こんどは中華飛碟学研究会の何願榮理事長よりワープロで打った手紙と、カラー写真を取り込んでカラープリンターで印刷した「台湾と日本文明金字塔の比較研究」というピラミッドに関する文章が届いた。5日、会社の休憩時にそれを読むうち、やはり「国際記者会見で発表したい」との一文に出会った。「これはとにかく、葦嶽山に行って現場を確認しておかなければ、台湾に行けない」という気持ちになった。帰宅して妻に「台湾に行く前に、広島県の葦嶽山に行くことにした。」と告げ、私はこの方面には詳しくないので、以前「サンデー毎日」に連載された日本のピラミッド特集を3冊の冊子にとじたものや、武内裕著の「日本のピラミッド」などから葦嶽山に関するペー

ジをコピーして読み、状況をイメージして準備を開始した。水曜日に近くのコンビニで「旅王国・広島」と時刻表を買い、葦嶽山に行くための最新情報を集めた。その間、「UFOフォーラム」で使用するスライドの作成や、「まんだらけ」の山野さん放映ビデオに映っていた映像の文書化作業はさんだので、現地への問い合わせや予約の電話はいつも会社の休憩時間となった。

「いつ行こうか? 早いほうがいい。今週の10日の土曜日は休みだ。金曜の夜に新幹線で出来るだけ近くまで行って宿泊し、土曜日に現地へ行くのはどうか。現場までどうやって行くか。タクシーはあるか。それとも誰か車持ちを誘うか?」

10日の予定をまず台湾の蔡章献先生に国際電話することにした。以前、「いつか役に立つだろう」と国際電話のかけ方を数年間「発送リスト」の裏に貼ってあった。それを見ながら番号を回す。私にとって初めて国際電話である。蔡章献先生が出たので、「10日に広島県の葦嶽山に行きますので、何願榮様に伝えて下さい」と伝えた。

4月8日木曜日の午前の休憩時に、まず観光本「旅王国・広島」で見た庄原市商工観光課に電話して葦嶽山に行く方法について聞いた。JR備後庄原からタクシーで行くしかないという。「レンタカーはあるか」と聞くと「備後庄原の一つ手前の駅近くにある。」とのことで、電話番号を覚えてもらい、そこへ電話する。すると、その経営者らしい男性の話では「JRより高速バスのほうが安い。庄原インターで下車すれば、そこへ迎えに行く」との事。「それでは、どのバスで行くかが決まったら連絡する」と告げる。そこで休憩時間は終了。次の昼の休憩時間は図書館に行き「中国道路地図」を借りた。食事を素早く済ませテレホンカードで電話できる社内の公衆電話へ向かう。

「さっきバス会社を聞かなくて。時刻表に該当する便が見当たらない。バス会社はどこか?」と聞くと、女の事務員は「阪と書いてある」と言うので、「それなら阪神バスだな」と時刻表に載っている予約受付に電話。すると「梅田発の始発は満席だが、新大阪発ならまだ席がある」というのでそれを予約した。再びレンタカー屋に電話して、庄原インター到着を連絡したのは午後の休憩時となった。そして、帰宅してすぐ庄原グランドホテルを予約した。予定表と予算表を作成、妻に提出する。予算は5万。4月の生活費引き出しを兼ねて銀行へは翌日に行くことにした。

この日の昼間、中華飛碟学研究会劉紹賢理事長より電話があり娘の志麻がでた。英語で当方のファックス番号を問い合わせてきたもので、電話番号と同じだ、と言ったが通じないようだった、と娘の話。「父は6時に帰宅すると、言ったから、また電話が来ると思う。パパ、ちゃんと言語で話さなよ。向こうは明瞭な英語だったよ」と娘が言うので、和英辞典で作文する。また、滞在先のホテルを問い合わせたので、この機会に聞こうと、それも何度も口にして覚えた。しかし、8時過ぎても電話がない。それでは、こっちからファックスを送ろう、「我的FAX No.は81-07436-3-2539 TELEPHONE No. 一様 天宮清」とマジックで書いて、劉理事長の名刺に記載された番号を回したが、「この番号ではダメ」というKDDのメッセージが流れた。蔡章献先生の番号と比較すると「886」

がぬけていた。それを入れてダイヤルすると、今度は「…ゼロをとってダイヤルして下さい」とのメッセージ。それで「03」とあったのを「3」だけにして再度ダイヤルすると、紙が入りファックスが送れた。そして、その夜のうちに劉理事長から2ページのファックスが届き、そこに滞在ホテル名とアドレス・電話が記載されていたので、すぐJTB天理支店にファックスを送った。

■近畿・中国一帯は雨の予報

金曜日にはフィルムの購入と器材の準備、8ミリビデオカメラの充電を開始したが、テレビの天気予報は明日の中国近畿一帯は80パーセント雨とでていた。妻が強く延期を提案した。しかし、ここまで来た以上、後戻りは出来ないと雨具の準備を始めた。とにかく撮影器材を守らなくてはならない。以前、シャッターボタンの上にコーヒーを一滴落としたために修理に出したことがある。器材の防備や雨具で小さなリュックはいっぱいになった。2台のカメラの片方に300ミリ望遠を着けていたが、少しでも軽くするため、望遠を外して広角に着け替えた。ビデオカメラは充電を開始したものの、雨の中で果たして使えるか? となかなか決心がつかなかった。

現地での車の運転も不安はあった。私の身体が記憶しているクラッチとチェンジレバー式の車ではなく、たぶんオートマ車になるだろうが、10年以上、ほとんど運転していない。山道を無事に走れるか? 「金をかけて行っても、雨や曇り空では画面が暗くなり、写真を撮っても使えないものにならないのではないか?」などなど、寝付けない夜に沸き上がるのは、不安材料ばかりであった。

■とにかく葦嶽山に向かって出発!

1999年4月10日朝5時半、外は予報通りの雨。しかし、思いきって充電したビデオカメラを持った。テープは60分。

午前6時25分、リュックとショルダーバッグに器材と冷蔵庫からの飲み物と食料を入れ、ビニール傘をさして自宅を出発。前裁駅6時47分発に乗車して、難波に7時45分着。7時49分難波発で8時05分新大阪着。阪急バスの切符売り場で、時刻表を見ながら帰りのバスをどうするか考えた。「やはりバスで帰ったほうがいい。」「もし今日が雨で撮影出来なかったら、明日撮影しなければならぬ。なるべく余裕を持とう。現地出発は午後3時4分がいい」と決めたところで、私の番がきたので、予約の9時40分発を買ってから、次に「帰りの切符をまだ買ってないので、ここで買いたい」と11日午後3時4分庄原インター発を調べてもらった。運良く空席があり、切符が買えた。

10時09分西宮通過。10時27分直線状の濃い雲を見て昔のハヨピラを思い出す。10時31分、雨が止み遠くの雲の切れ間に青空がのぞく。11時38分ふたたび雨。12時05分強い風と本降りの雨。バスも強風にあおられて揺れる。1時37分、霧が立ちこめ視界100m程。反対車線がかすむ。1時39分、本村に入る。霧が薄れ晴れ間がのぞく。午後1時45分庄原インターに到着。バス停すぐ裏の階段を下りて、地上の道路に出ると、それらしき車が停車していたので、近づくと「天宮さんですか!」と向こうから声をかけてきた。さっそく営業所へ向かう。ほとんど道なりの直線を走って到着。数台のクレーン車がずらっと並び、1000万前後の中古マイクロバスや600万のベンツがまるで放置されたように並んでいる。値段の表示もくたびれた感じ。事務所の中で2日分の使用料を支払い、図書館で借りた地図を拡大コピーしたものを提示して、道順を聞く。頭の中に要点を記憶してなんとか行けそう。そして車(ホ

ンダ・インテグラ)を前に…「実は、ここ10年ほど車を運転していない。しかもクラッチのあるやつしか知らない。」「オートマは全然乗ったことないんですか?」「一度だけ、芦屋の社長のクラウンに乗ったが」といった会話がなされた後、「右足だけでアクセルとブレーキを使って、左足は絶対使わないように。」などの注意を聞き、少し広い敷地をバックしてUターンした後に道路に出た。

空は曇天で「今日は現場までの行き方を覚えるだけでいい。また車の練習をかねて…」と独り言を言いながら、183号を東に向かう。葦嶽山は庄原市の東のはずれ、総領町との境界にある。ほどなく左手に目標の消防署と右手に

「日本ピラミッド」の看板がチラリと目にとまり、「ここを右折だな」と言いながら右折。432号線を南に向けて走ると、Y字交差点で左の道に向けて「日本ピラミッド」の標識。地図によるとここは赤川という所。左の道は23号線となる。これからどのくらい走ればいいのか距離感がわからず、23号を不安をかかえながら走行。ようやく農家の婦人が見えたので停車し「葦嶽山はまだ先ですか?」と確認する。「まだ先。店屋があるから、そこを左に折れて」と教えてもらう。

しばらく走ると「ピラミッド」と赤い文字で大きく書かれた白く四角い看板があった。そこを右に折れて進むと、山道に入った。道幅は狭いが乗用車なら余裕がある。しかし、対向車と出合ったらカーブなどの道幅のあるところにどちらかがバックしなければならない。幸い対向車とは出合わず、左に登る新しい舗装道路の手前で停車。「この道を上がるのだろう」と言いながらかなりの勾配を上る。エンジンの力が強いので楽である。途中、駐車スペースのある空き地があったが、かまわず進むと舗装道路の終りに大きな看板がありここが「灰原ルート」の登山口。時刻は午後3時30分、車をジャリの空き地に駐車し、パンと飲み物で簡単に腹こしらえをして装備を雨天用にして登山開始。空は暗く、今にも雨が降りそう。三脚を立てて車と共に記念撮影。広いジャリ道を少し歩くと、細い山道の入り口にきた。標識に「葦嶽山山頂まで1600m」と書いてある。丸太の階段を登るようになっていく。橋を渡るなど変化のある散歩道といった感じ。しかし霧がよく見えず、周囲の景色もかすんできた。そしてついにパラパラッと雨が当たった。「今日はこれで終りにしよう」と言いながら下山。

ホテルまでは何回か道に迷った。人に聞いたりしながらなんとか午後4時40分、ホテルに到着。駐車場に車を置いて、近くの「ジョイフル」の食堂でカツ定食を食べる。これが今回の最高の食事。750円。ホテルにチェックインする前に弁当屋で夜食用の握り飯と飲み物を買う。とにかく、今日は車の練習と登山口の確認で、明日晴れば6時か7時に出発しようとする。ホテルではロビーの電話帳で「サンデー毎日」に出ていたUFO目撃者の住所と電話番号を調べた。しかし、今回コンタクトするのは余裕がなく無理と思われた。

■葦嶽山と鬼叫山の巨石

4月11日午前6時起床。身の回りの整理と晴天用の装備、つまり雨具などは車に置く装備にして、7時にホテルを出発。(この時点で走行距離メーターは74.5km。これは前日ホテルに向かう途中で迷った分が相当含まれるので、ここから最終までが実際の道のりの距離数になる。)

一人で未知の場所に行くのは慣れていないが、明日は無事に会社に出勤しなければならない、という義務感から、どうしても何事も急ぎの動作になりがちである。特に食事の

時間があったくないので、どこかに開いている店でパンか弁当を買おうと捜しつつ走った。幸い「ピラミッド」と赤い文字の看板のある右折の手前に店があり、朝早くなのに開いていたので、弁当とパンを買った。ついでに「葦嶽山の絵葉書は置いてませんか?町で捜したが売ってない。」と言うと。「あります」と言って「謎とロマンの日本ピラミッド葦嶽山」と書かれた三つ折りリーフレットを一部くれた。見るとカラーで巨石の紹介やUFOの文字まであり、庄原市の正式の案内であった。「これはいい。実は台湾の人にもあげたいので、余分にほしい」と言う、たくさんくれた。これはありがたかった。

山に至るまでの様子をビデオに撮るために、片手にビデオを持ち回りながら片手でハンドルを操作して山道を登った。崖縁もあり、危険だが何事も練習である。途中の平地でもこれを試したので、やや自信がついた。カーブミラーはあるが念のためハンドルを回す腕の肘を押し付けてクラクションを鳴らしつつ走った。

7時55分、登山口到着。再び記念撮影。前日の登山口の手前にもう一つの入り口があり、このほうが正規のルートと思われた。どうも急ぎ足となるので息が切れる。また急な勾配もある。雨上がりであり、水たまりもある。8時23分、山の途中で四角ばった岩を見つけて、撮影と測定を行う。四角い岩が三つ、並んだようにあるのは、この付近の岩の特徴なのか、古い時代の人為的な配置や加工なのか、単に見ただけでは見当がつかない。

やがて鳥居が立ち、休憩するような木製のベンチのある場所にきた。そこから鳥居を通して前方に三角形の山が見えた。「あれが葦嶽山なのか?よくわからんなあ」と独り言を言いながら撮影を開始する。やはりビデオカメラを持ってきてよかった。とにかく写真のフィルムは12+36×3で120コマ程度だが、ビデオならバッテリーの続く限り静止画像がいくらでも撮れる。

山道はその三角形の山に向かって登っていた。やはり、これが葦嶽山なのだ。随所に「山頂まで何m」の標識があるので気分的に安心である。8時41分、ようやく平らな山頂に到着した。登山口から46分かかっているが、私の場合、途中で撮影したり、ビデオカメラを固定して道に戻って登る自分の姿を撮影したり、岩を測定したりしてきたので、やはり案内の通り「30分」が適当な時間と思われる。

葦嶽山の山頂にはこの山の云われを記した看板のほかは何もない。この山を「日本のピラミッド」としたのは酒井勝軍氏で昭和9年のこととされている。彼がなぜこの山についての情報を得たのか、について1984年7月29日号「サンデー毎日」連載「大追跡日本のピラミッド第5回、舞台は広島へ葦嶽山の巨石群にまつわる驚愕の証言」によると、大正の初め、出雲から来た葉売りが謎の情報をもたらしたことから始まっている。葉売りはこう言ったという。

「後醍醐天皇の書き物のなかに、神武天皇の墓にはクサビを根元に打ち込んだ大きな石柱が立っていて、そのてっぺんにおわん型の穴があいている」

この話を耳にした中にそれと同じ石柱を見たという村人がいて、村人たちは「天皇の墓なら宝物が埋まっているにちがいない」と石柱や屏風状の岩を倒してしまったという。

この話を地元の代議士から聞かされた酒井勝軍氏が、現地を訪れて、その巨石から見た三角の山がピラミッドであり、巨石は山を拝する祭壇だと断じたというものであった。

そして、葦嶽山の山頂には当時「太陽石」と酒井勝軍氏

が命名した岩があったという。たしかに、当時の写真といわれるものに後ろ姿の酒井勝軍氏のそばに人の頭3つ分ほどの磐座風の岩が映っている。その周囲にストンサークル状の岩が配置されていたと酒井勝軍氏は言ったのだろうか?。しかし、酒井勝軍氏は「ピラミッドが建ってから何万年もたってしまったので、太陽石は風化してよくわからないのだ」とも言っているようだ。とすると、彼が訪れた時、中心と彼が思った石のみがあったのか?。とにかく、この「太陽石」の痕跡がないのがおかしい、という説もある。

葦嶽山山頂の看板を以下に紹介する。

日本ピラミッド「葦嶽山」あしたけやま(815m)頂上
この山はどの方向から見ても三角形に見え、その山容はこの山が神体山として崇敬されたことをしめしています。

昭和九年 ピラミッドの研究者「酒井勝軍(かつとき)」という人がこの山頂から直径約3米の太陽石とそれをとりまく円形と方形の磐境(いわさか)を発掘し尾根続きの鬼叫山(ききょうざん)(東北方へ約150米)に方位石や供物台と呼ばれるドルメン等があることから世界最古の(約二万三千年)ピラミッドで、この葦嶽山はその本殿、鬼叫山は拝殿であることを発表し、天下の衆目を集めました。

その後、この説を異端邪教の類とみなした当時の国家権力によって頂上の中心石、敷石等は破壊離散してしまったといわれ、今は見ることが出来ません。

鬼叫山の巨石群は、古代縄文期にもさかのぼることのできる巨石信仰の古跡であり、鏡岩は平滑な岩面が日、月光を反映し「輝く神」として信仰の拠点とされ、神武岩はその前衛として古代人には神の摂理をしめす偉観であったと思われる。

この古跡は 近隣の帝釈峽の縄文文明の時代・地域を背景とした壮大な聖域だったのではないかと…昭和五九年八月この地を訪れた歴史学者古田武彦ふるたたけひこ氏の推論である。

庄原市観光協会

この看板を読み上げながらビデオに撮り、巨石のある鬼叫山(ききょうざん)に向かうことにした。鬼叫山は葦嶽山のすぐ隣で尾根つづき。かなりの急勾配なので、撮影器材や食料の入ったショルダーバッグを背中にかつぐ形にして、木の幹につかまりながらゆっくりと下った。葦嶽山を下山して鬼叫山に登る。途中に屋根つきの休憩所が設けられていた。そこに「日本ピラミッド」と書かれた大きな看板があり、葦嶽山と鬼叫山にみられる巨石の配置が図解されていた。

鬼叫山に登り始めると巨石が見えてきた。それらをステルカメラとビデオで撮影し、スケッチを手帳に記して巻尺で測定する。

写真は天候が問題である。上空の雲は強い風に流されて刻々と変化し、時に陰り時に陽光が射す。この陽光の照っている時に撮影できれば良い写真が撮れる。まず「ドルメン」と呼ばれる平らな石に出会った。看板にこう記されている。

■ドルメン(供物台)

机のように巨石が重ねてあるが、この巨石構造は世界各地の古代文明の遺跡と同じもので、この場所の様子が葦嶽山に供物を捧げたように見えるところから供物台の名前がつけられている。

その岩の上に近年のものと思われる陶器の器とさい銭があった。そのテーブル状の岩を通して葦嶽山を撮影する。

タイマーを使って私の顔も入れてみた。ドルメンから見た葦嶽山は見事な三角形で、撮影位置を変えて縦、横の構図で8枚も撮影してしまった。

さらに上に登ると、よく雑誌のグラビア等に出ている四角い石柱や巨大な「鏡岩」と呼ばれるもの、方位石と呼ばれる十文字にすぎ間のある岩などが点在する岩場に来た。一見して「これは一つの世界だ」と思った。自然の造形とはいいがたい。不思議な雰囲気だけをたよわせている。周囲に人影はないので、荷物を方位石のそばに置き、カメラだけを手に持って陽が射す瞬間を狙いながら岩場を動き回ってそれぞれの岩を撮影した。残念ながら、35ミリの広角では思ったような構図にならない。特に鏡岩をそれらしく撮影するには、空中から撮影しなければ良い写真にはならない。斜面の足場のギリギリの立ち木に背をもたれかけて何とかフレームに収めるが、どうしても中途半端な構図になる。

スチル写真を撮り終えて、次にビデオ撮影。器材を首にぶらさげると岩にカメラをぶつけるので、手にいつも持つが、岩の斜面で滑ったとたん、あやうくカメラを岩にぶつけそうになった。その代わり手をしたたか打った。軍手をしていたので大事には至らなかった。

9時24分に撮影を終了し、巻尺とノートを手で測定にかかった。一人での作業なので、巨大なものを計るのは大変である。石柱は途中の足場に乗って上からの長さ、下から巻尺を垂直にして計った長さをプラスした。どこまでが何センチなのか、目印となる岩の筋やひこみを覚えておいて計った。さいわい風がなく、巻尺を岩に当てながらゆっくりと垂直に伸ばして、折れ曲がると、再度伸ばして安定した瞬間の長さを覚えてから岩場に置いたノートに記入した。うっかりして巻尺を手放した時はハッとしたが、コロコロと転がった巻尺は、立ち木の根元にかぶさっている草の端でかろうじて止まった。

いま思うと、多くの反省点がある。陽が陰りだすと、不安になり、早く作業を終えなければという焦りが、ドルメン石組のフカンによる全容写真を撮り忘れた。ビデオと交互でやっているため、撮った構図の記憶が錯綜したらしかった。

方位石の上に持ってきた磁石を置き、そのズレ具合を撮影したが、磁石を添物のように小さく撮ったのでわかりにくい写真になってしまった。やはりスケッチも同時にすべきであった。

また、夢中で撮影していて、いつの間にかフィルムの残り枚数が少なくなっているのに気づいて、あわてて中止した。フィルムは安いしかさばらないので、もっと余裕を

編集後記

■今年は編者にとって収穫の多い年であった。UFOとの遭遇はどうだったか…?残念ながら報告するほどの顕著な目撃はなかった。しかし、気になる目撃はあった。最近では10月24日正午頃、宅急便で神原二美さんからメキシコの紀行文とビデオテープ等が届いたので、ビデオを家族で見てから、午後2時頃、原版のコピーをとるためバイクで出かけた時のことである。空は快晴だった。25号線に出る手前で信号待ちの停車するとすぐ、北西の青空の中に黒くて丸っぽいものが見えた。仰角は高く40度ほどか。かなり小さく、南に向けて移動していた。見慣れている高空の鳥には思えない。ゆっくりと流れていく。観察はヘルメット越しだが、最近買い換えたので汚れはない。視野の端に

持って用意すべきであった。

また、それぞれの看板の説明を一枚づつきちんと撮影すべきであった。看板は倒れて下を向いていたり、単に立てかけてあったりなので、看板を外した写真を撮り、看板は別に撮る方法もあった。

また、石柱の頭部にある楕円の窪みに溜まった雨水を持参したトイレットペーパーで吸い取って、その底の様子を近接撮影したり、底の深さを測定すべきであった。「深さ何センチ」とは物の本に出ているが、何事も自分の手で確認するのが、UFO研究家の面目である。うまく車を運転できるか、晴天の条件で現地にたどり着けるか、といった問題をクリアした安心感と、急変するかも知れない天候に対する不安が、いま一つの踏み込み意欲を相殺した感じだ。予定から実行までの時間的余裕は確かに短かった。しかし、日頃の訓練が瞬間の本番に役立つUFO研修者としてはまだまだ未熟である。

以下にそれぞれの岩の説明を記す。

■神武岩(屏風岩)

神代アヒル文字が刻まれていたというこの岩一帯は大正の初期神武天皇の財宝が埋められているという噂が流れ、大勢の人が押しかけて石柱を倒して宝を探しむまわったために、今ではこの一本しか立っていない。

■方位石

岩の切れ目が東西南北を示すといわれているが、現実には30度ズレており、また縦方向の切れ目が夏至線と一致することから、方位は切れ目でなく、石そのものが示していると推論する人もいる。

■鏡岩

神武岩の上の穴と真南を結ぶ線は45度の角度でこの岩に届く。かつては、穴に光る玉がはめこまれ、光が鏡岩に反射していたとも伝えられ、一種の光通信装置だったのではないかと推論されている。

■獅子岩

ライオン岩とも言われるこの岩は、冬至のときの日没方向を向いており、専門家の調べでは、自然の摂理や亀裂とは考えられない線で刻まれているようであり、風化の具合から人の手が加わった可能性があるという。

■鳥帽子岩(観音岩)

フィルム切れのため、説明文はビデオに撮影した。この岩の表面に「天」という文字が彫られてあったが、新しいものである。それもビデオ撮影した。 天宮 清



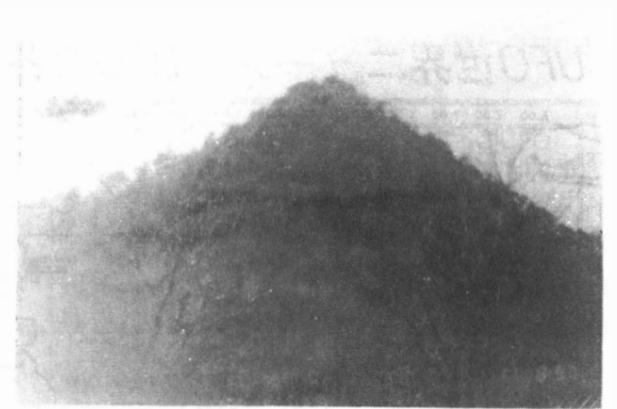
見るとよく見えた。しかし、信号が変わる時に目を離し、見失った。双眼鏡で形状を確認出来たらと残念である。

■「TVタックル」の出演のおかげで、会社の中でいろいろとUFOの話題があった。また出演した皆さんとのつながりも出来た。さらに親しく文通させて戴いている方からの励ましや慰めが有難かった。反省すべき点や不満な点など、今後の参考にしていきたい。

■1999年の話題は、なんといっても世の終わりが来なかった事か。本誌も志半ばである。UFOの謎に踏み込んでまだ間もない。2000年は編者のUFO研究40年記念と天空人協会の催しをかねて、東京で「天空人報告会」を開催する希望でいる。予定は6月25日の日曜日。本部の佐藤修氏との連携である。



■葦嶽山の登山口にある駐車場で。



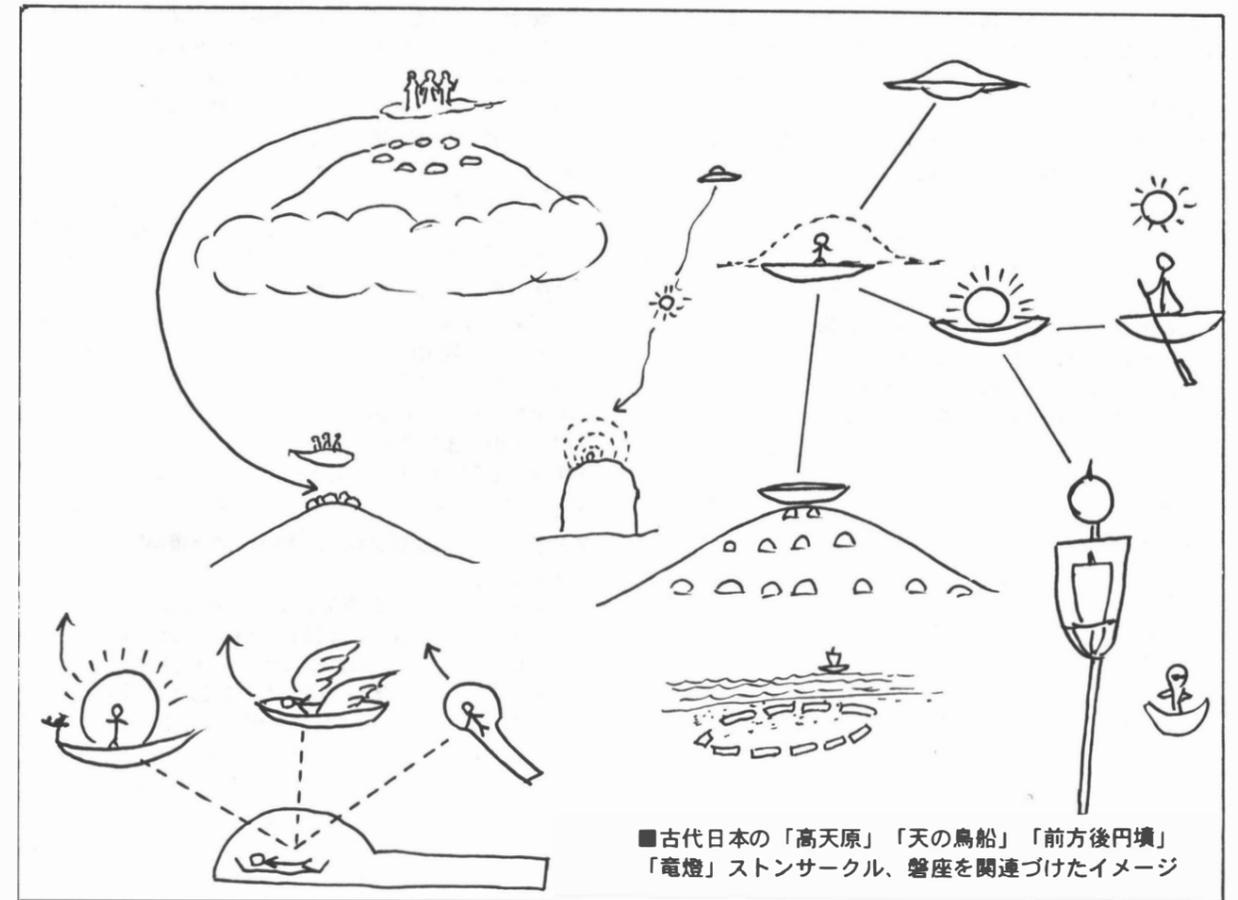
■途中から見た葦嶽山。



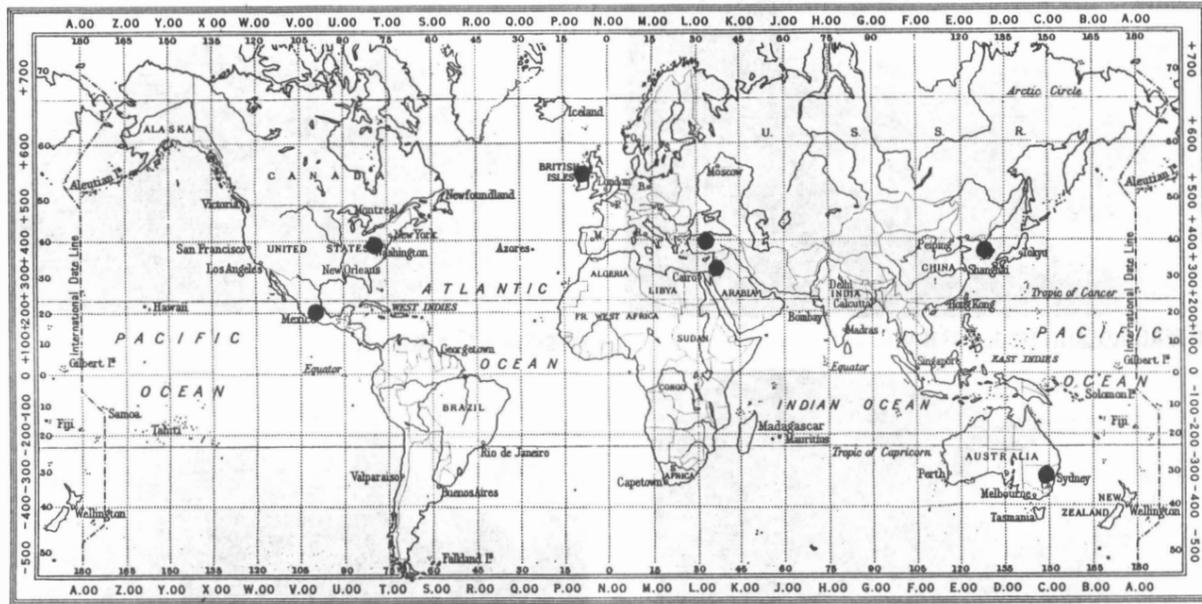
■葦嶽山のそばにある鬼叫山山頂の巨石



■「鏡岩」と名付けられた岩。



■古代日本の「高天原」「天の鳥船」「前方後円墳」「電燈」ストーンサークル、磐座を関連づけたイメージ



■またも韓国で分裂するUFO撮影か!

1999年10月8日朝のTVニュース番組で、韓国MBS夕方のニュースで放映されたUFOの映像が紹介された。アナウンサーの説明によると、撮影は1999年10月3日午前9時30分頃。場所は江原道(カンウォンド)太白山(テベッサン)。撮影者はテレビプロデューサーの「パク・シバン」さんで、彼の話によると「三日月の下に明るい光が見えたので、放送カメラで撮影していたところ、3~4個に分裂し、距離を維持しながら飛行し、7秒後に消えた」という。

正確には、10月3日は三日月ではなく下弦の月で月齢は23.6だから逆三日月。映像をご覧になった方は、以前も似たようなUFOが韓国で撮影されていたことを思い出したと思う。

その映像は1996年1月6日に放映されている。実際の撮影はそれ以前と思われるが、詳しいデータはない。この情報を掲載した本誌1996年NO.1(1996.2.14発行)23ページの「韓国でUFO撮影か?」によると、撮影は昼間で雲はなく、丸い一つの光体がぼんやりとした3~4個の丸みをおびた光りに分裂し、縦に並ぶの見える。場所は「江原道」で、今回の撮影と同じ場所である。

また、この年は韓国でUFOブームが起っていた。さらに同年11月23日にもソウルのローカルTVが細長い発光体の映像を放映している。この数週間前から、南韓国では写真家など多数によってUFO目撃が相次いでいたようだ。これらの情報は「UFO Folklore Center」のホームページで詳しく述べられている。「飛行の仕方から云って、去年のUFOと同じようだ」との部分から、韓国では共通したパターンが目撃されているようだ。

「分裂」という現象は、火球が落下した最後に見られるが、江原道における2度の分裂映像は、空中で浮遊中に分裂しており、分裂の性質は火球とは全く異なるものである。

■メキシコでUFOの実況放映!

UFOのメッカ、メキシコならではの驚くべき出来事が今年1999年7月7日に起ったようだ。天気予報のTVニュースを実況放映中にUFOが撮られ、そのまま放送されたの

である。

この出来事を伝える「UFO Folklore Center」のホームページによると、TV Azteca Networkで7:30amから始まった番組の中で、プロデューサーのJorge Lugo氏が何か変な物を空に発見。彼は「カメラをその物体に固定してズームしろ」と叫んで「あれはUFO(OVNI)だ!」と云ったという。

Lugo氏の会話をイヤホンで聞いていたニュースコンダクターのLuis PaduaとLety Benavidesは、天気予報そっちのけでこのライブショーをお茶の間に届けた。

そのとたん、TV局は地元でこの物体を見ている人々から沢山の電話を受け取り、このライブ・イベントは5分間にわたって続いたとのこと。

天気予報の後は通常のニュース番組に戻ったが、外ではカメラマンがUFOをとらえ続け、ディスク型のUFOは左右に急に動いたり、ズームするとディスク型だったものが急に楕円形(Oval)に変わったり、太陽の光を反射して、そのボディはメタリックなものようだったという。また未知のハロー現象のようなものも見られ、この映像はこれからコンピューター分析にかけられるという。

画面を見ると、右下の時刻を表示する「7:32」という数値が、そのままUFO映像出現の時刻であり、ズームされた映像は上部がわずかに突き出た空飛ぶ円盤の典型的な形状で、ポケているのもUFO映像の特徴を示している。

■トライアングル型UFO、世界各地に出現か!

◎イスラエル

三角形のUFOはこれまで数多く目撃撮影されている。最近の大きな出来事としては1989年11月29日以来、ベルギーで約50000人といわれる人々によって目撃された黒色で低速低空の飛行物体がある。写真撮影では影のような三角形の中に4つの光源が神秘的な輝きを示していた。

また、古い例としては、1968年9月5日の夕方、スペインのマドリッド上空で約1時間にわたって滞空し、多くの人々によって目撃された事件において撮影されたもの、同じ1968年8月6日午後3時、ラトビアで軍の宣伝映画撮影中に出現した三角形巨大物体が知られている。

ベルギーにおける三角形物体は三角の板のように偏平な

飛行物体で円錐形ではない。今年はその三角形UFOが各地に出現したようである。「UFO Folklore Center」のホームページ「Filer's Files #37--1999,MUFON Skywatch Investigations」によると、三角形は7月にイスラエルで目撃された。Barry Chamishの報告によると、7月22日、ツファトTsfatとヨクニームYokneamで7:30pmごろ三角形のUFOが出現。両方ともビデオに撮られた。プロの写真家ラフィ・マルカRafi Malka氏もビデオに撮影し、彼はあちこちに電話してUFOの出現を知らせた。マルカ氏の知らせを受けた一人にラミ・シュカリム教授professor Rami Shkalim(Bbar llan大学でカバラを教えている)がいた。教授と200名以上の人々は、UFOが消える12:30amまでUFOを目撃した。

UFOには銀色っぽい2つのライトがあり、そのライトは2倍の大きさに広がる赤いオーラで包まれていた。ライトはトライアングル型となり、さらにUFOが消える前に、ライト2つがスパイラル(らせん)状に光を放ち、まるでイストすゝ花火のようだったという。このビデオ映像は「グッドモーニング・イスラエル」などのTVで流された。

Jenny Rand'sの報告では、このUFO出現と平行して聖書で云う「アナキム」「リファイム」などの巨人(ジャイアンツ)がイスラエルに戻りつつあるとのこと。

「イスラエルにおける巨人に関する報告は、大洪水の時からダビデ王が亡くなる頃までと、そして1993年から現代の2つの時代だけ。これらのジャイアンツはコンタクティーを選び、彼等にUFOの写真やフィルムを証拠として撮られる」という。

ジェニー・ランドはこの夏、米国カリフォルニアのフィルムクルーと一緒に巨人のドキュメンタリーを制作。彼等はすでにポロネジ市(ロシア)での1989年の巨人出現なども取り上げているという。

1時間のディスカバリードキュメントが来年4月にオン・エアされる予定とのこと。

◎北アイルランド

8月11日の日食以来、北アイルランドで5晩にわたってUFOが出現。プラネタリアムやボリスに沢山の人の問い合わせがあった。グループで飛ぶUFOが報告された。また、プラネタリアムのパーネット博士Dr.Barnetによると、USAF Flying AWACSエアークラフト機が、2機の赤いトライアングル型のエアークラフトに先導されているようだったとのこと。

◎トルコ

8月17日のトルコ大地震以来、トルコ西部で怪光が見られるようになった。信じられないほどクリアーで丸いものやトライアングル型があり、白、黄色、赤、青色の色彩で現われたり消えたりしている。週に2~3回見られるのが当たり前になってしまうほど、ひんぱんに現われており、TVニュースやメディアにも登場。さらに地震の直前、イズミットの海底が赤くなり、海水温が40~45度にもなった。(海底火山の流れもないマルマラ海なのに)地震の2日前にこの現象は始まり、数百の魚やカニなどの生物が焼け死んだ。漁師の網は焼かれ、海から採った石や岩のサンプルも黒くなっていたという。

トルコUFO&超常現象組織がスミソニアン研究所とアメリカのいくつかの大学と協同で調査している。何人かの漁師は海中で爆発があったようだとも言っている。

◎オーストラリア

9月6日オーストラリアのシドニーで午前3時ごろ、地元のボリスが南シドニーの海上にトライアングル型UFOが

ホバリングしているとの2本の電話を受けた。UFOは各頂点に黄・オレンジ色のライトをつけていた。

◎アメリカ

9月8日米国ワシントンにて8:40pmごろ、UFO Resource Center近くで、トライアングル型UFOが出現。ジグザグに飛び20分ほど見られた。トライアングル型で、うすく、色は黄色っぽいベージュ。AuburnやKentで昨今見られるものと同じ型という。町の飲料水用のポンプのジェネレーターの電気がストップしてしまったとのこと。【情報提供(翻訳を含む):神原二美氏】

■国内UFO研究者による研究報告書の紹介

◎盛田信雄著『地球外仮説の可能性-レイクンヒース事件の分析に基づく新しいUFO研究パラダイム』

1999年4月に著者より贈呈されたもので、B5判97ページ。オフセット印刷。盛田信雄はペンネームである。日英両文の目次、専門的な図判など、UFO研究者のなかでも本格的に航空機とUFOの遭遇事件をやってない読みこなせない高レベルの研究書である。これを読めば、「UFOの知性」というもののレベルが感じ取れると思われる。

実のところ、この事件について、編者は知らなかった。編者の情報源は翻訳されているものに限定されるため、原文で発表されていても、翻訳されて出回らないと知るところとならない。また事例をすべて頭に回想できないので、どこかで読んでも記憶に残らなかったのかも知れない。

この事件について最近読んだボーダーランド文庫ブルース・L・キャッシー/ピーター・N・テム著『謎の反重力網』31ページに1969年コロラド大学のUFO研究(米空軍が委嘱した有名なプロジェクト)について批判する文章のあとにこの事件について触れているのを見つけた。

当時このプロジェクトは、一冊の厚い報告書の発行で幕を閉じた。その結論とは「過去21年間のUFO研究から得られた科学的知識は何もなかったということだ」となっていた。しかし、このわけのわからない結論が意味するのは、「世界中で起っているUFO現象を科学がつかみそこねた」ということではないのか? 例えば、レーダーという装置が捕捉した物理的な空中の痕跡の事例だが、これなどは多に「科学的知識」に関係するのではないか。

英国のラーケンヒース航空基地(Lakenheath airbase)は1956年、米空軍と英空軍が協同使用していた。この地上レーダー係は、「一つ、あるいはそれ以上」のターゲットが毎時2000マイル(時速3200km)から4000マイル(時速4600km)のスピードで移動しているのを見つけた。だが衝撃波はなかった。ターゲットは毎時数百マイルの速度で直角に進路を変えた。これは人間の作った航空機では不可能な飛行である。

英空軍の戦闘機が2機出撃し、1機はレーダー照準機の中にその物体をとらえた。しかしこの物体はくるとまわって同戦闘機の背後に位置を占め、どんな回避行動をとっても、そこから離れなかった。戦闘機はとうとう、燃料補給のために着陸せざるを得なかった。そして、地上要員は、「一つまたはそれ以上の、白い、素早く動く物体」を見たのである。この事件は、不可解な結果に終わったもののほんの一例であって、既存の知識のどれにもあてはまらない。

UFOと航空機(旅客機・軍用機、輸送機・戦闘機、ジェット機・レシプロ機、水平翼機・回転翼機を問わず)の先端技術との対決とも言うべき、数々の空中遭遇事件は、地球科学最先端と未知の科学技術、飛行運行管理と未知の管理知性の出会う場である。【情報提供:蔵本靖典氏】

「科学は観察から始まる。一切の先入観を捨て、ありのままのデータを観察することで、正しい理論を導くことができる。」(『地球外仮説の可能性』71ページより)

山口市にミステリーサークルを訪ねて

本誌緊急取材速報

- ◎数ヶ月間、保存され続けた休耕田ミステリーサークル
- ◎現地は生きた「ミステリーサークル資料館」だった!
- ◎多発するUFO目撃、そこはUFOに選ばれた村なのか?

■11月9日

11月9日、会社の同僚のYさんから「山口でUFOがミステリーサークルを作ったと朝のテレビでやっていたよ」と知らされた。帰宅して妻に「今日、こんなことを聞いた」というと、妻も相棒から「朝のテレビで見た。日本でもミステリーサークルが出来るのね」と聞いたという。我々二人とも、全然知らなかったの、「どこのチャンネルだろう」とか「誰に問い合わせようか」など話しながら、ふとコタツのテーブルの上を見ると時刻表に紙をはさんで置いてあり、娘がどこかに行く計画を立てている様子が伺えた。そんなところに娘が帰宅して言うには「ビデオ見たか?」「ちゃんとテレビ欄にUFOと出ているでしょ。よく見なよ!」とのこと。あわててテレビ番組欄を見ると確かにあった。娘が録画してくれて、しかも自ら現地に行くことを決めていたのであった。娘はいつも木曜金曜を休みしているの、「山口行きは11月11日になるから金を用意してほしい」とのことであった。

我々はとにかく録画された内容を見ることにした。場所は山陽本線の四辻(よつづじ)という駅の近らしい。ミステリーサークルと思われるものは、休耕田に生えた雑草が円形に近く倒れていて、それが出来たのは今年5月のことで、発見者、地主とも誰にも話さずにいたが、10月になって地元のサークル研究家に話したことがきっかけで、今回の報道に取り上げられることになったという。倒れた草はそのまま成長を続け、周囲の草が枯れているのに、そこだけ青青と生きている状態で、地質専門の学者(山口大学土壌生化学丸本卓哉教授)により土壌が採取されて分析中という。

ミステリーサークルと書いた道案内の標識や「このミステリーサークルは調査研究中なので立ち入らないで下さい」との立て札。そして、近くにはサークルに関する展示物があり、地元のミステリーサークル研究家村上修好さんが説明していた。しかも、UFOと思われる発光体の目撃者もいた。

この内容を見て私は「これは凄い!。」と驚いた。それは以下の点である。

- 倒れた草が損なわれず枯れずに数ヶ月成長していたこと。台風の影響もなかったらしい。
- ミステリーサークルの発生地に研究家がいたこと。
- サークルを保存し、展示物を設けて誰でも理解できるように配慮してあること。
- 駅から道案内表示があること。
- UFO目撃者が多数いること。
娘は時刻表を私に見せながら「大阪午後11時88分発の特急富士で行くと小郡に翌朝の6時10分につく。これで良いか確認してくれ。」とのこと、再確認する。そして

「この程度の距離なら新幹線のほうが楽ではないか?」と小郡に停車する新幹線を調べた。朝早く出れば十分日帰りできる見込みであった。準備の一つとして、番組の録画から主要場面をカメラ撮影した。さいわい次号THE UFO RESEARCHERの版下が完了した直後で、散乱していた部屋が片付いていた。そのプリントを参考として持ち、また贈呈用のTHE UFO RESEARCHER、英国クロープサークルの空中写真、名刺交換のための名刺を10枚ほど作成して持たせることにした。

■11月10日

会社の帰りにフィルムを出しに行くのと、フォトスーパーの女性店員が「ミステリーサークルが出来たんですね。」と言うので「娘が近く行くことになった」と話す。1時間後プリントを取りに行く。

この日の朝も別な局のニュース番組で紹介があり、娘はテレビをつけるとやっていたので即録画したとの事。内容を見ると発見の再現シーンから始まっており、ほぼ内容は前日の放映と一緒だったが、山口市鑄銭司(すせんじ)という地名を知った。地図でそれを確認する。

娘が「指示書を書いてくれ」というので、思いつくまま文章を打って渡すと、「箇条書でなければチェックできない」とのこと箇条書にして以下のような文書を渡した。そして旅費を計算し、プラスアルファの金を渡した。

山口ミステリーサークル現地取材指示書

- 場所:山口市鑄銭司(すせんじ) 山陽本線四辻下車
- 1999年11月11日午前5時半起床
- 午前6時5分に家を出発
- 前裁駅発6時19分で平端。平端で京都行き急行に乗り換え京都発7時42分に乗り10時31分小郡で下車
- 小郡発10時58分の岩国行き各駅停車で
- 11時04分四辻(よつづじ)下車
- 四辻駅で鑄銭司(すせんじ)に出来たミステリーサークルに行くにはどう行けばいいか聞く。徒歩で行けるか。タクシーがあれば、行きだけでもタクシーで行く。(時間の節約)

現場に着いたら

- カメラとビデオでサークルを全景、アップなどで撮影。
- ビデオなら立っている枯れた草と、倒れている青青とした草を比較して交互に写す。
- もしリフトに乗れたら乗ってやはりカメラとビデオで撮影。
- 田んぼの所有者の田中ヤス子さんに会えたら名刺を渡す。
- 田中ヤス子さんにTHE UFO RESEARCHERを渡す。

- 父親がUFOとミステリーサークルを研究していることを説明。
- UFO目撃について聞く。何年何月何日の何時頃に見たか
- 山の名前、山の高さ、いろいろ質問しながら話をビデオで撮影する。
- 見えた方向を指さしたり、顔写真を撮らせてもらう。
- UFO目撃図を描いてもらう。山を書いて経路を書くのと、形だけの彩色図の2種類。
- 図に住所と名前、年齢を書いてもらう。
- 土のサンプルを父親の知り合いの研究所で分析したいので、外の土と中の土を採られてもらう。
- 立っている枯れた草と、倒れている草を3本づつもらう。
- 取材した内容はアメリカとポーランドに送る予定。
- 父親が今年、英国に行って現地の研究家Colin Andrewsとヘリコプターからミステリーサークルを撮影した。その中から差し上げてくれと託されたので、差し上げる。
- 英国の写真をお見せするように頼まれたのでお見せしたい。とアルバムを見せる。
- 同様に、発見者の田中奎介(けいすけ)さん、地元のサークル研究家村上修好さんに会ったら写真を見せたりTHE UFO RESEARCHERを差しあげる。

■11月11日

世間では1がいくつづく日とか、天皇の在位記念とかの話題でにぎやかだが、私はどんなに頑張っても、それらに興味をもつことは出来ない。UFO現象とサークル現象と様々な怪奇現象や人界における世紀末現象の解説...で頭がいっぱいだ。

10日の快晴と比べ、11日は一日中、陽の射さない曇天であった。山口はどうだったか、傘の準備はしていったか、うまく現場に行きついたか、目撃者に会えたか、作業中も天候とそれらが気になった。

会社から帰宅して夕食後の午後7時過ぎ、電話が鳴った。出るとミステリーサークル研究家村上さんからあった。「お嬢さんはもう帰宅されましたか?」との声を聞いて内心、ああ、うまくいったようだ直感した。

村上さんが娘にカラーコピーの資料を託したこと、その写真の中には、吉野ケ里におけるミステリーサークルの付近にある電線のうち、サークルに近い一本がサークルの方に曲がっているものも、含まれており、これは南山 宏さんの著書にもない発見であること、THE UFO RESEARCHERの内容についての感想や編者の名前について、また障害者施設の仕事の関係で当地付近にも来たことがあることなど、その他色々お話し下さった。

村上さんからの電話の直後、娘が帰宅した。紙袋から植物の束がはみ出しているのを見て、現地の協力が得られたことを知った。

娘の話によると、ミステリーサークルの現場は四辻駅からの案内標識のおかげで迷わず行け、駅から徒歩で行ける近い距離にあること、現地ではサークル研究家、発見者、

UFO目撃者と会い、また日刊スポーツ記者、西日本新聞の記者と共に取材できたとのこと。特にいつも来ていた訳でないミステリーサークル研究家村上さんと会えたことで収穫は大きかった。村上さんからはA3判の写真カラーコピー2枚のほか、彼が現地調査した九州の水田ミステリーサークルなど、たくさんのカラーコピー、新聞記事コピーなどを戴き、それらは日本のミステリーサークル研究上の重要な事実や発見がみられた。娘は楽しみにしていた駅弁も買えずに現地に行き、午後2時頃に空腹となったが、田中さんのお家で食事と果物をご馳走になり、帰りは西日本新聞記者の車で小郡まで送ってもらえたとのこと、現地のお世話になった方々に感謝すると共に「私でもやれば出来る!」と娘は成果に満足していた。

取材中は新聞記者が目撃者にインタビューするのを撮影したり、目撃者からの話や様子を録画とカメラ撮影するのに手一杯で、メモ書きは帰路の新幹線の中で書いたとのこと、以下にそれを紹介する。

■天宮志麻による現地メモ

●UFOを目撃した田中ヤス子さん(87才)の話

「昨年5月か6月、午後3時か4時、山の中腹に赤いものがあったので、火事かと最初思ったが、煙も出てないし、移動しはじめたので、UFOだと思った。

タイヤの大きさの真っ赤なUFOは、そのまま右へ移動し、高い山の下までくると、少しとまり、それから上へ上へと昇って、雲に入って見えなくなった。だいぶ時間がかかったので、10分くらいは見えていたと思う。その目撃を孫と嫁と知人2人に話した。」

田中さんは、毎朝、ミステリーサークルに向かって手を合わせ、UFOの事も、ありがたいことだと言っている。「UFOはすごい力をもっているの、触ったら死ぬと思う」とも語っていた。

●サークルの第一発見者田中奎介さんの話

第一発見者の田中奎介さんは、UFOには興味がないという。ミステリーサークルを発見した事を奥さんに言うと、奥さんが「黙っとけ」と言ったので、今まで黙っていたらしい。しかし地元の研究家に話してからは公開されるようになった。

●地元の研究家

知的障害児の施設「りりがくえん」の園長をしていて、彼がサークルの保護、道標の設置、資料の展示、配布、巻いてをやってる。忙しい身でありながら、彼は児童らの作った製品の販売で資金をつくり、ブラジルへ行ってブラジルの知的障害学校に寄付したり施設を作ったりしている。その旅行途中にナスカの地上絵も見たいという。子供達のために、政府と助成金について言い合いをしたこともある。日本の各地のミステリーサークルを取材に訪れている。

●もう一人のUFO目撃者、亀尾夫妻

今年11月9日の18:00頃、赤いUFOが海からミステリーサークルのある方向へ飛んで行ったのを目撃。飛行機よりも速かったという。

●土の分析

山口大学で行われている土の分析は、1ヶ月程かかるというから、11月末か12月になるだろう。

以上、取材翌日から版下まで3日間で速報ページを仕上げた。編者の次の仕事がひかえているため、検討課題、探索課題などは後日機会あれば取り組みたい。

■ミステリーサークル研究者 村上修好氏
(社会福祉法人るりがくえん園長) 提供

鑄銭司の休耕田に出現 怪現象に地元で話題に

山口市鑄銭司の休耕田に「ミステリーサークル」の出現が地元で話題になっている。

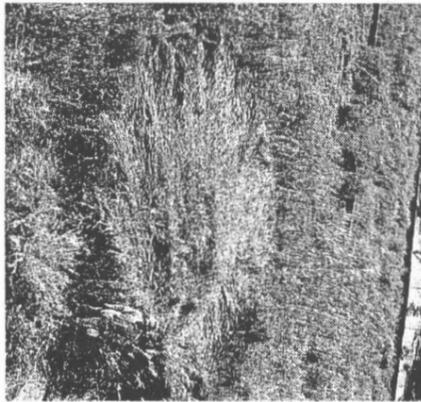


山口市鑄銭司の休耕田に「ミステリーサークル」の出現が地元で話題になっている。このサークルは、直径約10メートル、深さ約1メートルの穴が掘られており、その中心には石が埋め込まれている。地元では「ミステリーサークル」と呼ばれている。

ミステリーサークル?

山口市 1999年(平成11年)10月23日

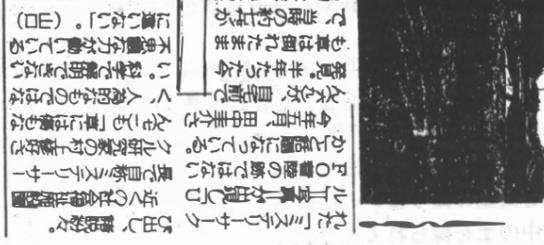
1999年(平成11年)10月26日(火曜日) 毎日新聞



山口市鑄銭司の休耕田に「ミステリーサークル」の出現が地元で話題になっている。このサークルは、直径約10メートル、深さ約1メートルの穴が掘られており、その中心には石が埋め込まれている。地元では「ミステリーサークル」と呼ばれている。



山口市の休耕田に「ミステリーサークル」の出現が地元で話題になっている。このサークルは、直径約10メートル、深さ約1メートルの穴が掘られており、その中心には石が埋め込まれている。地元では「ミステリーサークル」と呼ばれている。



山口市鑄銭司の休耕田に「ミステリーサークル」の出現が地元で話題になっている。このサークルは、直径約10メートル、深さ約1メートルの穴が掘られており、その中心には石が埋め込まれている。地元では「ミステリーサークル」と呼ばれている。

山口市 1999年(平成11年)10月24日 日曜日

山口市鑄銭司の休耕田に「ミステリーサークル」の出現が地元で話題になっている。このサークルは、直径約10メートル、深さ約1メートルの穴が掘られており、その中心には石が埋め込まれている。地元では「ミステリーサークル」と呼ばれている。

山口市鑄銭司の休耕田に「ミステリーサークル」の出現が地元で話題になっている。このサークルは、直径約10メートル、深さ約1メートルの穴が掘られており、その中心には石が埋め込まれている。地元では「ミステリーサークル」と呼ばれている。

■お世話になった方々。左より村上修好園長、日刊スポーツ松本久氏、第一発見者田中幸介氏、西日本新聞野村創氏。



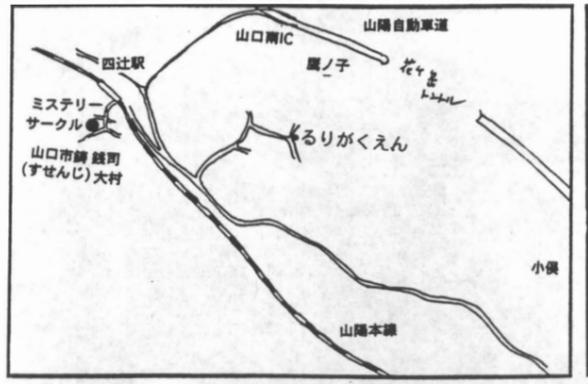
■10月に撮影されたミステリーサークル。太陽光線の反射が美しい。



■案内標識(サークル研究者るりがくえん村上修好園長によるもの)



■ミステリーサークルの位置を示す地図。四辻駅から案内標識がある。



■赤い発光体の目撃者田中ヤス子さん。

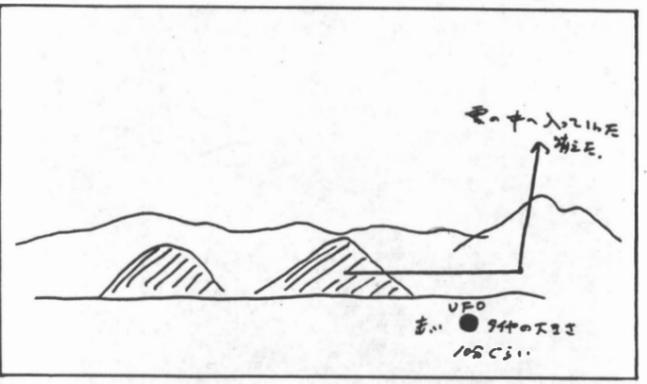


■11月15日に村上さんから入った連絡によると、フジテレビの取材陣と早稲田大学の大学院教授が来て、現地でカヤを倒し人造のサークルを作成した。16日、村上さんはこの身勝手な行為に対して記者会見を開き、学者が「セモノサークル」を作成した行為に抗議した。また同日、村上さんから西日本新聞のFaxが届き、それによると、このサークルは一躍人気観光スポットとなり、連日100人の見学者が訪れているという。また村上さんによると、勝手にサークルに入る人がおり、せっかく長期保存されてきたサークルが破壊の危機に瀕している。

■赤い発光体の移動と上昇を目撃した方向を指差す田中ヤス子さん。



■田んぼの所有者田中博司さんのお母さん田中ヤス子さんが目撃した赤い発光体の目撃状況再現図。目撃者の証言を聞きながら天宮志麻が作成。UFOらしき丸い(輪という表現もあった)発光体は、ミステリーサークル研究者村上修好(るりがくえん園長)氏の発行した資料によると、竜山の東側に現われて鷹ノ子から小俣の山に移動して、そこから空高く昇っていった、という。地図上で、その関係地名を示す。ただ、道路地図上には「竜山」は記載されていなかった。



九千人の交陰で

「九千人の森陰で」
初代理事長
故・小河正儀氏の
碑文より

(390)

一九九〇年の秋、福岡県行橋市今川の近くの稲田に、ミステリー・サークルが出現したと新聞報道を見て、豊津町にいる弟、芳行のところに電話してみた。なんと行橋市といっても豊津駅のすぐ近くのこと。かねてから興味があった上に、

一人ではもったいないと思って銚銭司読書のメンバーも誘って行くことにした。わざと行くことも目的も告げずに何とか出発した。亀山嶺南さんだけは、お寺の法務がいっ起きるか分からないので「どうしても」というので内緒で教えておいた。

だ。早く言つと、そんなものと思つたから言わなかったのだ。なに、それなら、わしも興味を持っていった。行つと、行つと、何でも貶す癖のある野村伸さんが言い出した。野村伸さんは、反対はしない人だと分かつていたが、これで皆の

んだ男が、あれはワシがいたすらでやつたんだと言つていた。そんなものに興味はない」と。昔から冷静な人で好奇心を燃やさないタイプではないとは知つていたが、ちょっと冷された気分になつたが、興味のないのに無理に誘つてはならないとすべ

サクルの謎」という本を読んでいたので、方位磁石を持って直径が四・五メートル位のサークルの中心部まで入つてみた。磁石の針は異様に震えて止まらない。二つ目の磁石を野村さんに持ってもらつて円の周囲を歩いてもらった。同じように磁石の針はブルブル震えていたよつたが、突然、付いて回つていた小学生が声を上げた。「あ、針が回る、針が回る」と。針がクルクル回り出した

るりがくえん園長 村上修好



八月の盆に墓参りに帰つていなかったこともあって見に行くことにした。

コム長靴を用意するよう言つておいたのに、小郡から中国自動車道に出たので、「なんだ、松茸狩りではないのか、どこへ連れていくのだ」と言ひ出した。一方通行の道路に入つていたので初めて「ミステリー」旅行だ。行橋にできたミステリー・サークルを見に行くの

気が揃つて車を飛ばしたのだ。途中、店に寄つて方位磁石を二個購入。行橋の朝日新聞の支局に、以前山口支局にいたことのある記者がいることを知つていたので立ち寄つてみた。一緒に行かないかと誘つたのだが、いへもなく「行かへ、あれは夕べ酒場で一緒に飲

別れた。今川の土手を通つて橋を渡り、豊津駅の手前の踏切を通つて現場に着いた。駅から二、三分の所だった。十人近い見物人が集まつていたので場所はすぐ分かつた。今まで、バット・デルガード・コーリン・アン・ドゥリス著、南山宏編著・訳の「ミステリー・

のだ。やはりそうか。事前二つ磁石を用意しておいてよかつた。中心部の磁石はブルブル震えて止まらないのに、周辺のクルクル回り出したのである。このサークルは時計回りにきれいに倒れていたが、その稲株の根元は地面に押しつぶされて

はいるが、折れてはいなかつた。すつと見て回つているうちに、「株は、二十数本のうち三、四本直立して倒れずに残つていた。他の株は見事に倒れ、田の中と外側との境はくっきりときれいに区別されていた。さつと区別しているうちに、弟の芳

行が自動車を迎えに来た。二、三日前に、今川の上流の方の空に「UFO」らしいものが移動しているを目撃したこと。またその日、小学校の運動会に集まつて来た人の中にもUFOを何人も見た人がおり、話題にしてきたが。

村上修好氏提供



■現場に設けられた高さ約5mの高見台から撮影したミステリーサークル。



■高見台から撮影した、その隣りのサークル。



■さらに隣りに発生した3つ目のサークルを近くから撮影したもの。



■地主の許可と協力により、土壌サンプルと植物サンプルを採取した天宮志麻。これらは本誌読者の協力により分析中。



■水田にできたミステリーサークルを調査する村上修好氏。写真提供:村上修好氏



■写真提供:村上修好氏

■ミステリーサークル研究家 村上修好さんの研究活動など

村上さんは山口県障害者施設授産協議会会長、社会福祉法人るりがくえん園長、協同作業所・ふれあいの店所長、など多くの施設や寮の運営に当たっておられ、その活動範囲は国際的で、遠くブラジルにまで及んでいる。その多忙の中、1990年以來、日本各地に出現したミステリーサークルの現地調査を行つてきた。その中から貴重な写真や報道資料を、今回の娘による現地訪問の際に御提供いただいた。ここにその一部を紹介させて戴く。

編者はこの現象には、植物学者、土壌・地質学者、昆虫・生物学者、物理学者など広い分野からの専門家の調査

研究が必要であり、またサークルは保存して多くの人に見てもらふことを理想に描いてきた。山口市銚銭司の休耕田に出来た今回のサークル現象、英国のような穀物畑でなく「ツバナガヤ」など雑草の類だが、1991年の9月にも石川県七尾市の休耕田に、やはり雑草サークルがいくつも出来たことがあつたし、日本では雑草サークルが多いようだ。雑草だから刈り取る必要はないわけで、休耕田のままなら、いつまでも証拠として保存できるわけだ。このことを実際に実行している方が村上さんだつた。UFO目撃者の田中さんは、サークルを毎朝拝し、UFOは触ると死ぬと言つておられるが、この精神は遠く紀元前の古代オリエント文明の人々に通じるものと思う。旧約聖書では人々が近寄り過ぎると死ぬことがないよう、主と人々の間に境が設けられた。(出エジプト記19-11)

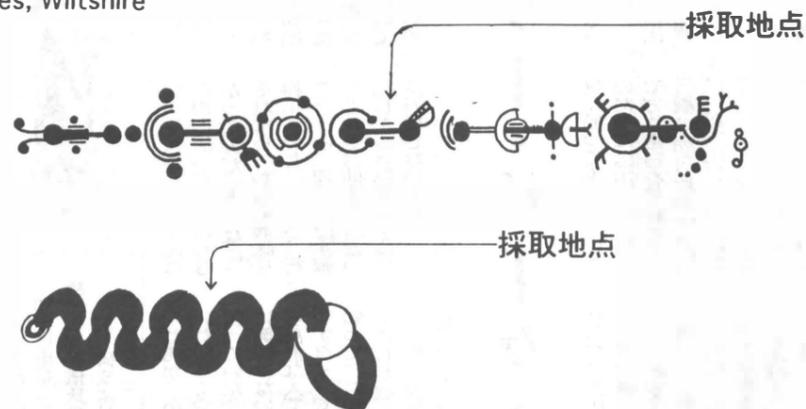


行橋にできたミステリー・サークル

■オルトンバーズのクロープフォーメーション 2地点から採取した麦の元素分析報告

ここに紹介するのは、今年の英国におけるクロープフォーメーションから採取した麦のサンプルを科学分析により元素の変化を調べようと試みた結果の内容である。この分析は本誌読者T.M氏の協力により実現した。採取した麦はAlton Barnesオルトンバーズにおける長大な連結サークルと、その近くに同時に出来た蛇行するサークルから得た。しかし、両者とも発生から約1ヶ月が経過していたので、麦は黄色く麦ワラ状態に近くなっていた。1991年、編者は兵庫県稲美町の麦畑に発生したサークルのうち、発生直後、中心付近の麦の上を手にした磁石通過させる際に、針が振れる現象を確認した。しかし麦の穂が刈り取られて、地面に渦巻き状の短い麦のサークルが痕跡をとどめていた現場で、再び磁石を中心付近の上で動かしたが反応は得られなかった。このことから、サークル発生直後と月日が経過した時とは、条件が異なるように思われた。また、麦が倒れる、曲がるという現象は物理的、力学的なもので、アンドリュース氏の報告にあるような細胞組織の異常や、今年のマジックバスケットにおける残留静電気?はあるとしても、植物の元素そのものには変化が起るほどの影響はないのかも知れない。それはともかく、本誌のような趣味の研究上で、このような分析が行われたという事実を読者諸兄に知っていただけたら幸いである。

Alton Barnes, Wiltshire



資料：曲がった麦2箇所（外部から影響を受けたと思われる箇所）

立っている麦2箇所（正常と思われる箇所）の各1本

具体的な採取場所：英国ウィルトシャー州オルトンバーズのサークル2種(図に示す)

採取日時：1999年7月18日

曲がった日時（サークル出現日時）：1999年6月12日

概観検査：4者はいずれも根から抜き取られ、枯れた麦と思われるものであり、一見して4者に大きな違いは見受けられない。しかし、曲がっている麦2箇所には、根先から約2~3cmのところまで一方向に約90度折れていたが、立っている麦2箇所にはこれらが見受けられなかった。

元素分析：土砂の付着による影響が比較的少ないと思われる麦の穂の部分について、蛍光X線分析による元素分析を実施した。なお、本検査では、10ppmレベルの元素検出はできない。

いずれも同種類の元素（ケイ素、カリウム、塩素、カルシウム、硫黄、鉄、亜鉛）が検出され、その他特記すべきものは検出されなかった。

また、主元素としてはケイ素、カリウム、塩素、カルシウム、1%以下の微量元素としては硫黄、鉄、亜鉛であり、これらの量比に若干の違いが認められるが、これらが外部からの影響を受けたためか否かは判断できない。

T.M

直立表 (サークル外)



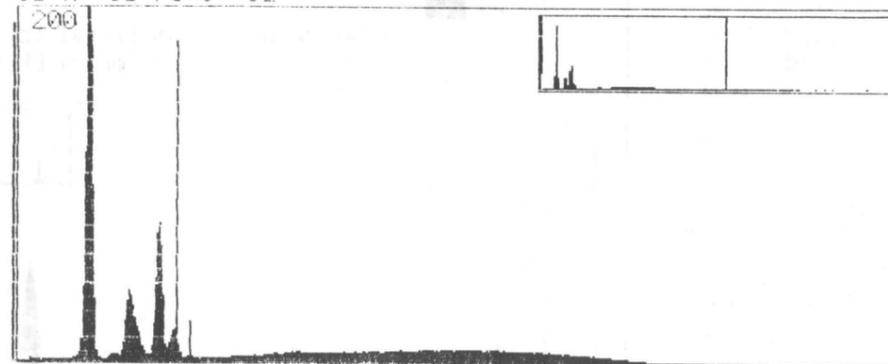
***** エLEMENTモニター SEA-2010 ***** 99-11-15 09:09 [000]

元素	濃度 (%)	強度 (cps)	変動 (cps)
Si 14 ケイ素	55.8965	1573.756	4.8062
K 19 カリウム	27.2668	584.778	3.0350
Cl 17 塩素	11.4112	356.842	2.4253
Fe 26 鉄	0.3360	7.995	0.8153
S 16 硫黄	0.6683	25.156	1.0604
Ca 20 カルシウム	4.4213	157.604	1.7763

装置状態	000 #
09:10:31	
設定時間	100 sec
照射径	10 mm
電流	92 uA
電圧	15 kV
試料室	真空
マイコン	あり
制約条件	OK
バック	0.0 %

測定	表	裏
有効	100	100
照射	68	70
電流	10	10
電圧	92	8
電圧	15	50
電圧	真空	真空
マイコン	あり	あり
KLM Ca 20	加減	
カーブ	0.00 keV	
	48.459 cps	

H	He
Li Be	同定元素
Na Mg	Al P Ar
Sc Ti V Cr Mn	Co Ni Cu Zn Ga Ge As Se Br Kr
Rb Sr Y Zr Nb Mo Tc Ru Rh Pd Ag Cd	In Sn Sb Te I Xe
Cs Ba Hf Ta W Re Os Ir Pt Au Hg Tl Pb Bi Po At Rn	
Fr Ra	
La Ce Pr Nd Pm Sm Eu Gd Tb Dy Ho Er Tm Yb Lu	
Ac Th Pa U Np Pu Am Cm Bk Cf Es Fm Md No Lr	



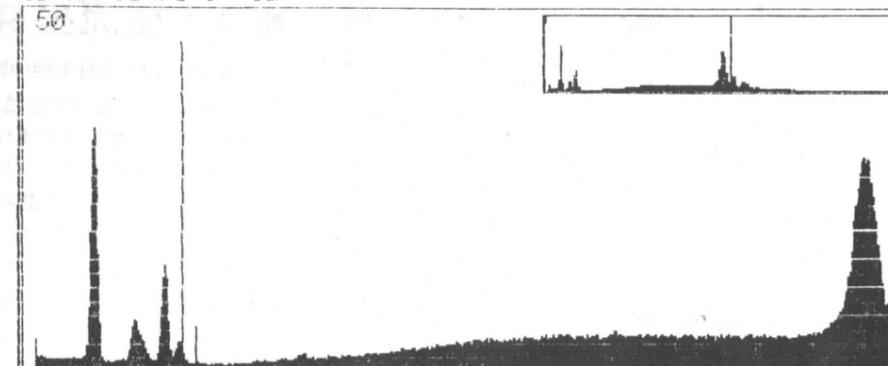
0.01SiClKCa Fe 19.99
エディット 表 DOT/BAR 裏 DOT/BAR 表裏交換 周期律表示

画面

装置状態	000 #
09:11:58	
設定時間	100 sec
照射径	10 mm
電流	92 uA
電圧	15 kV
試料室	真空
マイコン	あり
制約条件	シャット
バック	0.0 %

測定	表	裏
有効	100	100
照射	70	68
電流	10	10
電圧	8	92
電圧	50	15
電圧	真空	真空
マイコン	あり	あり
KLM Ca 20	加減	
カーブ	0.00 keV	
	48.930 cps	

H	He
Li Be	同定元素
Na Mg	Al P Ar
Sc Ti V Cr Mn	Co Ni Cu Zn Ga Ge As Se Br Kr
Rb Sr Y Zr Nb Mo Tc Ru Rh Pd Ag Cd	In Sn Sb Te I Xe
Cs Ba Hf Ta W Re Os Ir Pt Au Hg Tl Pb Bi Po At Rn	
Fr Ra	
La Ce Pr Nd Pm Sm Eu Gd Tb Dy Ho Er Tm Yb Lu	
Ac Th Pa U Np Pu Am Cm Bk Cf Es Fm Md No Lr	



0.01SiClKCa Fe 19.99
エディット 表 DOT/BAR 裏 DOT/BAR 表裏交換 周期律表示

画面



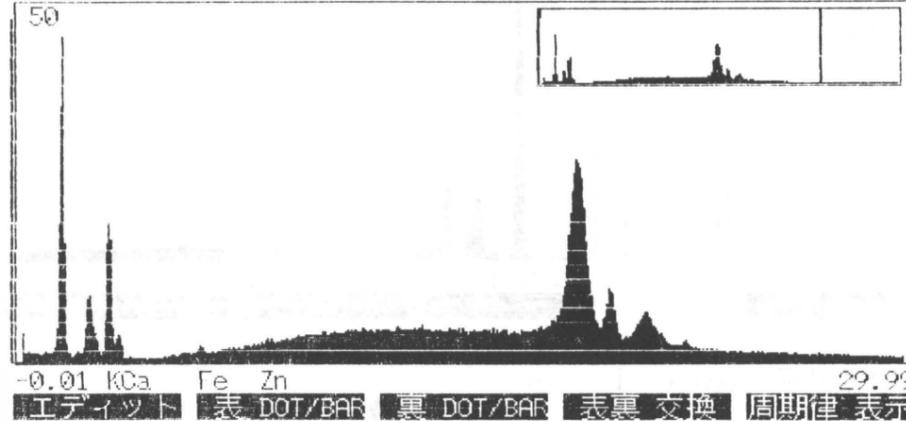
*****-エレメントモニタ--SEA=2010-*****_99=11=15 09:19 [000]

元素	濃度(%)	強度(cps)	変動(cps)
Si 14 ケイ素	49.82785	1452.254	4.6232
K 19 カリウム	33.18152	736.685	3.3739
Cl 17 塩素	12.66726	429.685	2.6489
Fe 26 鉄	0.27703	7.237	0.8425
S 16 硫黄	0.85832	35.461	1.1898
Ca 20 カルシウム	3.11015	143.505	1.7233
Zn 30 亜鉛	0.07787	4.757	1.1893

装置状態	000
09:20:22	
設定時間	100 sec
照射径	10 mm
電流	93 uA
電圧	15 kV
試料室	大気
マイナー容器	あり
制約条件	シヤック
デットタイム	0.0 %

H	He	
Li Be	同定元素	B C N O F Ne
Na Mg	Al P Ar	
Co Ti V Cr Mn	Co Ni Cu	Ga Ge As Se Br Kr
Rb Sr Y Zr Nb Mo Tc Ru Rh Pd Ag Cd In Sn Sb Te I Xe		
Cs Ba	Hf Ta W Re Os Ir Pt Au Hg Tl Pb Bi Po At Rn	
Fr Ra		
La Ce Pr Nd Pm Sm Eu Gd Tb Dy Ho Er Tm Yb Lu		
Ac Th Pa U Np Pu Am Cm Bk Cf Es Fm Md No Lr		

測定	表	裏
有効	100	100 s
照射	70	67 s
電流	10	10 uA
電圧	9	93 uA
電圧	50	15 kV
電圧	真空	真空
マイナー	あり	あり



画面

-0.01 KCa Fe Zn 29.99
 エディット 表 DOT/BAR 裏 DOT/BAR 表裏交換 周期律表示

UFO目撃報告追加

1999年11月19日朝、会社にて作業を始めていると、1Fローラーの榊原千鶴子さん(55才)が仕事の用事で私の部署の3Fに上がって来て、「天宮さんに報告しなければと思って...日曜日の朝、東の空にUFOを見た!初めて見た!」と話をしてくれました。「柿色で...」と言うので、「どんな形か紙に書いてくれ」と机の上で伝票用紙に図を描いてもらった。典型的なドーム付UFOといった外観である。これなら、どんな人でも異常を感じるのではないかと。「場所はどこか?」と聞くと「岡山詰所(天理市指柳町)の近く」とのこと。「動いていたか?」に「止まっていた。5分くらいで消えた」という。「空のどの位置に見えたか、指差して見てくれ」と頼むと、さっそく腕を伸ばして、見えた角度を再現してくれた。かなりの仰角。35度はある。データを整理してみると。目撃は1999年11月14日午前6時頃。目撃地点は天理

市指柳。方向は東。仰角は35度。静止したまま約5分目撃。ということになる。彼女からは以前、蛭沢松雪著『三つの太陽』を読んでもらい、「とても良かった」という感想を載している。

獅子座流星群

1999年11月18日未明の獅子座流星群では翌日、会社でも「見たか?」という会話があった。我々夫婦は外に出て観測したが、曇り空で晴れ間が見えず、あきらめて帰宅した。しかし同僚のOさん(50才)は、畑の道で車の中から観測したという。そして最初曇っていた空が急速に晴れ間が広がって、ついに「星より明るい」流星1個が流れるのを見た、と喜んで話してくれた。海外で撮られた流星雨の映像を見ると、光度の高い火球にしても、持続時間はきわめて短い。また、発光から消滅まで光度の変化が著しい。同じ光度を維持して長い経路を流れるという流星は皆無であった。



*****-エレメントモニタ--SEA=2010-*****_99=11=15 09:29 [000]

元素	濃度(%)	強度(cps)	変動(cps)
Si 14 ケイ素	51.04643	1528.326	4.6219
K 19 カリウム	31.24340	710.725	3.2365
Cl 17 塩素	12.70536	437.509	2.6084
Fe 26 鉄	0.21899	5.448	0.7593
S 16 硫黄	0.89368	37.456	1.1878
Ca 20 カルシウム	3.85044	160.030	1.7437
Zn 30 亜鉛	0.04169	2.431	1.0349

表



裏



*****-エレメントモニタ--SEA=2010-*****_99=11=15 09:53 [000]

元素	濃度(%)	強度(cps)	変動(cps)
Si 14 ケイ素	47.4975	1460.863	4.6724
K 19 カリウム	33.3550	779.637	3.4892
Cl 17 塩素	13.8138	502.546	2.8664
Fe 26 鉄	0.3085	9.074	0.8499
S 16 硫黄	0.9064	40.518	1.2585
Ca 20 カルシウム	4.1188	173.493	1.8593

直立表 (サークル外)



*****-エレメントモニタ--SEA=2010-*****_99=11=15 10:12 [000]

元素	濃度(%)	強度(cps)	変動(cps)
Si 14 ケイ素	64.8252	1881.167	5.2487
K 19 カリウム	21.7518	478.290	2.7914
Cl 17 塩素	8.7168	262.419	2.1536
Ca 20 カルシウム	3.6188	136.380	1.7186
Fe 26 鉄	0.3098	8.920	0.8575
S 16 硫黄	0.7776	27.651	1.1243

表



裏



*****-エレメントモニタ--SEA=2010-*****_99=11=15 11:11 [000]

元素	濃度(%)	強度(cps)	変動(cps)
Si 14 ケイ素	68.14278	2034.829	5.2596
K 19 カリウム	20.24945	454.780	2.6159
Cl 17 塩素	8.16341	246.569	2.0092
Fe 26 鉄	0.26359	6.290	0.6973
S 16 硫黄	0.53912	19.126	0.9994
Ca 20 カルシウム	2.55526	111.424	1.5160
Zn 30 亜鉛	0.08640	4.863	0.9727

★出版予告★2000年1月15日発行予定

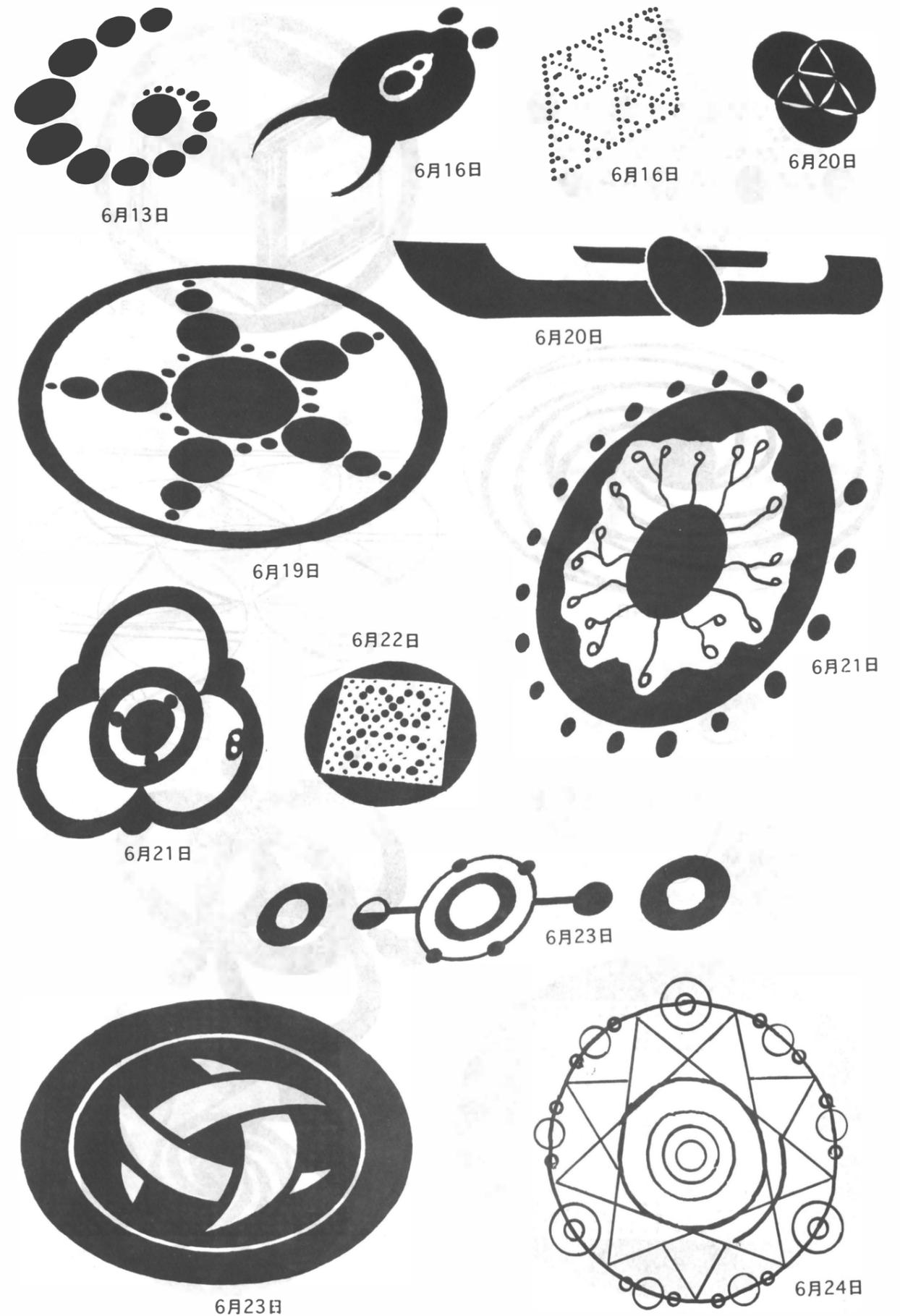
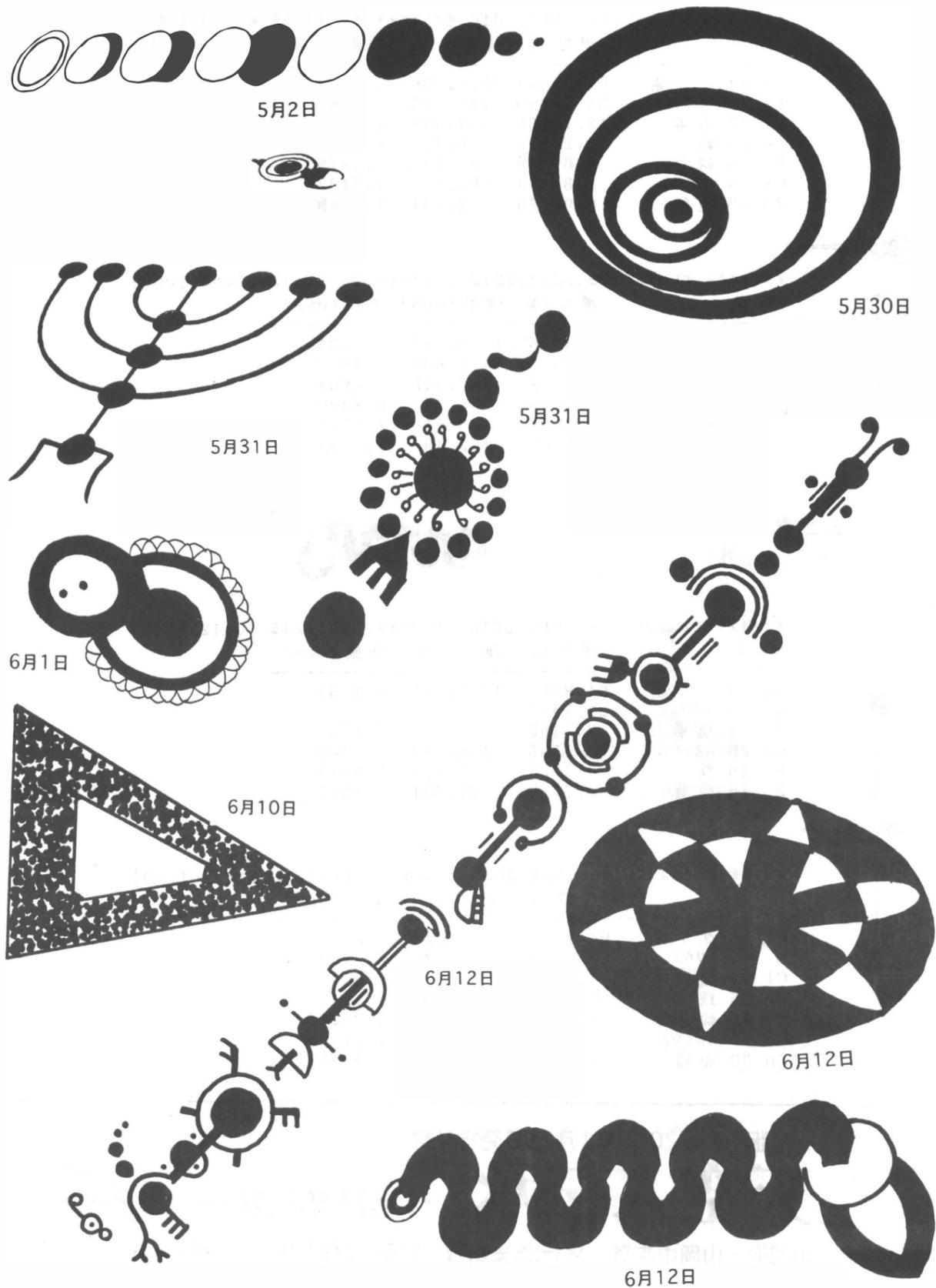
天空人伝承 ~地球年代記~

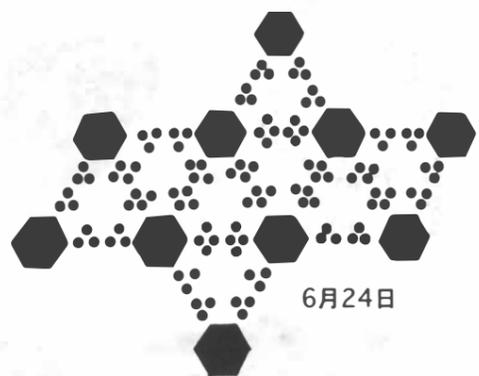


山岡徹・山岡由来著 発行:たま出版 定価(本体1,000円+税)

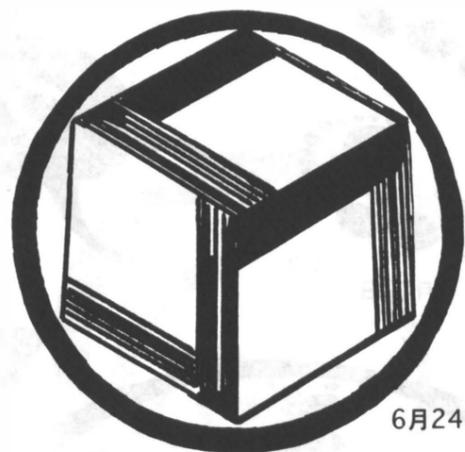
1999年5月~9月

英国の穀物畑に現われたクロープフォーメーションの色々





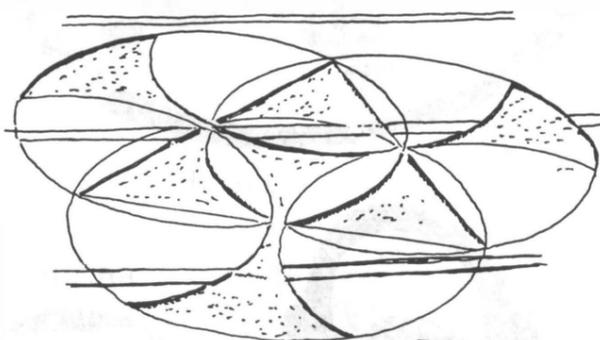
6月24日



6月24日



7月4日



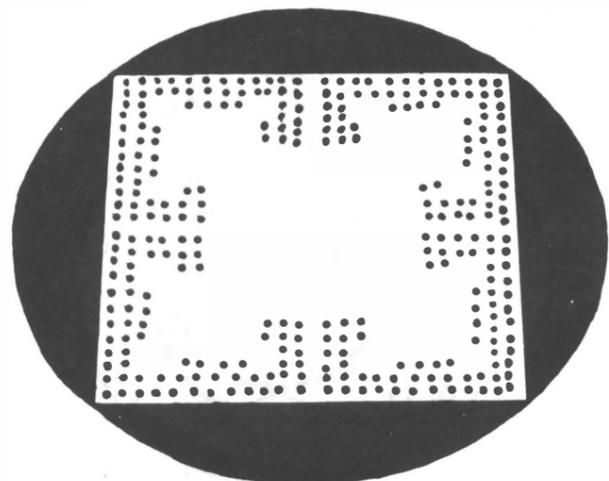
7月4日



7月12日



7月12日



7月16日



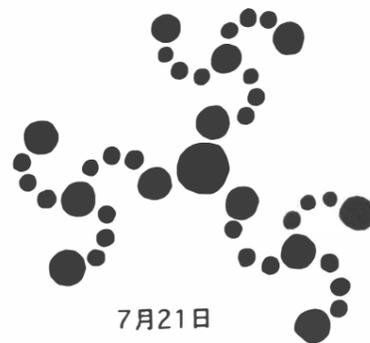
7月17日



7月19日



7月21日



7月21日



7月16日



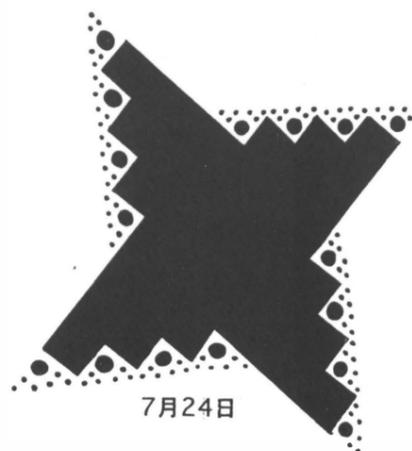
7月25日



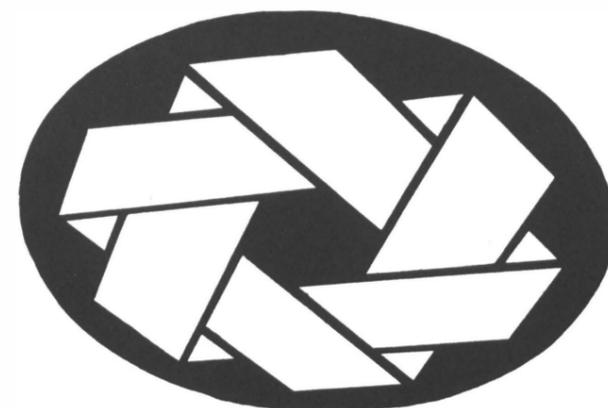
7月23日



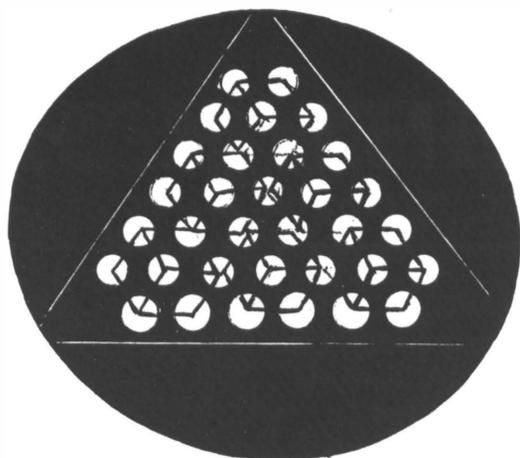
7月23日



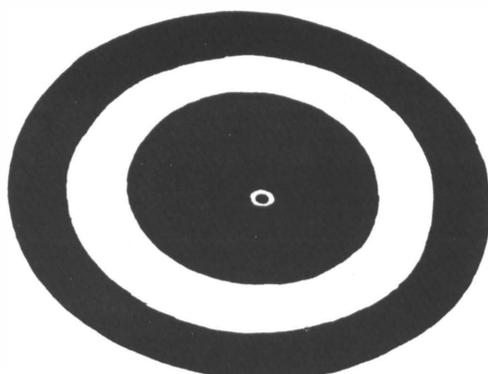
7月24日



7月28日



7月29日



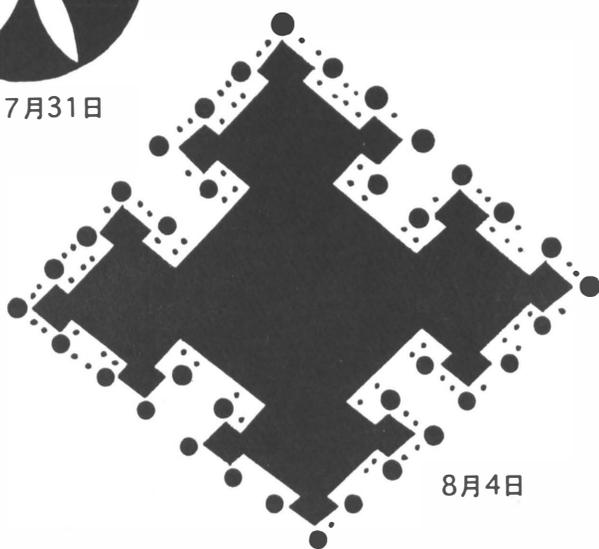
7月29日



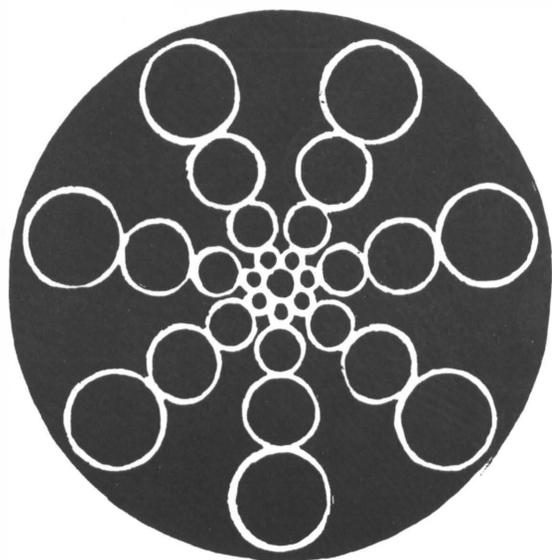
7月31日



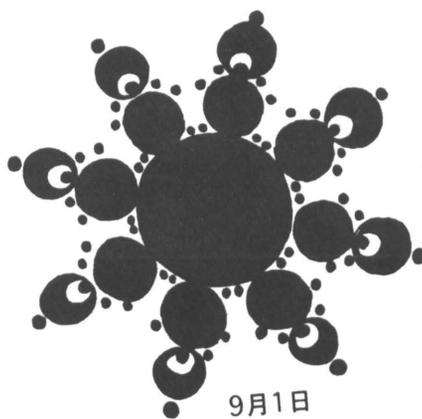
7月29日



8月4日



8月6日



9月1日



Tracing by Kiyoshi Amamiya

2000年1月1日発行 第12巻 第1号 通巻37号
 日本国632-0077天理市平等坊町193-5 ☎0743-63-2539 天宮 清
 Kiyoshi Amamiya : 193-5, Byodobo-cho, Tenri city, 632-0077 JAPAN
 天空人協会西日本統合部、奈良支部/中華伝統康復医学培训中心・中国UFO研究会網絡中心高級顧問/中国山西省UFO研究会高級顧問
 /中国不明飛行物研究会顧問/中国新疆維吾爾自治区UFO研究会高級顧問/中華飛碟學研究会顧問/C.P.R.-JAPAN連絡所